『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査

2001.3

神奈川県教育委員会
鎌倉市教育委員会
財団法人 かながわ考古学財団

『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査

2001.3

神奈川県教育委員会
鎌倉市教育委員会
財団法人 かながわ考古学財団

序　文

源頼朝が幕府を開いて八百余年、鎌倉は歴史と伝統を背景に今も発展を続けています。

頼朝は「三方を山に囲まれた天然の要害」である鎌倉を武士の都としました。ここをまもるために、幕府は鎌倉を取り囲む山稜に様々な防衛施設を設けたと言われています。

鎌倉旧市街は全体が遺跡であり、現在も市街地で発掘調査が行われない日はありません。しかし、街を取り囲む山稜が調査されたことはほとんどありませんでした。これらの山稜に防衛施設があったのかどうか、あるならばいつ頃の、どのような性格のものなのか、考古学的に検証するために今回の調査を行いました。

調査の結果、防衛遺構もさることながら、寺院址や祭祀・葬送の場所なども発見され、多くの成果が得られました。防衛施設だけではなく、鎌倉を取り巻く山稜が多様な性格を持ち合わせていたことが明らかになりました。今回の調査成果を活かして、「鎌倉」の世界遺産登録も視野に入れ、より良い街にするために、今後も取り組んでいきたいと思います。

なお、今回の調査は文化庁の助言を得て、神奈川県教育委員会と鎌倉市教育委員会が主体となり、かながわ考古学財団が行いました。鎌倉の外周を調査するため、市境を接する横浜市教育委員会、逗子市教育委員会にもご協力いただきました。

最後になりましたが、この度の調査・報告に当たって多大なご指導、ご協力を賜りました関係諸機関・各位、ならびに調査実施をご承諾いただいた土地所有者の皆様に篤く御礼申し上げます。

神奈川県教育委員会
　教育長　小森　良治
鎌倉市教育委員会
　教育長　熊代　徳彦
(財)かながわ考古学財団
　理事長　熊田　節郎

例　言

1．本書は「古都鎌倉」の世界遺産登録に向けて実施した、鎌倉旧市街を取り巻く山稜部に存在する防衛遺構等の確認調査報告書である。

2．発掘調査ならびに出土品整理・報告書作成作業は、神奈川県教育委員会、鎌倉市教育委員会の委託を受け、財団法人かながわ考古学財団が実施した。なお、発掘調査のうち、発掘作業員の提供等の支援業務は(社)神奈川県土地建物保全協会が実施した。

3．発掘調査ならびに出土品整理・報告書作成にかかる経費は、極楽寺坂地区、鷲峰山・天台山地区、杉本城・釈迦堂口地区、名越切通地区、住吉城地区、朝夷奈切通地区を神奈川県教育委員会が、大仏坂地区、仮粧坂地区、亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区を鎌倉市教育委員会がそれぞれ負担した。

4．調査、整理期間は以下の通りである。一部、発掘調査と出土品整理を並行して行った。

発掘調査　平成12年(2000)6月1日～11月27日

出土品整理・報告書作成　平成12年(2000)11月1日～平成13年(2001)1月31日

5．発掘調査、出土品整理は神奈川県教育委員会教育部生涯学習文化財課、鎌倉市教育委員会生涯学習部文化財課の指導の下、財団法人かながわ考古学財団職員・柳川清彦、岩田直樹、鈴木庸一郎、菊川英政が担当した。調査・報告に当たっては小川裕入・服部実喜・砂田佳弘・天野賢一・植山英史・栗原伸好・林原利明の協力を得た。

6．調査地の選定作業は平成11年11月から12年3月にかけて行った。参加者は以下の通りである。

神奈川県教育委員会教育部生涯学習文化財課　　鈴木次郎　桝潤規彰

鎌倉市教育委員会生涯学習部文化財課　　玉林美男　永井正憲

財団法人かながわ考古学財団　　白石浩之(平成12年3月退職)・柳川・宮坂淳一・鈴木

7．本書の執筆分担は以下の通りである。編集は鈴木が担当した。

第1編

第Ⅰ章　桝潤

第Ⅱ章　柳川

第Ⅲ章　松尾宣方(鎌倉市教育委員会生涯学習部文化財課)

第2～9編

第Ⅰ章　岩田(松尾の助言を得た)

第Ⅱ章　鈴木

第Ⅲ章　鈴木・菊川(各トレンチの分担については各編の例言に記した)

第10編

第Ⅰ～Ⅳ章　鈴木(桝潤・松尾の助言を得た)

8．発掘調査ならびに出土品整理にあたっては下記の諸氏・諸機関からのご指導、ご協力を賜った(順不同、敬称略)。

伊藤正義(文化庁記念物課)、今井康博(横浜市教育委員会)、佐藤仁彦(逗子市教育委員会)、伊丹まどか、大河内勉(故人)、齋木秀雄、手塚直樹、野本賢二、原敬志、宮田真(鎌倉考古学研究所)、田代郁夫、宗臺秀明、宗臺富貴子(東国歴史考古学研究所)、野村英雄((株)システム提案)、石井進、大三輪龍彦、関口欣也、大竹正芳、高橋トシ子、岩澤喜美枝、小牧肇、金田庄兵エ、平井八重子

文化庁、横浜市教育委員会、逗子市教育委員会、(財)鎌倉風致保存会、極楽寺、成就院、光明寺、浄智寺、長寿寺、禪居院、瑞泉寺、円応寺、杉本寺、報国寺、(社)神奈川県土地建物保全協会、(株)斉藤建設、(株)野口建設、湯沢設計事務所、(株)システム提案、国際自動車(株)

9．本書の遺構・遺物挿図の指示は次の通りである。

・遺構実測図の水糸高は海抜高を示す。

・遺構実測図、遺物実測図の縮尺は各挿図に示した。

・トレンチおよび遺構断面図に特に記載のないトーン等は以下の通り

斜線は原則的に基盤層を示す

スクリーントーンは岩塊、石材を示す

層位に数字等がない空白部分は樹木根等による攪乱を示す

10. 本文中の「鎌倉石」は鎌倉近辺の丘陵で産出される粗粒凝灰岩を指し、表記を簡略化した

11. 本書に掲載した写真は、遺構を鈴木・菊川が、遺物を鈴木が撮影した。

12. 遺跡地の航空写真は、(株)中央航測に委託して撮影した。

13. 本書にかかる記録図面類、写真、出土遺物は鎌倉市教育委員会で一括して保管している。

発掘調査・出土品整理参加者

秋元優子、今井礼子、小畑三和子、川口薬子、神田倫子、岸田太郎、倉島　望、後藤　健、迫田早苗、佐藤幸紀、鈴木　彩、曽我雅弘、武山　聡、長沢保崇、中嶋浩一、中根由起子、幅　伸悟、早川能夫、東麻理子、村上理子、安田理恵子、渡辺芳満(以上、調査補助員)

目　次

第1編　調査概要

第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1
第Ⅱ章　調査経過 …… 2
第Ⅲ章　鎌倉の戦史と要害遺構 …… 5

第2編　極楽寺坂地区の調査

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境 …… 13
第Ⅱ章　調査トレンチの概要 …… 17
第Ⅲ章　トレンチの調査成果 …… 23

第1号トレンチ（23）　第2号トレンチ（26）　第3号トレンチ（28）　第5号トレンチ（29）
第6号トレンチ（30）　第7号トレンチ（35）　第8号トレンチ（36）　第9号トレンチ（37）
第10号トレンチ（38）　第11号トレンチ（39）　第12号トレンチ（40）　第16号トレンチ（41）
第18号トレンチ（43）　第19号トレンチ（46）　第22号トレンチ（47）　第26号トレンチ（48）
第27号トレンチ（52）　第29号トレンチ（60）　第30号トレンチ（61）　第33号トレンチ（62）

第3編　大仏坂地区の調査

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境 …… 73
第Ⅱ章　調査トレンチの概要 …… 75
第Ⅲ章　トレンチの調査成果 …… 79

第1号トレンチ（79）　第2号トレンチ（81）　第3号トレンチ（83）　第8号トレンチ（84）
第9号トレンチ（85）　第10号トレンチ（86）　第11号トレンチ（86）

第4編　仮粧坂地区の調査

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境 …… 87
第Ⅱ章　調査トレンチの概要 …… 89
第Ⅲ章　トレンチの調査成果 …… 91

第3号トレンチ（91）　第4号トレンチ（94）　第5号トレンチ（96）　第6号トレンチ（97）
第7号トレンチ（100）　第9号トレンチ（101）

第5編　亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区の調査

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境 …… 103
第Ⅱ章　調査トレンチの概要 …… 106
第Ⅲ章　トレンチの調査成果 …… 109

第1号トレンチ（109）　第2号トレンチ（111）　第5号トレンチ（115）　第8号トレンチ（117）
第9号トレンチ（118）　第10号トレンチ（119）　第11号トレンチ（120）　第13号トレンチ（121）
第14号トレンチ（123）　第15,16,17号トレンチ（125）　第19号トレンチ（127）　第21号トレンチ（128）

第6編　鷲峰山・天台山地区の調査

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境 …… 129
第Ⅱ章　調査トレンチの概要 …… 131
第Ⅲ章　トレンチの調査成果 …… 133
第3号トレンチ（133）　第4号トレンチ（135）　第5号トレンチ（136）　第6号トレンチ（138）

第7編　杉本城・釈迦堂口地区の調査

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境 …… 143
第Ⅱ章　調査トレンチの概要 …… 146
第Ⅲ章　トレンチの調査成果 …… 151
第1号トレンチ（151）　第2号トレンチ（153）　第3号トレンチ（158）　第4号トレンチ（160）
第5，6号トレンチ（161）　第7号トレンチ（163）　第8号トレンチ（164）　第9号トレンチ（166）
第10号トレンチ（169）　第13号トレンチ（174）　第14号トレンチ（175）　第15号トレンチ（177）
第16号トレンチ（179）　第17号トレンチ（183）　第18号トレンチ（184）

第8編　名越切通地区の調査

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境 …… 187
第Ⅱ章　調査トレンチの概要 …… 189
第Ⅲ章　トレンチの調査成果 …… 191
第1，2号トレンチ（191）　第3号トレンチ（196）　第6号トレンチ（197）　第7号トレンチ（199）
第8，9号トレンチ（200）

第9編　朝夷奈切通地区の調査

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境 …… 201
第Ⅱ章　調査トレンチの概要 …… 203
第Ⅲ章　トレンチの調査成果 …… 206
第10号トレンチ（206）　第11号トレンチ（208）

第10編　まとめ

第Ⅰ章　防衛遺構 …… 209
第Ⅱ章　祭祀・葬送、その他に関する遺構 …… 218
第Ⅲ章　中世以前の遺構・遺物 …… 222
第Ⅳ章　結語 …… 223

挿図目次

（第１編　調査概要）

第1図　調査地区全体図 …… 3
第2図　稲村ヶ崎周辺の旧地形 …… 8
第3図　極楽寺境内絵図 …… 10

（第２編　極楽寺坂地区の調査）

第4図　極楽寺坂地区周辺の遺跡 …… 16
第5図　極楽寺坂地区トレンチ配置図（１） …… 20
第6図　極楽寺坂地区トレンチ配置図（２） …… 21
第7図　極楽寺坂地区トレンチ配置図（３） …… 22
第8図　第１号トレンチ …… 24
第9図　第１号トレンチ内ピット …… 25
第10図　第２号トレンチ平面図 …… 26
第11図　第２号Aトレンチ …… 27
第12図　第２号Eトレンチ …… 27
第13図　第３号トレンチ …… 28
第14図　第５号トレンチ …… 29
第15図　第６号トレンチおよび「一升桝」現況測量図 …… 33
第16図　第７号トレンチ …… 35
第17図　第８号トレンチ …… 36
第18図　第９号トレンチ …… 37
第19図　第10号トレンチ …… 38
第20図　第11号トレンチ …… 39
第21図　第12号トレンチ …… 40
第22図　第16号トレンチ出土遺物 …… 41
第23図　第16号トレンチ周辺地形 …… 42
第24図　第18号トレンチ …… 43
第25図　第18号トレンチ常滑甕出土状況 …… 44
第26図　第19号トレンチ …… 46
第27図　第22号トレンチ周辺地形 …… 47
第28図　第26号トレンチおよび周辺地形 …… 49
第29図　第26号トレンチ出土遺物 …… 50
第30図　「五合桝」表採五輪塔地輪拓影 …… 51
第31図　第27号トレンチおよび周辺地形平面図 …… 53
第32図　第27号Aトレンチおよび周辺地形 …… 54
第33図　第27号Bトレンチ堀 …… 56
第34図　第27号Bトレンチ堀周辺地形 …… 58
第35図　第27号Bトレンチ堀出土遺物 …… 59
第36図　第29号トレンチ …… 60
第37図　第30号トレンチ …… 61
第38図　伝「仏法寺跡」周辺地形および第33号トレンチ配置図 …… 63
第39図　第33号A,B,Cトレンチ …… 64
第40図　第33号D,E,F,Gトレンチ,Fトレンチ竈 …… 65
第41図　第33号H,Iトレンチ …… 66

（第３編　大仏坂地区の調査）

第42図　大仏坂地区周辺の遺跡 …… 74
第43図　大仏坂地区トレンチ配置図（１） …… 77
第44図　大仏坂地区トレンチ配置図（２） …… 78
第45図　第１号トレンチおよび周辺地形 …… 80
第46図　第２号トレンチ …… 82
第47図　第３号トレンチ出土遺物 …… 83
第48図　第３号トレンチ …… 83
第49図　第８号トレンチ …… 84
第50図　第９号トレンチ …… 85

（第４編　仮粧坂地区の調査）

第51図　仮粧坂地区周辺の遺跡 …… 88
第52図　仮粧坂地区トレンチ配置図 …… 90
第53図　第３号トレンチおよび茶毘址１～５ …… 93
第54図　第４号トレンチ …… 95
第55図　第５号トレンチ …… 96
第56図　第６号トレンチおよび茶毘址１～５ …… 99
第57図　第７号トレンチ …… 100
第58図　第９号トレンチ …… 102

（第５編　亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区の調査）

第59図　亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区周辺の遺跡 …… 105
第60図　亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区トレンチ配置図（１）… 107
第61図　亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区トレンチ配置図（２）… 108
第62図　第１号トレンチ …… 110
第63図　第２号トレンチ …… 112
第64図　第５号トレンチ …… 115
第65図　第８号トレンチ …… 117
第66図　第９号トレンチ …… 118
第67図　第９号トレンチ　方形基壇状遺構 …… 118
第68図　第10号トレンチ …… 119

第69図　第11号トレンチ …… 120
第70図　第13号トレンチ …… 122
第71図　第14号トレンチ出土遺物 …… 123
第72図　第14号トレンチ …… 124
第73図　第15，16，17号トレンチ …… 126
第74図　第19号トレンチ …… 127
第75図　第21号トレンチ …… 128

（第６編　鷲峰山・天台山地区の調査）

第76図　鷲峰山・天台山地区周辺の遺跡 …… 130
第77図　鷲峰山・天台山地区トレンチ配置図 …… 132
第78図　第３号トレンチ …… 133
第79図　第３号トレンチ出土銭貨拓影 …… 134
第80図　第５号トレンチ …… 136
第81図　第６号トレンチ周辺地形 …… 139
第82図　第６号A，B，Cトレンチ …… 140

（第７編　杉本城・釈迦堂口地区の調査）

第83図　杉本城・釈迦堂口地区周辺の遺跡 …… 145
第84図　杉本城・釈迦堂口地区トレンチ配置図（１）　148
第85図　杉本城・釈迦堂口地区トレンチ配置図（２）　149
第86図　第１号トレンチ …… 151
第87図　第２号A，B，Cトレンチ …… 154
第88図　第２号Cトレンチ堂消瓢 …… 156
第89図　第２号Bトレンチ出土遺物 …… 156
第90図　第３号トレンチ …… 158
第91図　第４号トレンチ …… 160
第92図　第５号トレンチ …… 161
第93図　第６号トレンチ …… 161
第94図　第８号トレンチ …… 165
第95図　第９号トレンチ …… 168
第96図　第10号トレンチ …… 170
第97図　第13号トレンチ …… 174
第98図　第14号トレンチ …… 175
第99図　第15号トレンチ …… 178
第100図　第16号トレンチ遺辺状況 …… 180
第101図　第16号トレンチ …… 181
第102図　第17号トレンチ …… 183
第103図　第18号トレンチ …… 185

（第８編　名越切通地区の調査）

第104図　名越切通地区周辺の遺跡 …… 188
第105図　名越切通地区トレンチ配置図 …… 190
第106図　第１号トレンチ …… 191
第107図　第２号A，B，Cトレンチ …… 193
第108図　第１，２号トレンチ周辺地形 …… 195
第109図　第３号トレンチ …… 196
第110図　第６号トレンチ …… 197
第111図　第７号トレンチ …… 199
第112図　第８号トレンチ …… 200
第113図　第９号トレンチ …… 200

（第９編　朝夷奈切通地区の調査）

第114図　朝夷奈切通地区周辺の遺跡 …… 202
第115図　朝夷奈切通地区トレンチ配置図（１）…… 204
第116図　朝夷奈切通地区トレンチ配置図（２）…… 205
第117図　第10号トレンチ …… 206
第118図　第11号トレンチおよび周辺状況 …… 208

（第10編　まとめ）

第119図　堀切の分布 …… 215
第120図　祭祀・祭遺、その他の道構の分布 …… 219

表目次

第1表　調査工程表 …… 2
第2表　鎌倉内の合戦・抗争暦 …… 6
第3表　極楽寺坂地区調査トレンチ一覧表 …… 18
第4表　大仏坂地区調査トレンチ一覧表 …… 75
第5表　仮粧坂地区調査トレンチ一覧表 …… 89
第6表　亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区調査トレンチ一覧表　106
第7表　鷲峰山・天台山地区調査トレンチ一覧表 …… 131
第8表　杉本城・釈迦堂口地区調査トレンチ一覧表 …… 146
第9表　名越切通地区調査トレンチ一覧表 …… 189
第10表　朝夷奈切通地区調査トレンチ一覧表 …… 203
第11表　調査した堀切の規模 …… 213

写真目次

（第２編　極楽寺坂地区の調査）

写真1　板橋上方より稲村ヶ崎方面の眺望 …… 17
写真2　第１号トレンチ　全景 …… 23
写真3　第１号トレンチ　掘立柱建物址 …… 25
写真4　第１号トレンチ　北側屋面の状態 …… 25
写真5　第１号トレンチ　屋面の落書き …… 25
写真6　第２号Ａトレンチ　塚調査前状況 …… 26
写真7　第２号Ｅトレンチ　堀切 …… 27
写真8　第３号トレンチ　全景 …… 28
写真9　第５号トレンチ　全景 …… 29
写真10　「一升桝」調査前状況 …… 30
写真11　第６号トレンチ　作業風景 …… 30
写真12　第６号トレンチ　全景 …… 31
写真13　第６号トレンチ　全景 …… 31
写真14　第６号トレンチ　南側土塁断面 …… 31
写真15　第６号Ａトレンチ出土遺物（陶磁器） …… 32
写真16　第６号Ｃトレンチ　全景 …… 32
写真17　第７号トレンチ出土遺物（陶磁器等） …… 35
写真18　第７号トレンチ　全景 …… 35
写真19　第８号トレンチ　北側泥岩塊敷 …… 36
写真20　第８号トレンチ　住居址確認状況 …… 36
写真21　第８号トレンチ　遺物出土状況 …… 36
写真22　第９号トレンチ　堀切・土坑 …… 37
写真23　第10号トレンチ　全景 …… 38
写真24　第10トレンチ出土遺物（豪形土器） …… 38
写真25　第10号トレンチ　遺物出土状況 …… 38
写真26　第11号トレンチ　全景 …… 39
写真27　第11号トレンチ　堀切底面土坑 …… 39
写真28　第12号トレンチ　堀切 …… 40
写真29　第16号トレンチ　全景 …… 41
写真30　第16号トレンチ　かわらけ①出土状況 …… 41
写真31　第16号トレンチ　かわらけ②出土状況 …… 41
写真32　第16号トレンチ　調査前状況 …… 42
写真33　第18号トレンチ　塚断面 …… 43
写真34　第18号トレンチ　埋甕内出土遺物（釘） …… 44
写真35　第18号トレンチ　塚出土埋甕 …… 44
写真36　第18号トレンチ　埋甕出土状況 …… 44
写真37　第18号トレンチ　堀切調査前状況 …… 45
写真38　第18号トレンチ　堀切全景 …… 45
写真39　第19号トレンチ　断面 …… 46
写真40　第22号トレンチ　周辺地形 …… 47
写真41　第26号トレンチ調査前状況　土塁状の高まり 48
写真42　第26号トレンチ　作業風景 …… 48
写真43　「五合桝」遠景 …… 48
写真44　第26号トレンチ　全景 …… 50
写真45　第26号トレンチ　石塔類出土状況 …… 50
写真46　第26号トレンチ東端塚遺物出土状況 …… 50
写真47　第26号トレンチ　かわらけ溜まり …… 50
写真48　第26号トレンチ東端塚出土遺物（かわらけ） 50
写真49　第26号トレンチ　かわらけ溜まり出土遺物 50
写真50　「五合桝」表採五輪塔地輪 …… 51
写真51　「五合桝」より極楽寺坂方面を望む …… 51
写真52　第27号Ａトレンチ　全景 …… 52
写真53　第27号トレンチ周辺マウンド① …… 55
写真54　第27号トレンチ周辺マウンド② …… 55
写真55　第27号トレンチ周辺マウンド③④ …… 55
写真56　第27号トレンチ周辺の石塔類 …… 55
写真57　第27号Ａトレンチ …… 55
写真58　第27号Ａトレンチ　敷石出土状況 …… 57
写真59　第27号Ａトレンチ　石塔等出土状況 …… 57
写真60　第27号Ａトレンチ　龕・石塔出土状況 …… 58
写真61　第27号Ａトレンチ　石塔・板碑出土状況 …… 58
写真62　コッホの碑移設記念碑 …… 58
写真63　第27号Ａトレンチ周辺　伐採後・掘削前状況 58
写真64　第27号トレンチ　作業風景 …… 58
写真65　第29号トレンチ　堀切 …… 60
写真66　第29号トレンチ　堀切 …… 60
写真67　第29号トレンチ　堀切 …… 60
写真68　第30号トレンチ　調査前状況 …… 61
写真69　第30号トレンチ　堀切 …… 61
写真70　第30号トレンチ　全景 …… 61
写真71　第26, 27, 33号トレンチ付近空撮 …… 62
写真72　伝「仏法寺跡」から鎌倉市街を望む …… 66
写真73　第33号Ａトレンチ　全景 …… 67
写真74　第33号Ａトレンチ　平場の状態 …… 67
写真75　第33号Ａトレンチ　平場・段差部分 …… 67
写真76　第33号Ａトレンチ　基壇状遺構 …… 67
写真77　第33号Ｂトレンチ　全景 …… 68
写真78　第33号Ｂトレンチ　竪穴状遺構 …… 68
写真79　第33号Ｃトレンチ　全景 …… 69
写真80　第33号Ｃトレンチ　柱穴 …… 69
写真81　第33号Ｄトレンチ　全景 …… 70
写真82　第33号Ｆトレンチ　全景 …… 70
写真83　第33号Ｆトレンチ　竈 …… 70
写真84　第33号Ｆトレンチ　土坑 …… 70
写真85　第33号Ｇトレンチ　柱穴列 …… 71
写真86　第33号Ｈトレンチ　全景 …… 71
写真87　第33号Ｉトレンチ　全景 …… 72
写真88　第33号Ｉトレンチ　柱穴・溝 …… 72
写真89　伝「仏法寺跡」池 …… 72

（第３編　大仏坂地区の調査）

写真90　第13号トレンチ作業風景 …… 76
写真91　第１号トレンチ下段　全景 …… 79
写真92　第１号トレンチ下段平場 …… 79
写真93　第２号トレンチ南端　崖落ち込み …… 81
写真94　第２号トレンチ　全景および周辺状況 …… 81
写真95　第３号トレンチ　遺物出土状況 …… 83
写真96　第８号トレンチ　調査風景 …… 84
写真97　第８号トレンチ　西端土層堆積状況 …… 84
写真98　第９号トレンチ　全景 …… 85
写真99　第10号トレンチ　全景 …… 86
写真100　第10号トレンチ出土遺物 …… 86
写真101　第11号Ａトレンチ　砂岩塊敷 …… 86
写真102　第11号トレンチ出土遺物 …… 86

（第４編　仮粧坂地区の調査）

写真103　第３号トレンチ　全景 …… 91
写真104　第３号トレンチ上段平場 …… 91
写真105　第３号トレンチ　茶毘址１ …… 92
写真106　第３号トレンチ　茶毘址２ …… 92
写真107　第３号トレンチ　茶毘址３ …… 92
写真108　第３号トレンチ　茶毘址４ …… 92
写真109　第３号トレンチ　茶毘址５ …… 92
写真110　第３号トレンチ　炭溜まり・かわらけ出土状況 …… 92
写真111　第３号トレンチ出土遺物（陶磁器類） …… 92
写真112　第３号トレンチ出土遺物（かわらけ） …… 92
写真113　「大堀切」現況 …… 94
写真114　第４号Ａトレンチ土層堆積状況 …… 94
写真115　第４号トレンチ　全景 …… 94
写真116　第５号トレンチ　全景 …… 96
写真117　第５号トレンチ　茶毘址 …… 96
写真118　第６号トレンチ　全景 …… 97
写真119　第６号トレンチ　茶毘址１，２ …… 97
写真120　第６号トレンチ　茶毘址１ …… 98
写真121　第６号トレンチ　茶毘址２ …… 98
写真122　第６号トレンチ　茶毘址３ …… 98
写真123　第６号トレンチ　茶毘址４ …… 98
写真124　第６号トレンチ　茶毘址５ …… 98
写真125　第６号トレンチ付近尾根頂部の祠 …… 98
写真126　第６号トレンチ茶毘址１出土遺物（かわらけ） …… 98
写真127　第６号トレンチ茶毘址３出土遺物（鉄釘） …… 98
写真128　第７号トレンチ　全景 …… 100
写真129　第７号トレンチ遺物出土状況 …… 100
写真130　第７号トレンチ出土遺物（縄文土器） …… 100
写真131　第９号トレンチ　岩盤面 …… 101
写真132　第９号トレンチ西半部　全景 …… 101
写真133　第９号トレンチ南半部　全景 …… 101
写真134　第９号トレンチ北半部　全景 …… 101

（第５編　亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区の調査）

写真135　第１号トレンチ　全景 …… 109
写真136　第１号トレンチ　全景 …… 109
写真137　第２号トレンチ　全景 …… 111
写真138　第２号トレンチ北半部　全景 …… 111
写真139　第２号トレンチ南半部　全景 …… 111
写真140　第２号トレンチ北端　遺物出土状況 …… 113
写真141　第２号トレンチ　井戸状遺構 …… 113
写真142　第２号トレンチ北端　崖面状況 …… 113
写真143　第２号トレンチ　岩盤面の状況 …… 113
写真144　第２号トレンチ出土遺物（かわらけ） …… 114
写真145　第２号トレンチ出土遺物（天目茶碗） …… 114
写真146　第２号トレンチ出土遺物（青磁） …… 114
写真147　第２号トレンチ出土遺物（白磁） …… 114
写真148　第２号トレンチ出土遺物（青白磁） …… 114
写真149　第２号トレンチ出土遺物（褐釉四耳壺） …… 114
写真150　第２号トレンチ出土遺物（瀬戸窯製品） …… 114
写真151　第２号トレンチ出土遺物（瓦質手焙り） …… 114
写真152　第５号トレンチ　塚蓋石 …… 116
写真153　第５号トレンチ　溝状遺構 …… 116
写真154　第８号トレンチ　全景 …… 117
写真155　第８号トレンチ　塚出土の礫 …… 117
写真156　第８号トレンチ　溝状遺構 …… 117
写真157　第９号トレンチ　全景 …… 118
写真158　第９号トレンチ　方形基壇状遺構 …… 118
写真159　第10号トレンチ　堀切 …… 119
写真160　第10号トレンチ　全景 …… 119
写真161　第11号トレンチ　堀切全景 …… 120
写真162　第13号トレンチ　作業風景 …… 121
写真163　第13号トレンチ　全景 …… 121
写真164　第13号トレンチ　柱穴 …… 121
写真165　第14号トレンチ　調査前状況 …… 123
写真166　第14号トレンチ　全景 …… 123
写真167　第14号トレンチ　全景 …… 123
写真168　第15号トレンチ調査前状況 …… 125
写真169　第16号トレンチ …… 125
写真170　第15号トレンチ …… 125
写真171　第17号トレンチ …… 125
写真172　第17号トレンチ周辺地形 …… 126
写真173　第19号トレンチ　全景 …… 127
写真174　第21号トレンチ　作業風景 …… 128
写真175　第21号トレンチ南端　岩盤検出状況 …… 128
写真176　第21号トレンチ北側　岩盤検出状況 …… 128

（第６編　鷲峰山・天台山地区の調査）

写真177　貝吹地蔵周辺の切通道 …… 131
写真178　第３号トレンチ北半部およびやぐら …… 133
写真179　第３号トレンチ　全景 …… 134
写真180　第３号トレンチ　岩盤面ピット …… 134
写真181　第４号トレンチ　作業風景 …… 135
写真182　第４号トレンチ出土遺物(かわらけ) …… 135
写真183　天台山頂部祠 …… 135
写真184　第５号トレンチ　全景 …… 136
写真185　第５号トレンチ作業風景 …… 137
写真186　貝吹地蔵周辺状況 …… 137
写真187　第６号Bトレンチ　全景 …… 138
写真188　第６号Bトレンチ　層塔未製品出土状況 …… 141
写真189　第６号Cトレンチ　道路状遺構 …… 141

（第７編　杉本城・釈迦堂口地区の調査）

写真190　第２号トレンチ作業風景 …… 147
写真191　第１号トレンチ南側　全景 …… 151
写真192　第１号トレンチ中央　全景 …… 152
写真193　第１号トレンチ南側　水溜状遺構 …… 152
写真194　第２号トレンチ　全景 …… 153
写真195　第２号Aトレンチ　全景 …… 155
写真196　第２号Bトレンチ　全景 …… 155
写真197　第２号Cトレンチ　全景 …… 155
写真198　第２号Aトレンチ常滑甕出土状況 …… 156
写真199　第２号Cトレンチ常滑・かわらけ出土状況 …… 156
写真200　第２号Cトレンチかわらけ出土状況 …… 156
写真201　第２号Aトレンチ　玉砂利敷 …… 157
写真202　第２号Bトレンチ　岩盤面 …… 157
写真203　第２号Bトレンチ　礎石・炭層 …… 157
写真204　第２号Bトレンチ　炭層上かわらけ出土状況 157
写真205　第２号Cトレンチ　岩盤面柱穴 …… 157
写真206　第２号Cトレンチ　岩盤面土坑 …… 157
写真207　第３号トレンチ　全景 …… 158
写真208　第３号トレンチ　岩盤面の遺構 …… 159
写真209　第３号トレンチ　堀切 …… 159
写真210　第４号トレンチ　全景 …… 160
写真211　第５号トレンチ　全景 …… 162
写真212　第５号トレンチ　溝状遺構 …… 162
写真213　第６号トレンチ　全景 …… 162
写真214　第６号トレンチ　岩盤面柱穴 …… 162
写真215　第６号トレンチ　調査前状況 …… 162
写真216　第７号トレンチ　調査前状況 …… 163
写真217　第７号トレンチ　全景 …… 163
写真218　第８号トレンチ　全景 …… 164
写真219　第８号トレンチ出土遺物(かわらけ) …… 164
写真220　第８号トレンチ　作業風景 …… 164
写真221　第８号トレンチ　周辺状況 …… 165
写真222　第９号トレンチ　作業風景 …… 166
写真223　第９号トレンチ　全景 …… 166
写真224　第９号トレンチ　全景 …… 167
写真225　第９号トレンチ　堀切底面 …… 167
写真226　第10号トレンチ　全景 …… 169
写真227　第10号トレンチ　全景 …… 169
写真228　第10号トレンチ　西側切石敷・茶臼址 …… 171
写真229　第10号トレンチ西端　五輪塔出土状況 …… 171
写真230　第10号トレンチ　東側切石敷 …… 172
写真231　第10号トレンチ　石塔類出土状況 …… 172
写真232　第10号トレンチ　作業風景 …… 173
写真233　第10号トレンチ出土遺物(かわらけ) …… 173
写真234　第13号トレンチ　全景 …… 174
写真235　第13号トレンチ　土層堆積状況 …… 174
写真236　第14号トレンチ　全景 …… 175
写真237　第14号トレンチ　茶臼址 …… 176
写真238　第14号トレンチ出土遺物(高坏・かわらけ・常滑甕) …… 176
写真239　第15号トレンチ　全景 …… 177
写真240　第15号トレンチ　茶臼址 …… 177
写真241　第15号トレンチ　出土遺物(かわらけ) …… 178
写真242　衣張山山頂より鎌倉市街を望む …… 178
写真243　第16号トレンチ付近　土塁状遺構 …… 179
写真244　第16号Aトレンチ　全景 …… 181
写真245　第16号Bトレンチ　全景 …… 182
写真246　第16号Cトレンチ　全景 …… 182
写真247　第17号トレンチ　調査前状況 …… 183
写真248　第17号トレンチ　全景 …… 183
写真249　第18号トレンチ　五輪塔火輪出土状況 …… 184
写真250　第18号トレンチ　全景 …… 184

（第８編　名越切通地区の調査）

写真251　第１号トレンチ　中央部分 …… 192
写真252　第１号トレンチ　全景 …… 192
写真253　第２号Aトレンチ　全景 …… 193
写真254　第２号Bトレンチ　全景 …… 193
写真255　第２号Cトレンチ　全景 …… 193
写真256　第２号Bトレンチ　茶臼址 …… 194
写真257　第２号Cトレンチ　土坑 …… 194
写真258　第３号トレンチ　全景 …… 196
写真259　第６号トレンチ周辺状況 …… 198
写真260　第６号トレンチ　全景 …… 198
写真261　第７号トレンチ　全景 …… 199
写真262　第７号トレンチ出土遺物(天目碗・山茶碗・かわ

らけ皿) …… 199
写真263 第8号トレンチ　全景 …… 200
写真264 第9号トレンチ　全景 …… 200

（第9編　朝夷奈切通地区の調査）

写真265 第10号トレンチ　全景 …… 206
写真266 第10号トレンチ　土層堆積状況 …… 207
写真267 第10号トレンチ直下　大切通 …… 207
写真268 第11号トレンチ　全景 …… 208

表紙：極楽寺坂地区南尾根周辺空撮

裏表紙：釈迦堂口隧道（南・名越谷側から）

第１編

調査概要

仮雑坂地区「大堀切」（先行踏査時）

第Ⅰ章　調査に至る経緯

日本政府は平成４年(1992)９月に、『世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約』(1972年ユネスコ総会において採択)を批准するとともに、「古都鎌倉の寺院・神社ほか」とされた鎌倉を含めて、国内の世界遺産暫定リスト10件を世界遺産委員会事務局に提出した。その後、暫定リストの追加が行われ、現段階では11件が推薦・登録されたが、「古都鎌倉」は推薦されるにいたっていない。

この間、鎌倉市では平成７年２月定例市議会において、「早期に推薦されるよう積極的に取り組みたい」旨を市長が表明し、平成８年３月の『第３次鎌倉市総合計画』を皮切りに、『鎌倉市環境基本計画』・『鎌倉市緑の基本計画』・『鎌倉市都市マスタープラン』などに、世界遺産への登録を目指す内容が盛り込まれた。一方、神奈川県においては平成９年３月の『かながわ新総合計画21』の地区実行計画に位置づけ、「鎌倉寺社の世界遺産一覧表への登載の要請」を掲げた。また、平成10年12月神奈川県議会本会議において、知事が世界遺産登録に向けた鎌倉市への支援について言及した。平成11年３月県議会では、「古都鎌倉の世界遺産への登録実現に関する決議案」が全会一致で採択された。

こうした動きの中で、神奈川県教育庁生涯学習部文化財保護課(現神奈川県教育庁教育部生涯学習文化財課、以下、県生涯学習文化財課)、鎌倉市企画部及び鎌倉市教育委員会生涯学習部文化財課(以下、市文化財課)は、平成11年１月に「古都鎌倉の世界遺産登録検討連絡会議」(以下、連絡会議)を設置し、世界遺産登録へ向けた環境づくりの推進及び課題整理等の作業の実施を目的として活動を開始した。

連絡会議における種々の検討の結果、「寺院・神社以外に他の国内登録物件と異なり、鎌倉独自の特色となるのは、古来より三方を山稜に囲まれた要害の地と言われてきたことであり、具体的遺構としては山稜部に残された切通・切岸を中心とする防衛遺構である」との結論にいたった。しかしながら、鎌倉を取り巻く山稜部はこれまでに考古学的な調査は実施されておらず、防衛遺構の構造・構築年代等を含めた山稜部の実体は不明なままであった。そこで、世界遺産登録に向けた具体の作業としては、まずこの防衛遺構を中心とした山稜部の実体を解明することが急務であると判断し、そのための発掘調査の実施が計画されることとなった。

発掘調査は平成12年度に実施することとし、平成11年10月から数次に分けて、県生涯学習文化財課職員と市文化財課職員が現地を踏査して、発掘調査箇所の選定を行った。その結果、調査対象地域を所謂「鎌倉七切通」を中心とした７ブロックと、杉本城・釈迦堂口地区及び住吉城地区を加えた９ブロックとし、それぞれ防衛遺構の可能性がある地点について、適宜トレンチ調査を実施することとした。なお、これら９ブロックには横浜市域にまたがる朝夷奈切通地区と、同じく逗子市域にまたがる名越切通地区及び住吉城地区が含まれるため、平成12年３月から横浜市教育委員会ならびに逗子市教育委員会にも連絡会議への参加・協力を得ることとなった。

発掘調査の実施にあたっては県が全体事業の３分の２、市が３分の１を分担することとし、発掘調査の記録作成・出土品整理・報告書作成等の各業務を財団法人かながわ考古学財団に、県・市それぞれが委託して実施することとなった。

第Ⅱ章　調査経過

鎌倉の世界遺産の登録に向けて県と鎌倉市は資料調査を行う事とし、平成12年度に鎌倉を取り巻く丘陵部の防衛遺構の発掘調査を計画し、かながわ考古学財団に依頼された。考古学財団は、これを受け12年1月から3月の県と鎌倉市の調査地の選定作業に同行し、調査計画立案に係わった。調査は、全体を「極楽寺坂」「大仏坂」「仮粧坂」「亀ヶ谷坂・巨福呂坂」「鷲峰山・天台山」「杉本城・釈迦堂口」「名越切通」「朝夷奈切通」「住吉城」の9地区に分割して進めることにしたが、事情により住吉城地区の調査は中止となった。その他一部調査できなかった箇所もあった。また、調査時点の伐開で新たに調査の必要な個所や当初想定した遺構と異なるものも発見された。

調査は、2000(平成12)年6月3日より極楽寺坂地区から着手し、各地区並行しながら概ね大仏坂地区、仮粧坂地区、亀ヶ谷・巨福呂坂地区、鷲峰山・天台山地区、杉本城・釈迦堂口地区、名越切通地区、朝夷奈切通地区の順に行ったが、土木機械類の使用が困難であったため当初予定の10月30日で完了することはできず、11月14日までの半月延長した。調査完了後10日間ほど補足測量を行い現地での業務をすべて完了した。

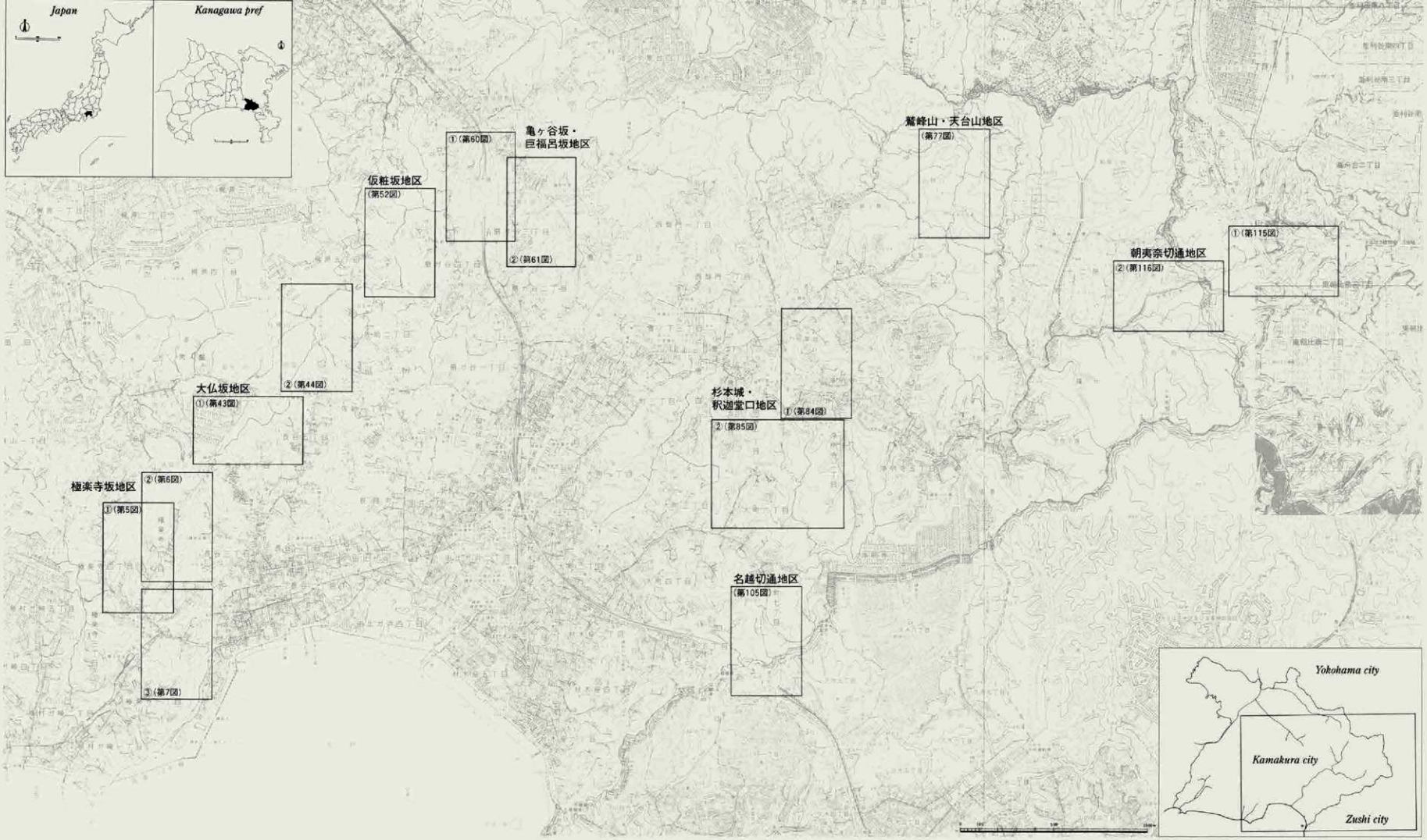
極楽寺坂地区は、西尾根から着手し、東尾根、南尾根と進めた。この地区には、土塁を伴う「一升桝」「五合桝」と呼ばれる桝形遺構が所在し、踏査でも掘切、平場も多く見られ計画の約3割をかけることとしたが、調査を進めた段階で想定外の遺構遺物の発見と南尾根で新たに平場(第33号トレンチ)が発見され追加調査したことから予定を大幅に越え8月30日までかかった。大仏坂地区は、7月24日より8月30日にほぼ計画どおり実施したが、調査中に大規模な平場造成が見つかり調査したところ昭和30年代末から40年代初めの造成地であることが判明し、直ちに中止した。仮粧坂地区は、8月17日より9月30日にほぼ計画どおりに実施したが、一箇所地権者の了承が得られず調査できなかった。亀ヶ谷・巨福呂坂地区は、9月13日より10月13日にほぼ計画どおり実施した。鷲峰山・天台山地区は、9月27日より10月13日に行ったが、地権者の了承が得られず調査は計画の半分ほどとなったが、第6号トレンチで石塔製作址と思われる遺構が検出された。杉本城・釈迦堂口地区は、10月3日より10月30日の間、計画より多く調査し、寺院址ややぐら群などを検出し多くの成果があった。名越切通、朝夷奈切通地区は、ほぼ並行して10月27日より11月14日に調査を行ったが、調査予定期日も過ぎ計画を大幅に縮小せざるを得なかった。名越切通地区では、今回の調査で唯一切通内を調査し、中世と近世の遺物が混在して出土した。

調査地点は、今後の再調査の際に地点が確認できるよう各地区調査トレンチ一覧表に国家座標を明記した。

なお、亀ヶ谷・巨福呂坂地区の伐開中に変死体が発見された。ご冥福を祈ります。

第1表　調査工程表

月 / 地区名	6月			7月			8月			9月			10月			11月		
	1～10	11～20	21～30	1～10	11～20	21～31	1～10	11～20	21～31	1～10	11～20	21～30	1～10	11～20	21～30	1～10	11～20	21～30
極楽寺坂	6/3								8/30									
大仏坂						7/24			8/30									
仮粧坂							8/17					9/30						
亀ヶ谷坂・巨福呂坂										9/13				10/13				
鷲峰山・天台山												9/27		10/12				
杉本城・釈迦堂口													10/3		10/30			
名越切通															10/27		11/13	
朝夷奈切通																11/6	11/14	



第1図　調査地区全体図[S=1/16,000]

第Ⅲ章　鎌倉の戦史と要害遺構

『吾妻鏡』治承4年(1180)9月9日条に「當時御居所非指要害地。又非御義跡。速可令出相模國鎌倉給。」と千葉常胤が安達盛長をして源頼朝に、「ここ(安房国)はさしたる要害の地でもなく、また源家の旧跡でもない。速やかに鎌倉へ出向くべきである。」と説いたとある。この一節をもって頼朝が鎌倉を本拠地と定めた理由とされ、更に『玉葉』寿永2年(1183)10月25日条、同年11月2日条、及び元暦元年(1184)8月21日条にある「鎌倉城」(寿永2年11月6日条では頼朝城とある)の呼称が、三方を山に囲まれ一方を海に面した鎌倉を、攻めるに難く守るに易い要害の地であるとの定説を裏付ける根拠の一つとされた。

この三方を囲む山々の要害遺構等の調査・研究に関しては、まず『鎌倉市史考古編・鎌倉の城郭』(昭和34年刊)で赤星直忠氏が鎌倉城、杉本城、住吉城そして玉縄城の各遺跡を地形調査にもとづいて論考されているのが、体系的な研究の先駆けであろう。同氏は更に『逗子市お猿畠大切岸について』(『神奈川県文化財調査報告書』 第34集・昭和47年刊)で切岸の要害性について論及されている。続いて鎌倉市教育委員会による『多宝律寺遺跡発掘調査報告書』(昭和51年刊)では、「中世山城的様相を呈する周辺地形」から主要切通などの要衝地にある有力寺院の建立は「政治的軍事的立地条件を抜きには考えられない。」と推察している。また同じく市教育委員会の『東勝寺跡発掘調査報告書』(昭和52年刊)では、発掘地点周辺の城塞遺構調査報告の中で「鎌倉を囲む山稜部には殆ど例外なく人工造成の手が加わり、階段状の平地や掘割などが自然地形を巧みに利用して造られている。これは手狭な谷戸の中での敷地面積を拡張すると同時に城塞的な防衛施設を備えることを目的としたものと思われるが、鎌倉の複雑な地形を活かして利用した当時の都市計画は全く見事と云う外ない。」と指摘する。名越切通周辺の発掘調査結果をまとめた、逗子市教育委員会による『逗子市名越遺跡』(昭和54年刊行)の中で赤星直忠氏は、元弘の乱(1333年)で烈しい攻防戦が展開された極楽寺坂、仮粧坂、巨福呂坂を例に挙げて、非常時における切通の要害的機能を解明された。近年、鎌倉市教育委員会によって主要切通周辺の詳細分布調査が仮粧坂(平成8年度)、亀ヶ谷坂(同9年度)、大仏切通(同10年度)、極楽寺坂切通・朝夷名切通・釈迦堂口・杉本城跡(同11年度)を対象に実施され、切通を中心とした要害的遺構群の分布状況が把握されている。この他、玉縄城跡内で行われた約20件の発掘調査例があり戦国期城郭遺構に関わる刮目すべき成果を得ているが、「鎌倉」外であるのでここでは詳しく触れない。

以上が、概ねではあるが山稜部の「要害」に関する考古学的調査・研究暦であり、今回の発掘調査はこれらの成果に基づきつつ「七切通」周辺地区と鷲峯山・天台山地区、杉本城・釈迦堂口地区・住吉城地区の9地区内で行われ、その経緯や結果については次編以降に詳述されるとおりである。

第2表「鎌倉内の合戦・抗争暦」は鎌倉を舞台とした戦史を纏めたものである。表における「鎌倉」の範囲は、吾妻鏡　嘉禎元年(1235)12月20日条にある「小袋坂、小壺、六浦、固瀬河」の四境とした。また、謀殺の類(例：元久2年・1205　三浦義村、畠山重保を誅す件等)や鎌倉外での戦闘(例：承久の変・元冠の役等)などは除外した。25件の「鎌倉の戦史」は次の4期に画される。

Ⅰ期は、鎌倉が事実上の首府の位置を維持していた鎌倉期で、権力の交替に伴う確執等による戦闘行為が主体であった。外敵の攻撃により鎌倉が「要害」として機能したのは皮肉にも、幕府が滅じた元弘の乱のみである。

Ⅱ期は、旧幕勢力の反攻と南北両朝の争乱が鎌倉争奪戦の形で展開している。元弘の乱後の混乱期から初

第2表　鎌倉内の合戦・抗争暦

	No	和暦	西暦	事項	鎌倉内の主たる戦場
Ⅰ	1	治承4年	1180	三浦・畠山由比ガ浜合戦	由比ヶ浜、小坪
	2	建仁3年	1203	比企氏の乱	比企ヶ谷
期	3	建保元年	1213	和田合戦	大倉、小町大路、若宮大路、横大路、米町口、前浜
	4	宝治元年	1247	宝治合戦	西御門、永福寺、法華堂
	5	文永9年	1272	二月騒動(北条時輔の乱)	名越か
	6	弘安8年	1285	霜月騒動	塔の辻他
	7	永仁元年	1293	平禅門の乱	経師ヶ谷
	8	嘉元3年	1305	北条宗方の叛	二階堂か
	9	元弘3年	1333	元弘の乱	洲崎、瓶薬寺口、仮粧坂、山の内口、東勝寺他
Ⅱ	10	建武元年	1334	本間・渋谷一族の反攻	聖福寺
	11	建武2年	1335	中先代の乱	大御堂(勝長寿院)
期	12	建武2年	1335	北畠顕家、鎌倉侵入	法華堂
	13	建武3年 延元元年	1336	斯波家長、顕家の兵と戦う	片瀬
	14	建武4年 延元2年	1337	北畠顕家再び鎌倉侵入	杉本城、小坪、前浜、腰越
	15	文和元年 正平7年	1352	新田義興他、鎌倉侵入	赤橋辺
Ⅲ	16	応永23年 ～24年	1416～17	上杉禅宗の乱	御所、佐介、国清寺(扇ヶ谷)、前浜、仮粧坂、雪ノ下
期	17	応永29年	1422	佐竹常元の叛	佐竹館(大町)、比企ヶ谷法華堂
	18	永享元年	1429	足利持氏、大掾満幹を襲撃	雪ノ下
	19	永享10年 ～11年	1438～39	永享の乱	大倉、永安寺、永福寺
	20	宝徳2年 ～3年	1450～51	足利成氏と長尾・太田氏との抗争	成氏第、江ノ島、腰越、由比ヶ浜
	21	康正元年	1455	今川範忠鎌倉に入り、足利成氏古河へ去る	鎌倉中
Ⅳ	22	永正9年	1512	伊勢長氏(北条早雲)と三浦義同(道寸)との抗争	住吉城他
期	23	大永6年	1526	里見義豊、鎌倉侵入	鶴岡八幡宮他、海上
	24	弘治2年	1556	里見義弘、三浦から鎌倉侵入	太平尼寺
	25	永禄4年	1561	里見義弘、三浦から鎌倉へ侵入し小田原へ向かう	荏柄の関所

代鎌倉御所足利基氏のもとに鎌倉府がおかれるまでの混乱期であった。

Ⅲ期は、鎌倉府後半期の内訌と京都室町幕府との対立による争乱の時期である。康正元年の戦いでは鎌倉公方足利成氏は鎌倉を死守することなく古河に去り、ここに「中世都市鎌倉」は終焉を迎えることとなる。

Ⅳ期は鎌倉を支配した小田原北条氏と反北条方との抗争の場となった時期であるが、政治的軍事的に重要な主戦場になることはなく、鎌倉は最早奪取するに値する要衝地の地位を喪失していたのである。

各期を概観すると、Ⅰ期とⅢ期はそれぞれの最終段階で外圧に屈して局面の転換を迎えているのに対し、Ⅱ期は内外の争奪戦に終始しⅣ期は一方的な侵略を受けるか或いは「通過戦場」となり、各時期の時代的特徴が如実に現れていよう。そして各戦闘の中で切通等が激しい攻防戦の舞台となったことが、史料上から推

定できるのは元弘の乱のみであり、また敗者が鎌倉から退かず戦いの末に亡び去るのもこの乱のみである。嘗て大森金五郎氏が中先代の乱に際して足利直義が鎌倉を退出したのは「鎌倉の到底防禦すべからざるを知ってゐたからである。」、また足利基氏が氏満への遺言で「鎌倉は坐ながらにして敵を受くべき地勢ではない。先ず兵を關戸・分配河原に出して、敵と雌雄を決すべし…と云ったのは尤もな言である。」(『かまくら』大森金五郎　大正14年)と指摘したのは首肯すべき見解であろう。

さて、今回の調査により多くの調査区で堀切、平場、切岸、桝形などの要害遺構を検出し、また調査地の中で「鎌倉合戦暦表」の主たる戦場に該当する、極楽寺口、仮粧坂、山の内口(巨福呂坂)と杉本城跡などでも要害遺構の分布が確認されている。中でも元弘の乱で激戦が展開されたとされる極楽寺切通周辺ではその所在密度が最も高く、切通直上坡には切岸、急崖、桝形(通称五合桝)などが分布し、また切通北西側の山上に位置する桝形遺構(通称一升桝)は形状・保存状態共に良好で且つ築造年代も13世紀後半～14世紀前半と推定し得る注目すべき要害遺構である。極楽寺地区は鎌倉西方を守る上で重要な要衝地であったことが、調査により裏付けられたといえよう。

元弘の乱は前述のとおり鎌倉期において切通等の要害遺構が防衛線として機能した、最初で最後の戦いであった。この戦いの終局は葛西ヶ谷の東勝寺であるが、鎌倉方の敗北を決定付けたのは稲村ヶ崎からの侵入を新田方に許したことである。稲村ヶ崎が鎌倉への重要な進入路であったことは史料からも明確で、『吾妻鏡』の稲村ヶ崎通行に関する記事には、建久2年(1191)2月4日条の頼朝二所詣の項に「若宮大路南行。至稲村崎。整行列。」と建長4年(1252)4月1日条の第6代将軍宗尊親王鎌倉下向の項『路次。自稲村崎。經由比濱鳥居西。』がある。紀行記では、『海道記』(貞永2年・1223)に「稲村といふ所あり。さかしき岩のかさなり臥せる濱をつたひ行ば。岩にあたりてさきあがる浪の。花の如にちりかかる。』とある。なお南北朝時代の史書『保暦間記』に建久9年(1198)、頼朝が相模川の橋供養の帰途に『稲村崎ニテ海上二十歳計ナル童子(安徳天皇)ノ現シ給テ。』とあり、稲村ヶ崎が通行路であったことを記している。このように稲村ヶ崎を経由する道が鎌倉への主要な進入路の一つであったことは確実であるが、頼朝や宗尊親王の行列が確伝いに通行したとは考え難く、狭隘ながらも通行路として整備された「稲村路」の存在が推察されよう。『吾妻鏡』建久2年2月4日条で「至稲村崎。整行列。」とあるのも、霊山山麓の道が狭いがために稲村ヶ崎まで来てから改めて行列を整え直す状況の描写と思われる。その「稲村路」はいつ頃まで存続したのであろうか。稲村ヶ崎の現況は大正12年(1923)の関東大震災による斜面崩落のために大きく変容した姿で、海岸線は崩落土により埋め立てられている。明治15年(1882)測量の「雪下村」地図(第2図)では坂ノ下から稲村ヶ崎にかけて崖状の礎が遍っているが、崖磯上に道の存在は認められない。『鎌倉記憶帖』(木村孝三郎氏・昭和61年刊)には、この頃成就院寮地から霊山山中腹を経て金山、稲村ヶ崎方面に至る道が一般的な通行路であり、急坡な極楽寺切通を越えるよりも早道であったという。さらに同書によれば元禄16年(1703)・安政2年(1855)の地震により霊山山が海に向かって大きく崩れたとあり、安政地震による山崩れの凄まじさが木村氏の祖父の談として収められている。海を挟んだ対岸の小坪には、逗子マリーナ建設の埋め立てで北側が埋せられてしまったが、飯島から住吉城西麓の正覚寺、海前寺、小坪寺の前を通る崖磯上の小道が開かれている。恐らく霊山山の麓から稲村ヶ崎方面にかけて同じような道が通っていたのであろうが、元禄・安政地震で埋没してしまい、その後に『鎌倉記憶帖』にある道が開かれたものと考えられる。明治35年、大森金五郎氏が新田義貞の渡渉伝説を確認するために稲村ヶ崎から坂ノ下に向かって干潮時に磯伝い踏破を試みているが(前掲『かまくら』所収)、これも当時は既に崖磯上に道が存在していないことを裏づけていよう。「稲村路」の存続期間については、草

第2図　稲村ヶ崎周辺の旧地形(明治15年測量)[S＝1 20,000]

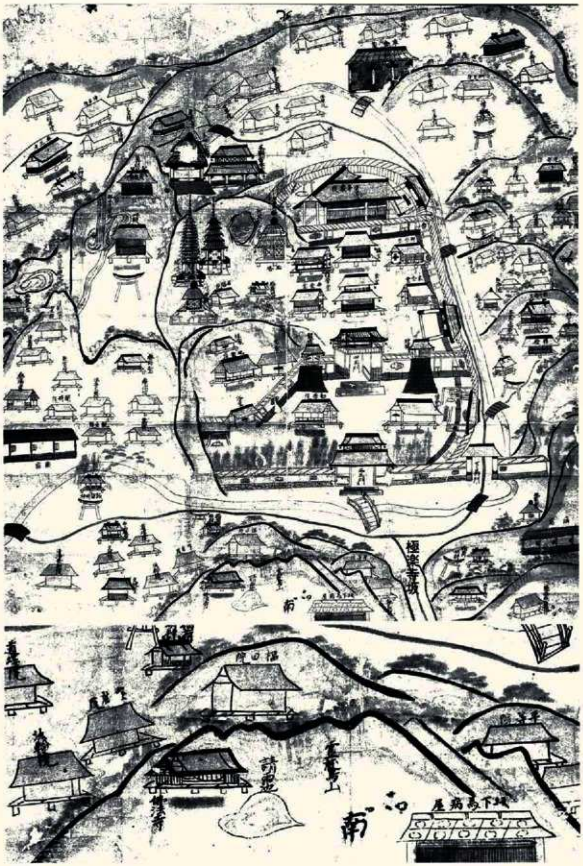
柳光壽氏や赤星直忠氏が『鎌倉市史』の中で「忍性が極楽寺開山住持となった文永4年(1267)以降に極楽寺切通が開削され、それ以来稲村ヶ崎道は使われなくなった。」と推考されている。『十六夜日記』(建治3年・1277頃)、『とわずがたり』(正応2年・1289)でも極楽寺には訪れるが稲村ヶ崎の記述はなく、通行路としての使用頻度は低下したものと思われる。しかし、軍事的に重要な進入路であったことは元弘の乱で実証され、また建武2年(1335)侍所頭人の高師泰が天野経顕に「鎌倉中入口内稲村ヶ崎警護事」(『天野文書』)を命じており「要衝路」としての機能は存続していたのであろう。なお草柳光壽氏が、『柳松論』に「稲村崎の浪打際。石高く道細くして。」とあることに関して、「石高く道が細いために多数の軍兵を通すに困難だというのであ

って、道は相当高い所を通っていたのではないかと思う。義貞は干潟を通ったのではあるまい。」(『鎌倉市史　総説編』)と述べた見解は傾聴すべきである。

さて、今回極楽寺地区調査の中で霊山山東側の山腹に南北約70m、東西約30mの平場の存在が判明し、極楽寺支院の一つ「仏法寺」の跡地と推定され調査が実施された。この場所が仏法寺であることは『極楽寺境内絵図』(第3図)の描写や、『極楽寺縁起』(元徳元年・1329)に「以到于田辺與江島仏法寺此三所、而行請雨之法」「仏法寺　霊山崎ノ之頂上也」とあることから窺える。また『日本歴史地名大系第14巻　神奈川県の地名』鎌倉市霊山山(昭和59年刊)の項に「…鎌倉時代後期から山頂に仏法寺という寺があり、極楽寺に属していたらしい。山上に小さな池の跡があり、忍性や日蓮が雨乞いをした場所との伝説がある。」と記し更に、「元弘の乱の折に激しい戦闘が展開された霊山寺とは仏法寺を指すと指摘している。『鎌倉記憶帖』では「霊山山は…中腹に、霊山寺跡といわれる古池のある1アール半ほどの平地があった。霊山寺跡は杉林になって、なかに細い道がついていた。」と霊山寺伝承を紹介しているが、ここでいう平地こそ今回仏法寺跡として調査を実施した場所であり、霊山寺の名は、「霊山崎に建つ寺」に基づく呼称と考えられ、霊山寺と仏法寺とが同一であることは間違いないと思われる。

仏法寺跡の調査内容については極楽寺地区第33号トレンチの項に詳しいが、岩盤を削平して造成された平場上には境内絵図にある「請雨池」らしき窪地(第38図、写真89)や掘立柱建物跡(第40、41図、写真85、88)などが検出されている。仏法寺跡内南東側に設定された日トレンチ(第41図、写真86)では、削平岩盤面が東側(海側)に向かって急激に落ち込み、同じ状況は北東側のAトレンチ東端(第32図)でも表出していた。落ち込み際は垂直に近い傾斜であるが、自然崩落的な状況は認められず切岸上端的な様相を呈し、仏法寺建立用地として造成された削平岩盤面の東限を画す結界線と判断される。切岸上端の東側には元禄・安政期の地震によると思われる崩落土が堆積し、その上面を道路状の窪みが南北に走行しており、公図上の道路位置とも合致することから『鎌倉記憶帖』でいう「細い道」のことである。稲村ヶ崎から霊山山麓を経て坂ノ下方面に至る「稲村路」はこの崖下に埋没しているのであろう。なお『鎌倉記憶帖』によれば関東大震災時に、この辺りでは道の東側斜面の「カヤ場」が大崩落し山の姿が一変したとのことである。

ではここで元弘の乱においてその勝敗を決定付けた「稲村ヶ崎攻防戦」について、調査結果を踏まえながら検証を試みたい。新田義貞率いる反鎌倉軍は元弘3年5月18日、巨福呂坂、仮粧坂、極楽寺坂の三方向から一斉攻撃を仕掛け各所で激しい攻防が繰り広げられた。『梅松論』によれば同日未ノ刻(午後2時頃)「義貞の勢は稲村崎を經て、前濱の在家を焼拂ふ煙みえければ。……其手引退て霊山の頂に陣を取。」とあり、一旦前浜から侵入した新田勢が鎌倉方の反撃により、大将の大館宗氏を討たれ敗走し霊山の頂きに陣を取るとある。前浜の合戦については『信濃後藤信明軍忠状―鎌倉遺文古文書編32268』の「同(5月)十八日於前濱一向堂前、依散々責戦」と『天野経顕軍忠状―天野文書・東京大学史料編纂所影写本』の「(5月18日)御手懸破稲村崎之陣迄、于稲瀬川并前濱鳥居脇合戦忠之處」とがあり、5月18日に稲村ヶ崎の陣を破った攻撃軍の一部が前浜の一向堂前及び稲瀬川や鳥居の周辺まで攻めこんだことは間違いないようである。なお、鳥居について、奥富敬之氏は『海道記』にもとづき「御霊神社の鳥居」のこととされている(『鎌倉古戦場を歩く』・平成12年刊)。下線部分の「稲村崎を經て」、「破稲村崎之陣」稲村ヶ崎からの進入路を攻撃軍が確保したことを示し、また「其手引退て霊山の頂に陣を取」は「引退て」とあるから反撃を受けた攻め手側が退き、霊山の頂で陣容を立て直したと推定し得る。つまり、稲村ヶ崎と霊山山を奪取することによって、前浜方面に進撃することが始めて可能となったのであろう。更に、『常陸塙政茂軍忠状―鎌倉遺文古文書編32309』に「同(5



第3図　極楽寺境内絵図（下段は霊山山部分）

月）十九日極楽寺坂於合戦、先手馳向、」と前浜合戦の翌日も、極楽寺坂は破られることなく激戦が繰り返されており、他の巨福呂坂、仮粧坂でも同じ状況であったのであろう。『熊谷虎一丸軍忠状―東京大学史料編纂所影写本』には「父直春……(五月廿日)鎌倉霊山寺之下討死」とあり、「霊山寺之下」で討ち死にしたのは18日に攻撃軍が陣を取った霊山山を巡る攻防戦か、或いは鎌倉方が河山を奪還した状況の中での戦いであろう。『三木俊連軍忠状―和田文書・東京大学史料編纂所謄写本』は「去五月廿一日　引籠敵霊山寺大門、射大手稲村崎　軍勢於散々之間疵打入之処、俊連自峯折下懸先打破敵之籠大門」「俊連責上霊山寺峯及夜間戦之処」と、5月21日霊山の大門に立てこもる敵が大手の稲村ヶ崎の軍勢(攻撃側)を散々射たので前進できなかったが、俊連は自ら峰を折れ下って敵のこもる大門を打ち破った。そして霊山寺の峰まで攻め上がるが戦いは夜までかかった、と記している。これにより21日は鎌倉方が霊山寺を完全に奪還し「大手の稲村ヶ崎」を散々に射て、攻撃軍の進撃を阻止していたと判る。そしてついに鎌倉方が力尽きて霊山山が攻撃軍の手中に落ちた22日の早晩、頭上から射かけられる危険が排除された、稲村ヶ崎から仏法寺下の道を我先に鎌倉へ侵入したのである。元東海大学教授で水産海洋学が専門の山中一郎氏によれば、元弘3年5月22日は現在の7月11日にあたりその日の干潮は午前2時50分頃と午後2時30分頃で、また大潮でもないという(『鎌倉朝日・知られざる鎌倉　134』・平成2年)。攻撃軍が突入した22日の早晩の干潮は、とても太平記の「俄ニ二十余町干上テ」には及ばなかったようである。それでも突入できたのは霊山山頂を支配することにより通行路頭上の安全を確保し、なおかつ海上で「横矢ニ射サセント構タリ」(太平記)と待ち構えた鎌倉方の軍船を霊山山上から牽制できたからに他ならない。引き潮による軍船の後退も有効であったのだろう。5月18日から22日までの推移を、推察を加えながら整理する。

★18日　午後2時、大館宗氏ら稲村ヶ崎の陣を破り霊山山、仏法寺を占拠し直ちに前浜まで侵出するが反撃され宗氏は戦死。霊山の頂まで退く。

★19日　極楽寺坂での激戦の傍ら霊山山の取り合いが続く。

★20日　霊山山を巡る攻防は鎌倉方の有利な内に進展し、再び手中に収める。

★21日　霊山山を奪還した鎌倉方は霊山寺の大門(南大門か)に立てこもり、大手(稲村ヶ崎)の攻撃方に矢を射かけて進撃を阻止するが、三木俊連の奇襲により大門を放棄し霊山寺の峰を拠点に最後の抵抗を試みるものの、同日深夜に及び遂に破れ、霊山山一帯は攻撃方の支配下となる。

★22日　午前3時頃、攻撃軍は「稲村路」から一斉に鎌倉内に突入した。同時にそれまでよく支えていた極楽寺坂、仮粧坂、巨福呂坂の鎌倉方も背後を衝かれる形で瓦解し、鎌倉幕府は滅亡する。

元弘の乱に於て各切通は防衛機能を存分に発揮し各所の攻防で破られることはなく、石丸熙氏が『都市鎌倉の武士たち』で「七口の防備は堅固であり、優れた軍事的機能を証明したのである。』と指摘したようにその要害性は十分に実証されたといえる。切通隧路の両壁に築かれた切岸、堀切、平場等の防衛施設は、この戦いで有効に機能したが、霊山山麓の「稲村路」はいわば「片壁だけの切通」状態であり、壁の頂をどちらが奪うかで行路の支配権が決定される地形的条件を備えていたといえよう。加えて5月18日に、大館宗氏らが稲村路の突破に一度は成功したことが、鎌倉方、反鎌倉方の双方に興亡の鍵がこの地にあることを強く認識させたに違いない。霊山山そして仏法寺を巡る熾烈な戦いは正に鎌倉攻防の帰趨を決する合戦であったのである。

以上により、鎌倉最大の合戦である元弘の乱と、要害遺構との関わりの一端を明かにし得たことは、「中世都市鎌倉」の研究上重要な成果がもたらされたものであり、今回の調査の意義は極めて高いといえよう。

本稿を執筆するにあたり、三山進氏から里見一族の鎌倉侵攻に関して種々ご教示を頂いた。また、史料の検索、釈文等で浪川幹夫、内田浩史両氏の手を煩わせた。記して謝意を表する。

文中に引用した史料以外に、下記の諸書を参考とした。

渡邊　世祐　1925　『関東中心　足利時代の研究』
山岡　荘八　1964　『新太平記』
阿部正道　1971　「塩田義政とその邸跡について」『神奈川県博物館協会会報』第26号
三山　進　1979　『太平寺滅亡』
熱田　公　編著　1981　『年表　日本歴史』3
川名　登　1983　『房総里見一族』
館山市立博物館　2000　『さとみ物語』
筑間良彦　2001　『鎌倉合戦物語』
『源平盛衰記』
『北条九代記』
『鎌倉大草子』
『鎌倉大日記』
『鎌倉年代記・裏書』
『鎌倉九代後記』
『北条五代記』
『甲斐国妙法寺記』
『喜連川判鑑』
『武家年代記・裏書』
『関八州古戦録』
『快元僧都記』
『東国紀行』
『相州兵乱記』
『宗長手記』

補　記

本稿執筆後の地形踏査等により「稲村路」に関わる所見を得たので、検討に供するために記す。極楽寺切通以南の山稜部は東側を霊山ヶ崎、西側を稲村ヶ崎と『新編相模風土記稿』『新編鎌倉志』に呼称される。両崎の境界地は史料上判然としないが、明治15年測量図の検討と踏査により、現住居表示の極楽寺一丁目14番と15番とを画す谷筋が山稜全体を南北に分断する唯一の箇所と確認し得た。谷筋は切通状の地形を呈し、「測量図」には針磨橋から南西方向に進む道が描かれ、現状でもほぼ同位置に道路が所在する。「測量図」の道は南端が崖上で途切れており、その先は江戸期の地震により崩壊したものと推定される。道の北東側には台形状の高地が表記され、東側の下半部は関東大震災で崩落しているが、現状の崖際に沿って平坦面の残存が認められた。踏査と「測量図」からの推論ではあるが、袖ヶ浦(稲村ヶ崎の海岸)から極楽寺側に沿って北上し、切通状の谷筋を経て仏法寺下から前浜へと通る「稲村路」の存在を考えたい。また三木俊連軍忠状にある大手の稲村崎を散々に射たとする「霊山寺大門」の所在地は、「稲村路」を見下ろす北東側の「台形高地」が相応しい場所として想定できよう。

第2編

極楽寺坂地区の調査

名越より稲村ヶ崎・極楽寺坂方面を望む

極楽寺坂地区　例言

1　本地区のトレンチ番号は設定時、および調査時、本報告で異なっており、下表の通り対応する。記録図面、記録写真、出土遺物への注記は調査時番号に拠っている。
2　本地区での出土遺物への注記はWHAT＊＊(トレンチ番号)と略記している。
3　第Ⅲ章の執筆分担は下表の通りである。

本報告番号	調査時番号	設定時番号	執筆担当
1	1	83	菊川
2	2	84	菊川
3	3	82	鈴木
4	4	81	
5	5	80	鈴木
6	6	78, 79	鈴木
7	7	77	鈴木
8	8	76	鈴木
9	9	75	菊川
10	10	74	菊川
11	11	73	菊川
12	12	72	菊川
13	15	57	
14	16	58	
15	17	59	
16	19	61	菊川
17	20	62	
18	21	64	菊川
19	22	65	菊川
20	23	67	
21	24	68	
22	35	85	鈴木
23	32	86	
24	31	88	
25	30	89	
26	29	90, 91	鈴木
27	28	92	菊川
28	27	99	
29	26	98	菊川
30	25	97	鈴木
31	33	94	
32	34	95	
33	36	93	菊川

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

本調査地区は、鎌倉市坂ノ下、極楽寺一・二・四丁目、長谷三・四丁目、笛田にまたがる丘陵地帯の尾根筋沿いに東西約1km、南北約1.5kmの範囲にひろがる。今回の8調査区のなかでは最も広範囲で、かつ後述するように鎌倉の中世史を語る上できわめて重要な意味合いを持つ地域を含んでいる。

中世都市鎌倉を考えた場合、その「域壁」に喩えられる丘陵地帯の西部分は山ノ内方面より源氏山、長谷、極楽寺をへて稲村ヶ崎で相模湾の海岸線に達する。地質的には源氏山周辺までは深沢凝灰質粗粒砂岩層、それ以南では第三紀前期鮮新世に堆積した三浦層群の逗子シルト岩層によって形成された丘陵で、その標高は最高所でも海抜100mに満たないものの、かなり急峻である。極楽寺周辺では極楽寺川とその小支流によって開析され、西ヶ谷、馬場ヶ谷といった谷戸をなし、丘陵の尾根筋はこれらの谷戸によって東西に分断される形となっている。このうち東側の尾根筋はさらに極楽寺坂切通の造成により人為的に南北に切断され、南側の尾根が稲村ヶ崎に続いている。

極楽寺坂切通は極楽寺の開山である良観坊忍性が開鑿したという伝説があることからこのように呼ばれる。鎌倉七切通の一つで、そのなかでも最も西側に位置するので、鎌倉幕府はここを京都および西国を眼中に据えた重要な戦略拠点と見なしていたと想像できる。極楽寺は正式には霊鷲山感応院極楽寺といい、現在では鎌倉で唯一の真言律宗寺院。開基は北条義時の子重時。開山は前述した通り忍性である。開創については「極楽寺縁起」では正元元年(1259)と伝え、もともと別地(これについては深沢の里、藤沢等異伝が存するが、深沢説が有力)にあった極楽寺という寺を重時が移設し、あらためて大寺の建立を開始したが志半ばで重時は世を去り、その子長時、業時兄弟が父の遺志を継ぎ、忍性を開山に迎えて完成させたのが現・極楽寺であると思われる。なお伝えによると寺の移転地として忍性が選んだ極楽寺坂周辺はかつて地獄谷とよばれていたという。重時は極楽寺の地に「別業」(『吾妻鏡』による)を有し、法名を極楽寺殿といった。北条氏一門の別業、すなわち別荘は後の各調査区でも述べるが鎌倉七切通などの要衝の地に置かれており、極楽寺坂の重時別業も例外ではない。寺院としての極楽寺は往時は七堂伽藍に塔頭・支院四十九院を擁した大寺院であった。鎌倉幕府滅亡後も鎌倉公方の庇護のもと同寺は寺勢を維持するが、大火、暴風、地震にたびたび見舞われ伽藍、支院はつぎつぎと失われていき、寺域は縮小していった。現在の極楽寺境内とその西側一帯はかつての七堂伽藍の所在地と推定され、極楽寺中心伽藍跡(№290)として周知されており、その周辺部は広く極楽寺旧境内遺跡(№291)として、同寺の支院、関連施設はもちろんのこと、北条氏の極楽寺別業の所在の可能性も含めて「極楽寺境内絵図」(以下「境内絵図」と略記)に基づき一括して周知されている。

ところで極楽寺の開山忍性は、師・叡尊が復興した律宗を上層・下層の社会に広く浸透させ、また土木工事や医療・福祉などの社会事業を熱心に行い、忍性菩薩とたたえられた。極楽寺は彼の鎌倉における事業の拠点となり、かつての境内とその周辺には病宿・療病院・癩宿・坂下馬病舎・施薬悲田院・薬湯室などの施設が存在したことが近世に成立し、最盛期の同寺の様子を描いた「境内絵図」より知られる。さらに極楽寺から尾根を隔てた長谷の桑ヶ谷には療病院が設けられ、癩病などに苦しむ一般庶民の患者に対して診断治療が施された。この療病院の跡には現在石碑が立ち、その周辺は桑ヶ谷療病院跡遺跡(№294)として周知されている。

さて、極楽寺坂切通は京と鎌倉を結ぶ東海道ルート上にあった、いわゆる稲村ヶ崎古道に代わって開鑿さ

れたものであった。極楽寺創建以前に鎌倉入りした人々、たとえば『海道記』や『東関紀行』の作者らは稲村ヶ崎の波打ち際を通過したものと思われる。建長四年(1252)鎌倉入りした六代将軍宗尊親王は稲村ヶ崎経由であった。先述の通り縁起では極楽寺開創は正元元年(1259)とあるが、実際に忍性が同寺に移ったのが文永四年(1267)なので極楽寺坂切通の完成はこの時期以降にもとめるのが適当であろう。鎌倉時代の同切通は今日のように深く掘削されておらず、成就院の門前あたりを通っていたという。ここが血なまぐさい戦場となったのは元弘三年(1333)の新田義貞による鎌倉攻めの際である。

『太平記』,『梅松論』によると義貞は鎌倉攻撃に際して軍勢を三手に分けたという。『太平記』の記載によればそのうち極楽寺坂へは新田一門の大館二郎宗氏を左将軍、江田三郎を右将軍とする十万余騎の軍勢がさしむけられ、同坂を守備する北条氏一門の大仏貞直率いる甲斐・信濃・伊豆・駿河の軍勢五万余騎と戦ったが、貞直の家臣本間山城左衛門らの猛攻にあって新田軍は腰越にまで押し戻され、宗氏は戦死したという。極楽寺坂の防備は「北は切通にて山高く路さかしきに、木戸を誘へ逆茂木をかいて、数万の兵陣を双べて並居たり。南は稲村ヶ崎にて、汐頭路せばきに、浪打ち涯まで逆木を繁く引き懸けて、澳四、五町が程に大船どもを並べて、矢倉をかいて横矢に射させんと構へたり」(小学館新編日本古典文学全集版『太平記』による)とあるようにきわめて厳重であった。しかしこの戦いの際、『太平記』に記述のない「霊山寺(霊山)の攻防」があったとみられる。『梅松論』は宗氏が「稲瀬川にをいて討取」られた後、「其手引退て霊山の頂に陣を取」と記すが、さらに具体的な戦闘の記録として『和田系図裏文書』所載の「和泉国三木村俊連軍忠状」には同年五月二十日、鎌倉方の兵が霊山寺の大門に引きこもり、稲村ヶ崎に達した新田の軍勢を散々に射たのに対して、俊連らは霊山の峰から下ってこの大門を打ち破り、さらに峰に上って夜に至るまで鎌倉方と戦ったという内容の記述があり、他の新田側の武士が残した軍忠状などの文書にも霊山寺での戦いを記したものが見られ、一部は総大将の義貞が鎌倉に入る前に霊山から鎌倉方の防御線を突破して鎌倉市中で戦っていたとみられる(奥富1999)。義貞は宗氏の戦死後、みずから兵を率いて同年五月二十一日に片瀬・腰越を経て稲村ヶ崎に臨むが、ここで有名な「黄金の太刀の奇瑞」がおこって新田勢は干潟と化した由比ヶ浜を渡って鎌倉に乱入したといわれている。しかし実際には前述の一連の古文書の記載から窺えるように、極楽寺坂と稲村ヶ崎の間の霊山をめぐる攻防戦に打ち勝ったことにより、鎌倉への進攻が果たせた可能性が高い。ところで肝心の霊山寺という寺の所在地であるが、霊山寺というのは正式な寺名というよりも「霊山にあった寺」の畔称と考えるべきであろう(貫・川副1980)。「境内絵図」には霊山崎に極楽寺支院の一つである仏法寺がみえるので、霊山寺とはこの仏法寺のことであると考えるのが自然である。仏法寺は元亀三年(1572)の極楽寺諸堂を焼いた火災の際に焼失を免れ、その後明暦三年(1657)に極楽寺長老恵性殊公が同寺を移築して極楽寺の方丈としたと寺伝にはあるので、近世初頭まで存立したと推定される。なお霊山は忍性と日蓮が、雨請いの修法を競った場所であるとの伝説が存在する。

近代に至って明治四十二年(1909)には結核菌を発見したドイツの細菌学者ロベルト・コッホが霊山を訪れ、これを記念する碑が門弟の北里柴三郎らによって建てられた。さらに大正年間には山頂一帯が公園として整備されたが、大正十二年(1923)に鎌倉を襲った関東大震災の後、維持管理がなされないまま放置された模様である。なおコッホ博士記念碑は現在稲村ヶ崎に移設されている。

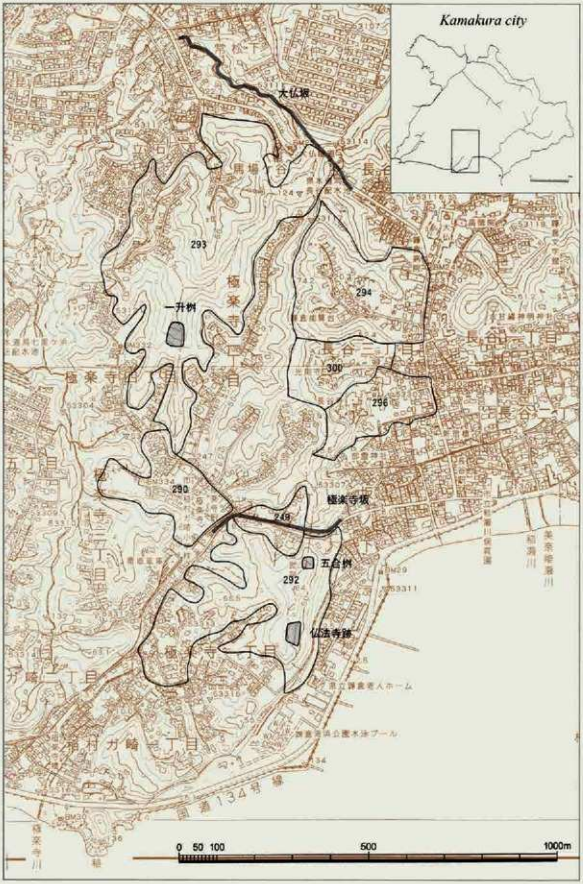
今日、霊仙山あるいは霊山ヶ崎とよばれている尾根の極楽寺坂切通寄りの中腹(成就院裏手)に、一部土塁で囲まれた城郭遺構と考えられる一角(桝形)が確認されており、五合桝遺跡(№292)として周知されている。さらに同切通の北方、西ヶ谷と馬場ヶ谷との間の尾根により規模の大きい桝形があって一升桝遺跡(№293)と

吟ばれ、これについては昭和四十八年(1973)に地形測量調査が行われている(松尾1983ａ)。両遺跡を除く極楽寺坂切通周辺の尾根筋には平場、堀切等が認められ鎌倉城(№87)に含められている。櫓形をはじめとするこの地区の一連の防衛遺構は同切通の戦略拠点としての重要性を実証するものであり、貴重な存在である。

極楽寺坂に面する成就院は古義真言宗の寺院で正式寺名は普明山法立寺成就院という。寺の縁起によると開基は北条泰時(開山は未詳)で弘法大師空海が護摩壇修法を行ったと伝える地に承久元年(1219)に創建されたが、後に新田義貞の鎌倉攻めで破壊されたので西ヶ谷に移り、江戸時代の元禄年中に祐尊によって再興され、旧地に復したという。成就院から現在の極楽寺坂を坂ノ下の方向へ下る途中の北側に鎌倉十井の一つ星月夜の井と、この井戸に関わる伝説を有する虚空蔵堂(明鏡山星井寺)がある。極楽寺坂切通が完成する以前はこのあたりは星月夜ヶ谷とよばれる谷戸であったという。星月夜の井は極楽寺坂を守備する兵員の飲料水として確保されていたと考えられる(赤星1959)。また成就院の北西方には廃寺となった西方寺跡(№219)があり、上杉憲方の逆修塔と伝える石造宝篋印塔をはじめ、鎌倉市指定西方寺址石塔群が現存する。

坂ノ下を経て、国宝銅造阿弥陀如来座像(鎌倉大仏)に向かって北上する道筋の周辺が長谷で、極楽寺との間は今回の調査区となった尾根によって隔てられている。長谷の地名はこの地にある長谷寺に因み、鎌倉時代以前は広く甘縄とよばれた城内にあった。ここに所在する甘縄神明神社、坂ノ下の御霊神社は平安時代に鎌倉権五郎景政を開発領主として開かれ、伊勢神宮に寄進された大庭御厨との関係が窺える。長谷寺は浄土宗で海光山慈照院長谷寺と号し、徳道上人を開山、藤原房前を開基として天平年間に創建されたと伝えるがその内容は大和の長谷寺の縁起に基づいており、あくまでも伝説の域を出ない。国の重要文化財に指定されている梵鐘の銘文には文永元(1264)年七月十五日とあるので、同寺の創建が鎌倉時代中期まで遡れることは確かである。本尊は寄木造りの十一面観音立像で、像高11．97ｍの巨像。右手に錫杖、左手に蓮華を挿した花瓶を持つ長谷寺様式の観音像である。板東三十三所観音霊場の第四番札所。境内の周辺では中世の同寺の堂屋の跡とみられる遺構等とともに、付随する遺物が確認されており、長谷観音堂周辺遺跡(№296)として周知されている。

長谷寺の北の谷戸には「花の寺」として知られる日蓮宗寺院の光則寺がひっそりとした佇まいの中にある。行時山光則寺という寺号は、北条時頼の側近の武士で後に日蓮に帰依し、同寺の開基となった宿屋左衛門尉光則と、その父行時に由来する。光則寺の境内は光則の邸跡といわれる。日蓮は著名な『立正安国論』を光則を通じて北条時頼に献じたといわれるが、これは光則が得宗家の被官、すなわち私的家臣(御内人)の立場にあったからであろう。なお北条氏得宗家の御内人の館が極楽寺坂と大仏坂の両切通ルートが交わる長谷の地にあったと伝えるのは注目すべきである。当時の鎌倉幕府は公然と他宗派を非難し、ときには幕政をも批判してやまない日蓮の情熱的な布教姿勢を警戒し、『立正安国論』が献上された翌年の文応二年(1261)に日蓮を伊豆に配流し、いったん赦免したものの文永八年(1271)には佐渡に流罪とした。佐渡へ護送される直前、日蓮は極楽寺坂を通行されて腰越の先の龍ノ口の刑場に引き出されるがそこで奇瑞があり、危うく処刑を免れたという伝承がある。その際日蓮の弟子日朗らは捕らえられて宿屋光則に預けられたという。光則寺本堂の裏手には日朗が幽閉されたと伝える「土牢」がある。日蓮が赦されて流刑地から戻ったころ光則は日蓮宗徒となり自邸を寺に改め、日朗を開山に迎えて光則寺を開創したと同寺の縁起にある。現在、光則寺のある谷戸およびそれを囲む尾根筋を含む一帯は光則寺旧境内遺跡(№300)として周知されている。また、本堂奥の山腹に「大橋太郎通真士龍」(大橋太郎通真は源平合戦で捕虜となり鎌倉に十二年間幽閉されたと伝える平氏方の武士)とよばれている古墳時代の横穴墓が一基存在する。



第4図　極楽寺坂地区周辺の遺跡[S＝1/10,000]

第Ⅱ章　調査トレンチの概要

極楽寺坂切通を取り巻く山陵部を極楽寺坂地区として調査を行った。極楽寺坂周辺は現在史跡に指定されておらず、指定に向けて多くの資料を得る必要もあり、他の地区より多く、全体で33箇所のトレンチを設定することとなった。各トレンチの位置と概要は第２表の通りである。主に、調査前の立地および地表形態から、山頂・山腹・尾根筋の平場、堀切、土橋状の痕尾根が観察された位置にトレンチを設定している。本調査地区は広範にわたるため、調査にあたっては便宜的に西尾根（第１～12号トレンチ）、東尾根（13～21号）、南尾根（22～33号）と地区を分けて呼称している。西尾根と東尾根は馬場ヶ谷を挟んでおおむね南北に走る尾根である。両尾根は大仏切通付近（現在は県水道企業団の貯水池となっている）で分岐し、西尾根は極楽寺境内に向かって、東尾根は極楽寺坂に向かってそれぞれ延びている。南尾根は極楽寺坂の南に位置する丘陵で、極楽寺坂切通によって分断されているが、元は東尾根と一体だった山陵と推定される。さらに南、稲村ヶ崎へと延びる尾根は、現在では住宅地と国道134号線によって分断されている。第２表に示すとおり、調査したものの遺構・遺物は発見されず、成果が得られなかったトレンチもある。しかし、遺物が出土するとは考えがたかった堀切、平場等で年代が比定できた箇所もあり、また、予想もしなかった成果が得られた箇所もあった。これらの詳細は次章に記している。

特徴的なトレンチをいくつか挙げると、第33号トレンチでは、新田義貞の鎌倉攻めの際に戦闘が行われたと伝えられる「仏法寺」に比定される平場を調査している。また、その上方の南尾根頂部に設定した第27号トレンチでは当初想定していなかった大規模な塚が発見された。付近には現在も石塔が多数散乱し、調査ト

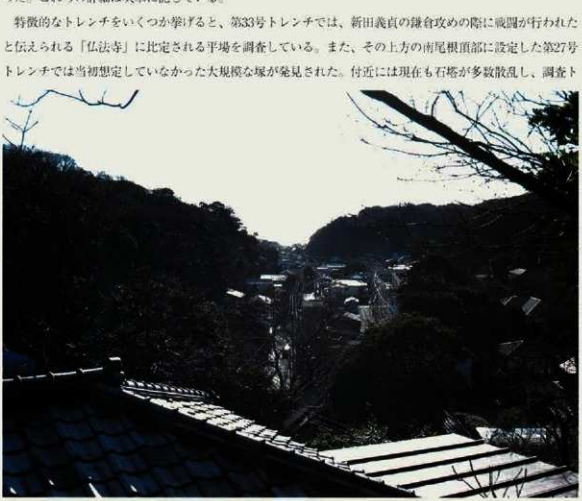


写真１　桜橋上方より稲村ヶ崎方面の眺望（左手上方が南尾根）

レンチ内からも葬送に関わる遺物が多く発見されているため、極楽寺の南側丘陵一帯は宗教色の強い「聖地」であった可能性がある。

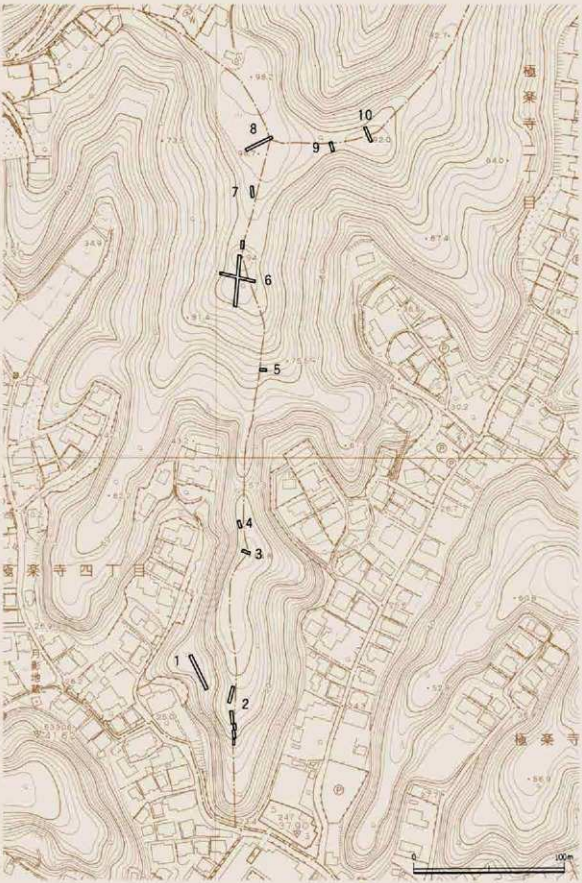
極楽寺北方の丘陵上に存在する大規模な桝形遺構、いわゆる「一升桝」の調査では、2時期にわたって土塁を構築していることが確認された。桝形内に設定した第6号トレンチからは若干の遺物も出土している。当初、これほど大規模な桝形遺構は戦国期までで下るものと推測していたが、出土遺物からその構築年代が13世紀後半まで遡ることが確認されたのも大きな成果と言えよう。

さらに、西尾根の頂部に設定した第8，9号トレンチでは弥生時代末期の住居址が発見された。中世以前の遺構・遺物は杉本城・釈迦堂口地区でも発見されており、鎌倉旧市街を取り巻く丘陵上に中世以前の遺跡が少なからず存在することが明らかになった。

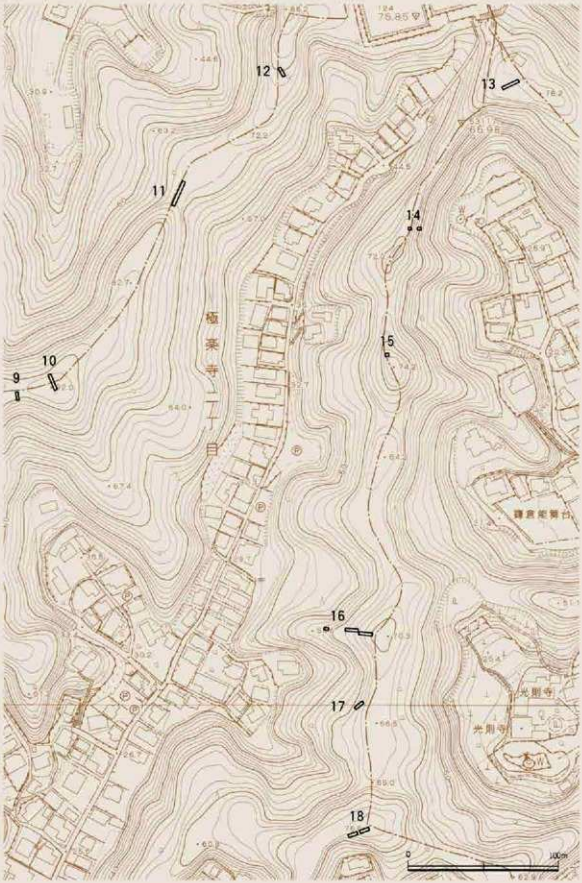
第3表　極楽寺坂地区調査トレンチ一覧表

No.	町名・大字	地番	国家座標（北東角・南西角）	規模（m）	面積（㎡）	検出遺構	出土遺物	神奈川県遺跡台帳No. 遺跡名
1	極楽寺四丁目	991	X=-76654.18　Y=-27503.95	22.0×1.5	33.00	切岸、平場、建物跡（柱穴・溝）	かわらけ・常滑・手焙り、瀬戸、肥前染付	293 一升桝遺跡
		895-1	X=-76631.50　Y=-27516.75					
2	極楽寺四丁目	991	X=-76690.19　Y=-27487.17	4.0×1.0	4.00	塚、平場、堀切	かわらけ	293 一升桝遺跡
			X=-76688.60　Y=-27487.48					
	極楽寺二丁目	985	X=-76685.04　Y=-27485.92	5.0×1.5	7.50			
			X=-76680.35　Y=-27488.26					
		986-1	X=-76678.79　Y=-27485.45	3.0×1.5	4.50			
			X=-76676.14　Y=-27487.17					
			X=-76676.14　Y=-27487.17	9.0×1.5	13.50			
			X=-76667.55　Y=-27489.82					
			X=-76661.77　Y=-27489.04	12.5×1.5	18.75			
			X=-76651.31　Y=-27487.95					
3	極楽寺二丁目	976	X=-76562.57　Y=-27475.80	4.0×1.5	6.00	堀切路		293 一升桝遺跡
	極楽寺四丁目	855-1	X=-76562.19　Y=-27482.15					
4	極楽寺二丁目	976	X=-76545.39　Y=-27481.39	5.0×1.5	7.50			293 一升桝遺跡
	極楽寺四丁目	855-1	X=-76541.57　Y=-27484.44					
5	極楽寺二丁目	976	X=-76441.55　Y=-27465.73	4.0×1.5	6.00	堀割路		293 一升桝遺跡
	極楽寺四丁目	855-1	X=-76442.70　Y=-27470.70					
6	極楽寺二丁目	962-1	X=-76382.92　Y=-27473.76	24.0×1.5	36.00	桝形（土塁・平場）	かわらけ、常滑、瀬戸、土師器	293 一升桝遺跡
			X=-76377.25　Y=-27496.93					
	極楽寺四丁目	855-1	X=-76356.60　Y=-27481.19	5.0×1.5	7.50			
		870	X=-76361.51　Y=-27483.08					
	極楽寺二丁目	962-1	X=-76366.30　Y=-27483.45	34.0×1.5	51.00			
	極楽寺四丁目	855-1	X=-76399.66　Y=-27487.86					
7	極楽寺二丁目	962-1	X=-76328.07　Y=-27474.05	7.0×1.5	10.50	堀切	青白磁、かわらけ、常滑	293 一升桝遺跡
	極楽寺四丁目	870	X=-76320.67　Y=-27476.51					
8	笛田	2136	X=-76288.64　Y=-27462.54	19.0×1.5	28.50	住居跡、土坑	弥生土器	293 一升桝遺跡
			X=-76295.21　Y=-27480.21					
9	笛田	2136	X=-76296.51　Y=-27421.62	6.0×1.5	9.00	堀切、土坑		293 一升桝遺跡
	極楽寺二丁目	962-16	X=-76290.90　Y=-27424.65					
10	笛田	2136	X=-76290.36　Y=-27396.35	11.0×1.5	16.50	住居跡	弥生土器	293 一升桝遺跡
	極楽寺二丁目	1015	X=-76280.96　Y=-27402.08					
11	極楽寺二丁目	1013-7	X=-76153.16　Y=-27311.37	17.0×1.5	25.50	堀切、平場、土坑		293 一升桝遺跡
			X=-76157.52　Y=-27320.02					
12	極楽寺二丁目	1008-2	X=-76082.51　Y=-27245.63	6.0×1.5	9.00	堀切		293 一升桝遺跡
			X=-76077.75　Y=-27249.69					
13	長谷四丁目	532-5	X=-76087.20　Y=-27089.85	11.0×1.5	16.50			294 桑ケ谷療病院跡
	長谷三丁目	612	X=-76091.66　Y=-27100.68					
14	極楽寺二丁目	1001	X=-76183.22　Y=-27155.89	2.0×1.5	3.00	犬走状平場		294 桑ケ谷療病院跡
			X=-76184.85　Y=-27157.52					
	長谷三丁目	617-1	X=-76183.22　Y=-27161.61	2.0×1.5	3.00			
			X=-76184.68　Y=-27163.53					
15	極楽寺二丁目	1001	X=-76269.42　Y=-27177.13	2.0×1.5	3.00	土橋状平場（中央に堀割路状落ち込み）		294 桑ケ谷療病院跡
	長谷三丁目	617-2	X=-76266.87　Y=-27179.04					
16	極楽寺二丁目	953	X=-76454.34　Y=-27188.65	17.5×1.5	26.25	平場	舎わせ口かわらけ	87 鎌倉城
			X=-76449.49　Y=-27205.54					
	長谷三丁目	658-1	X=-76450.02　Y=-27217.02	3.0×1.5	4.50			300 光明寺旧境内遺跡
			X=-76448.65　Y=-27219.65					

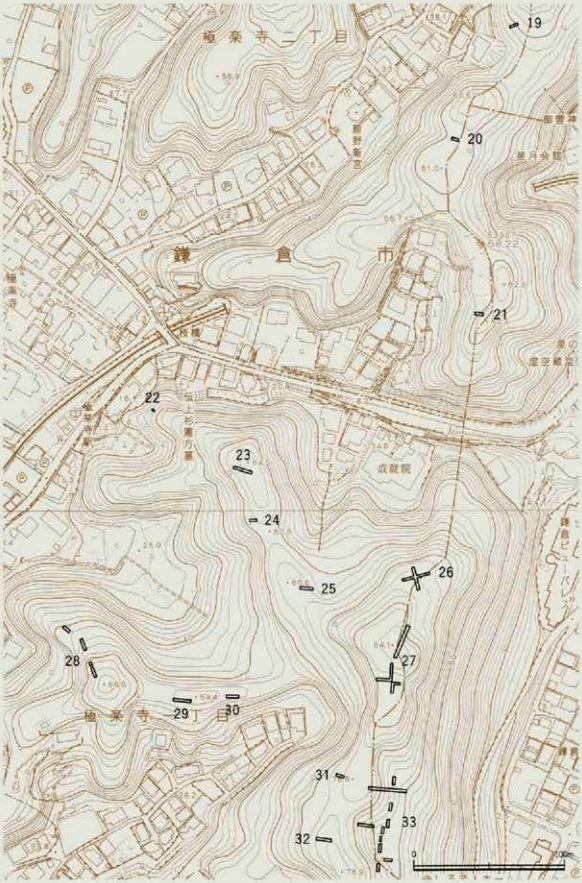
No.	町名・大字	地　番	国家座標 （北京角・南西角）	規模 （m）	面積 （㎡）	検出遺構	出土遺物	神奈川県遺跡台帳No. 遺跡名
17	梶楽寺二丁目	953	X=-76499.30　Y=-27193.01	7.0×1.5	10.50	平場	かわらけ	87 鎌倉城
	長谷三丁目	658-1	X=-76501.95　Y=-27199.91					300 光明寺旧境内遺跡
18	梶楽寺二丁目	950	X=-76583.64　Y=-27190.36	14.0×1.5	21.00	塚、堀切	かわらけ、常滑、釘	87 鎌倉城
		46-1-H200	X=-76586.29　Y=-27203.62					
	長谷三丁目	658-1						300 光明寺旧境内遺跡
19	梶楽寺二丁目	46-1-H200	X=-76670.06　Y=-27083.61	7.0×1.5	10.50	平場	かわらけ	296 長谷観音堂周辺遺跡
	長谷三丁目	1-1	X=-76663.62　Y=-27085.95					
20	梶楽寺二丁目	45-1	X=-76754.32　Y=-27128.67	4.5×1.5	6.75	平場		87 鎌倉城
	坂ノ下	143	X=-76753.15　Y=-27132.77					
21	梶楽寺二丁目	16-5	X=-76876.76　Y=-27112.87	5.0×1.5	7.50	前平岩盤面	かわらけ	87 鎌倉城
	坂ノ下	139-1	X=-76868.42　Y=-27117.55					
22	梶楽寺一丁目	30-1	X=-76933.92　Y=-27330.14	1.5×0.5	0.75	平場		292 五合桝遺跡
			X=-76932.74　Y=-27330.95					
23	梶楽寺一丁目	22-1	X=-76975.77　Y=-27265.76	12.0×1.5	18.00	平場、焼土	瀬戸	292 五合桝遺跡
		31	X=-76970.44　Y=-27277.89					
		3-1						
		72-5-H200						
24	梶楽寺一丁目	3-1	X=-77006.65　Y=-27262.45	4.0×1.5	6.00	平場		292 五合桝遺跡
		3-2	X=-77005.55　Y=-27267.23					
25	梶楽寺一丁目	3-2	X=-77053.54　Y=-27224.50	8.0×1.5	12.00	切岸、平場、柱穴状ピット		292 五合桝遺跡
			X=-77056.64　Y=-27233.58					
26	梶楽寺一丁目	2	X=-77041.79　Y=-27147.38	18.0×1.5	45.50	例形（平場、土塁）、塚	かわらけ、常滑、銭「元弘三年」銘地輪	292 五合桝遺跡
		3-3	X=-77045.58　Y=-27166.35	15.0×1.5				
	坂ノ下	213-イ						
		213-ロ						
27	梶楽寺一丁目	3-3	X=-77076.21　Y=-27161.64	23.0×1.5	34.50	平場、塚	かわらけ、常滑、瀬戸、山茶碗、板碑、五輪塔、須恵器、弥生土器、桟瓦、火葬骨	292 五合桝遺跡
			X=-77096.81　Y=-27171.56					
		127-1	X=-77101.32　Y=-27172.58	12.0×1.5	18.00			
			X=-77112.49　Y=-27183.56					
		129-1	X=-77114.10　Y=-27167.80	7.0×1.5	10.50			
			X=-77126.31　Y=-27173.65					
	坂ノ下	214-5	X=-77101.32　Y=-27172.58	9.0×1.5	13.50			
			X=-77112.49　Y=-27183.56					
			X=-77114.10　Y=-27167.80	4.0×1.5	6.00			
			X=-77126.31　Y=-27173.65					
28	梶楽寺一丁目	72-10	X=-77091.83　Y=-27375.22	8.0×1.5	12.00			292 五合桝遺跡
			X=-77085.26　Y=-27375.31					
		72-6	X=-77109.05　Y=-27368.18	10.0×1.5	15.00			
			X=-77106.68　Y=-27373.22					
			X=-77079.17　Y=-27386.25	5.0×1.5	7.50			
			X=-77077.27　Y=-27396.92					
29	梶楽寺一丁目	72-8	X=-77127.13　Y=-27306.05	12.0×1.5	18.00	小堀切	首飾り（近現代）	292 五合桝遺跡
		72-9	X=-77125.23　Y=-27317.42					
30	梶楽寺一丁目	72-8	X=-77124.60 Y=-227274.44	8.0×1.5	12.00	小堀切		292 五合桝遺跡
			X=-77122.70　Y=-27282.02					
31	梶楽寺一丁目	129-1	X=-77177.85　Y=-27205.45	5.0×1.5	7.50	犬走状平場	かわらけ	292 五合桝遺跡
	坂ノ下	214-1	X=-77174.78　Y=-27209.34					
32	梶楽寺一丁目	129-1	X=-77219.65　Y=-27213.23	10.0×1.5	15.00	近世～近代削平面	かわらけ、常滑、五輪塔	292 五合桝遺跡
	坂ノ下	214-1	X=-77216.78　Y=-27222.87					
33	坂ノ下	214-2	X=-77187.13　Y=-27163.61	25.0×1.5	37.50	平場、池、建物跡、基壇状遺構、墓、墓域	かわらけ、常滑、瀬戸、縄相、手燭り、土錘、土鍋、釘、銭、砥石、宝篋印塔、五輪塔、火葬骨、近世陶磁器	292 五合桝遺跡
			X=-77182.54　Y=-27188.21					
			X=-77181.64　Y=-27170.93	5.0×1.5	7.50			
			X=-77176.66　Y=-27172.24					
			X=-77216.04　Y=-27175.04	5.0×1.5	7.50			
			X=-77204.57　Y=-27175.72					
			X=-77209.47　Y=-27178.23	5.0×1.5	7.50			
			X=-77214.15　Y=-27180.32					
			X=-77226.40　Y=-27180.34	5.0×1.5	7.50			
			X=-77221.38　Y=-27181.18					
			X=-77235.24　Y=-27181.81	5.0×1.5	7.50			
			X=-77233.98　Y=-27182.86					
			X=-77232.51　Y=-27173.41	5.0×1.5	7.50			
			X=-77236.62　Y=-27177.82					
			X=-77205.90　Y=-27185.59	10.0×1.5	15.00			
			X=-77207.28　Y=-27195.01					
			X=-77216.27　Y=-27180.09	3.0×0.5	1.50			
			X=-77215.22　Y=-27181.00					



第５図　極楽寺坂地区トレンチ配置図（１）[S＝1/2,500]



第6図　極楽寺坂地区トレンチ配置図(2)[S＝1/2,500]



第7図　極楽寺坂地区トレンチ配置図(3)[S=1/2,500]

第Ⅲ章　トレンチの調査成果

第1号トレンチ

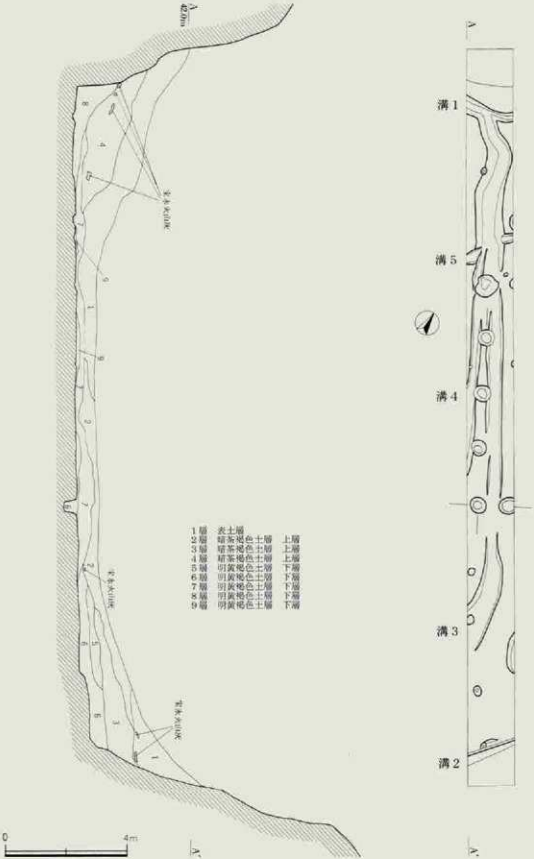
西尾県先端部に近い山腹の平場である。平場は海抜39m、道路面から約14mほど高所にあり、現況は三方を切岸で囲まれた竹林となっている。

トレンチは北西と南東の切岸直下を結んで設定した。堆積土は平場中央付近で約60cm、切岸直下では2mを超える厚さとなるが、大まかには崩落岩盤や宝永火山灰を混入する土層と細かな泥岩粒を含み脆い粘性のある下層に分層できる。なお、切岸の高さは北西側で約6.3m、南東側で約7.7mあることが判った。

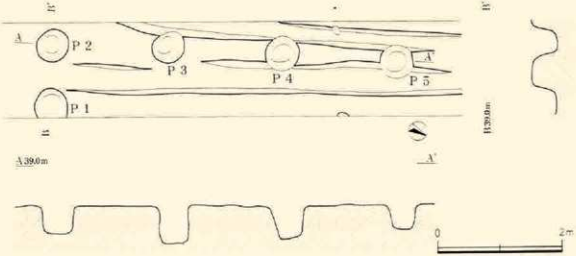
トレンチ内からは数条の溝と掘立柱建物の柱穴が見つかった。溝は切岸直下の壁面に沿う（溝1・溝2）もの以外にトレンチに平行（溝3・溝4）ないし斜行（溝5）するものがある。排水溝あるいは建物に伴う雨落ち溝と考えられるが、いずれも幅約30cm、深さ7cm前後と規模が小さく掘り込みも浅いため、岩盤面の剥離によって消滅した箇所が目立つ。掘立柱建物は平場のほぼ中央にある。建物の規模は不明。柱穴間隔は約1.8mを計測し、北西－南東方向に3間分（P1～P4）の柱並びが確認できる。なお、トレンチ壁面にかかる柱穴（P5）は約0.9m離れた位置にあり、建物の北東側面には縁が付いていたようである。

出土遺物には、かわらけ皿・常滑甕・手捏りがある。微細な破片で出土量も少なく、遺構の年代を直接的に示すものはないが、上層から瀬戸大窯期（16世紀）の擂り鉢破片が出土しており、この平場の造成時期が中世に遡る可能性も考えられる。

写真2　第1号トレンチ　全景（南から）



第8図　第1号トレンチ[S=1/120]



第9図 第1号トレンチ内ピット[S=1/60]

写真3 第1号トレンチ掘立柱建物址(南から)

写真4 第1号トレンチ 北側壁面の状態(南から)

写真5 第1号トレンチ 壁面の落書き(大正十年)(南から)

第2号トレンチ

西尾根先端部の尾根筋に設定したトレンチで、南からA～Eに分割して調査を行なった。

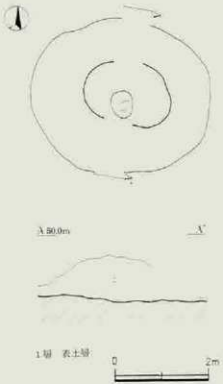
Aトレンチは塚の中心部を通る幅50cmの小トレンチである。塚は直径3.6m前後の楕円形、基底面からの高さ約1mを計測し、頂部表土下に直径48cm、深さ約7cmの浅い窪みをもつ。盛土は単一土層でかわらけ皿の微細な破片を混入するが、構築年代の判る遺物はない。

B～Dトレンチは塚から堀切に至る尾根筋のトレンチである。基盤：地山、泥岩層が軟質で強いすべったため明瞭ではないが、土層断面の観察から連続する2つの段切り遺構が存在したと推測できる。上位段切りはDトレンチ北端から60cm南側にあり落差約25cm、下位段切りはCトレンチ中ほどにあり落差約35cmを計測する。なお、Dトレンチでは西側斜面への落ち込みが大きく段切りに続く傾斜面の状態は不明瞭となるが、Cトレンチでは段切り下に平坦面がありBトレンチに続くことが判った。Bトレンチ南半部は崩壊の拡張を受け平坦面が乱れている。B～Dトレンチの出土遺物はない。

Eトレンチは堀切に設定したトレンチである。堆積土は上下に大きく分けられ、上層には粘性のある暗褐色土、下層には巨大な岩塊を含む崩落岩盤が2mの厚さで堆積していた。堀切の底面は一部を確認したにとどまるが、北端に沿って幅30cm、深さ20cmの排水溝が掘られており、壁面の傾斜などから推測すれば、この堀切の規模は上幅約10m、下幅約2m、中央部分での深さ約6mの巨大な遺構であったと考えられる。なお、Eトレンチからの出土遺物はなく、堀切の築造年代は不明である。

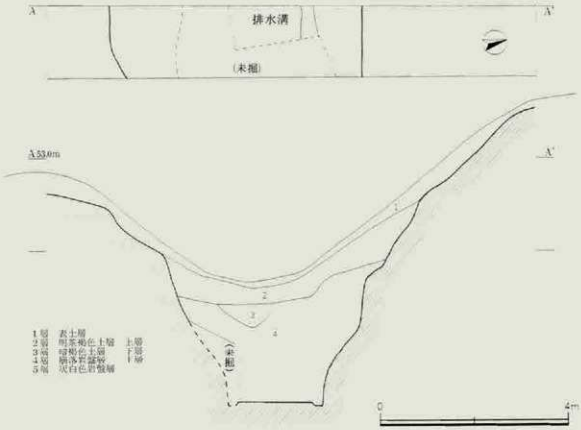
第10図　第2号トレンチ平面図（S=1/20）

写真6　第2号Aトレンチ　塚構築前状況（西から）



第11図 第2号Aトレンチ[S=1/80]

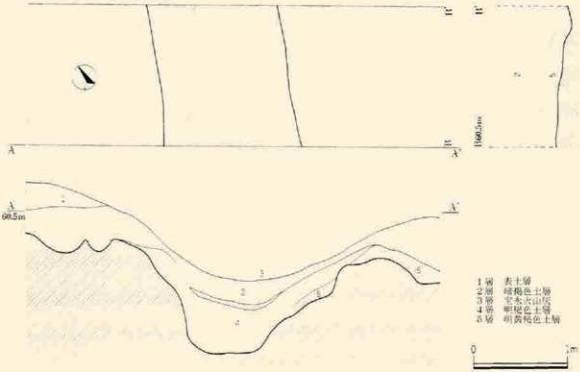
写真7 第2号Eトレンチ 堀切(南から)



第12図 第2号Eトレンチ[S=1/80]

第3号トレンチ

西尾根南端から一升樹に繋がる丘陵の痩尾根に設定したトレンチである。付近は南北方向の尾根筋に沿って堀割路状の落ち込みが続いており、現在も通行路となっている。トレンチ内下部でも現地表に見られる堀割路状の落ち込みがみとめられた。出土遺物はない。

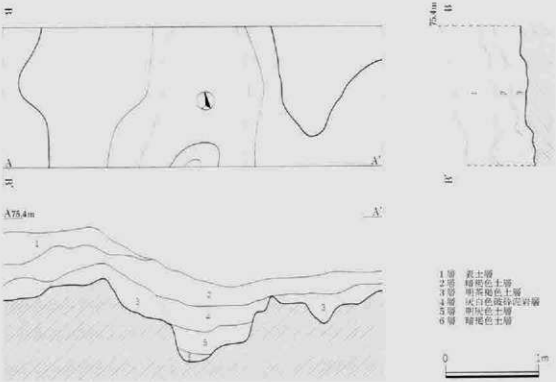


第13図　第3号トレンチ(S=1/40)

写真8　第3号トレンチ　全景(東から)

第5号トレンチ

一升桝下方の瓦尾根上に、斜面に直交して設定したトレンチである。泥岩層まで掘削したところ、第3号トレンチと同様に堀割路となっていることが確認された。出土遺物はない。



第14図　第5号トレンチ[S=1/40]

写真9　第5号トレンチ　全景(南から)

第6号トレンチ（一升桝）

西尾根は東を馬場ヶ谷、西を西ヶ谷に挟まれる丘陵である。この丘陵の頂部（標高99.3m）から南に100m下り、尾根が分岐する付け根の部分に「一升桝」と呼ばれる櫓形遺構が存在する。ここは、新田義貞の鎌倉攻めの際に兵を隠したという伝承を持つ場所でもある。現況は山林になっているが、基底部幅5～8m、高さ1.5～2.8mの豊々たる土塁を現在も見ることができる。土塁による囲郭の規模は、土塁頂部の心芯距離で長軸（南北方向）が36.5m、短軸（東西方向）は南側が30m、北側は19mで、全体では南側がやや窄まる台形状を呈している。櫓形の南西隅が入口部と推定され、コーナーだけ土塁が途切れ、その先は幅の狭められた尾根道が延びている。土塁に囲まれた平場に南北（A）および東西（B）方向のトレンチを、さらに、土塁北側の平

写真10　「一升桝」調査前状況（北東から）

写真11　第6号トレンチ　作業風景（東から）

写真12 第6号トレンチ　全景（南から）

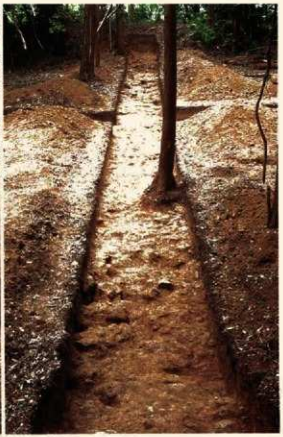


写真13 第6号トレンチ　全景（東から）

写真14 第6号トレンチ　南壁土層断面（北から）

場にも南北方向のトレンチ「C」を設定し、調査を行った。

A・Bトレンチとも現地表から50cmほど下で風化した泥岩を主とする基盤層に達した。しかし、樹木根による攪乱が著しく、表土から基盤層に至る間に明瞭な平坦面をとらえることはできなかった。土壇内には、小規模なピット1基と、径4～5mほどの落ち込みを2ヶ所確認した。落ち込みの覆土は泥岩塊で満たされており、人工的に埋め戻された遺構と判断されるが、出土遺物はなく、性格も不明である。トレンチの掘削は現況の土壇までで止めたが、Aトレンチ南端でのみ、土壇の約半分まで裁ち割った。泥岩塊を含む層と暗褐色粘質土の互層がみとめられ、最初の土壇構築後、最低2回、泥岩塊による土壇の積み上げが行われていることが明らかとなった。北側土壇は本体まで掘削していないが、調査範囲内では泥岩を積み上げた痕跡はみとめられなかった。もともと北から南に傾斜していた斜面を造成して平場を造り出し、北側土壇は削り出し、南側土壇は泥岩塊を積み上げて構築したものと推定される。出土遺物は少なく、表土直下でかわらけ片、古瀬戸銅し皿、常滑甕破片等が出土したのみであった。年代をとらえうる遺物も乏しいが、銅し皿は13世紀後半のものであり、溝形遺構は13世紀代に存在していた可能性がある。

Cトレンチでは現地表下約10cmで比較的しまった暗褐色土層に達した。焼土がブロック状に散乱しており、直線状の落ち込みがみとめられる。かわらけの細砕と共に土師器破片も出土しており、古代の住居址の一部とも推定できるが、詳細は不明である。

写真15　第6号Aトレンチ出土遺物 陶器類

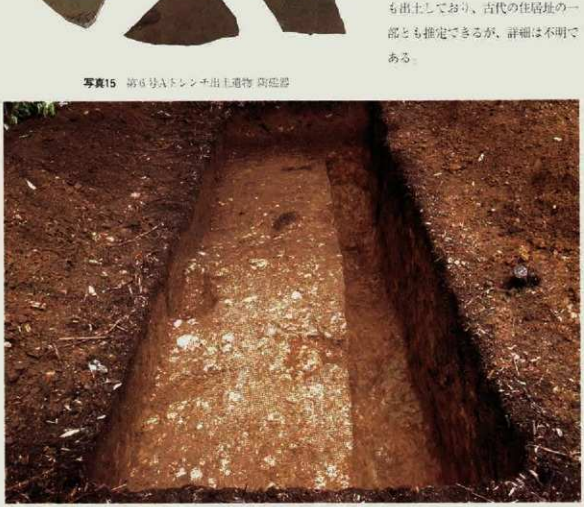
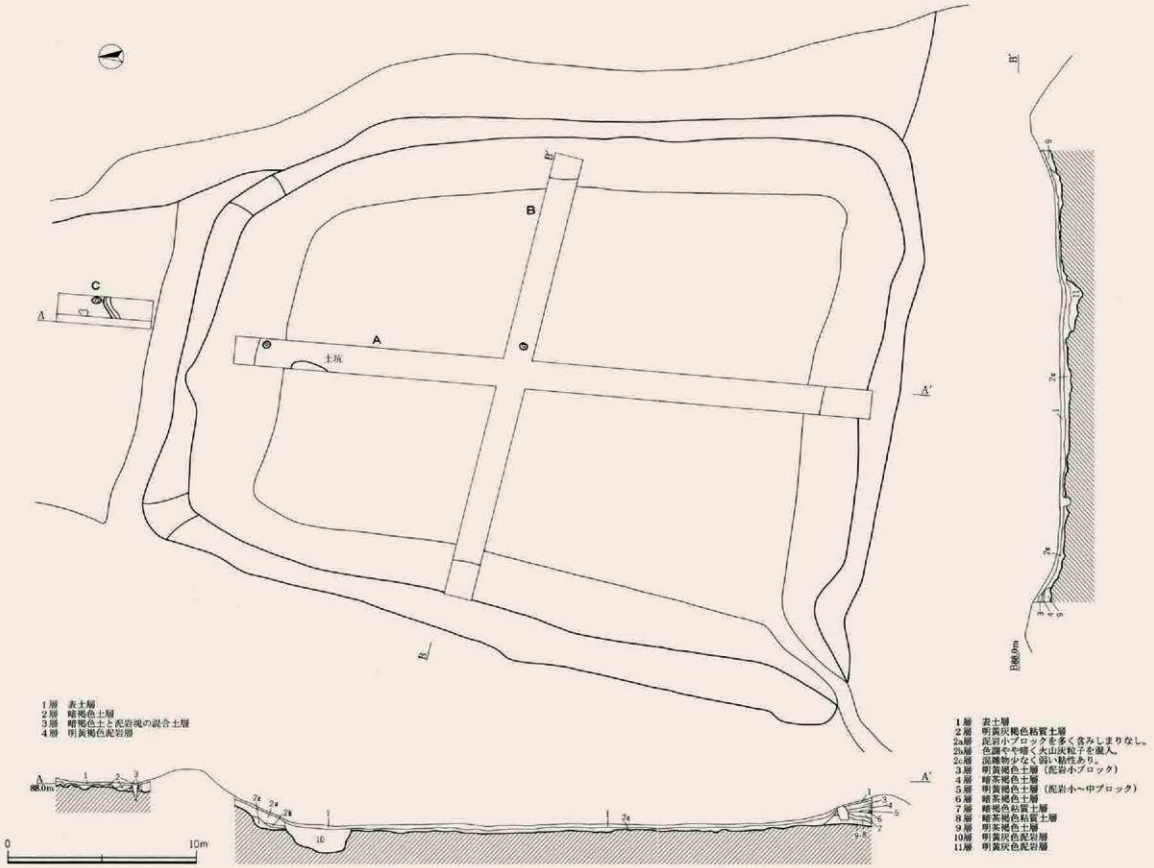


写真16　第6号Cトレンチ　全景(北から)



第15図　第6号トレンチおよび「一升餅」現況測量図[S=1/200]

第7号トレンチ

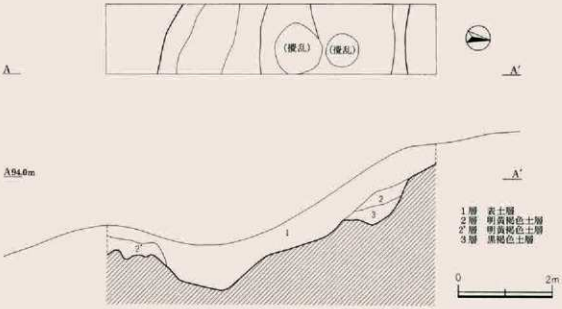
一升桝の北方約50mの位置に、現況上幅約6mの堀切が存在する。堀切は北側の尾根の最高点と、一升桝のほぼ中間の鞍部にあり、東西はそれぞれ馬場ヶ谷の支谷、西ヶ谷の支谷へと下っている。尾根筋は北から南へ傾斜しており、堀切の南北では高低差が1.8mほどある。トレンチは尾根筋に沿って、堀切に直交して設定した。

現地表下約1mで泥岩の基盤層に達するが、樹木根による攪乱が著しい。南北の斜面には表土の下に基盤層の再堆積土（2層）があり、北側ではさらにその下に旧表土（3層）が堆積している。2層上面より梅瓶、常滑壺、かわらけが出土している。梅瓶は14世紀代、常滑壺は13世紀後半のものであり、一升桝とほぼ同時期に機能した遺構と推定できる。

堀切の底面は幅約60cmでほぼ平坦になっており、尾根を分断すると同時に、尾根の東西を通行する道としても機能していたものと考えられる。

写真17　第7号トレンチ出土遺物（陶磁器等）

写真18　第7号トレンチ　全景（南から）



第16図　第7号トレンチ[S=1/80]

第8号トレンチ

西尾根の最後部、標高99.3mの頂部平場に設定したトレンチである。トレンチ東半は現地表下25cmで破砕泥岩塊を敷いた面に達する。トレンチのほぼ中央には、泥岩敷を切って焼土、および土師器の破片が集中する箇所があり、古代の住居址と考えられる。遺物はすべて破片で定かではないが、弥生時代末期～古墳時代初頭の住居址と推定される。トレンチの西側では灰色粘質土層が堆積する落ち込みが断面で確認されたが、遺物もなく、自然の水たまりのような地形と思われる。

第17図　第8号トレンチ[S=1/100]

写真19　第8号トレンチ　北側泥岩塊敷(西から)

写真20　第8号トレンチ　住居址確認状況(南から)

写真21　第8号トレンチ　遺物出土状況(北から)

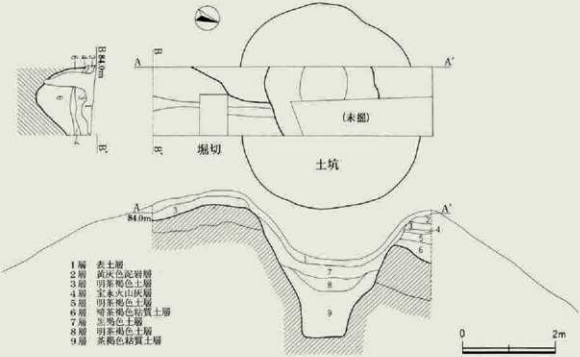
第9号トレンチ

一升岡から北東に約100m離れた尾根鞍部(海抜84.5m)にトレンチを設定した。二つの頂部(海抜99.3mと92.2m)に挟まれて尾根は急激に落ち込み、南北に谷が迫るため尾根の幅は約3mと狭くなっている。

現況地表面の観察では、南北方向に伸びる堀切とその北寄りに大形の窪みが見られた。堀切は尾根の自然地形を利用しており正確な幅と深さを計測できないが、底面は幅約40cmの断面V字形を呈し、北に傾斜して掘られていることが判った。また、堀切北寄りにある窪みは直径約4m、深さ約3mの巨大な土坑であり、底面は一部を確認したに留まるが、直径約80cmの円形と思われ平坦に削られていることが判った。なお、土坑は堀切を切って掘られ、宝永火山灰層の堆積は見られない。堆積土の状態から推しても近世以後の遺構と考えられるが、性格については不明である。

堀切・土坑とも出土遺物はない。

写真22 第9号トレンチ 堀切・土坑(北から)



第18図 第9号トレンチ[S=1/80]

写真23　第10号トレンチ　全景(南から)

第10号トレンチ

海抜92.2mの尾根頂上部に設定したトレンチである。頂部一帯は幅狭く、尾根は緩やかな傾斜で北東へ伸びている。

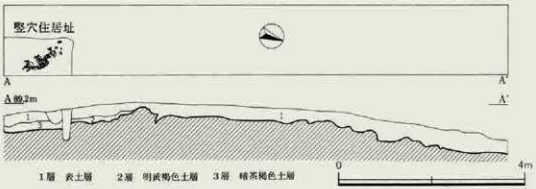
調査の結果、トレンチ南端に竪穴住居址の一部と思われる方形プランが確認され、壺形土器が潰れた状態で出土した。住居址は表土層下から掘り込まれ、床面まで約20cmの深さが残っていた。

壺形土器は2個体ある。折り返し口縁壺は円形浮文と斜行縄文を口縁部内面と肩部外面に配しており底部は欠失、素口縁壺はS字状結節文で区画した3段の斜行縄文を肩部外面に施文している。ともに器高約23cm、弥生時代末期に属する。

中世の遺構と遺物は見つかっていない。

写真24　第10号トレンチ出土遺物(壺形土器)

写真25　第10号トレンチ　遺物出土状況(東から)



第19図　第10号トレンチ[S=1/80]

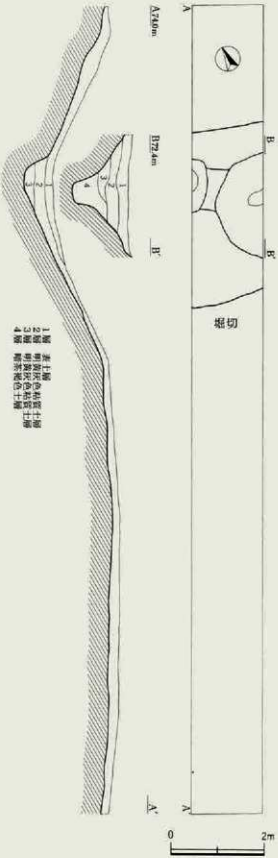
第11号トレンチ

尾根筋に設定したトレンチでその北東端に堀切がかかる。堀切は土層断面から上幅7m、底幅1m、深さ約1.5mの浅いV字形と推測できるが、基盤(地山、泥岩層)が軟質で崩壊が進むため形状が明瞭ではない。また、堀切底面に見られる擂り鉢形の土坑は、小形のものが直径1.2m、深さ約40cm、大形のものが直径2.2m、深さ約1mの規模をもっている。

堀切、土坑ともに出土遺物はない。

写真26 第11号トレンチ　全景(南西から)

写真27 第11号トレンチ　堀切底面土坑



第20図 第11号トレンチ[S=1/80]

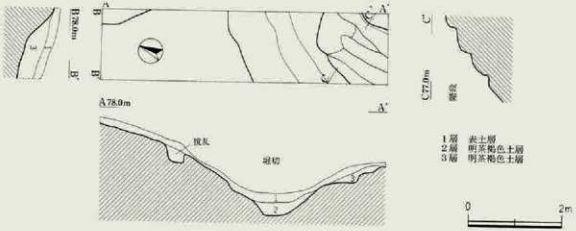
第12号トレンチ

長谷配水池の手前、尾根筋の堀切に設定したトレンチで、11号トレンチの堀切から北東に約100m離れた位置にある。

堀切は尾根鞍部を利用して作られ、上幅2m、底幅0.5m、深さ1.4mの規模を持っている。また、堀切の南西側斜面には幅30cm、高さ30cm前後の階段が3段削り出されているが、当初からの施設ではなく、後世に付加されたものであろう。

本トレンチからの出土遺物はない。

写真28　第12号トレンチ　堀切(西から)



第21図　第12号トレンチ[S=1:80]

第16号トレンチ

光明寺裏山の頂上部(海抜74.5m)とその西側に続く短い尾根にトレンチを設定した。

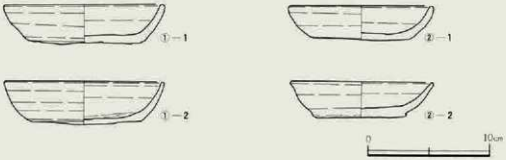
Aトレンチでは、合わせ口状態で埋納されたかわらけ皿が2箇所から見つかった。かわらけ皿は頂上付近の地表下10cm程のところにあり既に破損していたが、内部からは流入土の他には何も検出されなかった。かわらけ皿の年代は13世紀後半～14世紀に比定できる。

Bトレンチでは、高さ約1.5mの段切り遺構が確認された。段切り下は平坦に削られ、狭い平場となっている。出土遺物なし。

Cトレンチでは遺構・遺物ともに確認できなかった。自然地形と考えられる。

埋納されたかわらけ皿は、出土場所の立地から見て光明寺あるいは長谷寺に関わる地鎮の遺物と考えられるが、段切り遺構の年代と性格ついては不明である。

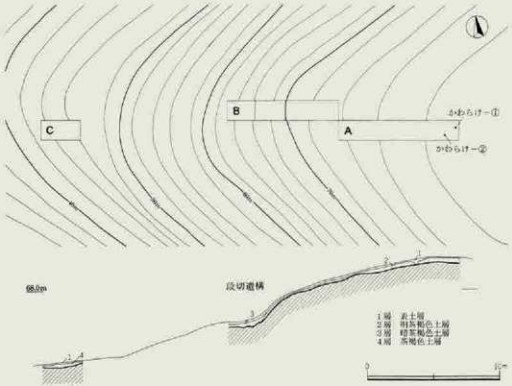
写真29 第16号トレンチ 全景(西から)



第22図 第16号トレンチ出土遺物[S＝1/3]

写真30 第16号トレンチ かわらけ①出土状況(北から)

写真31 第16号トレンチ かわらけ②出土状況(北から)



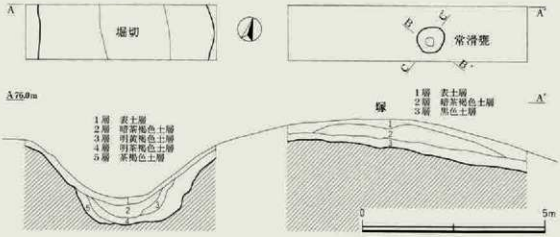
第23図　第16号トレンチ周辺地形[S＝1/250]

写真32　第16号トレンチ　調査前状況(西から)

第18号トレンチ

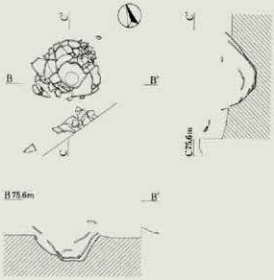
東尾根は長谷寺の西で大きく3方向に分かており、分岐にあたる頂上部(海抜81.6m)は東尾根で最も高い位置にある。トレンチは頂上部とその西に接する堀切に設定した。

東側トレンチでは表土下に常滑焼の大甕が発見された。正置した状態で埋められており、内部から鉄釘13点余りが出土した。体部上半を欠失するため甕の年代は不明。なお、一部を深掘りした結果、頂上部は旧表土上に約50cm程盛土した塚であることが判った。西側トレンチの堀切は上幅5m、底幅2m、深さ2.3mの規模をもつ。かわらけ皿細片が出土したが年代の判るものはない。



第24図 第18号トレンチ[S=1/100]

写真33 第18号トレンチ 塚断面(西から)



常滑甕　口径不明，肩部径80cm，底径18cm，器高70cm以上。

鉄釘　長さ　2.5cm，4.0cm，5.0cmの3種類，木質部分が付着。

0　1m

第25図　第18号トレンチ常滑甕出土状況[S=1/40]

写真34　第18号トレンチ　埋甕内出土遺物(釘)

写真35　第18号トレンチ　塚出土埋甕

写真36　第18号トレンチ　埋甕出土状況(南から)

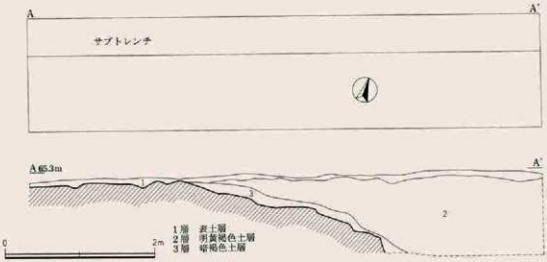
写真37　第18号トレンチ　堀切調査前状況(南から)

写真38　第18号トレンチ　堀切全景(南東から)

第19号トレンチ

長谷寺の西南、海抜71.8mの尾根頂上にトレンチを設定した。

付近一帯は広く平坦で目立った地形的特徴は見当たらないが、トレンチの一部を深掘りした結果、頂上部平坦面は、北東斜面を破砕した泥岩塊で埋めて造成されていたことが判った。トレンチ内に柱穴等の遺構は確認できず、大規模な整地の目的と性格は不明。なお、斜面側の堆積土からかわらけ皿の微細な破片が出土したが、年代の判るものはない。

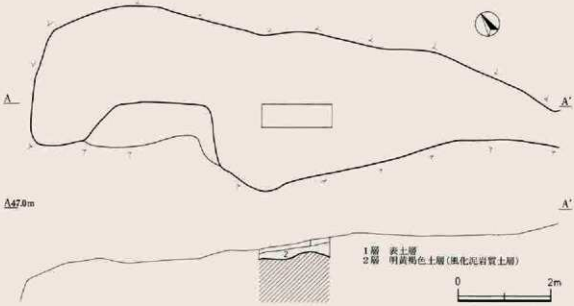


第26図　第19号トレンチ[S=1/50]

写真39　第19号トレンチ　断面(南から)

第22号トレンチ

南尾根の西北端頂部に設定したトレンチである。現在は樹木に覆われ見通しが悪いが、なにもなければ北西に極楽寺境内、北東に極楽寺切通、南西側には福村ヶ崎方面からの道を見通すことができる。尾根の先端は急峻な崖となっており、人為的なものと推測される。安全上、調査はごく狭い範囲に限られ、出土遺物もなかったが、尾根筋の岩盤は人工的に削平されていることが確認された。



第27図　第22号トレンチ周辺地形[S=1/80]

写真40　第22号トレンチ　周辺地形(西から)

第26号トレンチ（五合桝）

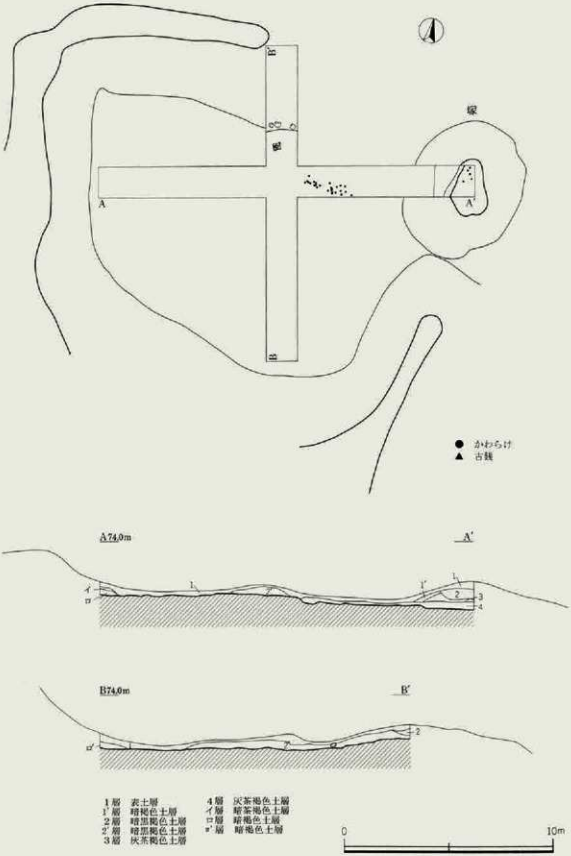
成就院の背後の丘陵上には「五合桝」と呼ばれる桝形遺構が存在することが古くから知られていた。極楽寺切通の鎌倉側を南上方から見下ろす位置にあり、極めて重要な地点であると言える。現在もここに登ると材木座海岸から由比ヶ浜、長谷大仏まで一望することができる。調査前は篠竹が生い茂っており、土塁状の遺構と平場の存在がかろうじてわかる程度だったが、全面的に伐採したところ、西側と南側が段切り造成され、東と北に不明瞭ながら土塁状の高まりがあることが確認された。また、内部の平場は平坦ではなく、低いマウンドが数カ所にあり、石塔も散乱していた。ここに十字にトレンチを設定して調査を行った。

トレンチ内は約20cm掘削したところで基盤層に達した。トレンチの北側では石塔が3点出土し、中央部にはかわらけ溜まりがある。かわらけは小型のものが多く、16世紀のものを主体として、15世紀後半～17世紀代のものが見られる（第29図3～13）。東側の堀状の高まりは南から延びる土塁から分断されており、高まり

写真41　第26号トレンチ調査前状況　土塁状の高まり（東から）

写真42　第26号トレンチ　作業風景（南から）

写真43　「五合桝」遠景（北側住宅地より）



第28図　第26号トレンチおよび周辺地形[S＝1/180]

写真44　第26号トレンチ　全景(北から)

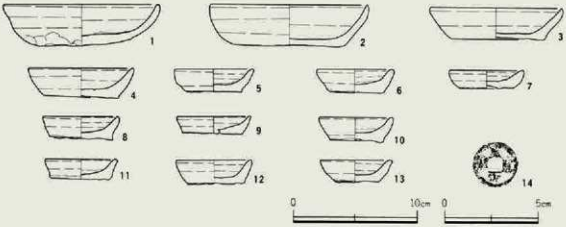
写真45　第26号トレンチ　石塔類出土状況(南から)

写真46　第26号トレンチ東端塚遺物出土状況(南西から)

写真47　第26号トレンチ　かわらけ溜まり(東から)

写真48　第26号トレンチ東端塚出土遺物(かわらけ)

写真49　第26号トレンチ　かわらけ溜まり出土遺物



第29図　第26号トレンチ出土遺物[S=1/3,1/2(拓影)]

の中央まで裁ち割ったところ、大形のかわらけ2点と皇宋通寶(1039年初鋳)が出土した。第29図1は本トレンチ出土中唯一の手づくね成形のかわらけで、13世紀中葉まで遡る。2はロクロ成形で、器壁が薄く丸みを持つ、14世紀中葉～後半のものである。

これら出土遺物の様相と断面の状況から、土塁状の高まりのうち、いくつかは塚である可能性が高い。遺物の主体が中世後期にあり、その頃にここが墓地、もしくは供養所となったものと推定される。しかし、表採した五輪塔地輪(写真50、第30図)には「元弘三年　七月十三日」と銘があり、かわらけも13世紀中葉まで遡ることから、五合桝と呼ばれる平場の造成は鎌倉期まで遡る可能性がある。元々切通を警護するために作られた五合桝が、鎌倉幕府が滅亡した元弘三年(1333)を機に、墓地もしくは供養所へと変化したとも考えられよう。

写真50　「五合桝」表採五輪塔地輪

第30図　「五合桝」表採五輪塔地輪拓影[S=1/4]

写真51　「五合桝」より極楽寺坂方面を望む

第27号トレンチ

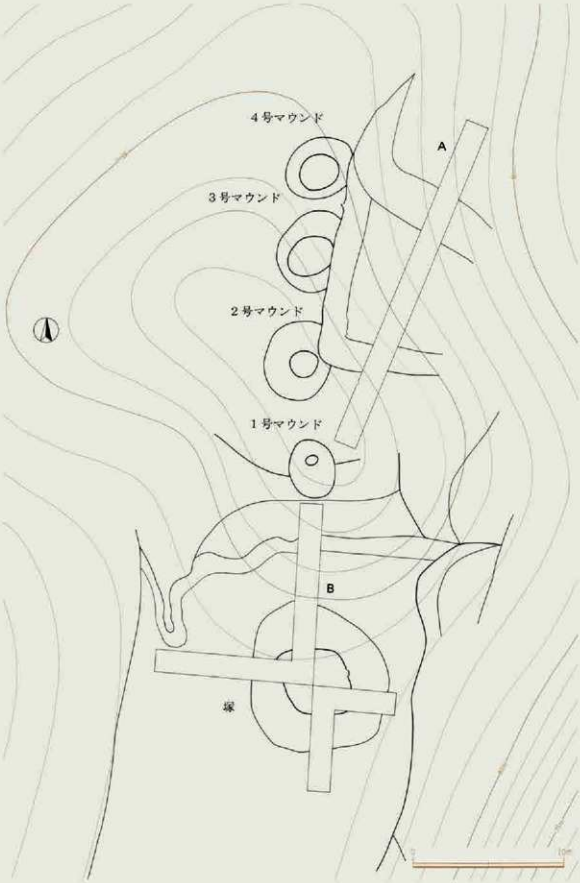
雲山山(海抜88.6m)の山頂付近に設定したトレンチである。

Aトレンチは山頂の北東傾斜面、矩形に掘り窪められた2段の平場に設定した。上段と下段の比高差は約2m、ピットと溝状遺構を発見したが建物址と断定できるものはなく、平場の性格や遺構配置には不明な点が多く残る。出土遺物にはかわらけ皿・常滑甕・火葬骨片がある。また、下段平場の削平面直上からは桟瓦が出土しており、平場の造成年代は不明であるが、近代以降に攪乱を受けていることが判った。

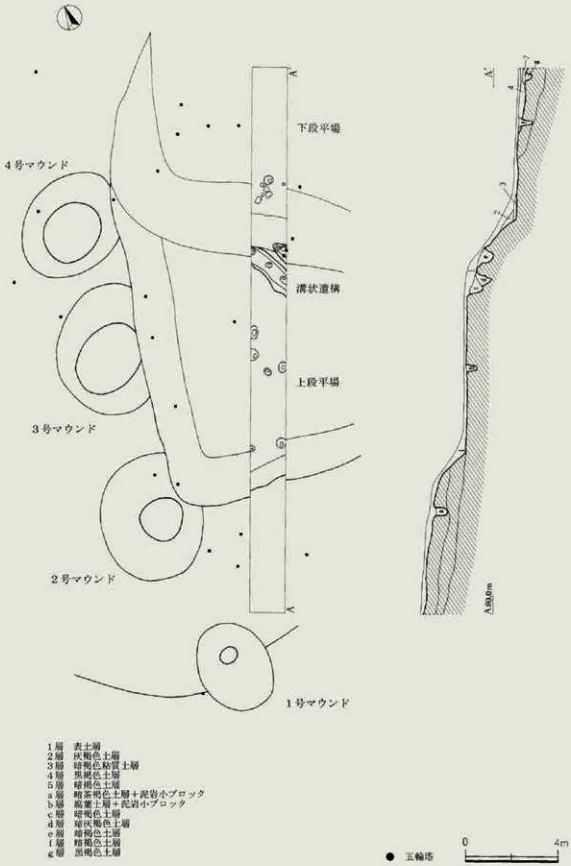
上段平場の西縁には南北に並ぶ4基の塚状の高まり(マウンド)があり、付近一帯からは五輪塔の部材が散乱した状態で見つかった。各マウンドは概ね4m前後の楕円形を呈し、高さは45~70cmを計測する小規模な遺構である。

Bトレンチは山頂の南方にある大形の塚に設定した。塚周辺は大正元年に「雲仙公園」として整備された眺望の良い場所であり、北端に塚、南端には昭和58年に移設されたコッホ博士碑の移設記念碑が建てられている。塚は基底部の直径8~9m、高さ約2.5mを計測する大形のもので、平面的には方形に近く、側面観は鈎鍾形を呈している。盛土は概ね4層に分けられ、3層目を積み上げた段階で塚の頂部外縁に五輪塔の部材や凝灰岩切石を並べて方形の区画を作っている。出土遺物にはかわらけ皿(15~16世紀)・常滑甕、渥美壺(13世紀前半)・板碑・五輪塔・礫・火葬骨片があり、須恵器・弥生土器の破片も混入していた。13世紀から16世紀まで、出土遺物の年代はさまざまであるが、この塚は公園整備の際に既に存在していたことが知られており、おそらく16世紀頃に、付近にあった石塔や骨蔵器などを集めて構築されたものと考えられる。

写真52　第27号Aトレンチ　全景(西上方から)



第31図　第27号トレンチおよび周辺地形平面図[S＝1/250]



第32図　第27号Aトレンチおよび周辺地形[S＝1/160]

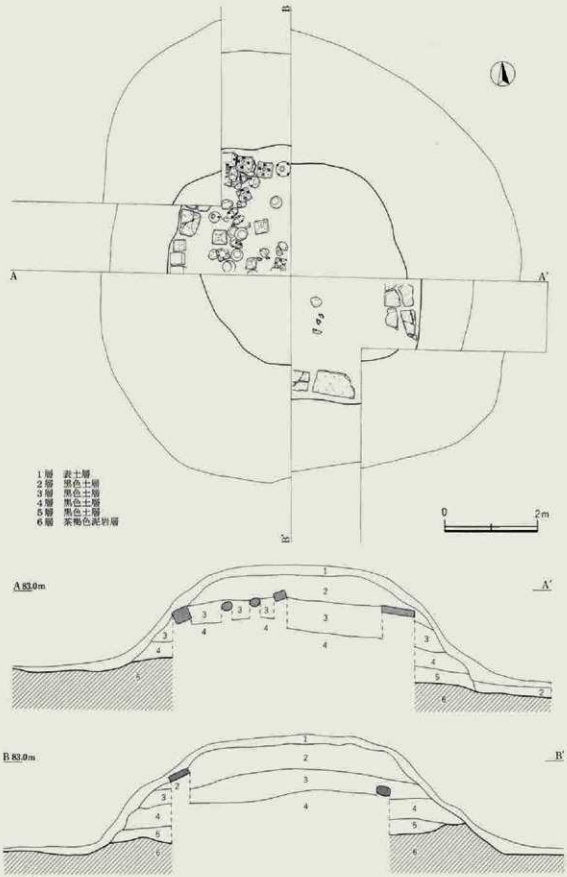
写真53　第27号トレンチ周辺マウンド①（西から）

写真54　第27号トレンチ周辺マウンド②（北から）

写真55　第27号トレンチ周辺マウンド③④（南から）

写真56　第27号トレンチ周辺の石塔類（北から）

写真57　第27号Aトレンチ（北から・ピンポールは散乱する石塔の位置を示す）



第33図　第27号Bトレンチ塚[S=1/80]

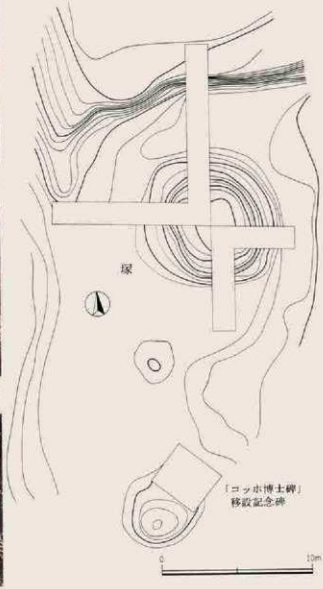
写真58　第27号Aトレンチ　敷石出土状況(南から)

写真59　第27号Aトレンチ　石塔等出土状況(南から)

写真60　第27号Aトレンチ　壺・石塔出土状況(東から)

写真61　第27号Aトレンチ　石塔・板碑出土状況(南から)

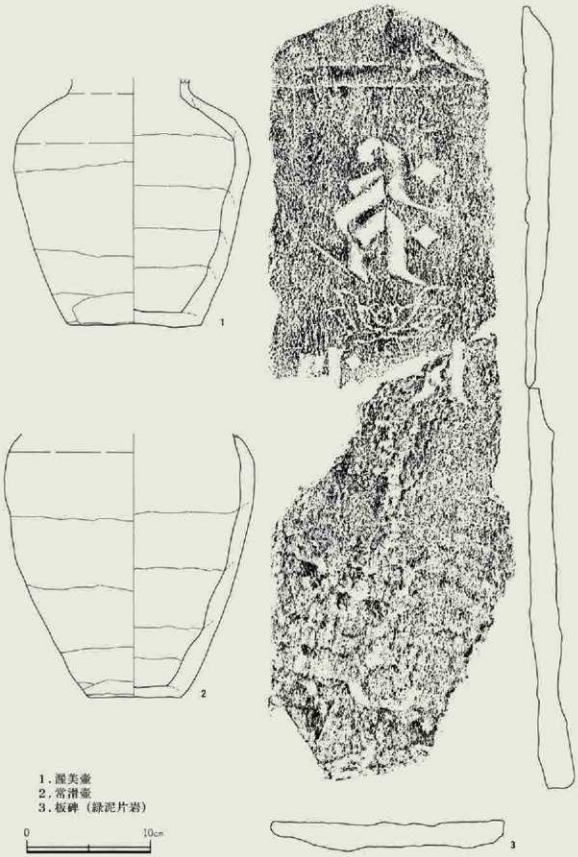
写真62　コッホの碑移設記念碑(北から)



第34図　第27号Bトレンチ塚周辺地形[S=1/250]

写真63　第27号Aトレンチ周辺　伐採後・掘削前状況(南から)

写真64　第27号トレンチ　作業風景(北から)



第35図　第27号Bトレンチ坂出土遺物[S＝1/250]

写真65　第29号トレンチ　堀切(東から)

第29号トレンチ

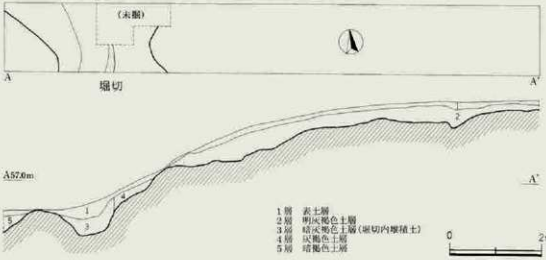
霊山山(海抜88.6m)から西へ伸びる尾根の鞍部に設定した。

堀切は鞍部東端にあり、上幅1.7m、底幅0.6m、深さ約0.7mを計測する。緩やかな尾根の高まりを挟んで第30号トレンチの堀切と並んでおり、一対で配置された可能性も考えられる。

出土遺物はなく、遺構の年代は不明。

写真66　第29号トレンチ　堀切(西から)

写真67　第29号トレンチ　堀切(北から)



第36図　第29号トレンチ[S=1/80]

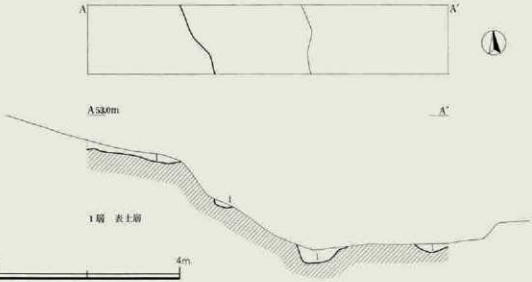
第30号トレンチ

極楽寺の支院である福田院があったとされる谷の最奥部に設定したトレンチである。南側は深い谷になっており、谷を南北に望む縁部に堀切状の落ち込みがみとめられる。現在も岩盤が露出しており、覆土はほとんどない。岩盤の亀裂が著しく遺構の遺存状態は悪いが、トレンチ中央に顕著な落ち込みがあり、人為的な遺構と判断される。出土遺物がないため、遺構の年代は不明である。

写真68　第30号トレンチ　調査前状況(西から)

写真69　第30号トレンチ　堀切(北から)

写真70　第30号トレンチ　全景(西から)



第37図　第30号トレンチ[S=1/80]

第33号トレンチ

霊山山から南へ伸びる尾根の中程、急峻な東斜面のかなり高所に「霊山寺跡」あるいは「仏法寺跡」とも伝わる平場（海抜60m）がありトレンチを設定した。現況地表面の観察から、平場は段差や溝で区画された①～⑥の平坦面に分割でき、平場の南西角に池、東縁辺には堀割路が巡っていたようである。

Ａトレンチでは、平坦面①側で削平岩盤面の約80cm上に整地面が確認され、山裾寄りに大形の凝灰岩切石（幅54cm×長さ80cm×厚さ12cm）を敷く基壇状の遺構が見つかった。平坦面⑤は①よりも約１m低く東側へ傾斜する。⑤側に遺構はないが、東半部が埋め立てにより拡張されていることが判った。

Ｂトレンチでは方形の竪穴状遺構と溝が見つかった。Ｃトレンチではピット、Ｄ・Ｅトレンチでは深さ１mの落ち込みを確認したが遺構の性格は不明である。なお、当初平坦面⑤－⑥間の区画溝にトレンチを設定したが未調査である。

Ｆトレンチは平坦面④－⑥間に設定した。平坦面①は⑥より約25cm高いが岩盤面はほぼ平坦で、段差部分に区画溝のあることが判った。区画溝は幅約1.5m、深さ約10cm、⑤－⑥間の区画溝から約25m離れた位置にある。竈は泥岩塊をコ字形に並べた短辺40cm×長辺50cm程の小規模なもので、内部から矩形に整形された安山岩製支脚と瀬戸灯明皿が出土した。土坑は深さ1.3m、トレンチ北端にかかるため全容は不明。なお、斜行する溝は地割れ痕であろう。

Ｇトレンチでは１m間隔で並ぶ柱穴が見つかった。掘立柱建物の一部と思われるが建物規模は不明。

Ｈトレンチは平場東縁の堀割路に設定した。堀割路は底幅80cm、深さ1.2mを計測する。

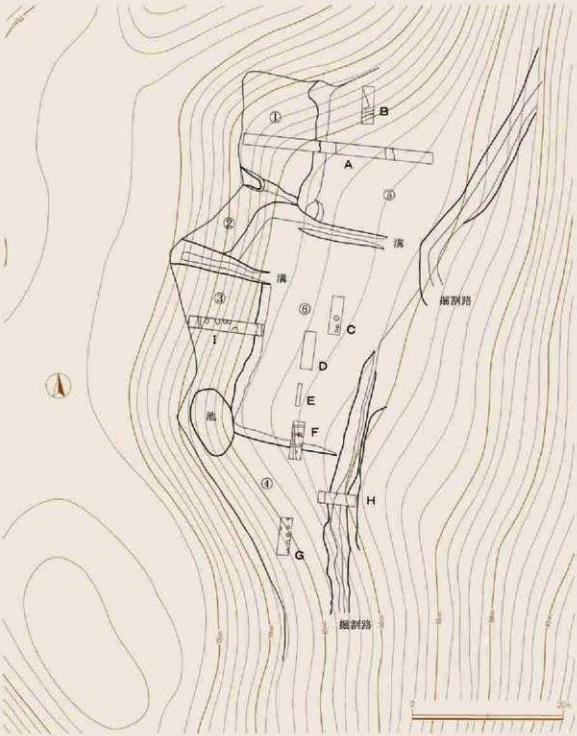
Ｉトレンチは平坦面③に設定した。掘立柱建物の柱穴・土坑・溝などが見つかった。建物規模は不明、溝

写真71　第26,27,33号トレンチ付近空撮

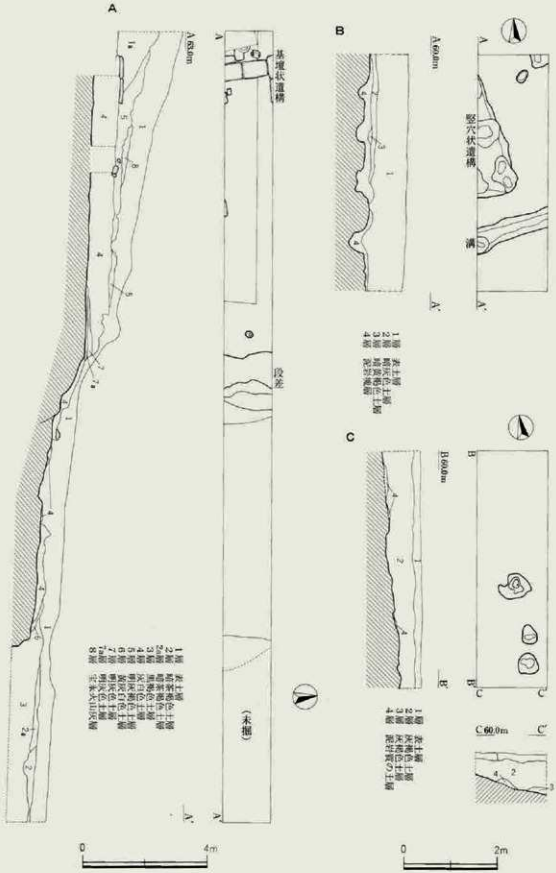
は雨落ち溝の可能性もある。また、土坑の中には火葬骨片を多量に埋めたものが見られた。

池跡は現況で短径6ｍ×長径9ｍの楕形を呈している。ピンポールによる探査では東側汀線付近で約50cm、中央部～西側山裾寄り部分では1ｍを超える深さと推測された。

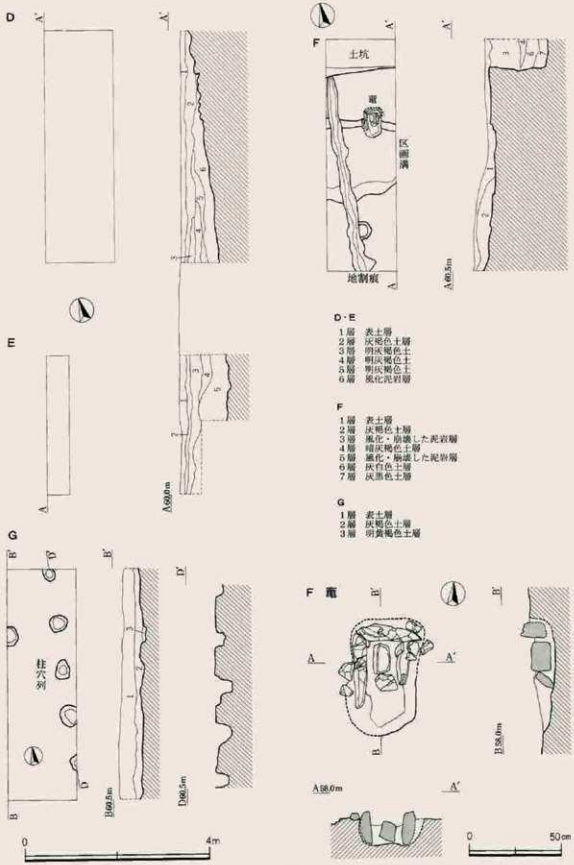
出土遺物にはかわらけ皿・常滑壺、捏ね鉢・瀬戸瓶子・褐釉壺・釘・銭・砥石・鏃・火葬骨・近世陶磁器等があり、五輪塔は平場南端の山裾にも散乱した状態で見つかった。遺構の年代を直接示す遺物はないが、かわらけ皿に15～16世紀のものが含まれており、これら遺構群が中世に遡る可能性を示している。



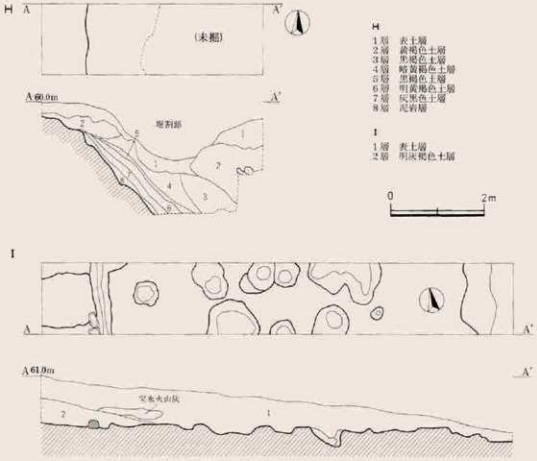
第38図　伝「仏法寺跡」周辺地形および第33号トレンチ配置図[S＝1/500]



第39図　第33号A[S=1/120], B, Cトレンチ[S=1/80]



第40図　第33号D, E, F, Gトレンチ[S=1/80], Fトレンチ竈[S=1/20]



第41図　第33号H,Iトレンチ[S=1/80]

写真72　伝「仏法寺跡」から鎌倉市街を望む(西から)

写真73　第33号Aトレンチ　全景(西から)

写真74　第33号Aトレンチ　平場の状態(南東から)

写真75　第33号Aトレンチ　平場・段差部分(南から)

写真76　第33号Aトレンチ　基壇状遺構(南から)

写真77　第33号Bトレンチ　全景(北から)

写真78　第33号Bトレンチ　竪穴状遺構(東から)

写真79　第33号Cトレンチ　全景(北から)

写真80　第33号Cトレンチ　柱穴(東から)

写真81　第33号Dトレンチ　全景(北から)

写真82　第33号Fトレンチ　全景(北から)

写真83　第33号Fトレンチ　竈(南から)

写真84　第33号Fトレンチ　土坑(北から)

写真85　第33号Gトレンチ　柱穴列(西から)

写真86　第33号H1トレンチ　全景(西から)

写真87　第33号Tトレンチ　全景(東から)

写真88　第33号Tトレンチ　柱穴・溝(西から)

写真89　伝「仏法寺跡」池(東から)

第３編

大仏坂地区の調査

五合槻（極楽寺坂地区第26号トレンチ）より長谷・大仏方面を望む

大仏坂地区　例言

1　本地区のトレンチ番号は設定時、および調査時、本報告で異なっており、下表の通り対応する。記録図面、記録写真、出土遺物への注記は調査時番号に拠っている。
2　本地区での出土遺物への注記はWHBT＊＊（トレンチ番号）と略記している。
3　第Ⅲ章の執筆分担は下表の通りである。

本報告番号	調査時番号	設定時番号	執筆担当
1	1	56	菊川
2	2	55	鈴木
3	3	54	鈴木
4	4	51,52	
5	5	49,50	
6	6	48	
7	7	47	
8	8	46	鈴木
9	9	45	鈴木
10	10	44	鈴木
11	11	42	鈴木
12	12	43	
13	13	41	
14	14	40	

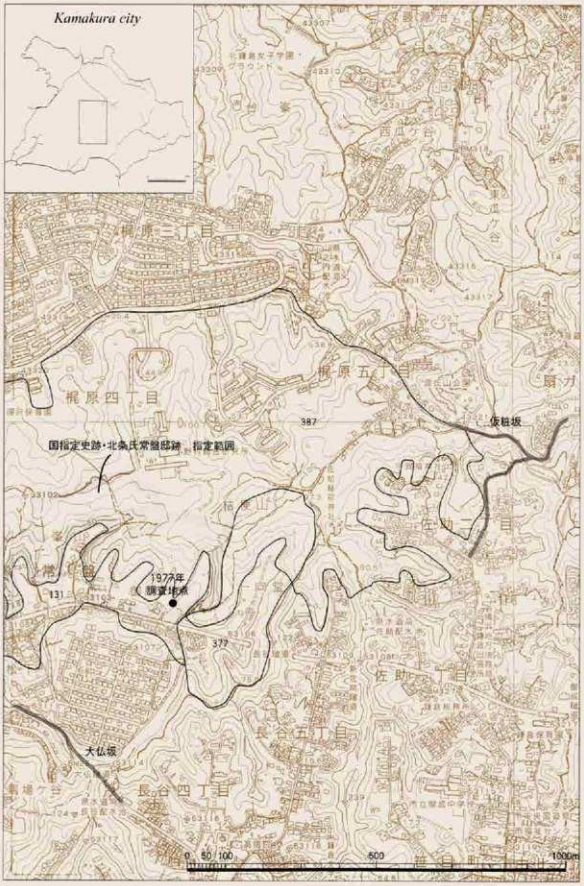
第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

本調査地区は鎌倉市街地の西、国宝銅造阿弥陀如来座像(鎌倉大仏)の背後から佐助ヶ谷に至る尾根筋を中心とする、長谷四・五丁目、笛田、常盤、佐助二丁目、梶原五丁目にまたがる地域である。調査区のほぼ南端が鎌倉七切通の一、大仏切通(国指定史跡)で、同所を起点に今日では裏大仏ハイキングコースとなっている尾根道に沿って佐助稲荷神社、宇賀福神社(銭洗弁天)の裏山に達する。尾根の大部分は杉の植林または桜、コナラの二次林に占められており、木漏れ日が心地よいが、古都保存法施行前は宅地開発の波が押し寄せたこともあった。尾根を形成する岩盤は極楽寺地区と同様逗子シルト岩層が主体である。尾根を抱く丘陵部は複雑に開析され、佐助ヶ谷と長谷大谷戸という南向きのふたつの大きな谷戸をなし、さらにその奥は支谷が山腹に樹枝状に入り込み、鎌倉独特の谷戸地の景観を呈している。

大仏切通は鎌倉大仏造立以前から開鑿されていたとみられる。『吾妻鏡』養和元年(1181)九月十六日条を繙くと、主人足利俊綱の首を持参した従者の桐生六郎が鎌倉に入ることを許されず、「直に深沢を経て腰越に向ふ」よう指示されたとの記事が見えるが、この経路は大仏坂を通るルートを表していると思われる。しかし鎌倉幕府の基盤が強化され、北条氏が幕権を掌握してからは他の切通同様防衛拠点として重要視され、大仏、仮粧坂両切通を睨む常盤の地に、北条泰時の弟政村が常盤亭を建てて居館としている。常盤亭は「常葉ノ別業」、「常葉ノ第」、「常盤ノ御亭」、「常盤の山荘」などと記され、六代将軍の宗尊親王が赴いたり、歌会が催された記録がある。現在の常盤字御所之内周辺一帯がその旧跡とされ(北条政村屋敷跡　№131)、昭和五十三年(1978)に「北条氏常盤亭跡」として国指定史跡に指定、それに先立つ昭和五十二年(1977)には三上次男氏を団長とする調査団によって発掘調査が実施され、3次にわたって建造されたと考えられる建物の礎石、柱穴、雨溝さらには井戸などの遺構が確認され、大量のかわらけ、常滑等の国産土器をはじめ、銅銭、硯片、珍しいものでは骨製の賽子といった種々の遺物が出土した(松尾1983b)。なお周辺には御所之内のほか、殿入、殿入下という小字名が残っている。一方同史跡に北接する常盤と梶原にまたがる丘陵地帯には山城としての特徴が認められ、桔梗山城(№387)とよばれている。亭の主で常盤殿と称された政村は運署、執権を歴任した北条一門の実力者であり、その彼が鎌倉北西の守りの要所である常盤の地に邸宅を構えたことは、北条氏による一門・一族あげての幕府防衛政策が背景にあると考えられよう。

常盤亭跡の東、現在の長谷トンネルの常盤側出口付近には一向堂という小字名が残っている。一向堂とは浄土真宗(一向宗)の布教所がかつて所在したことに因む名である。『新編相模国風土記稿』によると鎌倉末期の延慶二年(1309)に唯善坊が如信上人の御影刻および御真影、御骨を抱いて鎌倉に下り、常盤に居住して念仏の宣布につとめたとある。その後一向堂は戦国時代に兵火にかかり廃絶したという。常盤の一向堂があったと伝えられる一帯は一向堂跡(№377)として周知されている。

調査区北端は佐助ヶ谷に接する。このあたりには北条一門の佐介氏の祖、時盛の邸宅「佐介第」があったと伝えるが場所は特定されていない。『吾妻鏡』には、摂家将軍である四代将軍藤原頼経と五代将軍同頼嗣が京都に送り返される前に当地に逗留したとの記述がある。大仏・仮粧坂の両切通と佐助ヶ谷との位置関係を考慮するならば、佐介第も常盤亭と同様、北条氏が鎌倉防衛のために要所に設置した別業の一つとみるべきであろう。



第42図　大仏坂地区周辺の遺跡[S＝1/10,000]

第Ⅱ章　調査トレンチの概要

大仏切通から、佐助稲荷付近までの山陵部を大仏坂地区とし、鎌倉旧市街の西面を南西から北東方向へ延びる丘陵上にトレンチを計14箇所設定した。防衛遺構は鎌倉旧市街とは反対側、本地区では丘陵の西面～北面に構築されたであろうという予測から、14箇所のトレンチのうち第2，14号トレンチ以外は、すべて丘陵の西および北向きの斜面に設定している。第4～7，9，12号トレンチは丘陵頂部、第2，3，8号トレンチは尾根筋より一段下がった位置の平場の調査である。比較的似たような地形を複数箇所調査し、その共通性を見いだそうとしたものである。

しかしながら、近現代の攪乱を受けている箇所もあり、人為的な防衛施設と断言しうる遺構は乏しかった。

第4～7号トレンチを設定した丘陵頂部は常盤方面が一望にできる場所であり、「物見櫓」のような施設の存在を推定したが、顕著な遺構は発見されず、遺物も出土しなかった。

一向堂跡(鎌倉市№377)と周知されている谷から佐助稲荷方面へ抜ける大規模な鞍部は、幅2mほどの土橋状の尾根道が湾曲して延び「S字状鞍部」と仮称されている(菊川・玉林1996)。この尾根道の西側の平場に設定した第10号トレンチ、およびその北側の第11号トレンチでは、近世陶磁器・縄文土器等が若干出土したが、中世の遺物は出土せず、人為的な遺構も検出されなかった。

鎌倉旧市街地西側の最高峰である桔梗山頂部に設定したトレンチ(第12号トレンチ)では、かわらけの細片が出土したものの、戦時中に高射砲が置かれたため、遺構はこれによる攪乱を検出したに止まっている。

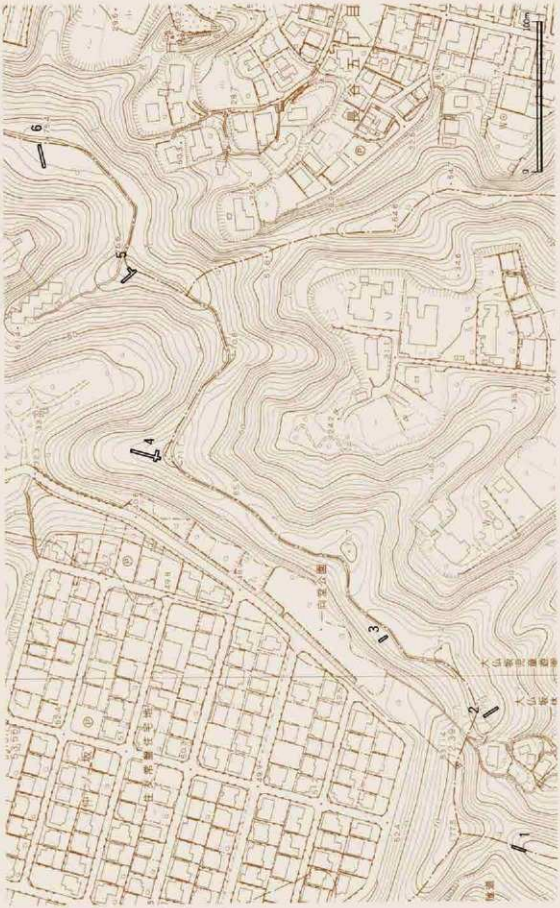
1995年の鎌倉市教育委員会による分布調査(菊川・玉林1996)で4段にわたる大規模な平場、および枡形、堀切状の造成がみとめられた箇所に設定した第14号トレンチでは、調査の結果、昭和40年代に行われた宅地造成の跡であることが判明している。

第4表　大仏坂地区調査トレンチ一覧表

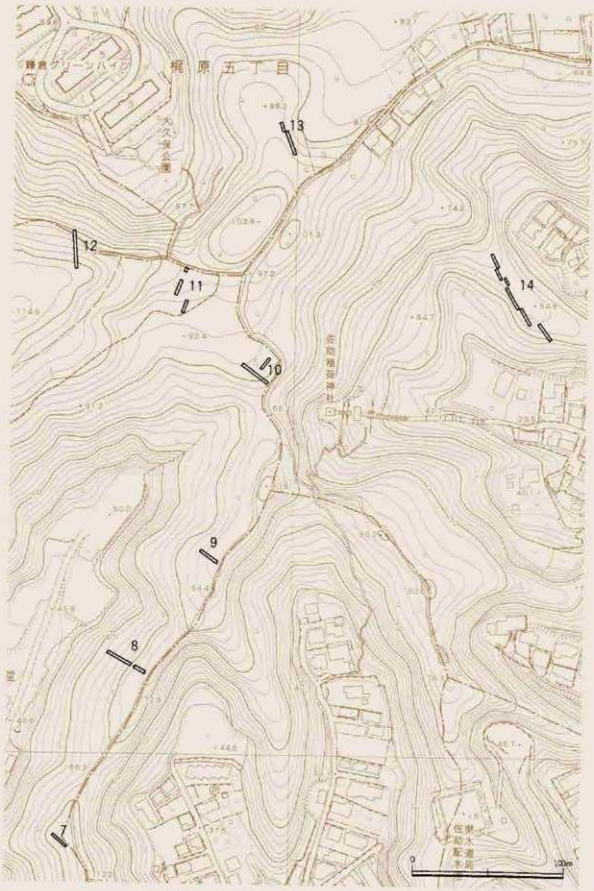
No.	町名・大字	地番	国家座標（北東角・南西角）	規模(m)	面積(㎡)	検出遺構	出土遺物	神奈川県遺跡台帳No.遺跡名
1	笛田	2186-3	X=-75947.83　Y=-27111.01 X=-75955.90　Y=-27116.14	5.0×1.5 4.0×1.5	13.50	小平場、切通（近代前平面）	陶製碑子	293　一升枡遺跡
2	長谷四丁目	529-2 529-5	X=-75936.11　Y=-27015.53 X=-75929.79　Y=-27026.92	11.0×1.5	16.50	切岸、平場		87　鎌倉城
3	常盤	932-1	X=-75865.65　Y=-26971.65 X=-75861.75　Y=-26976.74	5.0×1.5	9.00	平場	舎わせ口かわらけ	史跡　大仏切通
4	常盤	919-1 919-1 931-1 931-2	X=-75697.95　Y=-26847.75 X=-75716.33　Y=-26854.52 X=-75714.41　Y=-26848.59 X=-75714.02　Y=-26855.42	20.0×1.5 7.0×1.5	30.00 10.50	平場状		377　一向堂跡
5	常盤	918-3 918-4	X=-75700.83　Y=-26728.52 X=-75693.00　Y=-26737.58 X=-75697.77　Y=-26727.35 X=-75656.63　Y=-26730.41	12.0×1.5 3.0×1.5	22.50	平場状		377　一向堂跡
6	常盤 長谷五丁目	914-1 412-4	X=-75642.06　Y=-26660.45 X=-75637.03　Y=-26645.28	15.0×1.5	22.50	平場状		377　一向堂跡
7	常盤	912	X=-75563.08　Y=-26646.91 X=-75553.52　Y=-26655.41	12.0×1.5	18.00	平場状		377　一向堂跡
8	常盤 長谷五丁目	908 412-4	X=-75445.54　Y=-26595.97 X=-75443.01　Y=-26603.64 X=-75440.67　Y=-26604.95 X=-75433.01　Y=-26621.32	8.0×1.5 18.0×1.5	12.00 27.00	平場		377　一向堂跡

No.	町名・大字	地　番	国家座標（北東角・南西角）	規模（m）	面積（㎡）	検出遺構	出土遺物	神奈川県遺跡台帳No 遺跡名
9	常盤 長谷五丁目	903 412-4	X=-75373.31　Y=-26549.52 X=-75364.29　Y=-26559.91	14.0×1.5	21.00	平場		387　桔梗山城
10	常盤	838	X=-75254.58　Y=-26519.38 X=-75240.91　Y=-26534.74	21.0×1.5	31.50		近現代陶磁器、土師器、縄文土器	387　桔梗山城
	常盤	900 901	X=-75244.33　Y=-26522.21 X=-75236.93　Y=-26517.65	9.0×1.5	13.50			
	佐助二丁目	776						
11	常盤	833	X=-75180.84　Y=-26572.86 X=-75177.81　Y=-26572.86	3.0×1.5	4.50	焼土、磁焼敷	唐津、瓦永通貫、弥生土器、縄文土器	387　桔梗山城
		835	X=-75195.65　Y=-26578.91 X=-75185.98　Y=-26576.46	10.0×1.5	15.00			
		836	X=-75207.44　Y=-26574.67 X=-75196.98　Y=-26572.86	9.0×1.5	13.50			
12	常盤	830	X=-75178.72　Y=-26644.82 X=-75153.63　Y=-26648.14	25.0×1.5	37.50	近代高射砲の透成	かわらけ	377　一向堂跡
13	槻原五丁目	1493 1488	X=-75100.91　Y=-26501.39 X=-75058.42　Y=-26520.47	17.0×1.5 30.0×1.5	70.50	溝、平場		387　桔梗山城
14	佐助二丁目	773-1	X=-75173.85　Y=-26366.43 X=-75166.04　Y=-26371.98	9.0×1.5	13.50	現代宅地造成		387　桔梗山城
		772	X=-75181.47　Y=-26364.18 X=-75175.23　Y=-26359.04	7.0×1.5	10.50			
		773-3	X=-75185.29　Y=-26358.81 X=-75181.47　Y=-26362.52	5.0×1.5	7.50			
		767-2	X=-75201.24　Y=-26352.39 X=-75187.57　Y=-26362.26	15.0×1.5	22.50			
			X=-75211.81　Y=-26344.25	12.0×1.5	18.00			
			X=-75201.76　Y=-26351.53 X=-75221.69　Y=-26330.90	13.4×1.5	20.10			
			X=-75211.81　Y=-26340.08					

写真90　第13号トレンチ作業風景



第45図　大江遺跡トレンチ配置図(1)(S=1/2,500)



第44図　大仏坂地区トレンチ配置図(2)[S=1:2,500]

第Ⅲ章　トレンチの調査成果

第1号トレンチ

大仏龍道の真上にあたる尾根筋の崖と平場にトレンチを設定した。

調査の結果、崖上は遺構がなく自然地形と考えられるが、崖下の平場は幅約1.5mと狭く、付近の様相から西側山腹を回って尾根上へ出る通路と推定された。また、通路北側はほぼ垂直に落ち込み、深さ2.5mまで掘り下げても底面を確認できなかったため、明治12年に改修された大仏切通の南側崖面と判断された。この時の工事は2度にわたって行なわれ、両側の崖を約9m削り落とし、路面に石磐を敷いて、人力車2台が通行可能になったと伝えている。

トレンチ内の堆積土は大形の破砕岩盤を含む砂質土で、空缶などのゴミが出土した。おそらく、明治12年の切通は昭和33年に造成された長谷配水池の土砂によって、大規模に埋め戻されたと推測される。

写真91　第1号トレンチ下段　全景(北から)

写真92　第1号トレンチ下段平場(北東から)

第45図　第1号トレンチおよび周辺地形[S=1/500(周辺地形),1/80(トレンチ)]

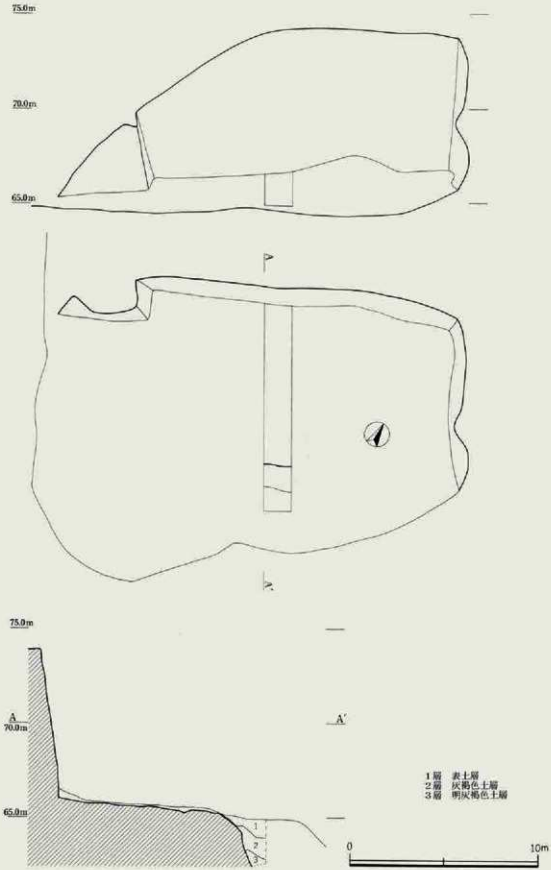
第2号トレンチ

尾根筋（現在は大仏ハイキングコース）の東南側に大規模な切岸を伴う平場が存在する。この切岸に直交する方向にトレンチを設定した。平場はほぼ矩形で、長辺22m、短辺15mほどの規模である。切岸はほぼ垂直に切り落とされ、平場と稜線上部の高低差は最大で8mを測る。東南側も下方に大きく落ち込んでいる。

平場では現地表下から10～20cmで基盤層である岩盤面に達する。覆土は腐葉土が薄く堆積しているだけであり、それほど古い堆積とは思われない。岩盤面は堅緻かつ極めて平滑になっている。トレンチ南側には高低差20cmほどの段差があり、この段差の下で岩盤の落ち込みを確認している。出土遺物がないため、平場の性格および造成の時期は不明だが、昭和29年作製の地形図には切岸、平場がすでに見えている。現在は長谷にある浅間神社の跡地とも推定されている（菊川・瀬田他1999）。

写真93　第2号トレンチ南端　崖落ち込み（東から）

写真94　第2号トレンチ　全景および周辺状況（南から）



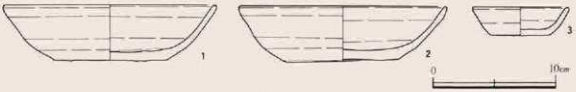
第46図　第2号トレンチ[S=1/200]

第3号トレンチ

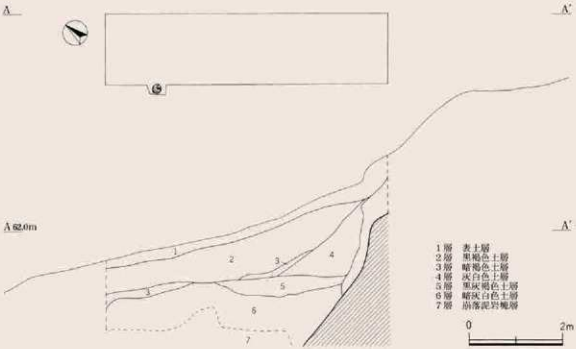
尾根筋の北西方向、現在の仲ノ坂団地に面する斜面には数カ所断続的に平場がみとめられる。本トレンチはその中の一箇所に、斜面に向かって垂直に設定した。現地表下1～2m、第48図中5・6層の上面で平坦面が検出された。6層の直上、第3層中より14世紀後葉のかわらけが3枚合わせ口で出土しており、この平坦面はそれ以前に構築されたものと推定される。トレンチの東側では急激に落ちる岩盤面が検出されたが、表面に削痕等はない。この岩盤が人為的に削り出されたものかどうかは判断できない。

かわらけは第47図1が下に置かれ、2・3がそれに被さる形で出土した。内部は中空で、遺存物はなかった。

写真95　第3号トレンチ　遺物出土状況(東から)



第47図　第3号トレンチ出土遺物[S=1/3]



第48図　第3号トレンチ[S=1/80]

第8号トレンチ

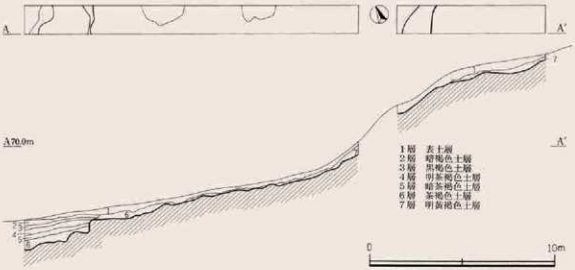
第3号トレンチと同様、尾根筋の西側斜面に構築された平場である。尾根の頂部も開けており、上下二段の平場を形成している。上・下段の高低差は約10mである。斜面の下は字「一向堂」と呼ばれる谷であり、一向堂のさらに西側には北条氏雷盤郎跡がある。これらを望む場所に構築された平場であり、これが中世までさかのぼるものであれば、鎌倉の防衛にあたって戦略上重要なものと推測される。

下段平場の規模は第3号トレンチ付近に比べて大きく、奥行き20m、幅はおよそ30mの広がりを持つ。上段、下段とも基盤となるのは風化した泥岩層で、現地表より50cmほどで風化岩盤面に達する。根による攪乱を多く受けているためか、平滑な面はとらえられなかった。平場の落ち際、トレンチの西端部は一段低くなっているが、堆積土から見ると、中世以前の自然地形と推測される。

規模の大きな平場であり、人為的な造成である可能性は高いが、調査では出土遺物もなく、所定はできなかった。

写真96　第8号トレンチ　調査風景(南東から)

写真97　第8号トレンチ　西端土層堆積状況(東から)



第49図　第8号トレンチ[S=1/200]

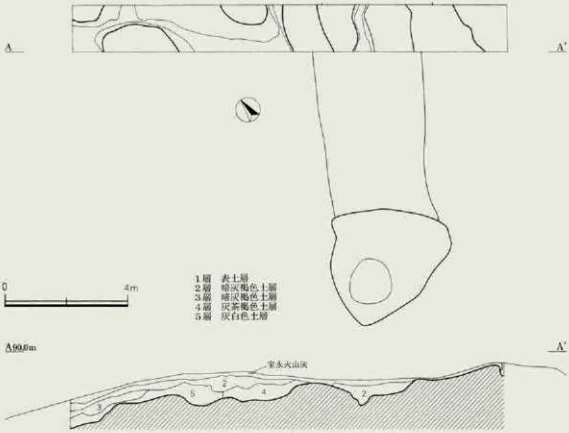
第9号トレンチ

第8号トレンチの北東約90mの位置に設定したトレンチである。周囲は比較的広い頂部の平場となっており、西側の斜面下には一向堂の谷の最奥部を望むことができる。

平場の東半部には、幅が広く浅い溝状の落ち込みが現在の尾根道に沿って通っている。当初これを堀切と推定して調査したが、岩盤面でも浅く、平面形もそれほど明瞭ではないため、道状遺構ーかつての尾根道の痕跡と考えられる。なお、この南側には、除子堀状の円形の落ち込みがみとめられる(未調査)。

トレンチの西半は緩やかな斜面になっている。基盤である岩盤は根によって攪乱を受けているが、岩盤の上面は平滑になっている部分がみとめられ、元は人為的な削平面であったと推定される。しかし、出土遺物はなく、道状遺構、削平面の構築時期は明らかではない。

写真98　第9号トレンチ　全景(南東から)



第50図　第9号トレンチ[S=1/120]

写真99　第10号トレンチ　全景(北西から)

写真100　第10号トレンチ出土遺物

第10号トレンチ

「S字状鞍部」と仮称される鞍部の調査である。「一向堂」と呼ばれる谷の奥部を取り巻くように現在尾根道がめぐっており、道の両脇は2～3mの段差が付けられている。北西に向く谷の現況は植林地で、2段の平坦面がみとめられる。トレンチはこの谷の最奥部に設定したが、ローム、黒色土が水平に堆積しており、人為的な遺構は発見されなかった。遺物はごくわずかに出土しており、表土層から近世～近代の磁器、黒色土中からは土師器の破片、縄文土器が出土している。縄文土器は深鉢の口縁部破片で、縦方向の隆帯が付けられる。縄文時代前期末、諸磯C式のものであろう。

第11号トレンチ

桔梗山の東麓に入り込む谷に設定したトレンチである。現況は植林地で、約3段の平場となっている。最上段のAトレンチでは岩塊を敷いた面を検出している。岩塊敷の下からは縄文土器が出土した。この他、最下部のCトレンチでは近世の陶磁器類、常滑甕、かわらけ片、砥石、弥生土器片などが出土している。

写真101　第11号Aトレンチ　岩塊敷(南から)

写真102　第11号トレンチ　出土遺物

第４編

仮粧坂地区の調査

仮粧坂現況

仮駐坂地区　例言

1　本地区のトレンチ番号は設定時、および調査時、本報告で異なっており、下表の通り対応する。記録図面、記録写真、出土遺物への注記は調査時番号に拠っている。
2　本地区での出土遺物への注記はWHCT＊＊（トレンチ番号）と略記している。
3　第Ⅲ章の執筆分担は下表の通りである。

本報告番号	調査時番号	設定時番号	執筆担当
1	1	38	
2	2	37	
3	3	35	菊川
4	4	34	鈴木
5	6	31	菊川
6	7	32	菊川
7	8	30	鈴木
8	9	29	
9	10	27,28	菊川

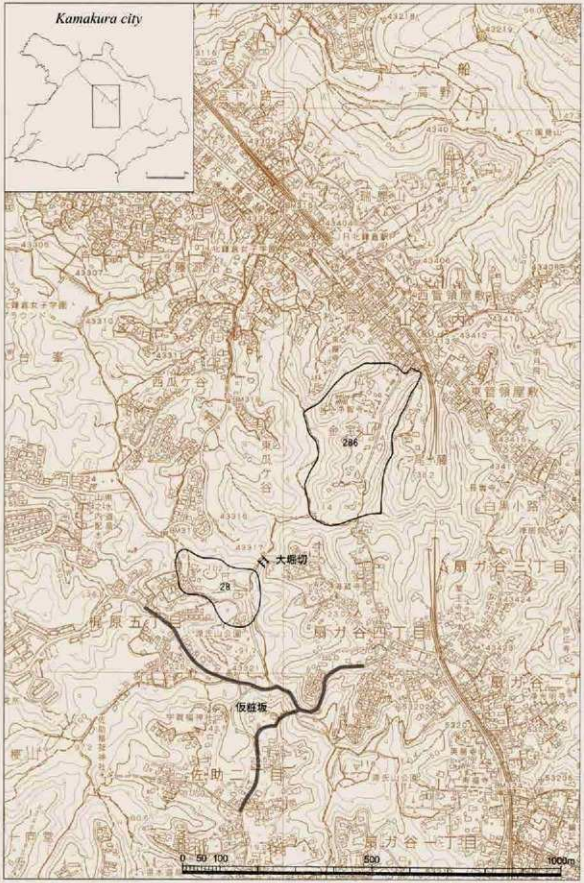
第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

本調査地区は、鎌倉市街地の西、梶原五丁目、佐助二丁目、山ノ内にまたがる丘陵部で、鎌倉七切通の一、国指定史跡仮粧坂切通に近接する。現在は桜の名所として知られる源氏山公園を中心に、北鎌倉方面にのびる葛原岡、長谷方面に向かう裏大仏の両ハイキングコースの出発点として、年間を通じて多くの人々が訪れる観光名所である。ハイキングコース沿いは緑豊かな樹林が繁くが、ほとんどが移の植林かコナラ等の二次林である。樹林の表土の下は深沢凝灰質砂岩層か逗子シルト岩層の岩盤である。

仮粧坂は化粧坂、気和飛坂などと記し、その地名の由来は平氏の公達の首実検のために化粧がなされたからだとか、遊女宿があったからとか諸説あるがはっきりしない。ただ『曽我物語』によると坂の下に遊女がいて、彼女をめぐって曽我十郎時致と梶原源太景季が張り合ったという。さらに『吾妻鏡』建長三年(1251)十二月三日条に幕府が鎌倉市中の商業区域を定めた際、「気和飛坂山上」が小町屋および売買所を構えてよい場所の一つとして指定されており、人のにぎわう歓楽街のようなものが形成されていたのかもしれない。一方でいわゆる鎌倉街道上ノ道が通じる交通の要所で、鎌倉防衛上の重要拠点でもあった。元弘三年(1333)の新田義貞による鎌倉攻めの際、義貞、騨屋義助兄弟率いる本隊は仮粧坂から鎌倉に突入しようとしたが、金沢越後左近大夫将監纏する守備軍の前に迂回を余儀なくされており、非常に防御が堅かったと想像される。

仮粧坂に北接して葛原岡とよばれる尾根がある。元弘二年(1332)、元弘の乱に際して鎌倉に護送された後醍醐天皇の廷臣日野俊基は同年六月にここで斬られた。明治に入って俊基を祭神とする葛原岡神社が創建された。社の南には俊基の墓と伝える石造宝篋印塔がある。ところでこの日野俊基に関する史実は、鎌倉時代にこの地が刑場であったことを窺わせるが、先述した「遊女宿」、「小町屋」の存在とあわせて、中世において仮粧坂一帯が鎌倉市街から城外への「境口」とみなされていたことを示すのではなかろうか。葛原岡という地名の由来について、『鎌倉攬勝考』は大庭御厨の開発領主である鎌倉権五郎景政と、その先祖とされる桓武天皇の皇子葛原親王(桓武平氏の祖)を祭った御霊社がかつてこの地にあったことを伝える。後に御霊社は梶原に移ったが、親王に因む葛原岡の地名は残ったとされる。葛原岡神社の周辺には縄文早期の土器や黒曜石製の石鏃などが出土した葛原岡遺跡(№28)、藤原仲能の墓といわれる塚、大堀切(蛇居ヶ谷切通)が所在する。うち大堀切は源頼朝が建設を命じたが、蛇の祟りをおそれて工事を中断した切通の跡という言い伝えがあるが、実のところは海蔵寺奥から瓜ヶ谷に至る尾根の岩盤を切った、土橋状の遺構の残る大規模な防衛施設であると考えられる。

葛原岡背後の谷戸を瓜ヶ谷といい、中世の山ノ内荘の荘域になる。この北東側尾根筋一帯は鎌倉五山の第四位、金峰山浄智寺の寺域であった。臨済宗円覚寺派。北条宗政の菩提を弔うために彼の夫人と、その子師時が弘安四年(1281)以降まもなく開創。開山は兀庵普寧、大休正念とされるが、実際に開山の責務を遂行したのは準開山である南州宏海という。鎌倉時代末期から南北朝、室町期にかけて浄智寺は北条氏、足利将軍家、鎌倉公方等に厚く庇護され大いに繁栄したが、江戸時代以降寺勢衰微し、今日では山門、南北朝時代の作になる阿弥陀・釈迦・弥勒の三如来(三世仏)像を安置する仏殿などの建築を残すのみである。とはいえ名刹の風情を今日に伝える旧境内全域が国の史跡指定を受けており、また周辺の遺物散布地は浄智寺境内遺跡(№286)として周知されている。



第51図　仮粧坂地区周辺の遺跡[S＝1/10,000]

第Ⅱ章　調査トレンチの概要

浄智寺谷の最奥部から源氏山公園にかけての山陵部を仮粧坂地区とし、調査を行った。扇ガ谷と梶原を隔てる尾根上の道は現在ハイキングコースとなっており、この道沿いに計９箇所のトレンチを設定した。大仏坂地区同様、鎌倉旧市街の外側に面する、山陵の西側および北側に重点をおいている。第１号トレンチのみ銭洗弁天北側の頂部に設定したが、他はみな頂部もしくは尾根筋より一段低い位置に観察された平場にトレンチを設定した。

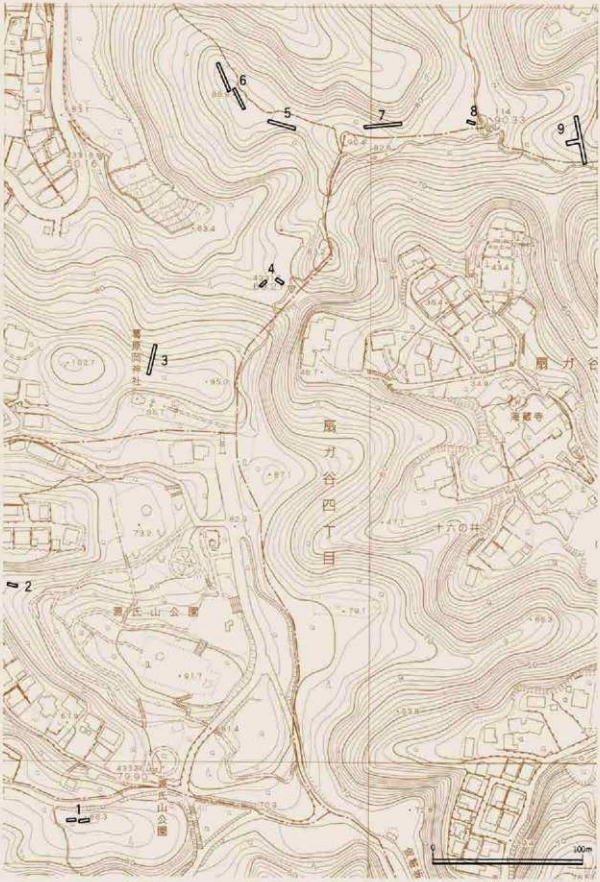
第１号トレンチでは道状遺構が確認された。仮粧坂の旧道の一部と推測されるが、出土遺物はなく不明な点が多い。第２号トレンチは源氏山公園の西側へ延びる尾根先端の平場に設定した。かわらけの細片、鞴、火葬骨などが混在して出土したが、下水管が埋設されており、公園整備の際に大規模な掘乱を受けていることが判明した。扇ガ谷の最奥部、海蔵寺の裏手から瓜ヶ谷方面へ抜ける鞍部には、丘陵を分断する大規模な堀切(大堀切)と土橋状の道が存在する。この大堀切の瓜ヶ谷側で調査を行った(第４号トレンチ)が、遺物は出土せず、明瞭な遺構も検出されなかった。

本地区では９箇所のトレンチ中３箇所(第３，５，６号トレンチ)で茶毘址が発見されており、仮粧坂という境界域を特徴づけるものとなっている。

この他、第７号トレンチで縄文土器がほぼ一個体分出土している。現在、葛原岡神社周辺が葛原岡遺跡(鎌倉市No28)として周知されているが、今回の調査の結果から、付近の縄文時代遺跡の範囲は現在より広がるものと考えられる。

第５表　仮粧坂地区調査トレンチ一覧表

No.	町名・大字	地　番	国家座標 (北東角・南西角)	規模 (m)	面積 (㎡)	検出遺構	出土遺物	神奈川県遺跡台帳No. 遺跡名
1	佐助二丁目	717	X=75039.69　Y=26162.84 X=75039.03　Y=26200.00	7.0×1.5	10.50	道、土坑		387 梶原山城
		718-1	X=75040.15　Y=26184.30 X=75039.43　Y=26190.48	6.0×1.5	9.00			
2	梶原五丁目	1428 1429	X=74885.89　Y=26233.77 X=74883.04　Y=26238.63	6.0×1.5	15.00		かわらけ、鞴、火葬骨	87 鎌倉城
3	山ノ内	1189 1190 1157-3 1157-2	X=74743.99　Y=26145.89 X=74724.38　Y=26143.07 X=74648.12　Y=26057.89 X=74685.00　Y=26073.35	20.0×1.5	30.00	平場、茶毘址	かわらけ、常滑、瀬戸、青磁、手焙り、砥石、釘、火葬骨	28 葛原岡遺跡
4	山ノ内	1192	X=74682.64　Y=26058.74 X=74684.95　Y=26073.35	5.0×1.5	7.50	大堀切	かわらけ	87 鎌倉城
		1189	X=74682.64　Y=26057.34 X=74681.46　Y=26062.17	5.0×1.5	7.50			
5	山ノ内	1198-1 1195	X=74581.63　Y=26050.38 X=74575.44　Y=26067.61	18.0×1.0	18.00	茶毘址	かわらけ、火葬骨	286 浄智寺境内遺跡
6	山ノ内	1198-1	X=74567.49　Y=26083.51 X=74555.57　Y=26091.46	15.0×1.5	22.50	平場、茶毘址	かわらけ、釘、火葬骨、縄文土器	286 浄智寺境内遺跡
			X=74556.01　Y=26093.23 X=74536.34　Y=26102.95	20.0×1.5	30.00			
7	山ノ内	1198-1	X=74577.45　Y=25979.30 X=74575.09　Y=26004.42	25.0×1.5	37.50	平場	かわらけ、手焙り 縄文土器	286 浄智寺境内遺跡
8	山ノ内	1198-1	X=74577.45　Y=25931.59 X=74574.64　Y=25935.81	5.0×1.5	7.50	平場		286 浄智寺境内遺跡
9	山ノ内	1421	X=74571.86　Y=25863.36 X=74602.57　Y=25858.41	29.0×1.5	43.50	平場	かわらけ、常滑、瀬戸、山茶碗、白磁、褐釉、手焙り、瓦、釘、銭、鉄滓、弥生土器	史跡 浄智寺境内 286 浄智寺境内遺跡
		1418-イ-200 1421	X=74589.00　Y=25861.02 X=74589.26　Y=25870.24	9.0×1.5	13.50			



第52図　仮粧坂地区トレンチ配置図[S＝1/2,500]

第Ⅲ章　トレンチの調査成果

第3号トレンチ

葛原ケ岡神社の北にある尾根は、瓜ケ谷側の山腹に植林された数段の平場があり、尾根上とその1段下の平場にかけてトレンチを設定した。

調査の結果、尾根上の平場は地山を約1m掘り下げ造成した中世の生活面と判り、5基の茶毘址が発見された。茶毘址はおおむね短径1m、長径1.5m、深さ0.5m前後の楕円形を呈するが、掘り込みのないもの(茶毘址4)や周囲に泥岩塊を配したもの(茶毘址3)、覆土の上面にロームを貼るもの(茶毘址1・3)などが見られた。なお、下段平場には遺物包含層がなく後世に植林棚として削平されたものと判断した。

出土遺物の年代から、茶毘址は14世紀後半～15世紀前半に比定できる。

写真103　第3号トレンチ　全景(北から)

写真104　第3号トレンチ上段平場(南から)

写真105　第3号トレンチ　茶毘址1（西から）

写真106　第3号トレンチ　茶毘址2（西から）

写真107　第3号トレンチ　茶毘址3（東から）

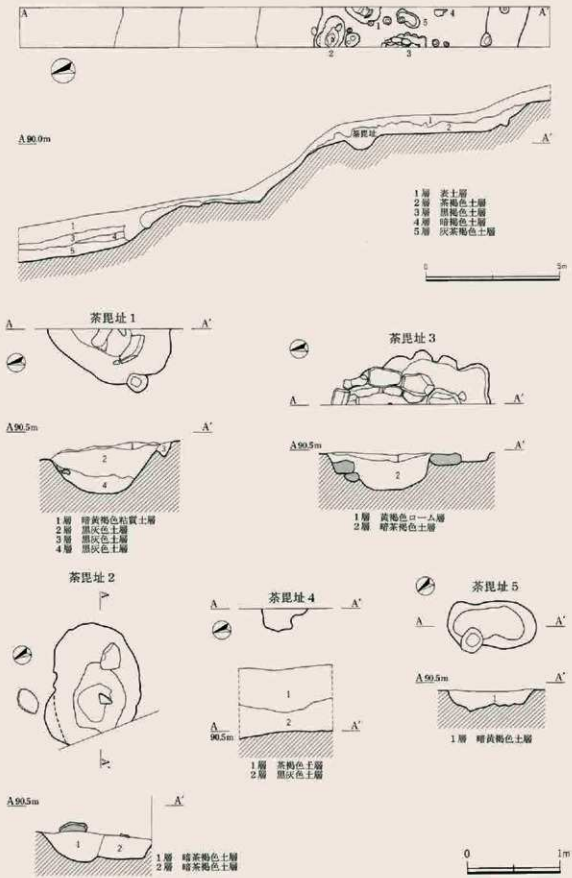
写真108　第3号トレンチ　茶毘址4（西から）

写真109　第3号トレンチ　茶毘址5（東から）

写真110　第3号トレンチ　炭溜まり・かわらけ出土状況（西から）

写真111　第3号トレンチ出土遺物（陶磁器類）

写真112　第3号トレンチ出土遺物（かわらけ）



第53図　第3号トレンチおよび茶毘址1～5 [S=1/140(全体図),1/40(茶毘址)]

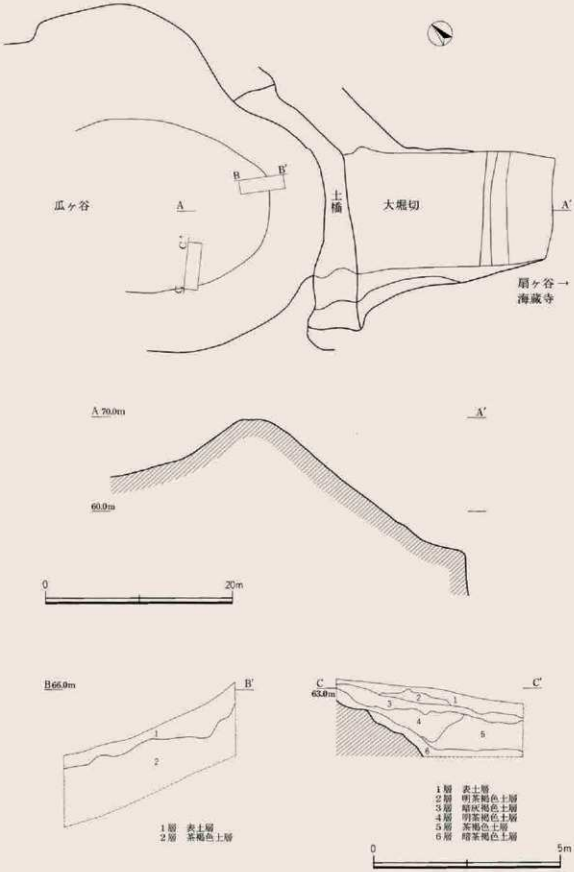
第4号トレンチ

海蔵寺の裏手には「大堀切」「蛇居ヶ谷切通」と呼ばれる大規模な切通状の遺構がある。この堀切の北西側は土橋状の尾根道(現在はハイキングコース)を挟み、瓜ヶ谷に通じる。瓜ヶ谷の最奥部は現在、植林地となっており、平場状の広がりを持つ。この平場の南西側、および南東側の斜面にかけて、A・B2箇所のトレンチを設定した。Aは南西側の崖線を追ったが、平坦面は検出できなかった。Bも基盤層まで掘削することはできず、土橋状の高まりの構築状況は把握できなかった。いずれのトレンチも出土遺物はなく、大堀切と対応するような人為的な平場の存在を証明するような成果は得られなかった。なお、大堀切部分は測量調査を行い，傾斜面に2段の平場が存在することが確認された。

写真113　「大堀切」現況(南西から)

写真114　第4号Aトレンチ土層堆積状況(北から)

写真115　第4号トレンチ　全景(北から)



第54図　第4号トレンチ[S=1/400, 1/100(土層断面図)]

写真116　第5号トレンチ　全景(北から)

写真117　第5号トレンチ　茶毘址(北から)

第5号トレンチ

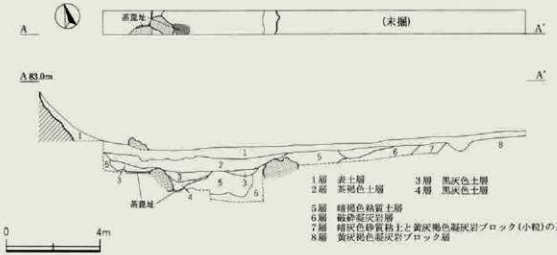
海蔵寺の北東、瓜ケ谷へ張り出す尾根の鞍部平場にトレンチを設定した。平場は南へ下る谷に2段あり、現況はともに植林地となっている。なお、地蔵を安置し壁面に五輪塔他の彫刻をもつ「東瓜ケ谷やぐら群」は、この谷下方の山腹にある。

トレンチでは基底(地山、岩盤)まで掘り下げることが困難なため、一部分を深く掘削して、土層の堆積状態と遺構の有無を確認した。

調査の結果、平場は植林棚の造成時に削平されたもので、表土層下はおおむね自然堆積の状態であった。また、東西斜面からの崩落土で谷が埋没していく過程で、茶毘址が2箇所に残されていることが判った。

茶毘址は地表下1mと1.5m程のところで確認された。巨大な岩塊の岩除を利用しており、周囲が火熱を受けて赤変した様子も観察できる。

かわらけ皿の微細な破片の他に、火葬骨片と鑄が出土したが、遺構の年代は不明である。



第55図　第5号トレンチ[S=1/160]

第6号トレンチ

瓜ケ谷へ張り出す尾根の頂部と北東へ伸びる尾根筋に設定した。頂部は平坦で開けており、尾根は幅広く傾斜も緩やかである。なお、頂部には凝灰岩製の小祠が祀られている。

トレンチでは段切り状の遺構と5基の茶毘址が発見された。段切り状の遺構は地山を約1.5m切り下げて尾根筋に平坦面を造成するが、段切り部分に茶毘址が掘り込まれることから中世に遡る遺構と判った。

茶毘址はおおむね短径0.6m、長径1m、深さ0.5m前後の楕円形あるいは隅丸長方形を呈し、内底面に赤く硬化した被熱痕を残すもの（茶毘址2）、凝灰岩の切り石を据えるもの（茶毘址1）、廃棄の際に被熱した泥岩塊を一緒に埋め込むもの（茶毘址1・2）がある。

出土遺物には、14世紀後半のかわらけ皿（茶毘址1）の他に、火葬骨片と釘（茶毘址3）が出土した。また、トレンチ北西端の自然堆積層からは貝殻条痕文をもつ縄文時代早期末葉の土器片が出土している。

写真118　第6号トレンチ　全景（北から）

写真119　第6号トレンチ　茶毘址1，2（北から）

写真120　第6号トレンチ　茶臼址1(北から)

写真121　第6号トレンチ　茶臼址2(北から)

写真122　第6号トレンチ　茶臼址3(西から)

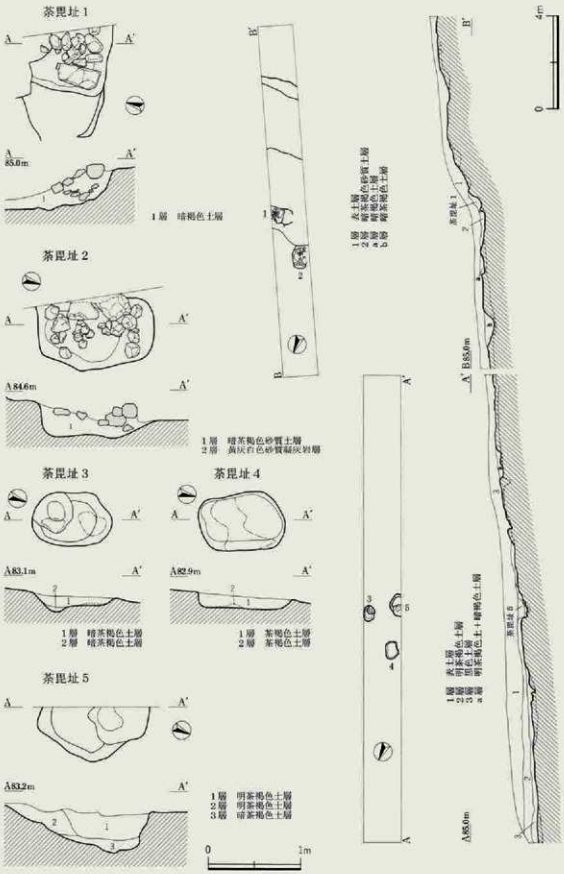
写真123　第6号トレンチ　茶臼址4(東から)

写真124　第6号トレンチ　茶臼址5(東から)

写真125　第6号トレンチ付近尾根頂部の祠(南から)

写真126　第6号トレンチ茶臼址1出土遺物(かわらけ)

写真127　第6号トレンチ茶臼址3出土遺物(鉄釘)

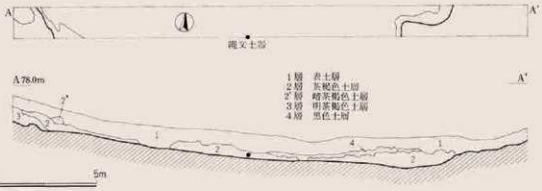


第56図　第6号トレンチおよび茶毘址1～5［S＝1/160(全体図),1/40(茶毘址)］

写真128　第7号トレンチ　全景(西から)

第7号トレンチ

東西両側を丘陵頂部に挟まれ、平場状を呈する場所に設定したトレンチである。東西のピークはいずれも標高約90mを測り、特に東側のピークは天柱峰と呼ばれている。トレンチ北側は広く谷へと下って行く。トレンチは25mにわたって、現地表下1.5~2.0mまで掘削した。トレンチの東西際で風化した岩盤面を検出したが、人為的な成形痕とはみとめられなかった。トレンチ中央の平場状の部分は谷地形になっており、土層の堆積状況から、中世以前の自然地形と考えられる。谷中央の暗褐色土中からは縄文土器が出土した。口縁部に隆帯による渦巻紋が施される、加曽利E Ⅲ式(縄文時代中期後半)の深鉢である。出土状況から見て、埋設されたものではなく、東西南側の山陵から流れ込んだものと推測される。



第57図　第7号トレンチ[S=1/180]

写真129　第7号トレンチ遺物出土状況(南から)

写真130　第7号トレンチ出土遺物(縄文土器)

第9号トレンチ

浄智寺の谷の最奥部平場に設定した。トレンチでは地表下60cmと1.4mのところで2時期の生活面を確認しており、上位面は山麓の岩盤を削り平場面積を拡張していることが判った。平場の性格は不明であるが、おそらく浄智寺に関連した遺構と考えられる。

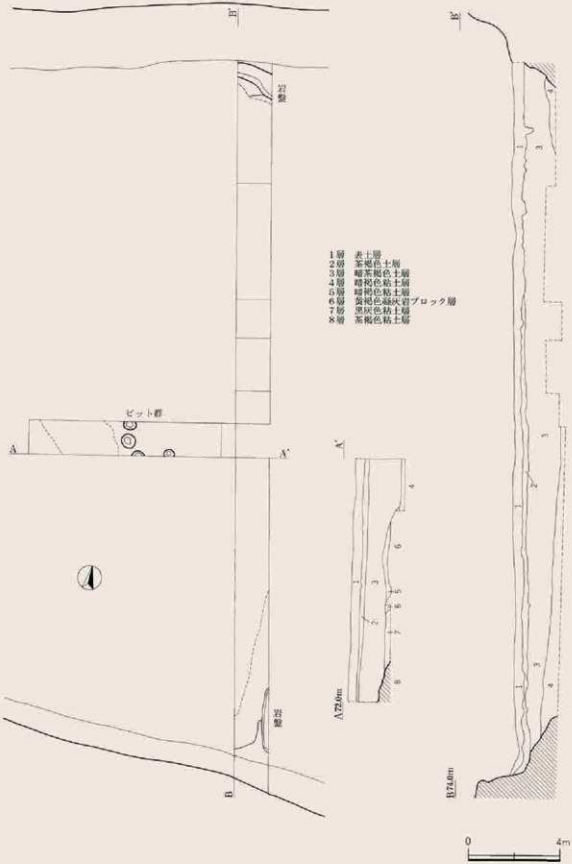
出土遺物には、かわらけ皿・国産陶器・輸入陶磁器手焙り・瓦・金属製品等があり、14世紀後半～15世紀の遺物を含んでいる。

写真131　第9号トレンチ　岩盤面(南から)

写真132　第9号トレンチ西半部　全景(東から)

写真133　第9号トレンチ南半部　全景(北から)

写真134　第9号トレンチ北半部　全景(南から)



第58図　第9号トレンチ[S=1/160]

第５編

亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区の調査

第21号トレンチ作業風景

亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区　例言

1　本地区のトレンチ番号は設定時、および調査時、本報告で異なっており、下表の通り対応する。記録図面、記録写真、出土遺物への注記は調査時番号に拠っている。
2　本地区での出土遺物への注記はWHDT＊＊（トレンチ番号）と略記している。
3　第Ⅲ章の執筆分担は下表の通りである。

本報告番号	調査時番号	設定時番号	執筆担当
1	1	23	菊川
2	2	25	菊川
3	3	26	
4	4	22	
5	5	21	菊川
6	6	20	
7	7	14	
8	8	13	菊川
9	9	15	菊川
10	10	16	菊川
11	11	18	菊川
12	12	19	
13	13	17	菊川
14	14	11, 12	菊川
15	15	10	鈴木
16	16	9	鈴木
17	17	8	鈴木
18	19	6	
19	20	5	菊川
20	21	4	
21	18	2	菊川

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

本調査地区は、中世の山ノ内荘の荘域であった鎌倉市山ノ内を中心とし、一部扇ガ谷三・四丁目にまたがる尾根筋一帯で、鎌倉七切通のひとつに数えられる亀ヶ谷坂切通と、同じく巨福呂坂切通が域内に含まれる。両切通とも昭和四十四年(1969)に「巨福呂坂」、「亀ヶ谷坂」として国指定史跡に指定。切通に切断された尾根筋は平安後期に山内首藤氏によって開発された山ノ内荘と、鎌倉開府以前は国衙領とされた鎌倉郷との境界にほぼ相当する。同荘の開発領主山内首藤氏は代々清和源氏の郎党であったが経俊のとき頼朝に弓を引いた罪により山ノ内荘は幕府に没収され、後、和田合戦の論功で北条義時が獲得して以来同荘は北条氏の私領とされた。このため山ノ内の地には北条一族により建長寺・円覚寺・浄智寺・禅興寺(明月院はこの禅興寺の塔頭)などの諸寺院が建立された。一方、亀ヶ谷坂と巨福呂坂は鎌倉の北の出入口にあたり、特に鎌倉市街地と山ノ内を結び、いわゆる鎌倉街道中ノ道に通じる巨福呂坂は軍事的にも経済的にも重要な幹線道だったと推定される。『吾妻鏡』仁治元年(1240)十月十日条に「前武州(北条泰時)の御亭において、山内に道路を造らるべきの由、その沙汰あり」とあり、同十九日条に「山内に道路を造らる。これ殷雑たるの間、往還の煩あるによってなり」と、道路工事着工の決定が敍せられているが、この記事は幹線道路の新規造成ではなく、第9編第Ⅰ章で扱う六浦路(朝夷奈切通)と同様従来のルートの拡幅整備とみられる。しかし『吾妻鏡』に道路造成の具体的記述が残されているのは山内路(巨福呂坂)と六浦路だけであり、幕府が両道をきわめて重視したことは間違いない。

『太平記』によると元弘三年(1333)の新田義貞による鎌倉攻めの際、堀口貞満、大島守之率いる十万騎余の大軍が巨福呂坂に向かうと、迎え撃つ鎌倉方は北条一門で、幕府最後の執権である赤橋守時が六万騎余の兵を率いて現在の梶原・寺分から上町屋・山崎にかけての一帯になる洲崎に出撃し、激戦になったという。この戦いで守時は戦死し、洲崎を突破した新田勢の軍勢は巨福呂坂手前の山ノ内まで進み、同じく北条一門の金沢貞将ら鎌倉方と戦っている。同坂は霊山を越えた新田軍本隊が鎌倉市中に乱入し、火を放って大混乱を招き幕府勢が総崩れになるまでは破られず、貞将も奮戦の末討死したと伝える。

巨福呂坂はこうした鎌倉幕府の交通拠点、軍事戦略拠点であっただけでなく、鎌倉五山の第一位になる巨福山建長興国禅寺(建長寺)の所在地として、北条氏の宗教政策にとっても重要であった。建長寺の開基は北条時頼、開山は蘭渓道隆(大覚禅師)である。同寺創建前の寺地は「地獄谷」とよばれた刑場で、刑死者を弔う心平寺という小寺があり地蔵堂だけが残されていたという。時頼は建長元年(1249)、小袋谷に地蔵堂を移築した上で寺院建立に着手し大がかりな建設工事を経て、建長五年(1253)に新寺院の落慶法要が行われ、山号は地名に、寺名は元号に因んで命名された。往時には左右対称の大伽藍と塔頭四十九院を擁し、僧侶千人を越えるといわれた建長寺であったがたびたび大火や地震に見舞われ、現在残っている総門、山門(三門)、仏殿、法堂などの伽藍建築はいずれも近世における再建である。今回の調査地区内では亀ヶ谷坂周辺に満光寺跡(№179)、法幢寺跡(№178)が所在するがいずれも建長寺の末寺と推定される。

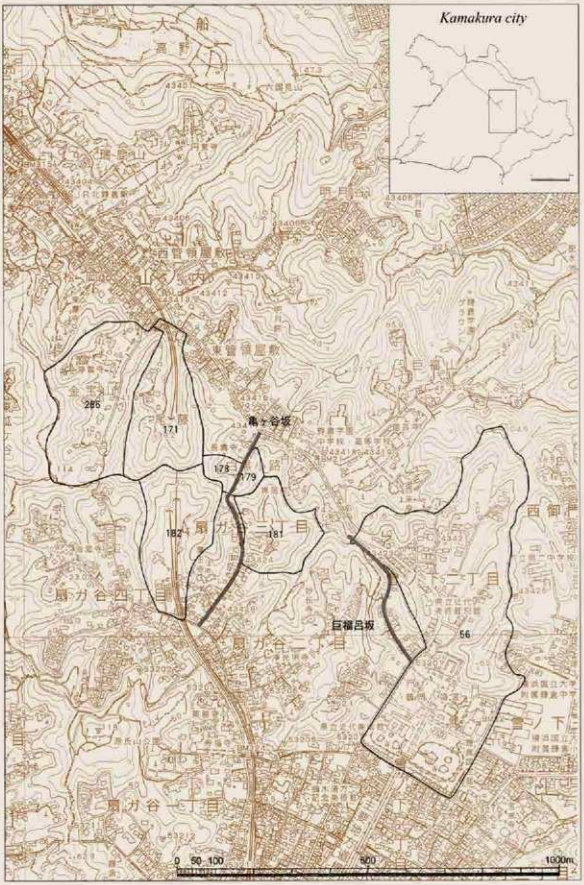
巨福呂坂から亀ヶ谷坂にかけての一帯には、このほかにも中小の寺院が点在していた。扇ガ谷方面から亀ヶ谷の切通にむかう坂の途中には宗派、開基、開山、創建時期等いずれも不詳だが坂中山正円寺という寺があり、勝縁寺、坂中観音堂などと称された。鎌倉時代末期には存在していたことが「随聞私記」所載の永仁四年(1296)四月十六日の大火の記事によって確認できるが廃寺となった時期は明らかではない。現在、扇ガ

谷三丁目の亀ヶ谷坂に沿った一画が勝禄寺跡(No181)として周知されている。正円寺西方の現在横須賀線扇ガ谷トンネルのある小谷戸のあたりは法泉寺跡(No182)で、同寺は竹園山法泉寺と号し開基は関東管領だった畠山国清、開山は素安了堂と伝えるが、鎌倉末期の文献「北条貞時十三年忌供養記」には元亨三年(1323)に既に法泉寺の寺名が見える。一方亀ヶ谷坂の山ノ内側登り口近くには足利氏ゆかりの臨済宗寺院、宝亀山長寿寺がある。開基は初代鎌倉公方足利基氏、開山は古先印元と伝え、基氏が父尊氏の菩提を弔うために創建したといわれる。同寺寺宝に尊氏の木像、また境内には彼の遺髪を納めたという石塔がある。

山ノ内の地には有力武士が居館を構えていたと伝えられる。古くは先述の山内首藤経俊の父俊通が山ノ内荘の荘官として平安末期ここに居住したと推測され、南北朝時代には関東管領職を世襲した上杉氏の諸流のうち、憲方を祖とし最も栄えた山内上杉氏が管領屋敷を構えた。この憲方の逆修塔と伝える宝篋印塔は第2編第Ⅰ章でふれた通り西方寺跡に所在するが、別に明月院裏手に上杉憲方の石塔といわれるものが十六羅漢・釈迦如来像を彫った岩窟内にある。なお鎌倉時代には山ノ内を領有した北条氏が建長寺、円覚寺などの大寺を建立し、巨福呂坂・亀ヶ谷坂両切通もその影響下においたと思われる。仮裁坂地区の項で詳述した浄智寺の東側の谷戸を尾藤ヶ谷とよび、北条義時の家令尾藤景綱の邸跡(No171)といわれるが『吾妻鏡』の記述とは相違があり、検討を要する。しかし北条氏嫡流(後の得宗家)の私的家臣(御内人)である尾藤氏が北条氏の私領山ノ内荘に邸宅を有した可能性は否定できない。

巨福呂坂を越えると鶴岡八幡宮寺の寺域に達する。鶴岡八幡宮寺は永福寺、勝長寿院とともに源頼朝の創建した三大寺院のひとつとされる。その前身は源頼義が鎌倉郡由井(由比)郷に石清水八幡を勧請して建てた由比若宮である。ちなみに清和源氏と鎌倉との深い縁はこの頼義が平忠常の乱(1028)の後、相模守に任じられ、さらに平直方(北条氏の祖)の女婿となって鎌倉郡内に居住したことに始まる。治承四年(1180)に鎌倉入りした頼朝は由比若宮を小林郷北山に遷し、鶴岡八幡若宮若宮とした。このとき同宮を京都の大内裏に見立てた鎌倉の都市計画が策定された。さらに建久二年(1191)の大火の後、頼朝は八幡宮後背の大臣山に新たに社殿を建て、あらためて石清水八幡を勧請して鶴岡八幡本宮(上宮)とした。同時に大火により焼失した若宮(下宮)も再建された。かくして清和源氏の氏神で、かつ武家政権である鎌倉幕府の守護神である鶴岡八幡宮が完成した。同宮は社務職である僧職の別当のもと、二十五坊の供僧と神主が奉仕する神仏混淆の寺院であり、鶴岡八幡宮寺と称された。鶴岡八幡宮寺二十五坊は御谷とよばれる大臣山北西の谷戸を中心に点在し、鎌倉幕府滅亡後も室町幕府、鎌倉御所(公方)、後北条氏、豊臣氏、江戸幕府の尊崇をうけ、とくに徳川家康のときに七坊に減じた坊を十二坊に増やすといった復興策が講じられるが、明治維新をむかえ、神仏分離令により諸坊はすべて廃止、寺院的色彩はことごとく払拭されて供僧は還俗させられ神職として八幡宮に仕えることとなった。現在、御谷の大部分を含めた八幡宮境内一帯が国指定史跡「鶴岡八幡宮境内」に指定されているが、さらに八幡宮寺諸坊の跡地と推定される巨福呂坂に近接する地域までが鶴岡八幡宮旧境内遺跡(No56)に組み入れられている。

以上のことからもわかるように、巨福呂坂は建長寺をはじめとする山ノ内の大禅院群と鶴岡八幡宮寺とを結ぶ交通路としても重要な意義をもっていたと考えられる。



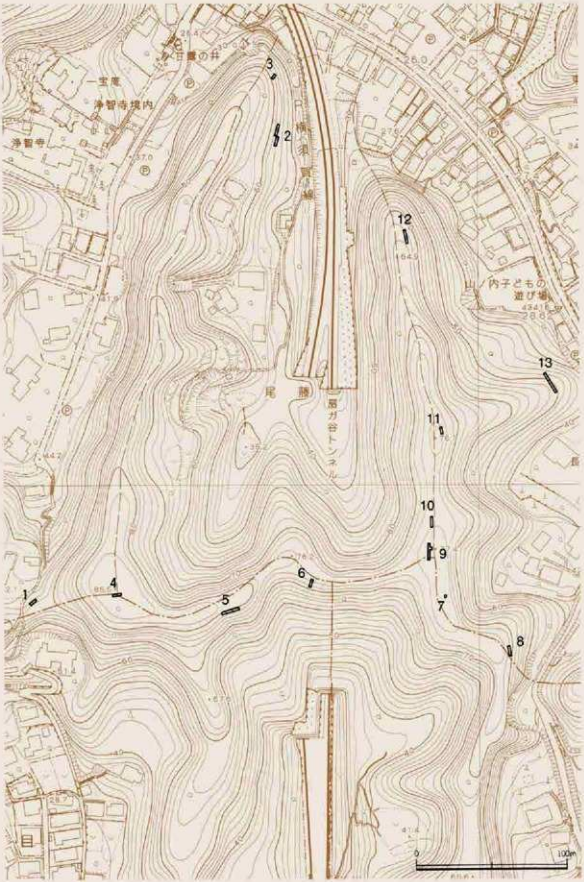
第59図　亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区周辺の遺跡[S=1/10,000]

第Ⅱ章　調査トレンチの概要

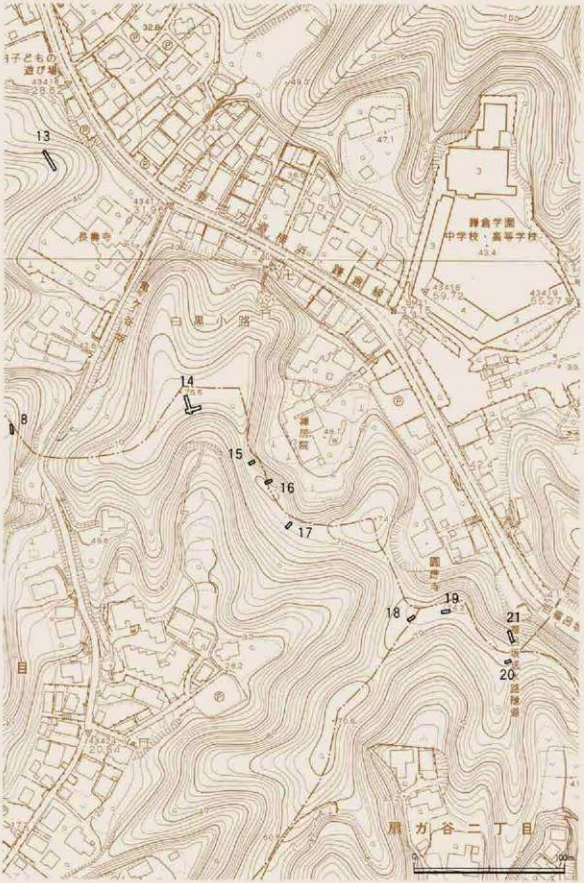
山ノ内路の南側、浄智寺境内から鶴岡八幡宮境内の間に連なる山陵を亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区とした。山陵は亀ヶ谷坂によって分断されており、調査にあたっては便宜的にここより西を亀ヶ谷坂地区、東を巨福呂坂地区とした。亀ヶ谷坂地区で13箇所、巨福呂坂地区で8箇所、計21箇所の調査を行った。トレンチは山陵の北側斜面、山ノ内路に面する方向に多く設定している。第1号トレンチは浄智寺谷と扇ガ谷をつなぐ切通、第3，8，12号トレンチは下方を一望できる尾根の端部、第10，11，20号トレンチは堀切に設定した。その他は頂部平場、および尾根筋の平場である。寺院址と推定される第2号トレンチで多量の遺物が出土し、第9号トレンチでは切石を配した石塊の基壇状の遺構が発見された。亀ヶ谷坂地区においては、遺構として不明瞭ではあるが、塚状の高まりが多く見られたのが特徴となっている。また、巨福呂坂地区の禅居院裏手の尾根筋に設定した第15～17トレンチでは、延長約100mにおよぶ堀割路状の掘り込みを確認している。

第6表　亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区調査トレンチ一覧表

No.	町名・大字	地　番	国家座標（北東角・南西角）	規模（m）	面積（㎡）	検出遺構	出土遺物	神奈川県遺跡台帳No. 遺跡名
1	山ノ内	1427-イ	X=-74576.80　Y=-25792.49 X=-74579.05　Y=-25797.03	5.0×1.5	7.50	堀切、土坑		史跡　浄智寺境内
2	山ノ内	1438-1	X=-74275.72　Y=-25634.62 X=-74261.84　Y=-25633.74	8.0×1.5 6.0×1.5	21.00	平場、切岸、やぐら	かわらけ、常滑、瀬戸、青磁、白磁、手捻、茶臼など	171　尾藤景綱邸跡
3	山ノ内	1438-1 1430-1	X=-74231.87　Y=-25636.60 X=-74227.91　Y=-25635.72	4.0×1.5	6.00	現代側平面		171　尾藤景綱邸跡
4	山ノ内 扇ガ谷四丁目	1459-1 545	X=-74573.19　Y=-25736.88 X=-74572.75　Y=-25741.88	5.0×1.5	7.50	前平地形か		171　尾藤景綱邸跡 286　浄智寺境内遺跡
5	山ノ内 扇ガ谷四丁目	1459-1 490	X=-74582.93　Y=-25658.94 X=-74584.76　Y=-25670.58	12.0×1.5	18.00	平場、塚、土坑	かわらけ	171　尾藤景綱邸跡 182　法泉寺跡
6	山ノ内 扇ガ谷四丁目	1459-1 490	X=-74567.62　Y=-25611.38 X=-74562.51　Y=-25611.18	5.0×1.5	7.50	現代側平面		171　尾藤景綱邸跡 182　法泉寺跡
7	山ノ内	1507	X=-74574.61　Y=-25622.34 X=-74572.94　Y=-25623.60	1.5×1.5	2.25			史跡　亀ヶ谷坂
8	山ノ内 扇ガ谷三丁目	1507 489-1	X=-74612.93　Y=-25479.17 X=-74607.04　Y=-25481.41	6.0×1.5	9.00	塚、溝	常滑	史跡　亀ヶ谷坂 178　法幢寺跡
9	山ノ内	1507 1459-1	X=-74549.49　Y=-25633.44 X=-74538.81　Y=-25634.69	11.0×1.5	16.50	塚（石廟？）	かわらけ	史跡　亀ヶ谷坂 182　法泉寺跡
10	山ノ内	1507 1459-1	X=-74528.14　Y=-25631.34 X=-74521.23　Y=-25633.02	7.0×1.5	10.50	堀切		史跡　亀ヶ谷坂 182　法泉寺跡
11	山ノ内	1502 1459-1	X=-74466.35　Y=-25524.49 X=-74462.18　Y=-25526.83	5.0×1.5	7.50	堀切		171　尾藤景綱邸跡
12	山ノ内	1496-1 1459-1	X=-74399.34　Y=-25547.42 X=-74330.94　Y=-25551.02	9.0×1.5	13.50	自然地形		171　尾藤景綱邸跡
13	山ノ内	1501	X=-74437.93　Y=-25449.53 X=-74426.50　Y=-25457.94	14.0×1.5	21.00	平場、建物址	かわらけ、常滑、瓦、硬石	87　鎌倉城
14	山ノ内	1523-1 1517	X=-74597.20　Y=-25354.71 X=-74588.61　Y=-25365.72	10.0×1.5 11.0×1.5	31.50	前平面、土坑	かわらけ、常滑、瀬戸、瓦、滑石、黒曜石剥片	179　清光寺跡 史跡　亀ヶ谷坂
15	山ノ内 扇ガ谷三丁目	1535-イ-1 422-1	X=-74633.17　Y=-25319.55 X=-74633.44　Y=-25323.31	3.0×1.5	4.50	堀割路（境堀？）		史跡　建長寺境内 181　勝縁寺跡
16	山ノ内 扇ガ谷三丁目	1535-イ-1 422-1	X=-74646.05　Y=-25308.54 X=-74646.05　Y=-25312.84	4.0×1.5	6.00	堀割路（境堀？）	かわらけ、常滑	史跡　建長寺境内 181　勝縁寺跡
17	山ノ内 扇ガ谷三丁目	1535-イ-1 421	X=-74674.23　Y=-25295.93 X=-74676.38　Y=-25299.69	4.0×1.5	6.00	堀割路（境堀？）		史跡　建長寺境内 181　勝縁寺跡
18	山ノ内	1545-1	X=-74736.80　Y=-25214.55 X=-74738.07　Y=-25219.60	5.0×1.5	7.50	平場、土坑	五輪塔	史跡　建長寺境内
19	山ノ内	1545-1	X=-74733.22　Y=-25191.78 X=-74732.17　Y=-25196.84	5.0×1.5	7.50	堀切、土坑	かわらけ、山茶碗、瓦	史跡　建長寺境内
20	山ノ内	1545-1	X=-74766.13　Y=-25151.79 X=-74765.31　Y=-25155.11	3.0×1.5	4.50	路状		史跡　建長寺境内
21	山ノ内	1547-2 1545-3	X=-74752.62　Y=-25149.62 X=-74746.29　Y=-25153.20	7.0×1.5	10.50	平場、切岸、溝	かわらけ、常滑、手捻り	56　鶴岡八幡宮旧境内遺跡



第60図　亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区トレンチ配置図(1)[S=1/2,500]



第61図　亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区トレンチ配置図(2)[S=1/2,500]

第Ⅲ章　トレンチの調査成果

第1号トレンチ

浄智寺谷最奥部の堀切に設定した。堀切は扇ケ谷へ抜ける小径の脇にあり、尾根鞍部の東を幅約6mにわたって切り落としている。

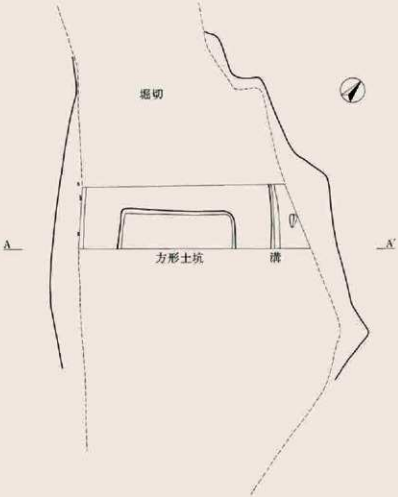
調査の結果、堀切部分の深さは5m、平坦に削られた底面の中央には一辺2.4m、深さ約50cmの方形土坑があり、東側壁面には底面から約1m上に灯明用らしき小穴と壁直下に浅い排水溝が掘られていることが判った。

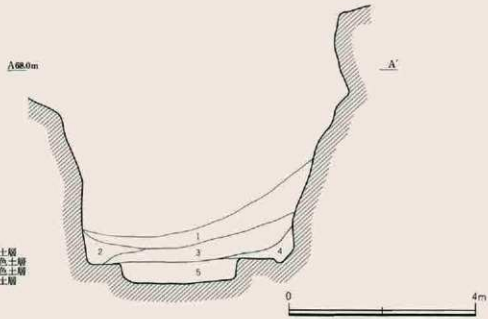
底面と壁面に残るこれら遺構が後世に付加された可能性も否定できないが、尾根を分断して防御する堀切とはまったく異なる遺構と考えられる。

出土遺物はないが、堆積土の状態から見て近世以後の遺構であろう。

写真135　第1号トレンチ　全景(西から)

写真136　第1号トレンチ　全景(北から)





1層　表土層
2層　暗褐色土層
3層　暗茶褐色土層
4層　暗茶褐色土層
5層　茶褐色土層

第62図　第1号トレンチ[S=1/80]

第2号トレンチ

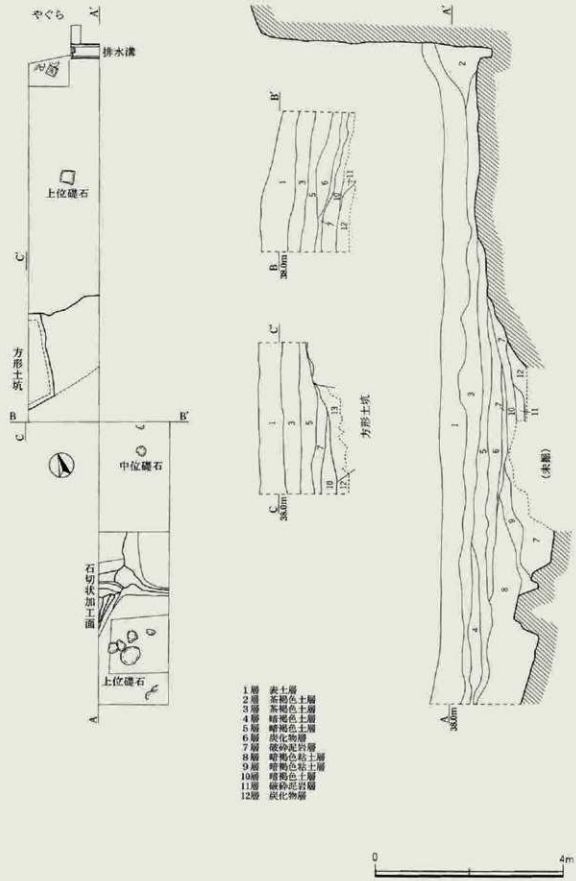
尾藤ケ谷入り口の小谷にトレンチを設定した。

トレンチでは3時期の生活面を確認した。最下面は谷中央部で見つかった遺構群で、一辺約1.8mの方形土坑(井戸？)の他に、幅約20cmの排水溝と石切り状の加工面をもつ岩盤がある。中位面に明確な遺構はないが、谷中央部には炭層が広がり、礎石の可能性ある伊豆石が見つかっている。炭層からは舶載陶磁器を含む多量の遺物が出土した。上位面は地表下70cmにある。山裾の岩盤を削平して平場を拡張し、崖面にはやぐらが掘られている。礎石は2箇所で見つかった。出土遺物にはかわらけ皿、甕、捏ね鉢、青磁白磁の椀皿類、手焙り、砥石、銭といった日常用品の他に、天目椀・茶臼・香炉・仏華瓶・燭台・硯などがある。遺物の様相からこの平場は寺院址と推定され、『鹿山略志』に「在山内之南尾藤谷」とある宝鏡寺の跡と考えられる。なお、年代は15世紀中葉から後半に比定され、火災を受けていることが判った。

写真137　第2号トレンチ　全景(南から)

写真138　第2号トレンチ北半部　全景(南から)

写真139　第2号トレンチ南半部　全景(北から)



第63図　第2号トレンチ[S=1/80]

写真140 第2号トレンチ北端　遺物出土状況

写真141 第2号トレンチ　井戸状遺構

写真142 第2号トレンチ北端　壁面状況(南から)

写真143 第2号トレンチ　岩盤面の状況

写真144　第2号トレンチ出土遺物(かわらけ)

写真145　第2号トレンチ出土遺物(天目茶碗)

写真146　第2号トレンチ出土遺物(青磁)

写真147　第2号トレンチ出土遺物(白磁)

写真148　第2号トレンチ出土遺物(青白磁)

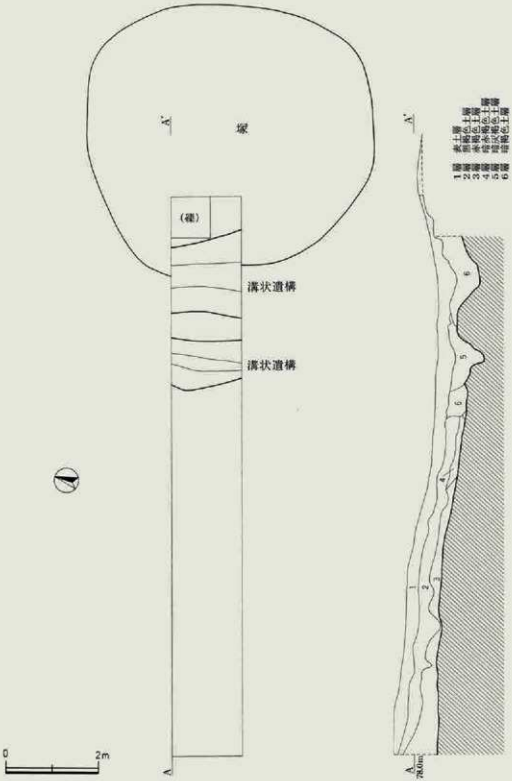
写真149　第2号トレンチ出土遺物(褐釉四耳壺)

写真150　第2号トレンチ出土遺物(瀬戸窯製品)

写真151　第2号トレンチ出土遺物(瓦質手焙り)

第5号トレンチ

2条の溝状遺構と塚が見つかった。塚は周辺地形の観察から直径6ｍ、高さ約50cmと推定され、表土下に泥岩塊を集め拳大の礫を葺いている。周辺から13世紀後半から14世紀前半のかわらけが出土したが、遺構には伴ってない。



第64図　第5号トレンチ[S=1/80]

写真152　第5号トレンチ　塚蓋石(南西から)

写真153　第5号トレンチ　溝状遺構(南から)

第8号トレンチ

亀ケ谷坂の西、切通に接する尾根の頂上には直径6mの塚状の高まりがあり、トレンチを設定した。

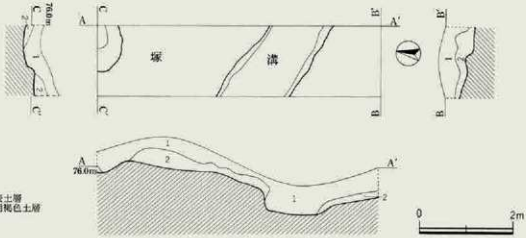
調査の結果、この高まりは自然地形を利用して岩盤上に約30cmの盛土をした塚で、南側には塚裾を巡るように溝が掘られていることも判った。溝は幅1.2m、深さ30cmを計測する。なお、塚上には拳大の礫が散乱しており、楕円形の大きな窪みも見られた。

溝から常滑の甕小片が出土したが、詳細な年代の判るものはない。

写真154　第8号トレンチ　全景(南から)

写真155　第8号トレンチ　塚出土の礫

写真156　第8号トレンチ　溝状遺構(西から)



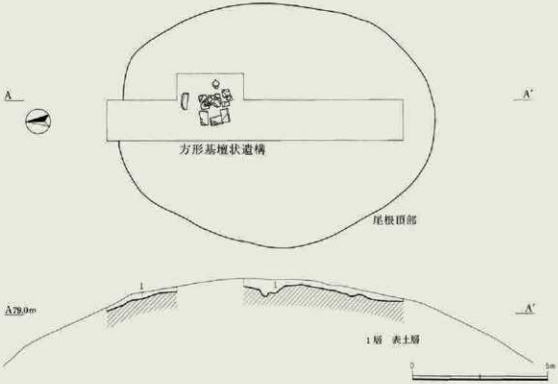
第65図　第8号トレンチ[S=1/80]

写真157　第9号トレンチ　全景(北から)

第9号トレンチ

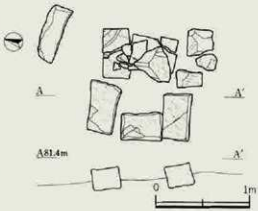
長寿寺の西、南北に伸びる尾根の最高所(海抜83m)にトレンチを設定した。

調査の結果、頂上やや南寄りに凝灰岩切石を組んだ方形の遺構が発見された。切石は短辺30cm、長辺45～50cm、厚さ20cmを計測し、既に石組は崩れているが、一辺約1mの方形基壇となり、少なくとも2段以上が積まれていたと推定できる。かわらけ皿細片と常滑甕小片が周辺から採集されたが、基壇内には何もなく、遺構の年代は不明である。



第66図　第9号トレンチ[S=1/140]

写真158　第9号トレンチ　方形基壇状遺構(西から)



第67図　第9号トレンチ　方形基壇状遺構[S=1/40]

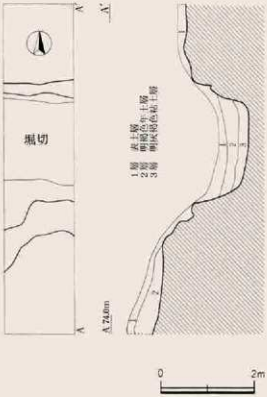
第10号トレンチ

尾根鞍部の堀切に設定した。9号トレンチの頂上部北側は尾根筋が急傾斜となって下り、堀切はこの自然地形を利用して作られている。なお、11号トレンチ堀切との関連は不明であるが、検討する必要があろう。

堀切の規模は上幅2.5m、底幅1.8m、深さ1.2mを計測し、底面はほぼ平坦に削られている。

出土遺物がなく遺構の年代は不明である。

写真159　第10号トレンチ　堀切(西から)



第68図　第10号トレンチ[S=1/80]

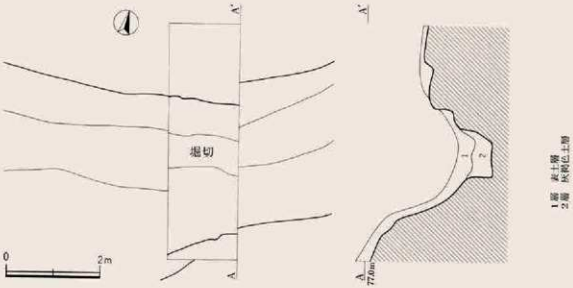
写真160　第10号トレンチ　全景(南から)

第11号トレンチ

尾根鞍部の堀切に設定した。10号トレンチ堀切の北約60mのところにあり、尾根の弱い高まりを挟んで、対置しているように見える。

堀切の規模は、上幅2.5m、底幅0.7m、深さ2mを計測し、底面はほぼ平坦に削られている。

出土遺物がなく遺構の年代は不明である。



第69図　第11号トレンチ[S=1/80]

写真161　第11号トレンチ　堀切全景(西から)

第13号トレンチ

平場は三方を切岸で囲まれ、山ノ内道を臨む斜面中腹にある。

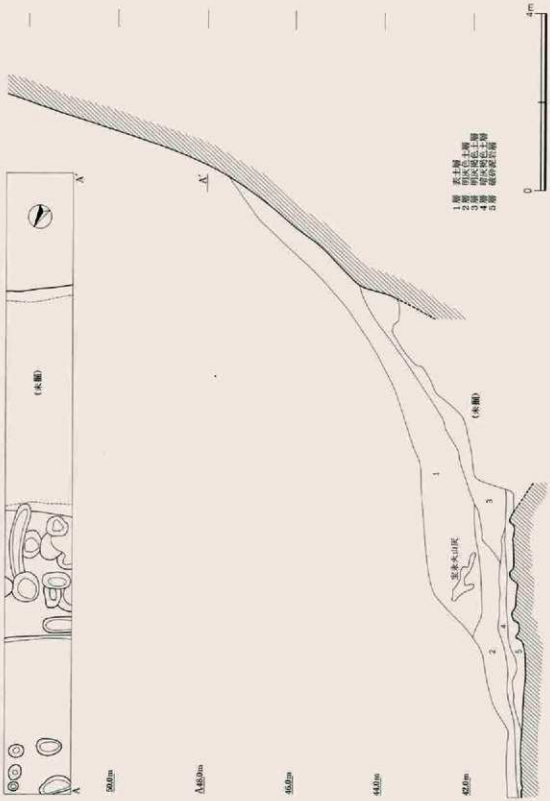
トレンチでは、削平された岩盤面に柱穴・土坑・溝等を確認した。少なくとも2時期の遺構が混在するが、柱穴規模から見てさほど大きな建物は想定できない。なお、切岸の高さは現況で約15mを計測した。

出土遺物にはかわらけ皿・常滑甕・砥石・瓦があり、15世紀後半～16世紀に比定される。

写真162 第13号トレンチ　作業風景

写真163 第13号トレンチ　全景(北から)

写真164 第13号トレンチ　柱穴



第70図　第13号トレンチ[S=1/80]

第14号トレンチ

亀ケ谷坂の北東，尾根の頂部に挟まれた鞍部平場にトレンチを設定した。

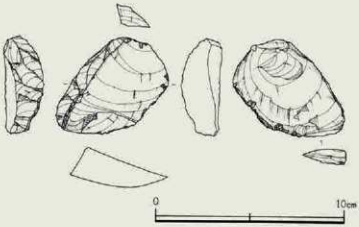
調査の結果、鞍部は東西９ｍにわたって削平され、不整形の大形土坑２基が存在することが判った。土坑の性格は不明。また、北側傾斜面は自然地形であり、地山ローム層中から黒曜石剥片が出土している。

かわらけ皿・常滑甕・瓦・滑石が出土したが、いずれも小片で年代の判るものはない。

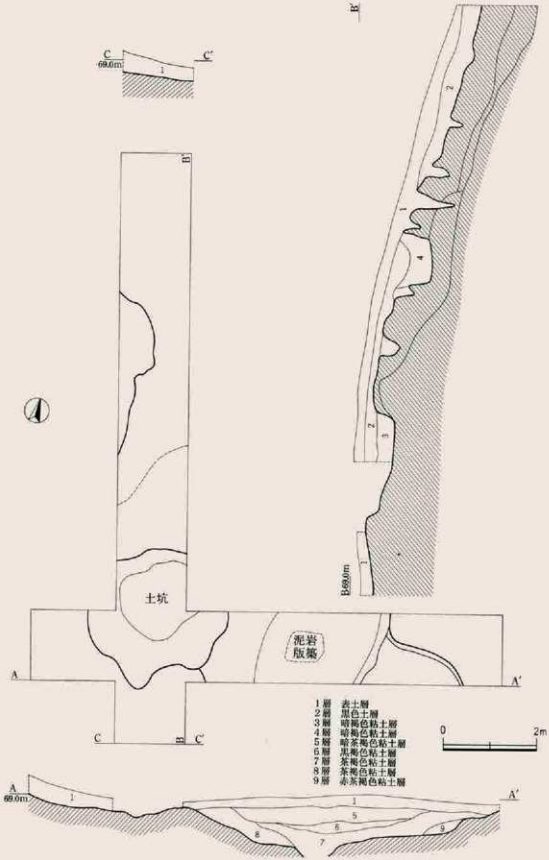
写真165　第14号トレンチ　調査前状況(南から)

写真166　第14号トレンチ　全景(北から)

写真167　第14号トレンチ　全景(西から)



第71図　第14号トレンチ出土遺物[S＝1/2]



第72図　第14号トレンチ[S=1/80]

第15, 16, 17号トレンチ

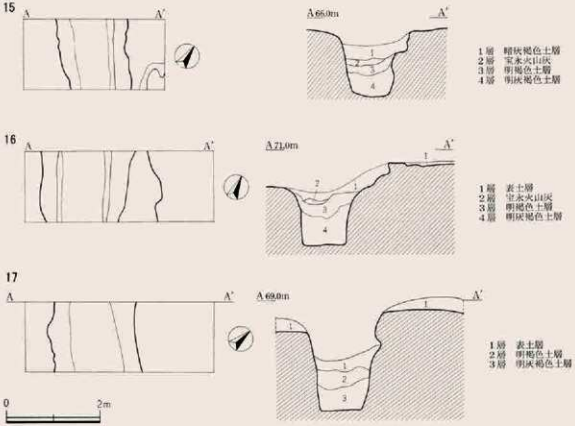
禅居院の裏手、山ノ内路を見下ろす山陵の尾根筋に沿って、堀割路状の溝が存在する。写真168のように、現状でも浅い落ち込みとして確認でき、その延長はおよそ100mに及ぶ。この溝に直交してトレンチを3箇所設定し、いずれの箇所でも断面形が方形～逆台形を呈する堀割を検出した。第17トレンチの規模が最も大きく、深さは岩盤上端より2m以上を測る。いずれのトレンチでも掘り込み覆土上半部で宝永火山灰がみとめられ、掘削は近世前半以前に遡ることが明らかである。しかし、第16号トレンチの東側側平面で常滑甕破片が出土した他に遺物はなく、堀割の掘削年代の上限は定かではない。堀割の東側(禅居院側)は岩盤が平坦に削られ、西側は扇ガ谷方面の谷へ急激に落ち込んでいる。遺構の性格については、山ノ内から扇ガ谷への通行を分断する施設と推定できるが、境堀とも考えられ、検討の余地がある。

写真168　第15号トレンチ調査前状況(北から)

写真169　第16号トレンチ(北から)

写真170　第15号トレンチ(北から)

写真171　第17号トレンチ(東から)



第73図　第15, 16, 17号トレンチ[S=1/80]

写真172　第17号トレンチ周辺地形(北西から)

第19号トレンチ

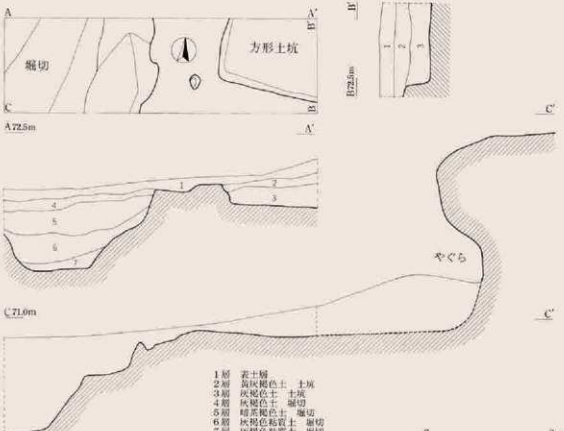
円応寺南方の尾根上には瘤状の高まりがあり、その西側に開口するやぐら前面にトレンチを設定した。

調査の結果、削平岩盤面に掘り込まれた方形土坑と堀切が発見された。土坑の全体規模は不明であるが、深さ約40cmを計測し、壁の立ち上がりは垂直、底面はほぼ平坦に削られている。やぐらに関連する施設とも見えるが性格は不明である。

堀切の断面は逆台形を呈し、底幅85cm、深さ1mを計測する。上幅は不明であるが、さほど大きな遺構とは考えられない。また、堀切は瘤状の高まりを挟んだ東側にも確認されており、一対で配置された可能性も考えられる。

出土遺物には、かわらけ皿・山茶碗窯捏ね鉢・瓦がある。多くは微細な破片であるが、堀切から出土したかわらけ皿1点は完形に近く、14世紀中葉～後半代に比定できる。

写真173　第19号トレンチ　全景(西から)



第74図　第19号トレンチ[S=1/60]

写真174　第21号トレンチ　作業風景(南から)

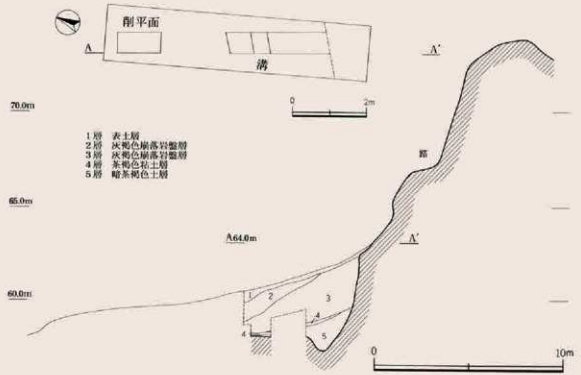
第21号トレンチ

現在の巨福呂坂の南、道を見下ろす斜面中腹の平場である。トレンチは切岸に接して設定したが、崩落土が厚いため一部を深く掘り下げて岩盤面を確認した。

削平岩盤面と切岸直下の排水溝は地表下約2.5mで確認された。溝は上幅1.2m、底幅40cm、深さ約70cmを計測し、覆土から15世紀後半～16世紀のかわらけ皿1点が出土した。なお、削平岩盤面近くからは常滑甕と手焙りの破片が採集されている。平場の性格は不明であるが、中世に遡る遺構であることが判った。

写真175　第21号トレンチ南端　岩盤検出状況(東から)

写真176　第21号トレンチ北側　岩盤検出状況(北から)



第75図　第21号トレンチ[S=1/100(平面), 1/200(断面)]

第６編

鷲峰山・天台山地区の調査

天園より鎌倉市街方面を望む

鷲峰山・天台山地区　例言

1　本地区のトレンチ番号は設定時，および調査時，本報告で異なっており、下表の通り対応する。記録図面、記録写真、出土遺物への注記は調査時番号に拠っている。
2　本地区での出土遺物への注記はWHET＊＊（トレンチ番号）と略記している。
3　第Ⅲ章の執筆分担は下表の通りである。

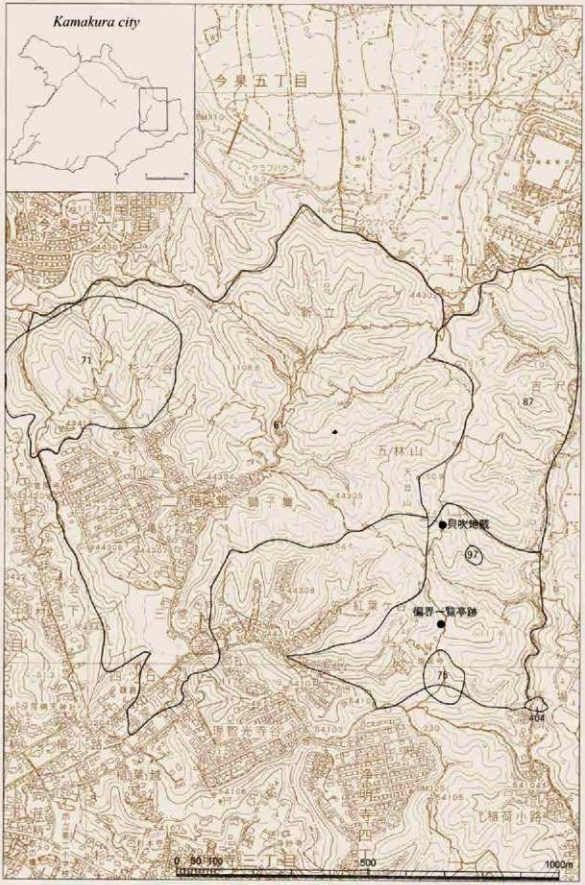
本報告番号	調査時番号	設定時番号	執筆担当
1	1	148	
2	6	147	
3	2	143	鈴木
4	3	142	鈴木
5	4	141	鈴木
6	5	140	鈴木

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

本調査地区は、そのほとんどが鎌倉市北東部にあたる今泉、二階堂、十二所の山地内に含まれる。東から天台山、大平山、鷲峰山と鎌倉の「高峰」(俗に言う鎌倉アルプス)が連なるが、最高所の大平山頂(横浜市境)でさえ標高は160mに満たない。しかしこれらの峰々をふくも尾根筋は鎌倉市街地は勿論のこと、旧武蔵国に相当する横浜市内から、三浦半島、相模湾、遠くは伊豆半島、富士山まで望める眺望絶佳の場所で、尾根をむすぶ道は今日では天園ハイキングコースとしてハイカーや観光客の人気を集めている。

天台山から鷲峰山に至る尾根筋の南麓が源頼朝の創建で、往時は壮大な寺容を誇った永福寺(№61)の「二階大堂」ゆかりの二階堂になる。天園から二階堂方面に下る道の途中に紅葉の名所として知られた獅子舞があり、ここを水源とする二階堂川は亀ヶ淵で杉ノ川、通玄橋で紅葉川を合わせて南西流し、滑川に注ぐ。紅葉川の流域に形成された沖積地(谷戸)は紅葉ヶ谷と称されるが、この地名の雅名を山号としているのが臨済宗円覚寺派の名刹、錦屏山瑞泉寺である。開基は二階堂に居した御家人の二階堂道蘊(貞藤)、開山は夢窓疎石である。当初は瑞泉院と称した。仏殿背後の禅宗様庭園は夢窓疎石の作と伝え、国の名勝に指定されている。足利尊氏の子で初代鎌倉公方となった基氏は夢窓疎石の法を嗣いだ義堂周信に深く帰依し、死後は瑞泉院に葬られた。このころ瑞泉寺と改称したとみられ、同寺は鎌倉府の庇護のもと繁栄した。最盛期の塔頭は『新編相模国風土記稿』によると尊氏の母上杉清子の塔所果証院以下14を数えたというが、鎌倉公方足利持氏が永享の乱で関東管領上杉憲実と争うと、瑞泉寺も戦乱にまきこまれ、永享十一年(1439)には憲実の攻撃をうけて同寺は全焼した。以後は豊臣氏、徳川氏などの保護を受けて瑞泉寺は存続するが、往時の伽藍の復興にはいたらなかった。なお現存しない塔頭は紅葉ヶ谷一帯に点在していたと思われ、これらと関連があるとみられる現在の境内周辺の遺物散布地は瑞泉寺遺跡(№320)として周知されている。なお今回の調査区に連なる尾根づたいには瑞泉院開創当時に建てられた「褊界一覧亭」が徳川光圀により復興されている。

ところで、天台山・鷲峰山周辺は鎌倉の東北の方角、すなわち鬼門にあたる。治承四年(1180)に鎌倉に入った源頼朝は新御所の造営を命じ、同年十二月に竣工したが、これより三代将軍実朝の治世まで幕府の中枢はこの大倉御所にあった。同御所を京の内裏に見立てたとき、平安京の鬼門の鎮守である比叡山(延暦寺＝天台宗総本山)に相当するのが天台山ということになる。『新編鎌倉志』、『鎌倉攬勝考』は天台山の地名の由来をここに求めている。一方、鬼門の方角の地というのは単に宗教的意味合いにとどまらず、軍事的にも鎌倉を防衛する際の重要な戦略拠点となるが、朝夷奈切通と巨福呂坂、亀ヶ谷両切通のほぼ中間にあたる天台山・鷲峰山地域は防衛的立地にふさわしく峻険な地形を有しており、鎌倉城(№87)の一部として周知されている。さらに鷲峰山付近には百八やぐら群(№71)、天台山南側の瑞泉寺裏手にはお塔の窪やぐら群(№97)、番場ヶ谷やぐら群(№404)といった特色あるやぐら群の存在が知られており、調査地区内の「貝吹地蔵」には元弘三年(1333)の鎌倉攻めの際、東勝寺で自害した北条高時の首を持って逃れる途中、道に迷った高時の家臣をほら貝を吹いて「首やぐら」まで先導したという伝説が残されている(異説では、新田側の軍勢の襲来をほら貝を吹いて鎌倉方に知らせたという)。この「首やぐら」との伝承を有する一穴が、瑞泉寺裏山やぐら群(№75)のなかに存在する。



第76図　鷲峰山・天台山地区周辺の遺跡[S=1/10,000]

第Ⅱ章　調査トレンチの概要

鎌倉旧市街地の北方～北東方に広がる山稜(勝上嶽～鷲峰山～大平山～天台山～瑞泉寺裏)の一帯を鷲峰山・天台山地区として調査を行った。大平山付近の尾根筋は横浜市との境になっており、尾根の北側はゴルフ場・住宅地と大規模な開発が行われている。この一帯の丘陵は個々が独立せずに横浜市側へと続いており、現地表観察による様相も他地区とは若干異なっている。他地区で顕著に見られた、尾根や鞍部を分断する堀切などはほとんど存在せず、岩盤が露出する切岸状の遺構もあまりみられない。唯一、大平山山頂付近の鎌倉側の斜面が大規模な崖になっているが、現状では深い杉林となっており、トレンチを設定することはできなかった。当初、鷲峰山付近から天台山付近までの一帯を調査する予定であったが、鷲峰山周辺は既に史跡指定されており、また、現地踏査の結果発掘調査に適した箇所に乏しかったため、トレンチは天台山を中心とした地域のみに設定した。天園ハイキングコースに沿って踏査を行い、当初10箇所のトレンチ候補地を選定したが、地権者の了承を得られない箇所等もあり、実際に調査を行ったのは6箇所に止まっている。

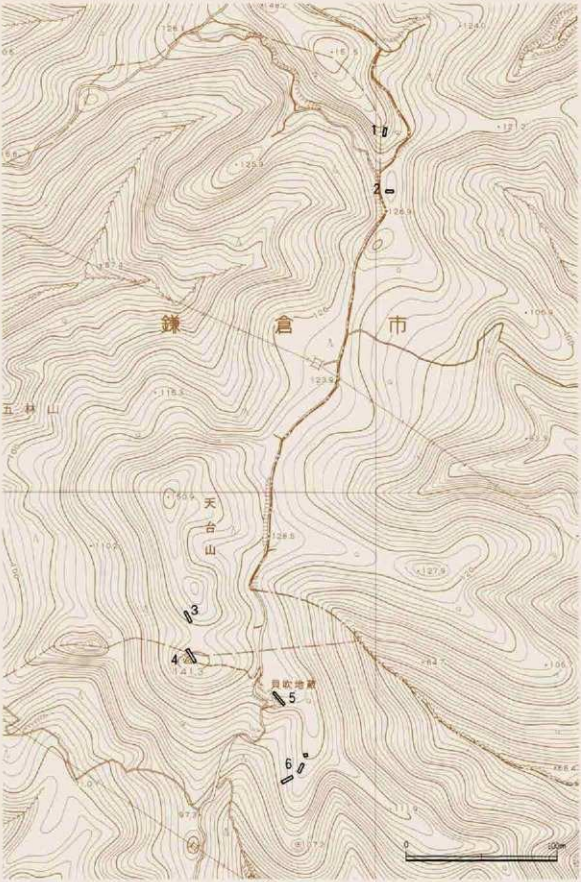
第1号トレンチは現在のハイキングコースを見下ろす頂部の平場、第2号トレンチは道沿いの稜尾根上を調査したが、両トレンチとも明瞭な遺構は検出されず、出土遺物もなかった。

他の4箇所は天台山頂、貝吹地蔵周辺の設定している。何近は急崖、切通道などがあり、複雑な地形を呈している。

写真177　貝吹地蔵周辺の切通道(南から)

第7表　鷲峰山・天台山地区調査トレンチ一覧表

No.	町名・大字	地番	国家座標 (北東角・南西角)	規模 (m)	面積 (㎡)	検出遺構	出土遺物	神奈川県遺跡台帳No. 遺跡名
1	二階堂	625-1	X=-74263.73　Y=-22993.58 X=-74258.54　Y=-22994.12	5.0×1.5	7.50			87 鎌倉城
2	十二所	277	X=-74301.81　Y=-22989.47 X=-74300.21　Y=-22982.87	4.0×1.5	6.00			87 鎌倉城
3	二階堂	637	X=-74585.94　Y=-23121.14 X=-74579.60　Y=-23126.50	8.0×1.5	12.00	やぐら、平場	かわらけ、銭	87 鎌倉城
4	二階堂	637	X=-74612.99　Y=-23118.46 X=-74605.43　Y=-23125.04	10.0×1.5	15.00	平場	かわらけ	320 瑞泉寺遺跡
5	十二所	299-H-020	X=-74640.28　Y=-23059.78 X=-74633.40　Y=-23067.07	10.0×1.0	16.00	平場、堀切状	かわらけ、土師器	320 瑞泉寺遺跡
6	十二所	299-H-020	X=-74674.91　Y=-23044.39 X=-74674.04　Y=-23046.66	2.0×1.5	3.00	階段状平場、溝状遺構、道路状遺構。	滑石？未製品 地輪？未製品	320 瑞泉寺遺跡
			X=-74680.68　Y=-23046.84 X=-74685.48　Y=-23050.68	6.0×1.5	9.00	石切(石塔製作址?)		
			X=-74689.24　Y=-23054.09 X=-74691.86　Y=-23061.69	8.0×1.5	12.00			



第77図　鷲峰山・天台山地区トレンチ配置図[S＝1/2,500]

第Ⅲ章　トレンチの調査成果

第3号トレンチ

天台山山頂と、その北側ピークとの間に広がる平場の調査である。平場の北側は切り立った岩盤が露出しており、やぐらが開口している。やぐらの規模は間口、奥行き、高さとも1mほどの小規模なものである。

トレンチ内北側は、現地表から40cmほど下で岩盤面に達する。トレンチ南側

第78図　第3号トレンチ[S=1/80]

写真178　第3号トレンチ北半部およびやぐら(南から)

写真179　第3号トレンチ　全景(南から)

は岩盤が急激に落ち込んでおり、ロームが堆積している(2～4層)。ローム層堆積以前はここに自然の谷が入っていたのであろう。ローム上面は北側の岩盤面と同レベルでほぼ平坦に削られており、やぐら構築の際に一帯が平場として造成されたものと考えられる。岩盤にはほぼ一直線に方形基調のピットが穿たれており、やぐらに伴う何らかの施設の存在が推定できる。トレンチ内からはかわらけの細粒と円礫、古銭が出土している。古銭は寛永通寶と大観通寶である。やぐらの構築時期は決定できないが、中世以降近世まで、やぐらに伴って何らかの葬送行為が行われていたと考えられる。

第79図　第3号トレンチ出土銭貨拓影[原寸]

写真180　第3号トレンチ　岩盤面ピット(北から)

第4号トレンチ

天台山頂部の平場に設定したトレンチである。山頂には三等三角点、および小さな祠が置かれている。

現地表下約30cmでローム層に達し、トレンチ内に明確な遺構はみとめられなかった。トレンチ南端ではかわらけが数点まとまって出土している。復元された3点は、いずれもロクロ成形の小型のものである。口径8cm、器高1.5cmほどで形はほぼそろい、13世紀後半のものと考えられる。遺構に伴わないため定かではないが、山頂での祭祀もしくは葬送行為に伴う遺物と推測される。

写真181　第4号トレンチ　作業風景(北西から)

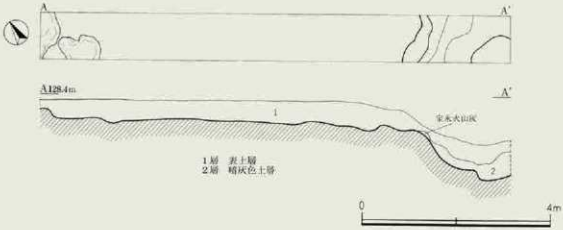
写真182　第4号トレンチ出土遺物(かわらけ)

写真183　天台山頂部祠(南東から)

写真184　第5号トレンチ　全景(南東から)

第5号トレンチ

天台山山頂から約65m東方には南西方向を向いた崖が屏風状に切り立っている。この崖に祠が穿たれ、中には「貝吹地蔵」と呼ばれる石像が安置されている。崖の上は痩尾根になっており、ちょうど貝吹地蔵の真上に小規模な堀切状の落ち込みがみとめられる。この堀切に直交して(尾根筋に沿って)トレンチを設定した。トレンチ内は現地表から40～70cm下で岩盤面に達する。岩盤上でも堀切状の落ち込みは確認できたが、根による攪乱等もあり、掘り方は明瞭ではない。覆土中には宝永火山灰が含まれる。トレンチ北西側の岩盤は平坦で、人為的な造成がなされている。三階堂方面から上がってくる道を見下ろす崖上に平場、南側の階段状平場(第6号トレンチ)に通ずる尾根には堀切が、それぞれ意図的に配されているものと推測できる。時期は明らかではないが、かわらけの細片と土師器甕片が出土している。



第80図　第5号トレンチ[S=1/80]

写真185 第5号トレンチ作業風景(南東から)

写真186 貝吹地蔵周辺状況(東から・標柱の奥が貝吹地蔵)

第6号トレンチ

貝吹地蔵の上方から南東～南側に伸びる尾根には、3～4段の階段状の地形がみとめられる。最上段は貝吹地蔵上の嶺尾根から続く平場でごく狭いが、2段目、3段目は共に方10mほどの広さを持つ。トレンチはそれぞれの段にA・B・Cの計3箇所設定した。Cトレンチを設定した平場の下方にはさらに数段の平場がみとめられたが、調査は行っていない。

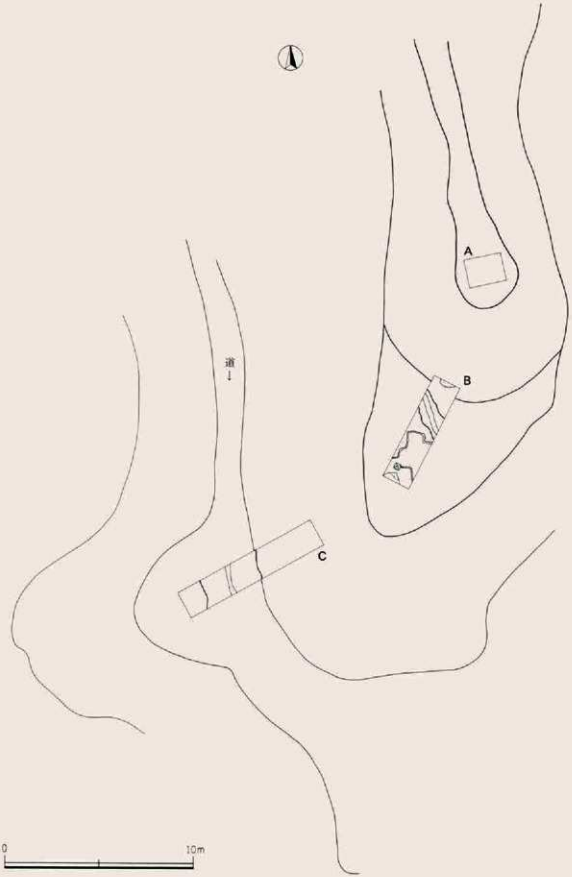
Aトレンチでは現地表から60cm下で岩盤に達した。岩盤上を平坦に削っているようにも見えるが、根による攪乱、岩盤の節理に沿った亀裂が入っており、はっきりしない。

Bトレンチでは溝、石切痕が検出され、トレンチ南端では層塔の未製品と思われる凝灰岩塊(33×30×14cm)が出土している。石切痕は30cmほどの深さで方形基調に削られている。トレンチ外にも切り出された凝灰岩塊が散乱していることを考え合わせると、この石切痕は石塔を切り出した痕跡と考えることができる。溝は幅、深さとも1mほどであり、走行方向は平場の落ち際のラインと並行している。本トレンチ周辺を石塔製作工房址と推定すれば、石を切り出す際に用いる水を流した溝址とも推定できよう。

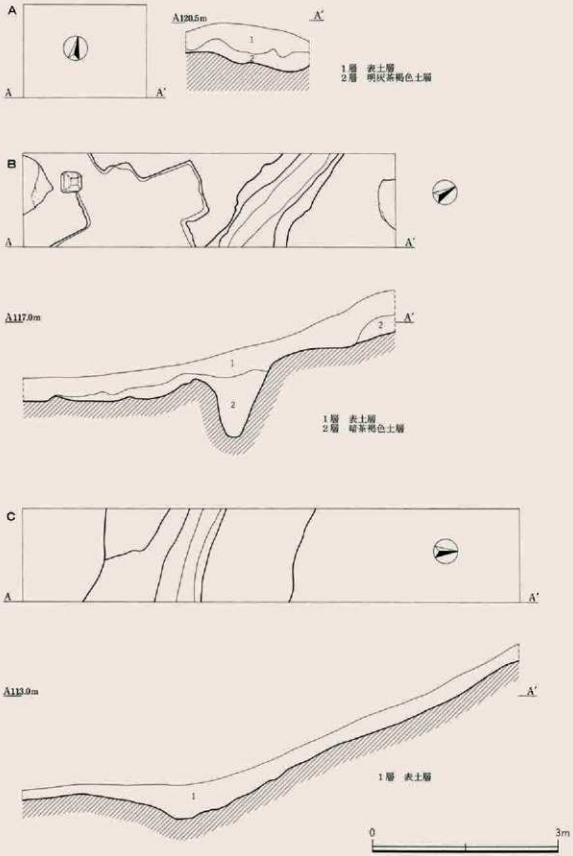
写真187　第6号Bトレンチ　全景(北東から)

Cトレンチでは、平場の横方向ラインに並行して走る、浅く幅の広い溝が検出された。平面的な形状は明瞭ではなく、堆積土も薄い。本トレンチの北側は帯状に細い平場が延び、貝吹地蔵前面の平場へと通じている。本遺構は貝吹地蔵から、平場の南側へと通じる道状遺構の一部と推測される。

以上のトレンチの覆土にはいずれも宝永火山灰が含まれており、発見された遺構はみなこれよりも遡るものである。



第81図　第6号トレンチ周辺地形[S＝1/200]



第52図　第6号A, B, Cトレンチ[S=1/60]

写真188　第6号Bトレンチ　層塔未製品出土状況(東から)

写真189　第6号Cトレンチ　道路状遺構(南東から)

第７編

杉本城・釈迦堂口地区の調査

釈迦堂口隧道（北・釈迦堂ヶ谷側から）

杉本城・釈迦堂口地区　例言

1　本地区のトレンチ番号は設定時、および調査時、本報告で異なっており、下表の通り対応する。記録図面、記録写真、出土遺物への注記は調査時番号に拠っている。
2　本地区での出土遺物への注記はWHHT＊＊（トレンチ番号）と略記している。
3　第Ⅲ章の執筆分担は下表の通りである。

本報告番号	調査時番号	設定時番号	執筆担当
1	1	123	菊川
2	2	125	菊川
3	3	124	菊川
4	4	126	菊川
5	5	127	菊川
6	6	128	菊川
7	7	170	鈴木
8	8	171	鈴木
9	9	169	鈴木
10	10	176	鈴木
11	12	175	
12	11	167	
13	13	139	鈴木
14	14	138	鈴木
15	15	137	鈴木
16	16	135	菊川
17	17	133	菊川
18	18	131	鈴木
19	19	130	

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

本調査地区は鎌倉市の東部、二階堂から浄明寺一・二・三丁目、大町六丁目にいたる尾根筋および谷戸の一帯である。

細かく見ると、杉本城址は二階堂の獅子舞付近に源を発した二階堂川と、同川を歌ノ橋の南で合わせる滑川に挟まれた丘陵上に位置し、この北側(二階堂川寄り)を稲葉越、南側(滑川寄り)を杉本と称している。滑川は浄明寺三丁目所在の浄妙寺門前付近からの呼称で、それより上流は胡桃川とよばれる。滑川流域の南は、東から宅間ヶ谷、犬懸ヶ谷、釈迦堂ヶ谷といった谷戸が樹枝状に連なり、鎌倉時代から室町時代にかけて幕府や鎌倉府の要職を占めた上級武士の邸宅や寺院がこうした谷戸の周辺に構えられたようであるが、現在では「竹寺」として親しまれている報国寺を除けば、訪れる観光客も少ない閑静な住宅地となっている。宅間ヶ谷と犬懸ヶ谷を隔てる尾根筋は南にのびて衣張山(標高121.4m)に達する。衣張山の南の尾根は浅間山とよばれており、同山頂から望む鎌倉市街の遠景は見事である。衣張山から西にのびる尾根筋は今日では浄明寺と大町との字界になっている。ここに有名な釈迦堂口の洞門がある。これら衣張山を中心とした尾根筋は池子火砕岩層を主体とした地層で形成されており、良質の鎌倉石を産出する。したがって衣張山周辺には石切場の跡が数多く認められる。衣張山の鎌倉石はやぐらに置かれる五輪塔の石材にも用いられたと考えられるが、事実後述するように、釈迦堂ヶ谷から宅間ヶ谷にかけての一帯にはいくつかのやぐら群が確認されている。

本調査地区の歴史的環境を語る上で特筆しなければならないのは、鎌倉期の山城として知られる杉本城(No 62)の存在である。鎌倉開府以前には三浦大介義明の長男、杉本太郎義宗(和田義盛の父)の館が当地にあったと伝えるが、その遺構は明らかではない。鎌倉時代末までに城郭としての機能が整えられたらしく、『太平記』巻十九は延元二・建武四年(1337)十二月、陸奥の北畠顕家が中先代の乱後、南朝に投降した北条時行、新田義貞の次男義興らと合同で鎌倉の足利義詮を攻めた際、杉本城の防衛にあたった足利方の斯波家長が北畠勢を防ぎきれず、杉本観音堂にて自刃し、配下の武士三百余名が討死したことを記すが、おそらく顕家の軍勢は武蔵国金沢方面から朝夷奈切通を経て鎌倉に攻め込んだものと考えられることから(『大國魂神社文章』所収『陸奥国岩城郡國魂太郎兵衛尉行泰軍忠状』、『鶴岡社務記録』建武四年十二月二十三日条)、杉本城は朝夷奈切通開鑿後、武蔵路(六浦路・金沢街道)からの攻撃を想定して鎌倉を守るための防衛拠点として築城されたとみて大過なかろう(赤星1959)。

杉本城は延元二年の合戦後、廃城となったとみられるが、平場をはじめ、堀割、曲輪など、鎌倉時代の城郭の遺構をよく残しており、赤星直忠氏によれば、杉本寺背後の通称大蔵山が主城部であり、その東方の照野山、稲荷山山頂に砦が築かれて主城部と一体となって大がかりな山城を構成しているという(赤星1959)。

杉本城址に南接して天台宗の古刹、杉本寺がある。正式には大蔵山杉本寺観音院といい、寺伝では天平期の名僧行基を開山、平安前期の慈覚大師円仁を中興開山とするが定かではない。『吾妻鏡』には大倉観音とあり、源頼朝の信仰の厚い寺であった(『吾妻鏡』文治五年十一月二十三日、建久二年九月十八日、同四年九月十八日、同五年二月十八日各条)。先述の『太平記』に「杉本観音堂」とあるのも同寺である。本尊は平安中期～鎌倉中期の作とされる三体の十一面観音立像で、最古の平安中期の像が鎌倉市指定の、また平安末期、鎌倉中期の像がそれぞれ国指定の重要文化財である。板東三十三所観音霊場の第一札所として今日も善男善

女の信仰を集めている杉本寺であるが、他の鎌倉の名刹と異なり、その寺域は中世以降大きくは変わっていない。現寺域の周辺は杉本寺周辺遺跡(No158)と称される遺物散布地で、ここに点在するやぐら、塚は同寺との関連性が推測される。

杉本寺の南側では金沢街道にほぼ沿う形で滑川が西流しているが、ここに架かる犬懸橋の南方にのびる谷戸が犬懸ヶ谷になる。『源平盛衰記』には治承四年(1180)八月二十六日、杉本城にあった和田小次郎義茂(杉本太郎義宗の次男)が「犬懸坂」を越えて名越を経由し小坪に出て、当時は平氏側だった畠山重忠と戦ったとの記述がある。なお室町時代、関東管領の地位を世襲した上杉氏のうち、憲藤の系統は犬懸ヶ谷に邸を構え、犬懸上杉氏と称したが、氏憲(禅秀)は応永二十三年(1416)、鎌倉公方足利持氏と争い敗れて翌年自殺し(上杉禅秀の乱)、犬懸上杉氏は滅亡した。

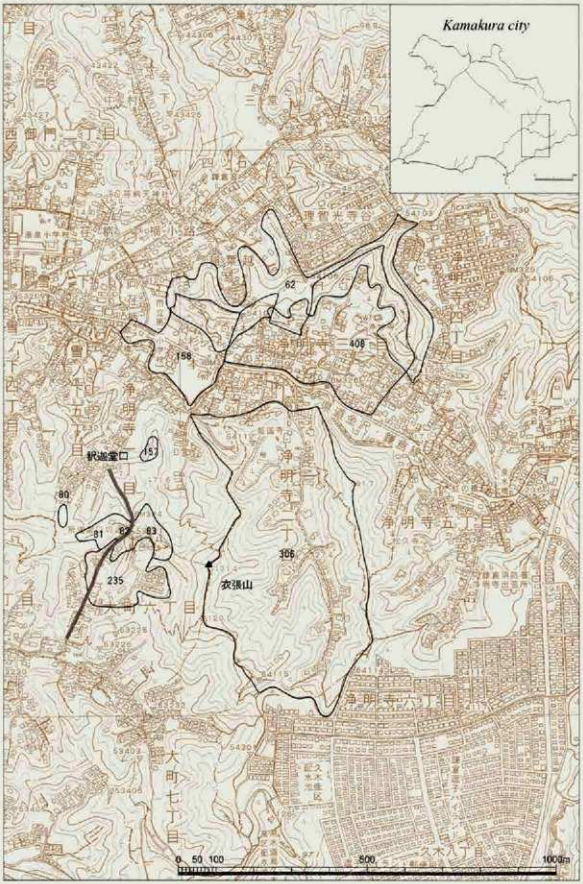
釈迦堂口の地名は北条泰時が父、義時の供養のために創建した釈迦堂に由来する。『吾妻鏡』嘉禄元年(1225)六月十三日条にその落慶供養の様子が記されている。谷戸最深部は釈迦堂ノ切通とよばれ、今日その洞門(トンネル)は観光名所となっているものの、崩落の危険があるため通行できない。この切通道のあたりは執権北条氏の鎌倉時代初期における拠点と考えられる。洞門の南側一帯は北条時政の名越山荘(名越亭)の所在地といわれる(北条時政邸跡　No235)。同山荘は時政の嫡男義時、さらに義時の子朝時にはじまる北条一門の名越氏に相伝された。現在名越山荘址と称される一帯のうち特に南邸跡とよばれている一区画は堀割や曲輪など、鎌倉時代の上級御家人の館の遺構がよく残っている。また付近には御伽草子の『唐糸草子』に登場する唐糸が源頼朝の命を狙おうとして失敗、捕らえられて幽閉されたという伝説のある「唐糸やぐら」など鎌倉時代初期につくられたやぐらが10数カ所現存しているが、これらは衣張山やぐら群(No81)と総称される。

釈迦堂口周辺のやぐら群としては、他に「日月やぐら」など鎌倉末期のやぐらを含む釈迦堂口トンネル上尾根やぐら群(No83)、室町期の釈迦堂口やぐら群(No82)、および釈迦堂東やぐら群(No157)などが確認されており、とくに釈迦堂谷奥やぐら群(No80)から出土した元弘三年(1333)五月二十八日銘の逸輪は東勝寺で自刃した北条氏一族の初七日を銘した墓塔と思われ、釈迦堂と北条氏との強い絆がうかがえる。

衣張山から北にのびる尾根を隔てて犬懸ヶ谷の東方にひろがる谷戸を宅間ヶ谷という。源頼朝に京から招かれた宅間派の絵師為久がここに居住し、その子孫も代々この地にあったことからこの地名がついたという。

宅間ヶ谷には今日、竹寺の通称で親しまれている報国寺がある。正式には功臣山建忠報国寺。臨済宗建長寺派。開基は寺伝では足利尊氏の祖父、家時とするが実は上杉氏の諸流のうち、宅間ヶ谷に邸を構えた宅間上杉氏の祖重兼であったとみられる(川副1959)。永享の乱(1438)で将軍足利義教に敗れた鎌倉公方足利持氏は乱の翌年永安寺で自刃するが、その長子義久はこの報国寺で自らの命を絶った。寺域内にはやぐらが多い。往時は開山天岸慧広(仏乗禅師)の塔所休耕庵をはじめいくつかの塔頭を構え、寺域も宅間ヶ谷一帯におよび、その大部分は今日報国寺遺跡(No306)として周知されている。ただし同遺跡では寺院址のみならず、中世の武士の館址も確認されており、宅間上杉氏出身で関東管領となった能憲の邸と推定される。なお報国寺遺跡から出土した染付片は15世紀のものとみられ、鎌倉においては貴重な出土遺物である。

報国寺から滑川を越えてほぼ真北に進むと鎌倉五山の第五位、稲荷山浄妙禅寺と号する浄妙寺に至る。開基は足利尊氏の遠祖義兼、開山は退耕行勇と伝える。鎌倉中期に臨済宗寺院となり、寺名も極楽寺から浄妙寺に改称された。南北朝～室町期に鎌倉公方の保護を受け、盛時には多くの塔頭を擁したがその後の火災や震災等でほとんどが失われた。現在境内全域が国指定史跡「浄妙寺境内」に指定され、塔頭址を含む旧寺域が浄妙寺旧境内遺跡(No408)として周知されている。



第83図　杉本城・釈迦堂口地区周辺の遺跡[S＝1/10,000]

第Ⅱ章　調査トレンチの概要

本地区では杉本寺の裏山一帯から、六浦路を隔てた南側の釈迦堂ヶ谷、宅間ヶ谷を取り巻く山陵部の調査を行った。調査工程上、第1～6号トレンチを杉本城地区、第7～12号トレンチを釈迦堂口地区、第13～19トレンチを衣張山地区として調査を行っている。

杉本城地区では遺物が多量に出土した第2号トレンチが注目される。立地と出土遺物の内容から見て、浄妙寺に関わる寺院の跡と推定される。第3，4号トレンチは共に堀切の調査である。両者とも二階堂(楯業越)と浄明寺を往き来する位置に構築されており、東西方向の尾根を分断すると同時に、南北方向の通行路としても機能していたものと考えられる。第5，6号トレンチを設定した場所は杉本寺裏の山頂に位置する平場で、現状でも明瞭な平坦面が残り、杉本城の主要部にあたると推定される。

釈迦堂口地区では「北条時政邸跡(鎌倉市№235)」として周知されている場所を調査している。現状で切岸、切通となっている箇所(第7，8，12号トレンチ)は、残念ながら近年の石切により大きく攪乱を受けており、中世まささかのぼる遺物も出土しなかった。第9，11号トレンチは堀切の調査である。第11号トレンチは遺構が検出されなかったが、第9号トレンチでは明瞭な箱形の堀切が発見された。掘り込みの両壁にはピットが伴っており、木戸状の施設があったものと推測される。今回の調査全体で、堀切は計18箇所調査しているが、このように明瞭な施設の痕跡が発見されたのは本トレンチが唯一である。第10号トレンチでは尾根端が二股に分かれた位置に形成された平場を調査している。釈迦堂東やぐら群(鎌倉市№157)の最奥部にあたり、平場を囲む3方の崖にやぐらが開口していた。調査の結果、やぐら前面に構築された茶毘址、切石敷きなどが多数の遺物と共に発見されている。

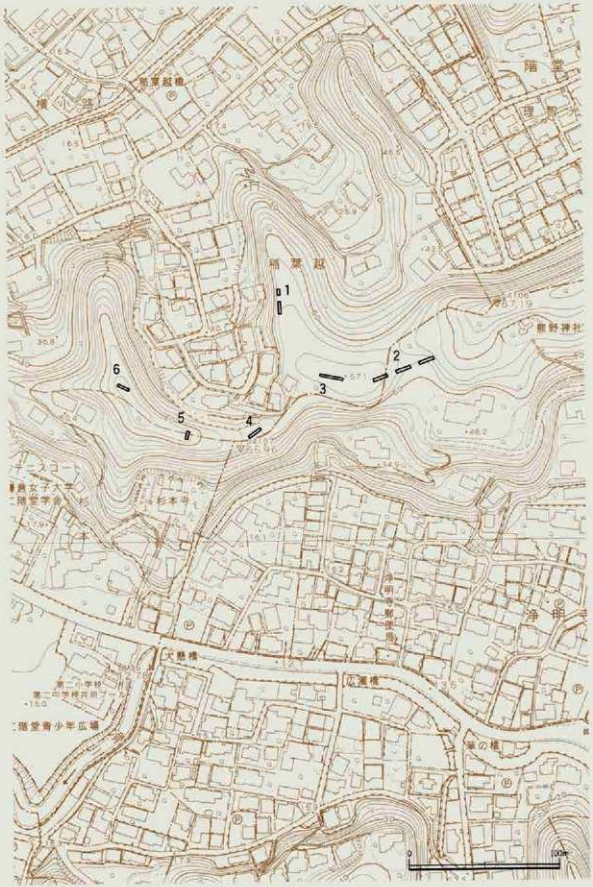
衣張山地区は第13，18号トレンチが尾根筋下の平場、第14，15，16トレンチが山頂の平場、第17，18号トレンチが尾根端部である。第14，15号トレンチは衣張山山頂の平場で、両トレンチとも中世の茶毘址の他、弥生末～平安時代の土器が出土した。第16号トレンチを設定した頂部平場にはし字型の土壇が現存し、その付近に散乱する五輪塔と合わせ、その性格が注目される地点である。

第8表　杉本城・釈迦堂口地区調査トレンチ一覧表

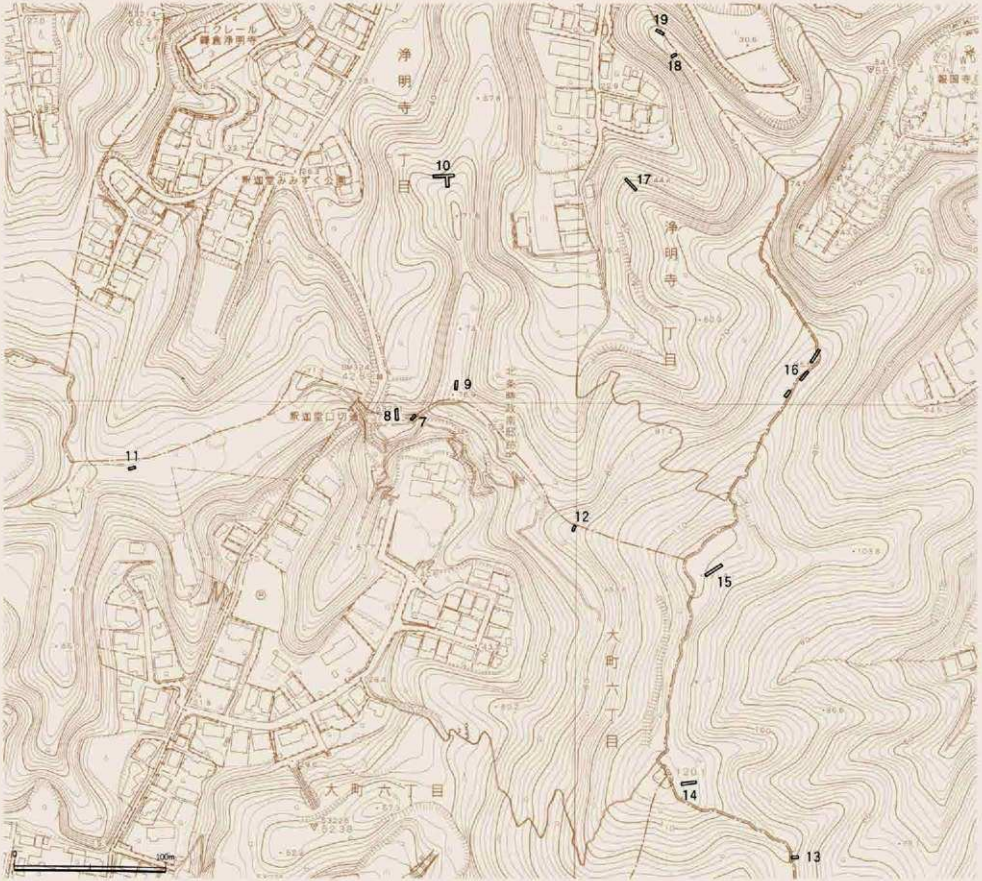
No.	町名・大字	地番	国家座標(北東角・南西角)	規模(m)	面積(㎡)	検出遺構	出土遺物	神奈川県遺跡台帳No.遺跡名
1	二階堂	831	X=-75332.40　Y=-23808.42 X=-75336.39　Y=-23809.50	4.0×1.5	6.00	平場、土坑、溝、柱穴	かわらけ、常滑、山茶碗、青白磁、手焙り、瓦	62 杉本城跡
			X=-75340.65　Y=-23808.01 X=-75348.72　Y=-23809.14	8.0×1.5	12.00			
2	浄明寺三丁目	21-1	X=-75379.99　Y=-23706.07 X=-75382.03　Y=-23716.12	10.0×1.5	15.00	平場、土坑、溝、礎石	かわらけ、常滑、瀬戸、山茶碗、青磁、白磁、青白磁、緑釉、手焙り、瓦、石製品、金属製品、他多数	62 杉本城跡
		27	X=-75385.59　Y=-23721.85 X=-75387.88　Y=-23731.40	10.0×1.5	15.00			
		28	X=-75391.57　Y=-23737.00 X=-75393.86　Y=-23746.54	10.0×1.5	15.00			
3	二階堂	831	X=-75393.93　Y=-23767.24 X=-75389.79　Y=-23781.58	15.0×1.5	22.50	平場、堀切	かわらけ、常滑、火葬骨	62 杉本城跡
4	二階堂	851-45 851-11	X=-75426.43　Y=-23821.08 X=-75430.99　Y=-23829.42	8.0×1.5	13.50	堀切	常滑	62 杉本城跡
5	二階堂	851-12 901-1	X=-75427.73　Y=-23868.64 X=-75432.03　Y=-23871.25	5.0×1.5	7.50	溝、柱穴	かわらけ、常滑、山茶碗、釘	62 杉本城跡
6	二階堂	851-12 851-49 864 901-1	X=-75398.15　Y=-23908.39 X=-75395.89　Y=-23916.07	8.0×1.5	12.00	平場、柱穴	かわらけ、釘	62 杉本城跡

No.	町名・大字	地番	国家座標（北東角・南西角）	規模（m）	面積（㎡）	検出遺構	出土遺物	神奈川県遺跡台帳No. 遺跡名
7	大町六丁目	1447	X=-76009.54　Y=-24106.81 X=-76011.16　Y=-24109.61	3.0×1.5	4.50	切通状		81 衣張山やぐら群 等
8	浄明寺一丁目 大町六丁目	615-1 1447	X=-76011.53　Y=-24117.68 X=-76004.45　Y=-24119.67	7.0×1.5	10.50	切岸、石切、平場		81 衣張山やぐら群 等
9	大町六丁目	1448-1	X=-75990.79　Y=-24079.44 X=-75985.33　Y=-24080.19	5.0×1.5	7.50	堀切、柱穴		81 衣張山やぐら群 等
10	浄明寺一丁目	606	X=-75848.68　Y=-24082.29 X=-75849.85　Y=-24086.81	4.5×1.0	4.50	やぐら群	かわらけ、常滑、石塔、火葬骨	157 鶴岡宝塔やぐら群
		707	X=-75856.78　Y=-24086.35 X=-75849.08　Y=-24095.93	15.5×1.5	23.25			
11	浄明寺一丁目	618-4	X=-76045.28　Y=-24291.36 X=-76044.88　Y=-24295.61	4.0×1.5	6.00			81 衣張山やぐら群 等
12	大町六丁目	1448-1 1452-1	X=-76084.77　Y=-24000.68 X=-76081.26　Y=-24001.06	3.0×1.5	4.50	石切	かわらけ	87 鎌倉城
13	浄明寺二丁目	518	X=-76300.82　Y=-23850.87 X=-76299.59　Y=-23854.99	4.0×1.5	6.00	平場	かわらけ	306 報国寺遺跡
14	浄明寺二丁目	519-1	X=-76251.42　Y=-23919.65 X=-76251.26　Y=-23928.96	10.0×1.5	15.00	茶臼址、焼土址	かわらけ、土師器、須恵器、弥生土器	306 報国寺遺跡
15	浄明寺二丁目	520-2	X=-76107.51　Y=-23902.86 X=-76112.68　Y=-23913.59	12.0×1.5	18.00	ピット、茶臼址	かわらけ、山茶碗、釘、土師器	306 報国寺遺跡
16	浄明寺二丁目	528-1	X=-75963.55　Y=-23839.01 X=-75971.09　Y=-23845.49 X=-75978.10　Y=-23846.44 X=-75982.67　Y=-23852.07 X=-75990.95　Y=-23858.13 X=-75993.93　Y=-23862.27	10.0×1.5 7.0×1.5 5.0×1.5	15.00 10.50 7.50	土壇状遺構（L字）、柱穴	かわらけ、五輪塔、常滑、瀬戸、青磁、白磁、褐釉、手捻り、硯	306 報国寺遺跡
17	浄明寺一丁目	718 719	X=-75857.79　Y=-23962.35 X=-75849.70　Y=-23967.98	10.0×1.5	15.00	削平地形か		87 鎌倉城
18	浄明寺一丁目	722-1	X=-75767.88　Y=-23935.75 X=-75768.11　Y=-23938.74	3.0×1.5	4.50	やぐら前面の削平面	五輪塔	87 鎌倉城
19	浄明寺一丁目	723 722-1	X=-75753.61　Y=-23944.26 X=-75752.03　Y=-23945.07	5.0×1.0	5.00	削平地形か		87 鎌倉城

写真190　第2号トレンチ作業風景



第84図　杉本城・釈迦堂口地区トレンチ配置図(1)[S=1/2,500]



第85図　杉本城・釈迦堂口地区トレンチ配置図(2)[S=1/2,500]

第Ⅲ章　トレンチの調査成果

第1号トレンチ

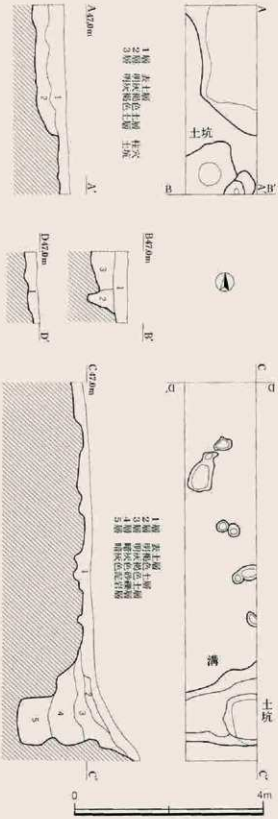
杉本寺の北東、稲葉越に張り出す尾根の先端部平場にトレンチを設定した。

平場中央のトレンチでは、方形および円形の土坑と柱穴の可能性ある小ピットが見つかった。岩盤がブロック状に崩壊しているため遺構の形は不明瞭であるが、土坑はともに深さ50cm前後を計測する。

平場南端のトレンチでは、崖に沿う大形の溝と水溜状の土坑、小ピットが発見された。溝は上幅1.5m、底幅80cm、深さ60cm。土坑はおそらく長方形を呈し、短辺90cm、長辺1.8m、深さ80cmと推測できる。なお、溝と土坑内部からは、凝灰岩の切石が多数投棄された状態で見つかっている。

かわらけ皿・常滑甕・山茶碗窯捏ね鉢・青白磁梅瓶・瓦・手焙り等、13世紀後半～14世紀に比定される遺物が出土しており、平場の造成年代は中世に遡る。

写真191　第1号トレンチ南側　全景(北から)



第86図　第1号トレンチ[S=1/80]

写真192　第1号トレンチ中央　全景(北から)

写真193　第1号トレンチ南側　水溜状遺構(西から)

第2号トレンチ

尾根の頂部に挟まれた鞍部平場にトレンチを設定した。平場は1段下がった南側の山腹にも存在し、連続して造成されたものと思われる。なお、鞍部平場の西端には大形のやぐら1基が開口している。

トレンチではおよそ3時期の生活面を確認した。第一面は地表下30～50cm程にあり、破砕泥岩で整地した良好な生活面である。明瞭な遺構は発見できなかったが、Aトレンチ東端で方形の凝灰岩切り石が見つかり、建物礎石の可能性がある。

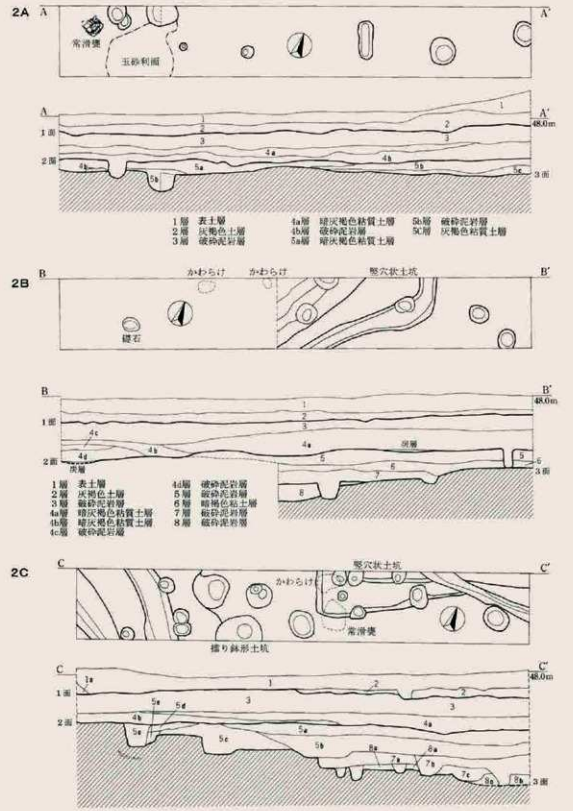
第二面は地表下1.1～1.3m程にあり、上面に薄い炭層が堆積することから火災を受けたことが判った。平場中央のBトレンチでは、人頭大の河原石を据えた建物礎石が見つかり、周辺にかわらけ皿数枚が潰れた状態で出土している。Cトレンチでは、中央部分でかわらけ皿17個体(ほぼ完形の14個体を実測)と常滑甕の大形破片がまとまって出土しており、西端部分の削平岩盤面には溝と柱穴が掘られていた。

第三面は地表下1.2～1.6m程にある。平場規模は第二面より小さいが、削平岩盤面に掘られた遺構密度は高く、Aトレンチでは柱穴と王砂利を敷いた範囲、Bトレンチでは柱穴と矩形に掘られた竪穴状の土坑、Cトレンチでは柱穴と竪穴状土坑の他に、甕を据えたような擂り鉢形の土坑が見つかっている。

出土遺物には、かわらけ皿・国産陶器(壺・甕・捏ね鉢・卸し皿)・舶載陶磁器(碗・皿・壺)・瓦・土製品(手焙り)・石製品(石鍋・砥石・硯)・金属製品(刀子・鏡鉄・釘・銭)などがあり、亀ケ谷坂第2号トレンチや名越切通第7号トレンチと並んで出土量が多い。なお、年代的には13世紀後半～15世紀後半までの遺物を含むが、第二面は14世紀後半に比定できる。

本地点は浄妙寺境内絵図に見える塔頭「五輩庵」跡と推定される。

写真194　第2号トレンチ　全景(西から・奥よりA,B,Cトレンチ)

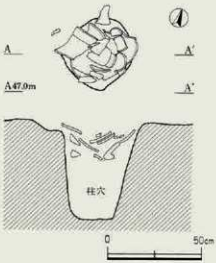


第87図　第2号A, B, Cトレンチ[S=1/80]

写真195　第2号Aトレンチ　全景(東から)

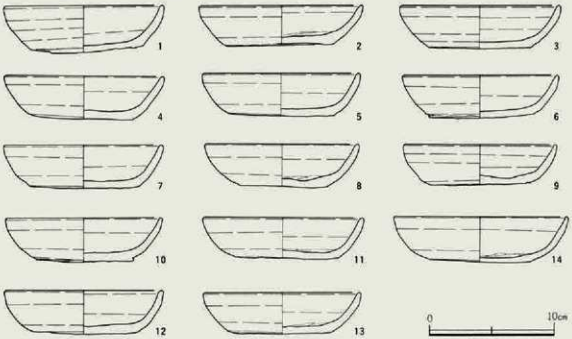
写真196　第2号Bトレンチ　全景(東から)

写真197　第2号Cトレンチ　全景(西から)



第88図　第2号Cトレンチ常滑甕[S=1/20]

写真198　第2号Aトレンチ常滑甕出土状況(西から)



第89図　第2号Bトレンチ出土遺物[S=1/3]

写真199　第2号Cトレンチ常滑・かわらけ出土状況(東から)

写真200　第2号Cトレンチかわらけ出土状況(北から)

写真201　第2号Aトレンチ　玉砂利敷(西から)

写真202　第2号Bトレンチ　岩盤面(北から)

写真203　第2号Bトレンチ　礫石・炭層(北から)

写真204　第2号Bトレンチ　炭層上かぶせ出土状況(南から)

写真205　第2号Cトレンチ　岩盤面柱穴(南から)

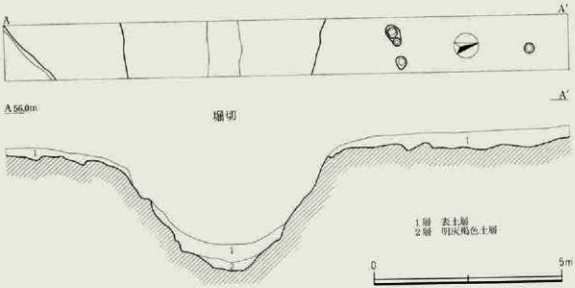
写真206　第2号Cトレンチ　岩盤面土坑(南から)

第3号トレンチ

2号トレンチの西、平坦に削られた尾根頂上の平場と堀切にトレンチを設定した。

堀切は断面V字形を呈し、上幅5m、底幅0.9m、深さ3mを計測する。出土遺物はないが、覆土中位に宝永火山灰の堆積が確認された。

平場は堀切によって東西に切られ、東側で小ピット、西側で浅い落ち込みが見つかった。なお、かわらけ皿と常滑甕の細片が出土したが、年代は不明である。



第90図　第3号トレンチ[S=1/100]

写真207　第3号トレンチ　全景(西から)

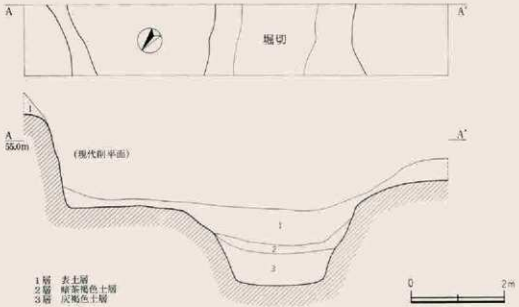
写真208　第3号トレンチ　岩盤面の遺構(南から)

写真209　第3号トレンチ　堀切(東から)

第4号トレンチ

稲荷越の最奥部尾根筋にある堀切にトレンチを設定した。堀切は上幅3.5m、底幅1.8m、深さ1.8mを計測するが、擁壁工事と宅地造成によって、上部を削られ平坦に埋め戻されていることが判った。

常滑甕の小片が出土したが、年代は不明である。



第91図　第4号トレンチ[S=1/80]

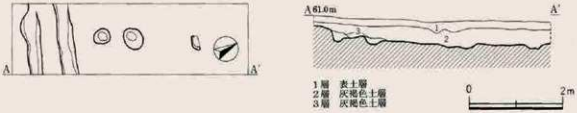
写真210　第4号トレンチ　全景(東から)

第5，6号トレンチ

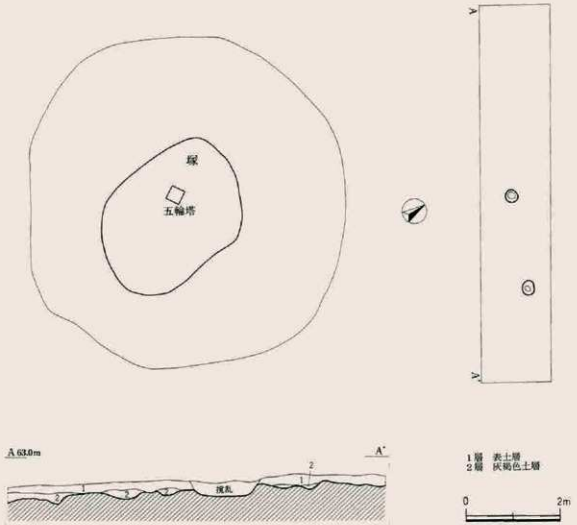
杉本寺背後の尾根上は東西に長い平場となっており、5号トレンチは東寄りの本堂背後に、6号トレンチは平場の西端近くに設定した。なお、6号トレンチの南側には頂部に五輪塔を乗せる直径7m、高さ1.5m程の塚が見られた。

トレンチでは柱穴らしき小ピットの他に、5号トレンチで幅30cm、深さ20cm程の平行する2本の溝が見つかった。小ピットは深さ・間隔がまちまちで建物を復元するには至っていない。また、溝は東西方向に伸びており新旧関係は不明、排水溝あるいは区画溝と思われる。

出土遺物には、かわらけ皿・常滑甕・山茶碗・釘などがあり、14世紀代に比定できる遺物を含んでいる。



第92図　第5号トレンチ[S=1/80]



第93図　第6号トレンチ[S=1/80]

写真211　第5号トレンチ　全景(北から)

写真212　第5号トレンチ　溝状遺構(東から)

写真213　第6号トレンチ　全景(西から)

写真214　第6号トレンチ　岩盤面柱穴(北から)

写真215　第6号トレンチ　調査前状況(南から)

第7号トレンチ

釈迦堂口地区では、釈迦堂口切通を中心として6箇所のトレンチを設定した。釈迦堂口切り通し付近には「釈迦堂口やぐら群」「釈迦堂口トンネル上尾根やぐら群」「衣張山やぐら群」「釈迦堂東やぐら群」「北条時政邸跡」等の周知の遺跡が多くある。

第7トレンチは大規模な切通の底部に設定した。現在ここには「北条時政南邸裏門跡」の表示がある。切通は北西から南東方向に通じており、北西側は釈迦堂口を望む平場、南東側は「唐糸やぐら」の前を通って、谷中の宅地に至る。切通の規模は幅3.2m、長さ5m、上部の尾根との高低差は約9mで、ほぼ垂直に切り落とされている。

トレンチ内は、現地表下約1mで岩盤面に達する。底面は平坦ではなく、中央部が低く落ち込んでいる。現在はこの切通は通行禁止となっており、人の往来はないが、かつては通行路として用いられ、このような堀割路状の形態となったのだろう。覆土中には層厚約20cmの炭化物層があり、ここからかわらけの細片が出土している。しかし、本層はゴミ焼き後の集積と思われ、ごく近年の廃棄物も混入していた。切通の構築年代は明らかではない。

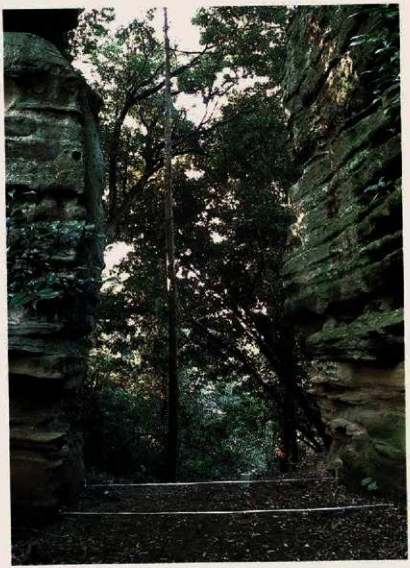


写真216　第7号トレンチ　調査前状況(南東から)

写真217　第7号トレンチ　全景(南から)

写真218　第8号トレンチ　全景(北から)

第8号トレンチ

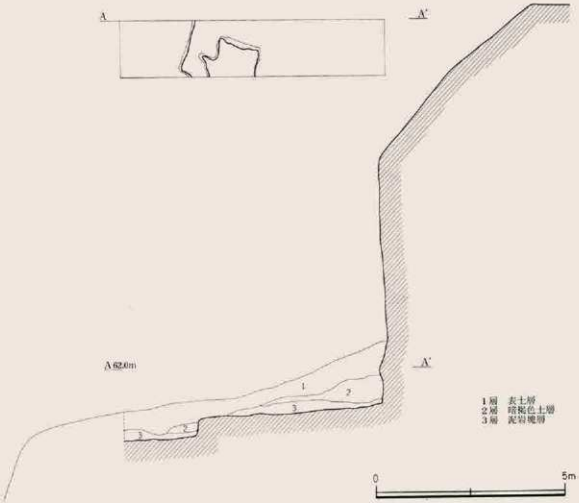
釈迦堂口の北東側、現在のトンネルを見下ろす位置に比較的大きな平場がある。平場の南側は高低差約10mの切岸となっている。トレンチはこの切岸に直交する形で設定した。

トレンチ内は、現地表下80～150cmほどで岩盤面に達する。岩盤面は平坦ではなく、トレンチ北側には高低差約40cmの落ち込みがある。また、全体的に細かな凹凸が残っており、近年まで石切が行われていたものと推定される。

覆土中より17世紀代のかわらけが1点出土したが、切岸および平場の構築年代は不明である。

写真219　第8号トレンチ出土遺物(かわらけ)

写真220　第8号トレンチ　作業風景(東上方から)



第94図　第8号トレンチ[S=1/100]

写真221　第8号トレンチ　周辺状況(北東から)

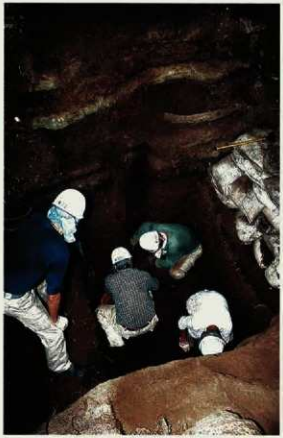


写真222　第9号トレンチ　作業風景(北から)

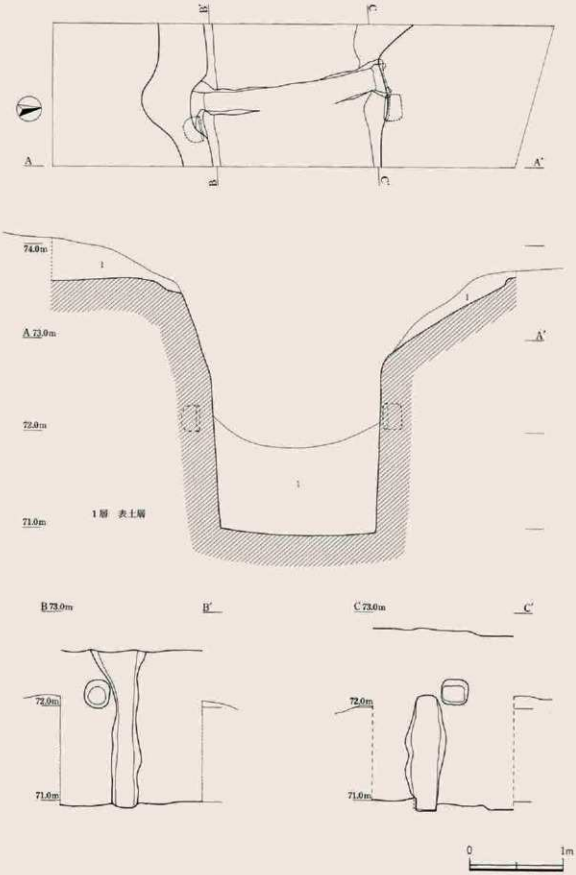
第9号トレンチ

衣張山から西に延びる尾根から分岐して、北へ延びる尾根の付け根に位置する堀切の調査である。尾根は東西を谷に挟まれて約300m延びており、第10号トレンチに至る尾根上にはさらに数カ所の堀切が確認されている。堀切の上部は調査前既に岩盤が露呈しており、開口部の幅は約3mあった。基底部の幅は1.8m、開口部から底面までの深さは3mに達する。出土遺物はなく、遺構の年代は明らかではない。堀切底部から両側面にかけては、柱を据え付けたような、方形基調の掘り込みが確認された。その構には、直径30cm、奥行き19cmのピットが穿たれ、門を持つ木戸の存在が推定される。堀切で丘陵を分断すると同時に、谷から谷への通行を防ぐための施設と考えられる。門の位置から推測すると、木戸によって西から東への通行を止める意図がより強くうかがえる。現状は東西の谷に向かって急激な崖となっており、堀切の両側に階段状の遺構等がないか確認したが、類する遺構は現況では見られなかった。

写真223　第9号トレンチ　全景(南から)

写真224 第9号トレンチ 全景(北から)

写真225 第9号トレンチ 堀切底面(東から)



第95図　第9号トレンチ[S=1/40]

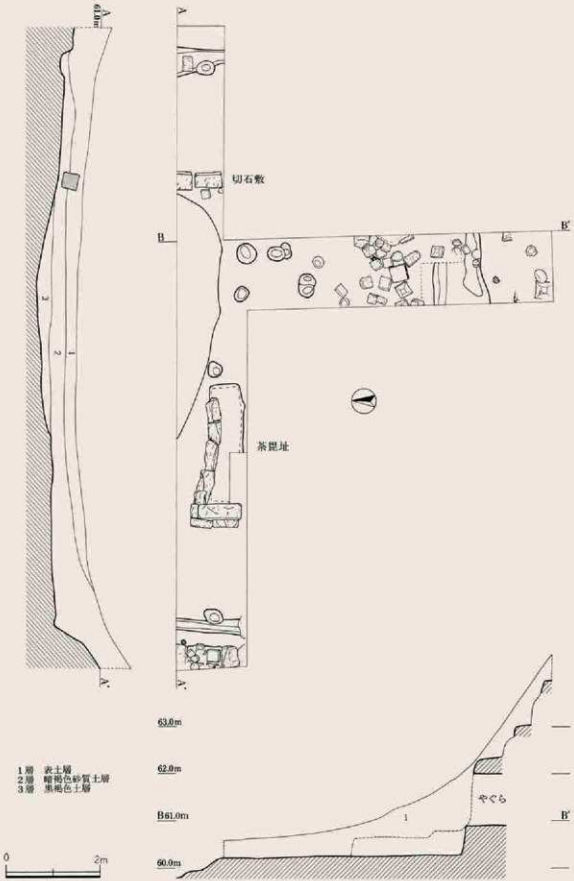
第10号トレンチ

第9号トレンチから北へ140m行くと、釈迦堂ヶ谷の支谷が切れ込み、尾根が二股に分かれる。支谷の最奥部は三方が壁となっており、現状で幅（東西）16m×奥行（南北）8mほどの平場が造成されている。この平場は「釈迦堂東やぐら群」の最奥部に当たり、現在も多数のやぐらが開口している。崩落が著しく定かではないが、上下3段以上のやぐらが並び、三方の壁面に広がっている。このやぐらに囲まれた平場の状態を確認するために、東西（A）、南北（B）にT字形のトレンチを設定して調査を行った。どちらのトレンチも、崩落した産際を除いて比較的堆積土は薄く、地表下50～70cmほどで岩盤面に達する。

Aトレンチでは東西端にそれぞれ側溝状の掘り込みが巡たれている。東端には天井がないやぐらがかかっており、五輪塔が2基以上ほぼ完存していた。中央部やや西寄りには岩盤を長方形に掘り込み、その上部に切石を敷き並べた遺構が発見された。掘り込み内は完掘していないが、黒色土の中に多量の火葬骨が含まれ

写真226　第10号トレンチ　全景（北から）

写真227　第10号トレンチ　全景（東から）



第96図　第10号トレンチ[S=1/80]

写真228　第10号トレンチ　西側切石敷・基礎址（東から）

写真229　第10号トレンチ西側　五輪塔出土状況（東から）

写真230　第10号トレンチ　東側切石敷(西から)

写真231　第10号トレンチ　石塔類出土状況(西から)

ており、荼毘跡と推定される。平場のやや西寄り、荼毘址と対応する位置には、岩盤面からやや浮いて切り出した鎌倉石が敷き並べられている。荼毘址の直上に置かれた切石の面取が粗いのに比べ、こちらは精良な立方体形を呈している。平場の中央部は谷に向かって緩やかに傾斜している。

Bトレンチの北半、平場のほぼ中央部には径30～40cm、深さ20～30cmほどのピットが数基穿たれている。覆土から火葬骨等は出土していないが、ピットに規則的な並びはみとめられないため、荼毘、もしくはそれに類する遺構と推定される。Bトレンチの南端はやぐらの床面に当たっており、その下にはやぐらの開口部が確認されている(未調査)。その前面、ピットの南側からは石造塔が密集して出土した。五輪塔の部分がほとんどだが、反花座、相輪等、宝篋印塔も出土している。形態的に多くは室町期のものであるが、一部鎌倉期と推定されるものもみとめられる。元から平場にあったものと、上部のやぐらから転落してきたものが混ざり合って、このような出土状況を呈したものであろう。なお、これらの石塔類は記録図面をとり、写真撮影の後、原位置を動かさず丁寧に埋め戻した。

石塔以外で本トレンチから出土した遺物は、かわらけ、常滑甕破片、瀬戸茶壺破片などである。かわらけは14世紀後半代を主体とし、一部15世紀のものも見られる。石塔とこれらの遺物の年代観をあわせると、本やぐら群の造営は鎌倉期に始まり、14～15世紀を通して営まれたと考えられる。近世の遺物はないため、その後、石切等で破壊されることなく、現在見られるような大規模なやぐら群の景観を残すに至ったものであろう。

写真232 第10号トレンチ　作業風景

写真233 第10号トレンチ出土遺物(かわらけ)

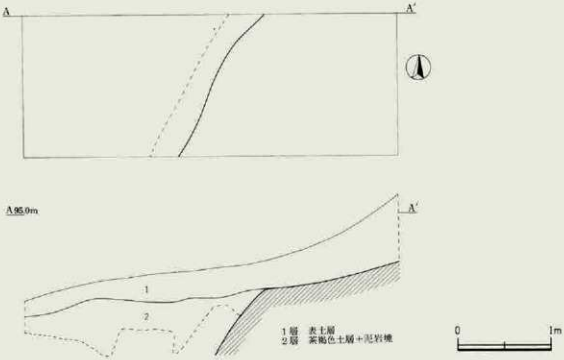
写真234　第13号トレンチ　全景(西から)

写真235　第13号トレンチ　土層堆積状況(北から)

第13号トレンチ

現在のハイランドから表張山山頂に至る尾根道の中途、浅間山のピークから南東に約90mの位置にある平場の調査である。現在ハイキングコースになっている尾根道の脇の、一段下がった位置に犬走り状の平場が造り出されている。平場は北東方の、宅間ヶ谷奥の支谷に向かい、ハイキングコースに沿って十数m続いている。トレンチは平場に直交する形で設定した。

トレンチの東半は現地表下30cmほどで平坦に成形された岩盤面に達する。西半は岩盤面が急激に落ち込んでおり、そこに破砕された泥岩塊が埋められている。元来斜面であった場所を平坦に削り出し、そこで発生した泥岩塊で谷筋を埋め、平場を拡張したものと考えられる。遺物はかわらけの細片が数点出土したのみで、造成の時期を明らかにすることは出来ないが、中世に遡る可能性はある。

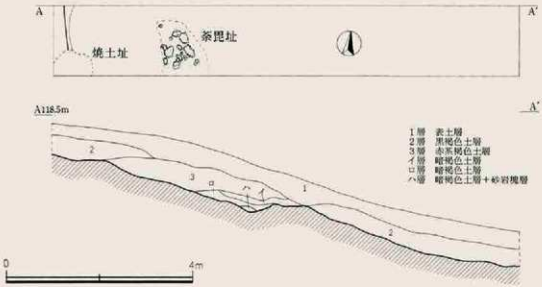


第97図　第13号トレンチ[S=1/40]

第14号トレンチ

衣張山南側山頂部での調査である。頂部の標高は122.3mで、現地に立つと名越方面を見通すことができる。トレンチはこの最高点の東側に設定した。

現地表下30～50cmで中世の遺構面に達する。トレンチの西半ではおよそ1m四方の範囲で礫が集積された箇所が発見された。礫は表面が炭化もしくは赤色化し、焼骨が出土しているため、これを荼毘址と推定した。



第98図　第14号トレンチ[S＝1/80]

写真236　第14号トレンチ　全景(西から)

写真237　第14号トレンチ　茶臼址（南から）

礫は10～30cmの塊が用いられ、規則的な並びはみとめられない。また、トレンチの西南隅には約50cm四方の範囲で焼土がみとめられた。礫はなく、骨も出土していないが、茶臼址に類する遺構と推定される。これらの遺構に伴った遺物はないが、1層および2層からかわらけ片、常滑壺が出土しているため、中世の遺構と考えられる。

本トレンチでは表土層より土師器が出土したため、ローム層に達するまで掘削を行った。トレンチ西端ではローム層上面で浅い溝状の落ち込みを確認した。また、平面的に遺構をとらえることはできなかったが、トレンチほぼ中央部で土坑、もしくは住居ともとらえられる掘り込みを断面で確認した。これらの遺構には伴わないが、3，4層中より弥生末～古墳時代の土師器片（高坏・壺・甕）・須恵器片が出土している。高坏の脚が出土していることから、山頂における祭祀を行った場所とも考えらる。

トレンチ東端では、ローム上面で階穴状の落ち込みを確認した。しかし、出土遺物はなく、平面、断面とも不明瞭なものであった。

写真238　第14号トレンチ出土遺物（高坏・かわらけ・常滑壺）

第15号トレンチ

衣張山の頂上に設定したトレンチである。頂上からは鎌倉の海岸線が一望できる。現在、頂部はほぼ平坦になっているが,戦中に高射砲が設置されていたため、2箇所の大きな陥没がある。トレンチはこれらを除けて、平場の東隅に設定した。

周辺の地形はトレンチの南西から北東に向かって傾斜しており、南西隅では現地表から40cm下、北東隅は1.5m下で基盤層に達する。

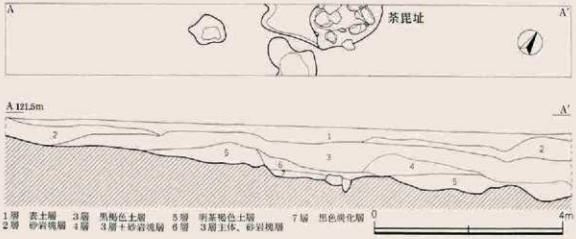
基盤層面では礫の集積を伴う土坑が1基発見されている。礫表面は熱を受けており、煤が付着、もしくは赤色化している。覆土中に少量ではあるが焼骨片も含まれており、荼毘址と推定される。遺構に遺物が伴わないため断言はできないが、3層からかわらけが出土したため、おおよそ中世の遺構と考えられよう。この他にも、礫が伴わない土坑が2基発見されており、同様な荼毘址と推定される。鎌倉市街を一望にできる場所が中世には荼毘所として機能していたことになる。

また、かわらけの他に小壁台付甕底部、鉢破片等、

写真239 第15号トレンチ　全景(北東から)

写真240 第15号トレンチ　荼毘址(南東から)

弥生末から奈良・平安時代の遺物も出土している。遺構は確認できなかったが、鎌倉旧市街を囲む丘陵の最高地点が古代以来から生活の場、もしくは祭祀の場であったことが伺える。



第99図　第15号トレンチ[S=1/80]

写真241　第15号トレンチ　出土遺物(かわらけ)

写真242　衣張山山頂より鎌倉市街を望む

第16号トレンチ

衣張山から北へ伸びる尾根の頂上部平場(海抜約93m)にトレンチを設定した。報国寺墓地のある谷を挟み尾根が二手に分岐する部分で、平場の現況は植林地となっている。

平場は南北2段に分けられ、約50cmの高低差をもっている。北側の平場は短辺8～16m、長辺25mを計測し、平場東縁の2箇所に盛土されたわずかな高まりが見られた。また、南側平場は短辺7～12m、長辺26mを計測し、南端部分に尾根を切り落とした崖面が露出している。

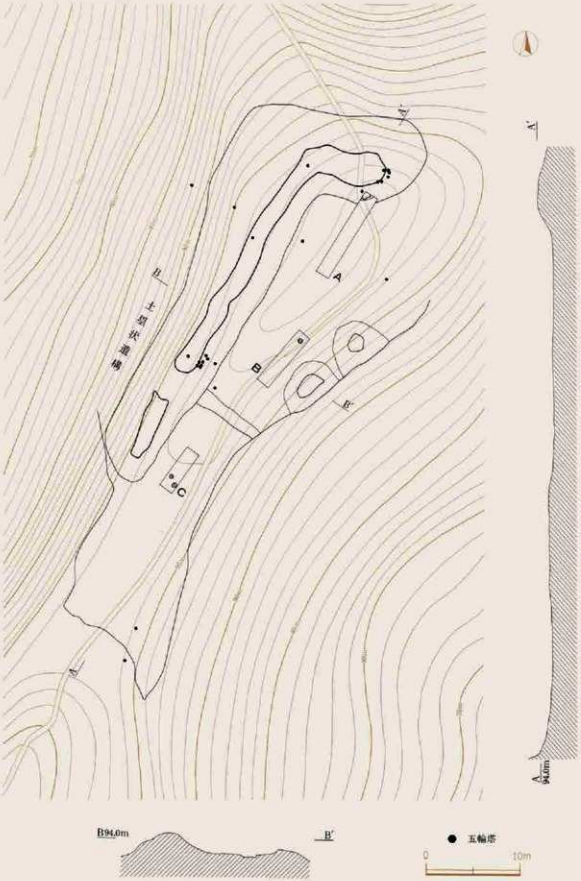
本地点において特筆すべき遺構は、平場西縁から北縁にかけて作られた土塁状遺構である。土塁状遺構は南端部分で低く不明瞭となるが、高さ約1.5m、長さ約40mを計測し、北端部分でL字形に短く屈折して約10m東側へ伸びている。トレンチの一部を延長したところ、盛土した土塁ではなく岩盤を削り残した遺構と判明した。

トレンチでは表土下に側平岩盤面が露呈するが、ブロック状に大きく崩壊しており遺構の状態は不明瞭である。発見された柱穴状の小ピットはいずれも浅く、建物を復元するには至っていない。

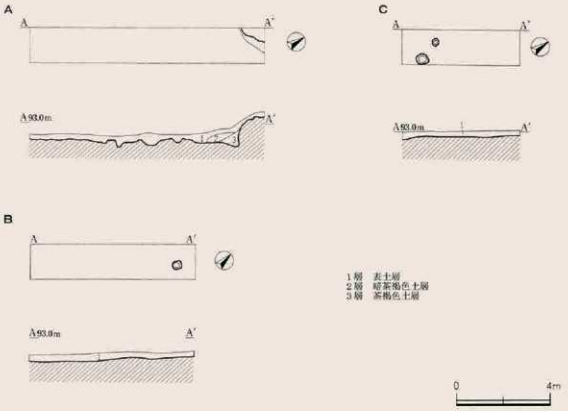
かわらけ皿・舶載磁器(青磁碗、白磁皿)・国産陶器(常滑甕、擂ね鉢、備前擂り鉢)・硯・手焙り等が出土しており、年代的には14世紀後半～15世紀代が主体となるようである。なお、平場および土塁状遺構の両端に散乱する五輪塔は、確認した29点中1点のみが安山岩製、他はすべて凝灰岩製であった。

衣張山の一帯に集中する石切り場とやぐら群に供給された多量の五輪塔を見れば、付近に工房が存在した可能性を否定できないが、調査では未製品が確認できず遺構の性格は不明である。なお、本地点は昭和31年に県立鎌倉高校歴史研究部によって一部が調査された記録(「衣張山発掘記」)が残る。

写真243　第16号トレンチ付近　土塁状遺構(北東から)



第100図　第16号トレンチ周辺状況[S=1/400]



第101図　第16号トレンチ[S=1/160]

写真244　第16号Aトレンチ　全景(南から)

写真245　第16号Bトレンチ　全景(南から)

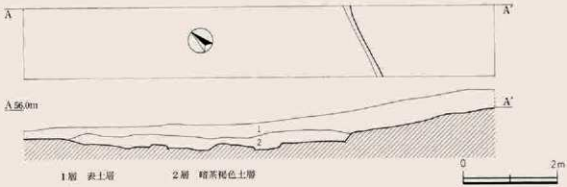
写真246　第16号Cトレンチ　全景(南から)

第17号トレンチ

衣張山から北へ伸びる尾根は先端部で緩筋かに分岐するが、その内、釈迦堂ケ谷東端の谷に張り出す短い尾根の先端部にトレンチを設定した。

尾根先端部は幅狭く、北西に緩やかに傾斜する地形である。トレンチでは表土下に岩盤面が露呈し、数段の段差を確認したが、岩盤自体が大きくブロック状に崩壊するため人為的な遺構とは考えがたい。出土遺物なし。

写真247 第17号トレンチ 調査前状況(南東から)



第102図 第17号トレンチ[S=1/80]

写真248 第17号トレンチ 全景(北西から)

第18号トレンチ

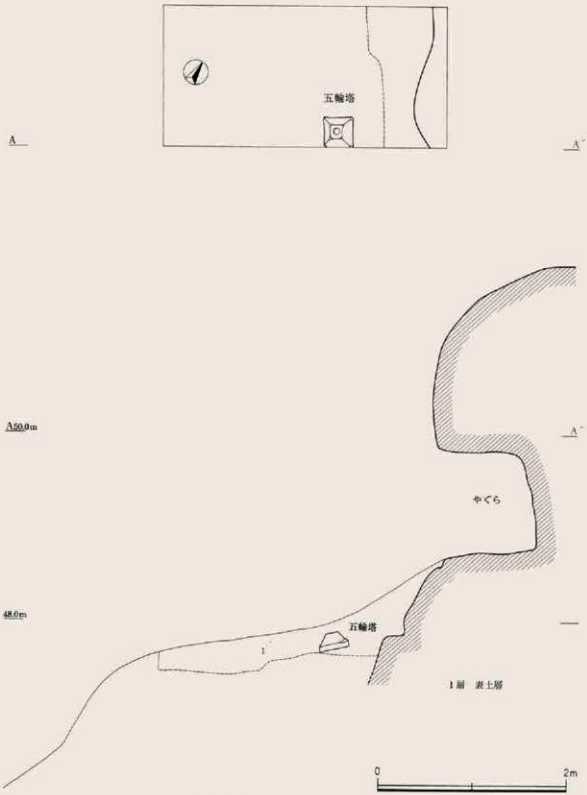
衣張山から北に延びた尾根は、「田楽辻子」と伝えられる地域に突き出し、南に大きく蛇行してきた滑川と接する位置まで至る。この尾根線に沿って、南西側の谷を望む一段低い位置に平場が設けられている。現状で観察される平場の規模は幅3m、長さは10mほどあり、尾根線直下の削り出された崖面にはやぐらが開口している。このやぐら前面の平場にトレンチを設定し、調査を行った。

尾根線直下の崖は人工的にほぼ垂直に切り出されている。やぐらの周辺には石切の痕跡もみとめられる。

写真249　第18号トレンチ　五輪塔火輪出土状況(南から)

トレンチ調査では崖際にわずかにテラス状の平坦面を検出したが、それより谷側は泥岩塊が含まれる面で調査を中断している。この面ではほぼ平坦に揃えられているため、破砕した泥岩塊を用いて平場を拡張している可能性も考えられる。表土直下では安山岩製の五輪塔火輪(1辺32cm四方、高さ18cm)が出土している。大型で傘の反りが強く鎌倉期まで遡る可能性がある。

写真250　第18号トレンチ　全景(西から)



第103図　第18号トレンチ[S=1/40]

第８編

名越切通地区の調査

名越切通現況（逗子市開より）

名越切通地区の調査

1　本地区のトレンチ番号は設定時、および調査時、本報告で異なっており、下表の通り対応する。記録図面、記録写真、出土遺物への注記は調査時番号に拠っている。
2　本地区での出土遺物への注記はWHCT＊＊（トレンチ番号）と略記している。
3　第Ⅲ章の執筆分担は下表の通りである。

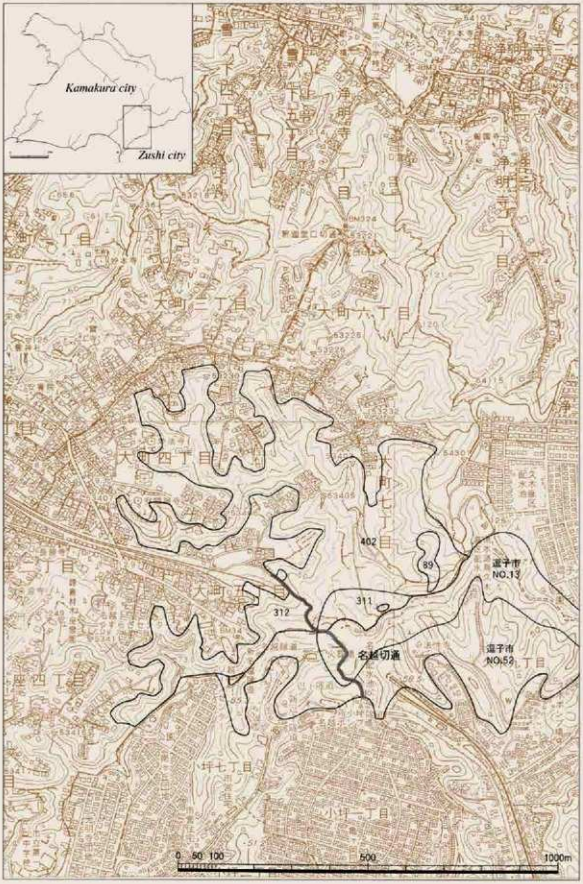
本報告番号	調査時番号	設定時番号	執筆担当
1	1	111,113	菊川
2	2	117	菊川
3	3	109	菊川
4	4	121	
5	5	122	
6	6	番号なし	菊川
7	7	100	菊川
8	8	102	菊川
9	9	106	菊川

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

本調査地区は、鎌倉市と逗子市との市境のうち、今日の大町五～七丁目から逗子市小坪にまたがる丘陵地帯の尾根筋を主に、一部鎌倉市側の尾根麓の谷戸内を含む、鎌倉七切通の一、名越切通の周辺地域で、よく知られた「お猿畠の大切岸」をはじめ、平場や堀切、置石などの防衛遺構を数多く見いだすことができる(名越遺跡　逗子市No52)。丘陵地帯は大平山、天台山方面から杉本城址の通称大倉山、さらに衣張山へと南に連なり、本調査地区を経て小坪付近で断崖となって海に達する、「三方を山に囲まれた」鎌倉の東側の山並みに相当する。丘陵を構成する岩盤は第三紀中新世から鮮新世の逗子シルト岩層または池子火砕岩層に属する。

名越は「なごし(難越し)」とも呼ばれた。鎌倉時代に切通が開かれる前、古代の官道である古東海道が名越の南西方の飯島付近から小坪へと通じていた。平安末期に鎌倉に居を構えた源頼朝の父義朝は、この古道の道沿いの沼浜(現・逗子市沼間付近)に別宅を設いたが、おそらく配下の三浦氏との連携を重視したのであろう。鎌倉幕府成立後は相模国の伝統ある武士団の長で、いわば清和源氏の譜代の御家人である三浦氏と、頼朝と政子、時政との関係をてこに急速に勢力を伸張した北条氏との軋轢が表面化する。時政・義時親子は杉本城・釈迦堂口地区で述べた通り名越に山荘を所有していたが、ここは比企能員の暗殺など政治的謀略の舞台となることがしばしばあり、北条氏の他の別業同様、戦略拠点としての性格が強かったと思われる。さらに想像を逞しくすれば、名越をはさんで対峙する三浦氏の本貫地を監視する機能も有したのではなかろうか。名越切通の開鑿時期については文献史料上の記録は見あたらない。しかし昭和五十三年(1978)暮から翌五十四年(1979)にかけて逗子市教育委員会によって実施された名越遺跡の発掘調査によって、切通および防衛遺構の様相がかなり明らかになった。その上で調査報告では、切通周辺に築かれた種々の防衛遺構は、六浦路および山内路の改修に着手した仁治元年(1240)前後の時期かそれ以降、北条氏が三浦氏の侵攻を阻む目的で造成したのが最初であると結論づけている(赤星1979)。今日「大ほらどう」(『新編鎌倉志』)とよばれる中世の防衛設備を残す切通道を中心とした名越切通の現存部分は国指定史跡であり、その周辺の一連の防衛遺構は名越砦遺跡(鎌倉市No402)として周知されている。

ところで名越切通周辺は、有名な「まんだら堂やぐら群」をはじめ、「お猿畠やぐら群」等数多くのやぐらが現在も残り(まんだら堂・お猿畠やぐら群　逗子市No13)、さらに今回の調査地区内にも浅間山南山腹やぐら群(鎌倉市No89)が存在する。加えてやぐら以外でも名越石塔(鎌倉市No311)とよばれる尾根頂部に建てられた石造の祠堂が知られるほか、塚状の盛り土や五輪塔、板碑等の石塔類をはじめとする葬送関連の遺構・遺物が随所に見られ、名越坂古墓遺跡(鎌倉市No312)として周知されている。こうしてみると名越は鎌倉時代以降、葬送地としての性格が強まったことは明白である。同地のやぐらの多くは切岸を穿って造成され、塚や供養塔は平場に築かれた例が多いことから、切通防衛用の施設が本来の目的に使用されることなく葬送の場所に転用されたという想定が可能である。このことについて前述の調査報告では、宝治合戦(1247)で三浦泰村一族が滅亡し、名越の防衛施設が無用となってから、弘長元年(1261)に幕府が発した「厳制」(『吾妻鏡』によれば「病者、孤子、死屍を路邊に棄つることを禁制すべし」という一節あり)等が契機となって、やぐらをはじめ、様々な墓域が設けられていったとの解釈が示されている(赤星1979)。ただしこれによって名越に残された防衛遺構が全く使われなくなったと速断すべきではなく、戦国時代に後北条氏が三浦氏や里見氏に備えるために防衛施設の拡充をはかった可能性も含めて、検討の余地が残る地域といえよう。



第104図　名越切通地区周辺の遺跡[S＝1/10,000]

第Ⅱ章　調査トレンチの概要

本地区では、名越切通の鎌倉市側を中心に9箇所のトレンチを調査した。このうち一箇所、第6号トレンチのみ逗子市域での調査である。

第1号トレンチは切通道の北側の、比較的開けた平坦地に設定している。第2号トレンチは、第1号トレンチから北西に延びた尾根上に設定した。この尾根は現在横須賀線の北側に沿って延び、尾根の先端部が4～5段に造成されている。トレンチはこのうち3段の平場に設定した。第3号トレンチは第1号トレンチから北側に延びる、一段高い平坦面に設定した。

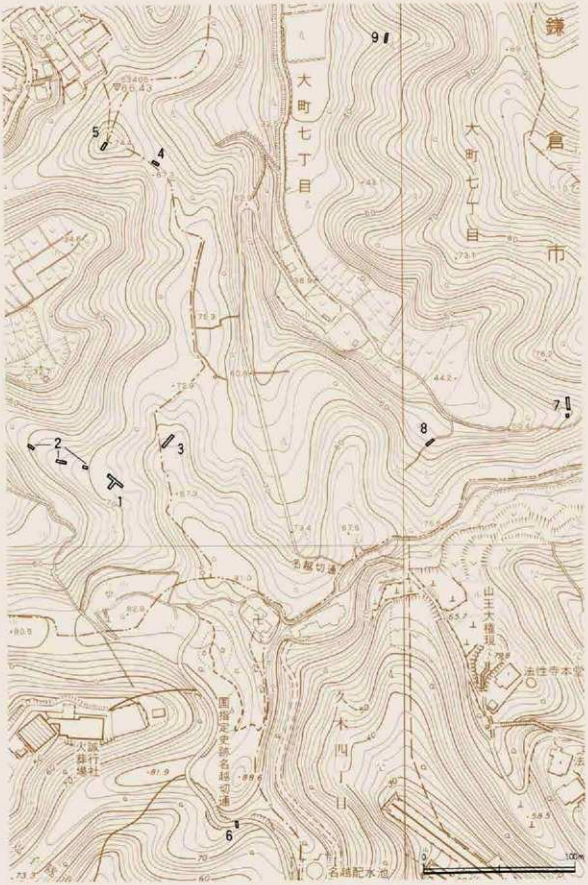
第4、5号トレンチ周辺は切通北側で最も高い地点で、第5号トレンチはその頂部、第4号トレンチは頂部下に確認された堀切状の落ち込みを調査している。第5号トレンチでは遺構は発見されず、第4号トレンチでは岩盤面に堀切状の落ち込みを確認したが、石切によって改変を受けていた。両トレンチとも遺物は出土していない。

第6号トレンチは、全調査地で唯一、鎌倉七口と呼ばれる切通の本体を調査した箇所である。調査の結果、現在は通行止めとなっている道の下から、中世～近世の遺物と共に、数枚の道路面と側溝が確認された。

第7～9号トレンチは名越切通から尾根を挟んだ北側の谷、名越谷最奥部の支谷中に設定した。第7号トレンチは浅間山南山腹やぐら群(鎌倉市No.89)と周知される範囲内であり、谷を取り巻く崖面には多数のやぐらが開口している。調査ではかわらけを始め多量の遺物が出土した。第8号トレンチでは14世紀後半のかわらけが出土し、第9号トレンチでは中世に遡り得る造成面を検出している。しかし、いずれのトレンチも谷の中央に設定したため、崖線の一部は検出できたものの、岩盤面まで掘りきることは出来なかった。

第9表　名越切通地区調査トレンチ一覧表

No.	町名・大字	地番	国家座標（北東角・南西角）	規模(m)	面積(㎡)	検出遺構	出土遺物	神奈川県遺跡台帳No.遺跡名
1	大町五丁目	2035-2	X=-76959.29　Y=-24188.97 X=-76952.70　Y=-24196.87	12.0×1.5	18.00	削平面、ピット	かわらけ、常滑、青磁、火葬骨、五輪塔	402 名越切通遺跡
			X=-76956.86　Y=-24194.04 X=-76960.56　Y=-24196.87	6.0×1.5	9.00			
2	大町五丁目	2034	X=-76948.00　Y=-24212.72 X=-76945.83　Y=-24215.09	6.0×1.5	9.00	削平面、茶臼址、土坑	かわらけ、土師、火葬骨、礫	402 名越切通遺跡
		2035	X=-76944.20　Y=-24227.20 X=-76941.59　Y=-24232.19	3.0×1.5	4.50			
		2035-2	X=-76934.50　Y=-24248.24 X=-76931.11　Y=-24250.56	4.0×1.5	6.00			
3	大町七丁目	1659	X=-76927.29　Y=-24154.98 X=-76933.60　Y=-24162.71	10.0×1.5	15.00	削平面、土坑（古代？）	土師器	402 名越切通遺跡
4	大町七丁目	1661 1662	X=-76747.23　Y=-24163.11 X=-76744.14　Y=-24165.74	4.0×1.5	6.00	堀切状		402 名越切通遺跡
5	大町五丁目 大町七丁目	2006 1671	X=-76732.16　Y=-24196.11 X=-76735.63　Y=-24200.01	5.0×1.5	7.50			402 名越切通遺跡
6	逗子市 小坪七丁目	1248-1 1253-1・3	X=-77193.60　Y=-24115.14 X=-77189.58　Y=-24117.69	4.5×1.5	6.00	切通	瀬戸、肥前染付	逗子市52 名越遺跡
7	大町七丁目	1642	X=-76904.88　Y=-23893.57 X=-76912.93　Y=-23894.38	2.0×1.5	3.00	削平面、土坑、溝	かわらけ、常滑、瀬戸、山茶碗、青磁、白磁、青白磁、鉢鞴、天目碗他多量	89 浅間山南山腹やぐら群
			X=-76915.96　Y=-23894.19 X=-76918.13　Y=-23895.51	8.0×1.5	12.00			
8	大町七丁目	1643	X=-76932.81　Y=-23982.93 X=-76935.32　Y=-23988.51	6.0×1.5	9.00		かわらけ、刀子	402 名越切通遺跡
9	大町七丁目	1636	X=-76662.14　Y=-24009.57 X=-76667.84　Y=-24012.03	6.0×1.5	9.00	削平面	かわらけ、常滑	402 名越切通遺跡



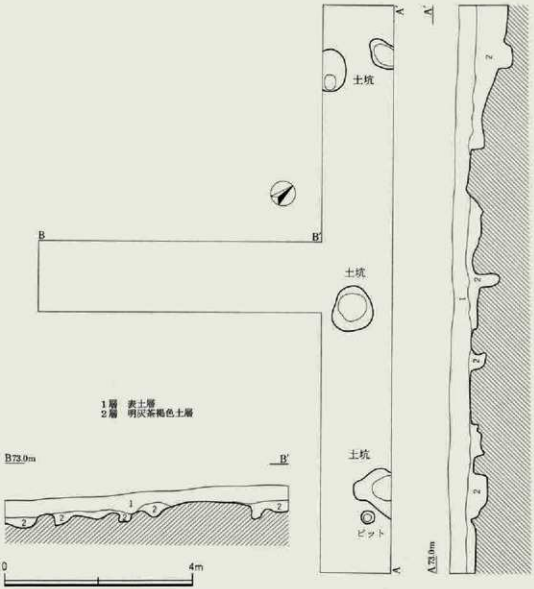
第105図　名越切通地区トレンチ配置図[S＝1/2,500]

第Ⅲ章　トレンチの調査成果

第1，2号トレンチ

名越切通へ至る旧道沿いの長い尾根に設定した。1号トレンチは主稜線から1段下った比較的大きな平場にあり、削平岩盤面に土坑群と柱穴状の小ピットを発見した。岩盤がブロック状に崩壊しているため、遺構の形態は不明瞭である。また、2号トレンチでは尾根上に連続する小規模な平場に茶毘址と土坑を発見し、茶毘址のある平場が明瞭な削平面であることが判った。

出土遺物には、かわらけ皿・常滑(壺、甕、捏ね鉢)・青磁(碗)・土錘・火葬骨・五輪塔などがある。遺構に伴うものはなく、破片ばかりが目立っているが、13世紀後半および14世紀後半に比定できる遺物(常滑壺・かわらけ皿)を含んでいる。



第106図　第1号トレンチ[S=1/80]

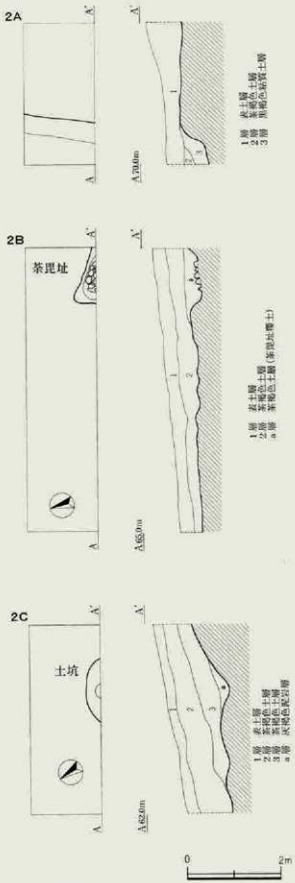
写真251　第1号トレンチ　中央部分(北から)

写真252　第1号トレンチ　全景(東から)

写真253　第2号Aトレンチ　全景(東から)

写真254　第2号Bトレンチ　全景(東から)

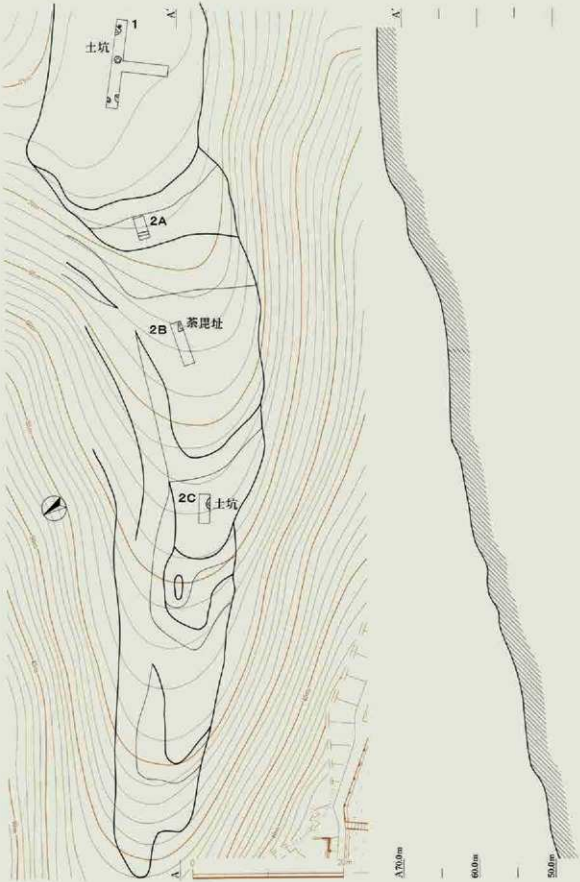
写真255　第2号Cトレンチ　全景(西から)



第107図　第2号A,B,Cトレンチ[S=1/80]

写真256　第2号Bトレンチ　基礎址(北から)

写真257　第2号Cトレンチ　土坑(北から)



第108図　第1，2号トレンチ周辺地形[S=1/500]

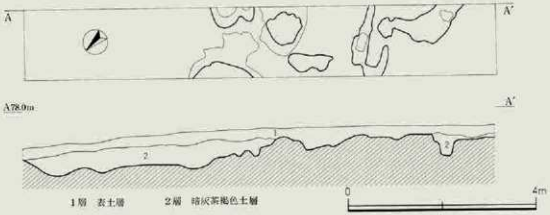
第3号トレンチ

1号トレンチの北側には北西に張り出す短い尾根があり、その付け根付近の平場にトレンチを設定した。1号トレンチのある平場より1段高く、およそ5m程の比高差がある。

トレンチ内にはブロック状に崩壊した岩盤とその隙間に堆積した粘土層が見られるが、凹凸が激しく明瞭な遺構は確認することができなかった。しかし、トレンチ南西端の岩盤上面は平坦に削られており、壁面にかかる黒色土の落ち込み(幅90cm、深さ30cm)は遺構の可能性が高いと考えられる。

出土遺物には、時期不明の土師器(鉢?)破片がある。おそらく、黒色土の落ち込み付近から出土したものであろう。なお、平場の造成時期は不明である。

写真258　第3号トレンチ　全景(北から)



第109図　第3号トレンチ[S=1/80]

第6号トレンチ

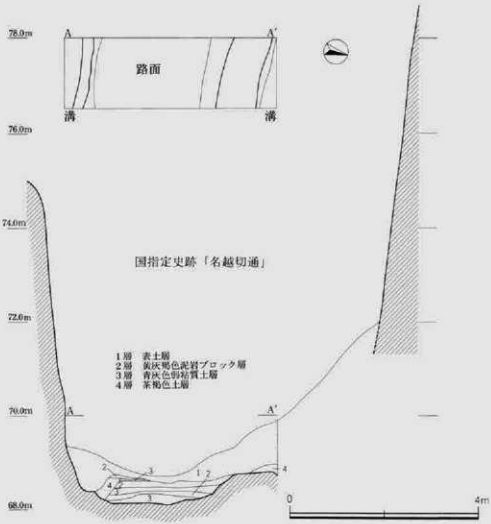
国指定史跡「名越切通」の範囲の中、崩落する危険があり、現在通行止めとなっている逗子市側の切通にトレンチを設定した。

トレンチではおよそ4時期の道路面が確認された。道路面は切通の崖面から崩落した泥岩塊が踏み固められたもので、雨水によって運ばれた青灰色粘土層と互層に堆積している。

最も上の道路面は、現在の道路面下15～20cm程にあり、両側に排水溝を伴っていたようである。この時の道路幅は約3.4m。北側排水溝は未発掘であるが、南側排水溝は上幅80cm、底幅30cm、深さ35cmを計測する。なお、排水溝は3時期目以降に掘られたようで、それ以前にはない。

最も下の道路面は岩盤を直接掘り窪めたものである。この時の道路幅は約2m、道路中央での切通の高さは8.2m前後と推定できる。

岩盤直上に堆積する青灰色粘土層から、瀬戸折れ縁鉢(13世紀後半)の口縁部小片と肥前産と思われる染め付け碗(18世紀後半以降)の微細な破片が出土し、最下の道路面が近世に使われていたことが判った。



第110図　第6号トレンチ[S=1/80]

写真259　第6号トレンチ周辺状況(東から)

写真260　第6号トレンチ　全景(東から)

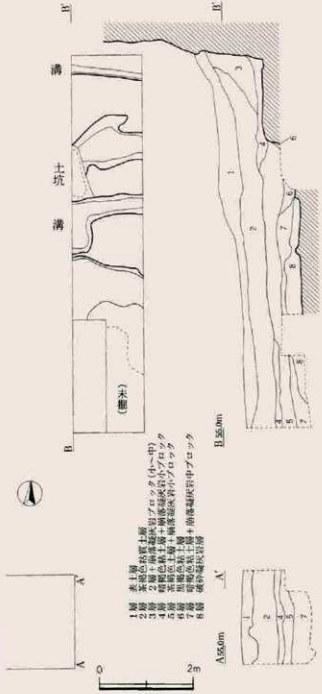
第７号トレンチ

名越ケ谷の最奥部には２段の平場があり、トレンチはこの下段平場に設定した。平場の崖面には２基のやぐらが確認されている。

トレンチでは削平岩盤面に掘られた排水溝と土坑状の落ち込みが発見された。堆積土層の観察から２時期の生活面が確認でき、谷の中央部に作られた平場を、後に崖極側に拡張していることが判った。

かわらけ皿・常滑甕・山茶碗捏ね鉢・瀬戸瓶子・青磁碗・白磁皿・青白磁香炉・褐釉壺・天目碗など13世紀中葉～14世紀前半に比定される多量の遺物が出土した。おそらく寺院址であろう。

写真261　第７号トレンチ　全景(南から)



第111図　第７号トレンチ[S=1/80]

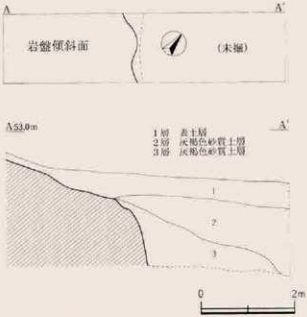
写真262　第７号トレンチ出土遺物(天目碗・山茶碗・かわらけ皿)

第8，9号トレンチ

名越ケ谷奥にある小谷内の平場で、ともに現況は植林地となっている。8号トレンチでは岩盤傾斜面に続いて垂直に落ち込む溜が発見されたが、底面まで発掘していないため自然地形か遺構か判断できなかった。出土遺物には14世紀後半のかわらけ皿と刀子がある。おそらく上部平場から転落したものであろう。なお、上部平場の崖面にはやぐら群が確認されている。

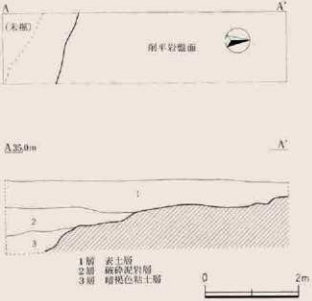
9号トレンチでは削平岩盤面が見つかり、谷の中央部を破砕した泥岩で整地していることが確認された。かわらけ皿と常滑甕の小片が出土しており、平場の造成が中世に遡る可能性がある。

写真263　第8号トレンチ　全景(東から)



第112図　第8号トレンチ[S=1/80]

写真264　第9号トレンチ　全景(南から)



第113図　第9号トレンチ[S=1/80]

第９編

朝夷奈切通地区の調査

第２号トレンチより六浦方面の眺望

朝夷奈切通地区　例言

1　本地区のトレンチ番号は設定時、および調査時、本報告で異なっており、下表の通り対応する。記録図面、記録写真、出土遺物への注記は調査時番号に拠っている。
2　本地区での出土遺物への注記はWHFT＊＊（トレンチ番号）と略記している。
3　第Ⅲ章の執筆分担は下表の通りである。

本報告番号	調査時番号	設定時番号	執筆担当
1	1	160	
2	2	161	
3	3	162	
4	4	159	
5	5	158	
6	6	157	
7	7	156	
8	8	155	
9	9	164	
10	10	166	鈴木
11	11	151	菊川
12	12	153	

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

本調査地区は、鎌倉市東端の十二所から、横浜市金沢区の朝比奈町に至る、鎌倉七切通の一、朝夷奈切通旧道に沿った一帯である。

この地域は古来武蔵国久良岐郡と相模国鎌倉郡の境界とされた丘陵地帯で、逗子火砕岩層の岩盤からなる。同層は不透水層であるため、降水は地中深くには浸透せず、ところどころに湧水をなし、滑川、吉沢川等の水源を形成するが、最も良く知られているのが鎌倉五名水の一つ太刀洗水で、朝夷奈切通内にあり、ここを水源とする太刀洗川は西流し、泉橋付近で十二所の北部で現在は鎌倉霊園の敷地内となっている和泉ヶ谷方面から南流してきた滑川と合流する。朝夷奈切通旧道は鎌倉七切通のなかでも最も往時の姿をよく残しているといわれ、傍らを流れる太刀洗川の水は清らかである。この旧道こそ中世の六浦路(金沢街道)である。

朝夷奈切通とよばれる所以は、和田義盛の子朝夷奈三郎義秀がわずか一日一夜で切り開いたという伝説に因む。しかし鎌倉と六浦・金沢を結び、さらには江戸湾を隔てて上総国へと通ずるルートは鎌倉開府以前から存在したとみられ、板東武士の実力者上総介広常は切通の近くに居を構えていたといわれる。後に彼は源頼朝の命をうけた梶原景時に殺されるが、このとき景時が血刀を洗ったという伝えから太刀洗の地名がおこったという。『吾妻鏡』仁治元年(1240)十一月三十日条に「鎌倉と六浦の津との中間に、始めて道路を当てらるべきの由議定あり。(中略)前武州(北条泰時)その所処に監臨したまふ」とあり、翌年四月五日条に「六浦の道を造り始められる」との記載がある。北条泰時は自ら造成工事の現場に足を運び、監督にあたるほどの力の入れようだったが、このときの「道を造る」とは新道の建設ではなく、従来の道の拡幅工事であったとみられる(石井1986)。六浦の津は重要な幕府の外港であるだけでなく、六浦荘は当時泰時の弟金沢実泰が領有しており、鎌倉間の連絡路の拡充は当時幕府の実権を掌握し、三浦氏との緊張関係が顕在化しつつあった北条政権にとって経済的にも軍事的にも差し迫った課題であった。したがって朝夷奈切通周辺は交通の安全と、有事の鎌倉防衛を目的に設置された平場などの防衛遺構が認められ、朝比奈砦遺跡(鎌倉市№310)と名付けられている。同様の遺構は隣接する横浜市金沢区でも確認されている(横浜市№27、同№53)。なお太刀洗水は第2編第Ⅰ章でふれた星月夜の井と同様、守備兵員の飲料水として確保されていたと思われる。

『太平記』巻十では元弘三年(1333)、上総・下総の軍勢を味方につけて敵の新田義貞勢を攻めるため金沢貞将が鎌倉から下総国下河辺に向けて出撃したことが描かれるが、このとき貞将の軍勢は六浦道を経由したとみられる(赤星1959)。一方、延元二・建武四年(1337)に鎌倉に攻め込んだ北畠顕家勢は六浦道から入って杉本城を攻撃した可能性が高いことは杉本城・釈迦堂口地区において述べた通りである。

室町時代に鎌倉府が衰亡し、朝夷奈切通の軍事防衛的意義がすたれた後は、六浦路は商業流通路としての性格が強くなった。六浦は製塩がさかんな地であり、金沢の称名寺領内では南北朝時代には塩田が設けられていたことが「称名寺塩垂場年貢銭結解状」(明徳元年七月十三日付)等の文書で明らかになっているが、ここでつくられた塩を鎌倉に運送する際にも六浦路は活用されたと思われる。十二所の光触寺境内に安置されている「塩魯地蔵」の由来として、江戸時代に編纂された『新編鎌倉志』、『新編相模国風土記稿』および『鎌倉覆勝考』が載せる塩売りの伝説はその一つのエピソードを物語っているといえよう。

県道金沢鎌倉線の開通後、切通道の通行量は激減したが、このことが幸いにも朝夷奈切通の良好な保存を可能にした。昭和四十四年(1969)、同切通は国指定史跡となっている。

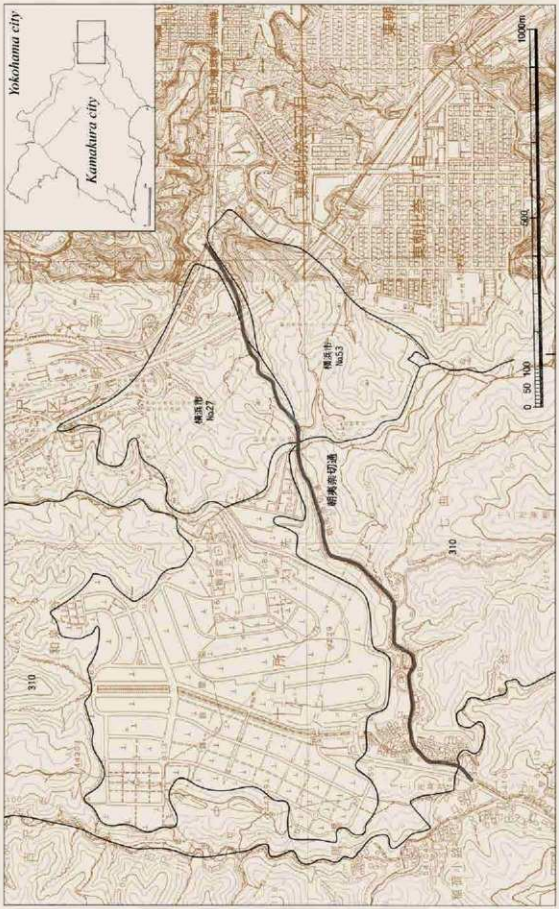


図114図　朝夷奈切通地区周辺の遺跡（S＝1/10,000）

第Ⅱ章　調査トレンチの概要

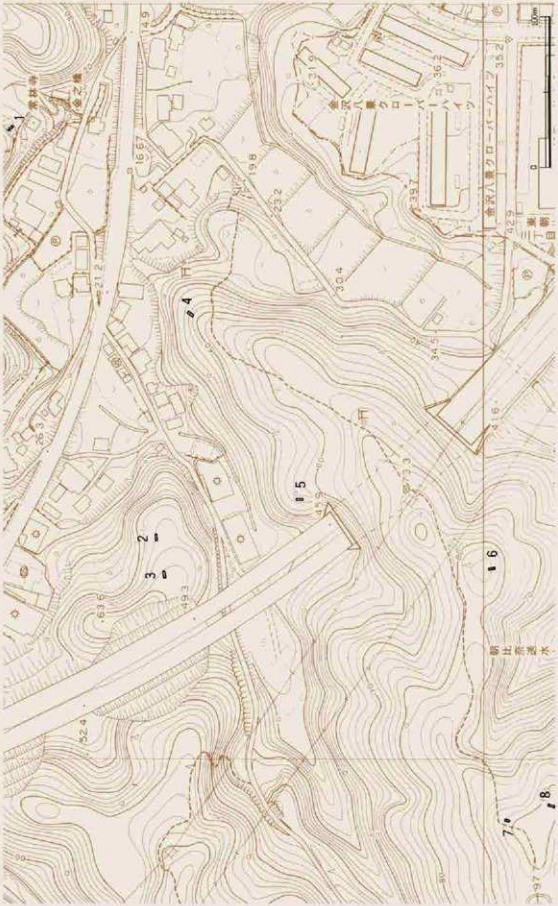
前章で触れたように、朝夷奈切通は鎌倉と六浦をつなぐために開削された道である。このため本地区の調査地は現在の行政区画で鎌倉市(第11，12号トレンチ)と横浜市(第１～10号トレンチ)にまたがっている。調査にあたっては、第１号トレンチを除き、便宜的に調査地区を北尾根(第２，３，９，10号トレンチ)および南尾根(第４～８，11，12号トレンチ)と分けて呼称した。

第１号トレンチは六浦路旧道の北側にある常林寺裏手の平場に設定した。現況は畑地となっている明瞭な平場であるが、調査の結果、ごく最近の造成であることが確認された。第２，３号トレンチは、北尾根東端部の平場に設定した。現地からは扉写真のように六浦方面まで見通すことができる。しかし、両トレンチとも表土下10cmほどで重機による攪乱を受けた岩盤面に達しており、横浜横須賀道路建設時に大規模な地形改変がなされたものと考えられる。第４号トレンチは切通道を挟んで南側、南尾根の東端部平場に設定したが、遺構・遺物共に発見されていない。第５トレンチは切通道を望む北向きの斜面中腹の平場、第６トレンチは頂部の調査だが、共に出土遺物はなく、植林棚と推定される造成面を検出したのみである。第７号トレンチは現在の山道に面する平場、第８号トレンチは土橋状の痩尾根に設定したが、両トレンチとも明瞭な遺構はみとめられなかった。第９号トレンチは、北尾根に造成された平場(現在は畑地)の背後にある堀切状の落ち込みに設定したが、遺構・遺物共に発見されなかった。第12号トレンチは南尾根の頂部下で、切岸状の岩盤面が露出していた場所に設定している。現況が傾斜の強い斜面であったため基盤層まで掘ることはできず、現地表から１m掘削したところで調査を中止している。かわらけ片が少量出土したが、明瞭な遺構は見られなかった。

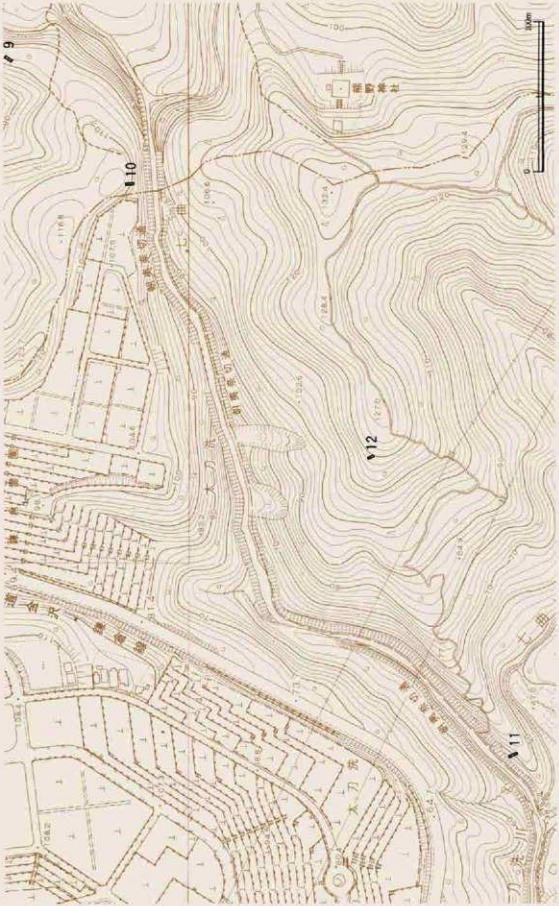
このように、本地区では当初の想定ほど成果が上がらなかったが、比較的成果の上がった第10，11号トレンチの詳細を次章に記す。

第10表　朝夷奈切通地区調査トレンチ一覧表

No.	町名・大字	地　番	国家座標 (北東角・南西角)	規模 (m)	面積 (㎡)	検出遺構	出土遺物	神奈川県遺跡台帳No. 遺跡名
1	横浜市金沢区 朝比奈	432-イ	X=-74687.80　Y=-21079.06 X=-74685.65　Y=-21082.53	4.0×1.5	6.00	造成平場 (近代以降)		
2	横浜市金沢区 朝比奈	15-4	X=-74782.47　Y=-21350.64 X=-74781.05　Y=-21354.75	4.0×1.5	6.00			金沢区27
3	横浜市金沢区 朝比奈	15-4	X=-74787.43　Y=-21375.16 X=-74786.72　Y=-21379.27	4.0×1.5	6.00	現代削平面		金沢区27
4	横浜市金沢区 朝比奈	602-2	X=-74804.07　Y=-21203.04 X=-74806.39　Y=-21206.34	4.0×1.5	6.00			金沢区53
5	横浜市金沢区 朝比奈	560-1	X=-74876.99　Y=-21327.18 X=-74876.81　Y=-21326.36	4.0×1.5	6.00	平場(植林棚？)		金沢区53
6	横浜市金沢区 朝比奈	592-1	X=-75006.08　Y=-21372.89 X=-75002.43　Y=-21374.95	4.0×1.5	6.00	平場(植林棚？)		金沢区53
7	横浜市金沢区 朝比奈	558-1	X=-75013.07　Y=-21535.58 X=-75015.34　Y=-21542.06	3.0×1.5	4.50	平場(植林棚？)		金沢区53
8	横浜市金沢区 朝比奈	587	X=-75041.40　Y=-21529.39 X=-75044.37　Y=-21532.07	4.0×1.5	6.00		漆塗り椀(現代)	金沢区53
9	横浜市金沢区 朝比奈	50-1	X=-74879.15　Y=-21665.35 X=-74881.53　Y=-21668.63	4.0×1.5	6.00			金沢区27
10	横浜市金沢区 朝比奈	52	X=-74963.41　Y=-21748.14 X=-74968.62　Y=-21756.31	5.0×1.5	7.50	泥岩敷地業面		金沢区27
11	十二所	582 585 559-2	X=-75218.94　Y=-22124.28 X=-75215.15　Y=-22127.87	5.0×1.5	7.50	平場	かわらけ細片	310 朝夷奈砦
12	十二所	597-1	X=-75123.33　Y=-21828.54 X=-75120.48　Y=-21931.51	4.0×1.5	6.00	切岸	かわらけ細片	310 朝夷奈砦



第115図　朝夷奈切通地区トレンチ配置図(1)[S=1/2,500]

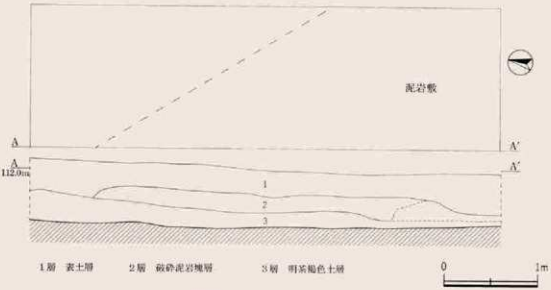


第116図　朝比奈切通地区トレンチ配置図(2)[S=1/2,500]

第Ⅲ章　トレンチの調査成果

第10号トレンチ

いわゆる「大切通」北側崖面の直上にある平場の調査である。現在の切通道底面とは約20mの高低差があり、平場は15m四方ほどの広がりを持つ。トレンチは切通に直交する形で設定した。



第117図　第10号トレンチ[S=1/40]

写真265　第10号トレンチ　全景(北から)

現地表から20cm下で泥岩塊を敷き詰めた面に達し、さらに下でローム層に達する。泥岩塊層は層厚20cmほどで、敷かれる範囲はトレンチ全体ではなく、切通側の半分ほどに限られる。切通掘削に伴って発生した泥岩塊を敷き詰め、切通直上に平場を造成したものと推定される。出土遺物はなく、造成の時期は不明である。

写真266　第10号トレンチ　土層堆積状況(東から)

写真267　第10号トレンチ直下　大切通(東から・トレンチは右手上方)

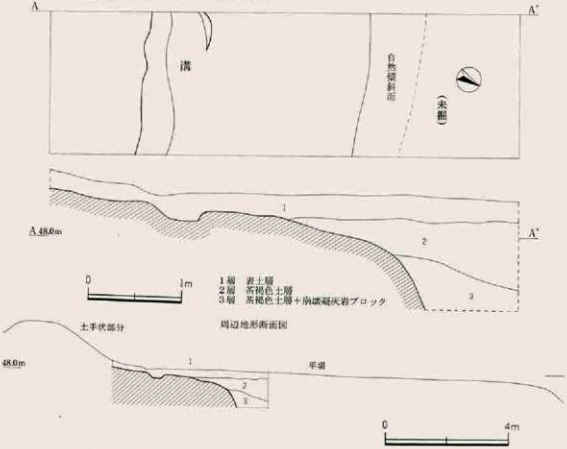
第11号トレンチ

朝夷奈切通の鎌倉側入り口には小滝があり、その右岸上方は尾根先端部を占める狭い平場となっている。この平場は2段に造成されており、切通に面した北西縁辺には尾根の一部を土手状に削り残した箇所とその裾を巡る溝状の窪みが観察された。トレンチは下段平場に設定している。

写真268　第11号トレンチ　全景(南から)

トレンチでは削平岩盤面と浅い溝が見つかった。溝は平場の造成当初からの遺構ではなく、土手状が崩れ広がった後世に掘られたものと考えられる。

一方、削平岩盤面は南東側が谷へ落ち込む自然傾斜面となっており、内部からかわらけ皿の微細な破片が出土した。平場の造成時期は明らかにできなかったが、14mの幅をもつ平場の大部分がすでに中世期に埋設あるいは埋め立てられていた可能性のあることが判った。



第118図　第11号トレンチおよび周辺状況[S=1/40(トレンチ),1/120(地形断面図)]

第10編

まとめ

十王岩より鎌倉市街を望む

第Ⅰ章　防衛遺構

本調査の主目的は、鎌倉旧市街を取り巻く山稜部に設けられたとされる防衛施設の実態をつかむことであった。鎌倉市内外各地には鎌倉七口と呼ばれる切通をはじめ、名越大切岸等の防衛施設とされる遺構を今でも見ることができる。山稜上には「大堀切」「一升桝」「五合桝」と呼ばれる遺構の存在も知られ、この他も至る所で平場、切岸、堀切、堀割などの存在が確認されている。これらについては今までに、杉本城(赤星1959)、仮粧坂周辺(菊川・玉林1996)、亀ヶ谷坂周辺(田代・高野1998)、大仏切通周辺(菊川・瀬田他1999)、名越切通周辺で、現況で観察し得る地形の詳細分布調査がなされ、逗子市側の一部では発掘調査も行われている(赤星1979ａ)。

今回の調査でもこれらの詳細分布図を参考にし、分布調査が行われていない地域については新たに踏査を行い、調査箇所を選定した。各編で述べたように、すべてのトレンチで当初想定した遺構が発見されたわけではない。また、人為的な遺構と判断されても「防衛遺構」と断定できない箇所も多くあった。以下、「人為的な造作がみとめられ、中世に遡る可能性がある」遺構について、分布と特徴をまとめておく。

なお、各トレンチ名称は「地区名－トレンチ番号」で略記する。地区名についても以下の通り略記する。

●極楽寺坂地区→「極楽寺」　●大仏坂地区→「大仏」　●仮粧坂地区→「仮粧」

●亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区→「亀・巨」　●鶯峰山・天台山地区→「鶯・天」

●杉本城・釈迦堂口地区→「杉・釈」　●名越切通地区→「名越」　●朝夷奈切通地区→「朝夷奈」

（1）平場

平場はその構築位置、構造によってさらに以下の６種類に細分される。ただし、中間的で厳密には区別できないものもある。

①頂部平場

山陵ピークの平坦面。眺望がよいため、物見櫓等の遺構の存在が推定された。30箇所の調査地うち、中世に遡る可能性があるのは以下の13箇所である。

極楽寺坂地区　16,17,19,23

大仏坂地区　9

杉本城・釈迦堂口地区　5，6，14,15

名越切通地区　1，3

朝夷奈切通地区　10

これらのうち、平場上に遺構が見られたのは極楽寺16の段切り状遺構、名越１の土坑等がある。柱穴・竪穴など、明らかに建物の存在が想定される遺構は発見されていない。杉本５，６などでは頂部が平坦に成形されているのが確認され、極楽寺19ではさらに、頂部を削って発生した泥岩塊で平場を拡張している。朝夷奈10も泥岩塊を敷き、平場を構築している。その他のトレンチは人為的な造作と断言はできないが、中世の遺物が出土しているため、中世に何らかの用途で利用されていた可能性がある。出土遺物はかわらけの破片が多く、個々の構築時期を特定することはできない。最も古いのは極楽寺16出土かわらけが示す13世紀後半という年代だが、ここは光明寺裏手の山頂部で、合わせ口という出土状態からも、地鎮などの作法に伴う遺構

である可能性が高い。名越１では火葬骨も出土しており、祭祀・葬送的な色彩を持つ平場も少なくない。はじめから祭祀・葬送のために平場が作られたのか、元々防衛のために作られた平場の性格が後に変化したのか、現状で判断することはできない。

なお、遺構・遺物がない、もしくは少量で詳細が明らかではないのは極楽寺13,32、大仏１，４，５，６，７，12,13、仮椎１、亀・巨４,18、鷲・天４、名越５、朝夷奈３，６である。このうち一部中世の遺物が出土した箇所もあったが、出土状況から平場に伴うものとは考えられなかった。

調査では人為的な遺構と考えられる箇所よりも、なにも発見できなかったトレンチの方が多かった。しかし、頂部は元々眺望に優れた場所であり、なんの造作を施さないまま利用されていた可能性もある。生活の場所ではないため、遺物が多く出土することもない。人為的遺構がない、すなわち防衛施設ではない、と否定することはできないだろう。

今回調査されなかった場所に、より防衛的色彩の強い平場が存在した可能性にも留意しておかねばならない。たとえば、大仏坂地区の頂部に設定したトレンチでは明確な遺構・遺物がほとんど発見されなかったが、この尾根の西方、北条氏常盤邸の南側には「腰巻曲輪」と呼ばれる平場が東西約400mにわたって延びており（阿部1971）、常盤方面の防衛拠点はここにあった可能性がある。

さらに、鷲峰山・天台山地区や朝夷奈切通地区でも明瞭な平場があまりみとめられなかったが、鎌倉旧市街の北東から東側は峻険な山稜が広く延びており、それ自体を要害として用い、特段の防衛施設が設けられなかったとも考えらる。

②尾根端部平場

低地に突き出した尾根端部に存在する平場で、①と同様の施設の存在が推測されていた。ある程度の広さを持つ場所と、痩尾根状のごく狭い場所がある。また、階段状に数段の平場が存在するところもある。調査で人為的な遺構と判断された箇所は以下の通りである。

極楽寺坂地区　2,（16），22

鷲峰山・天台山地区　6

杉本城・釈迦堂口地区　17

名越切通地区　2

朝夷奈切通地区　11

このうち、鷲・天６と名越２は４段以上の平場からなる。それぞれ道に沿って延びる尾根で、道を上から見下ろすのに適した構造となっている。地形の現況はいかにも「城郭」然としているが、調査の結果発見された遺構からは天台山６が石塔工房址と推定され、名越２には茶毘址が伴う。遺構の年代は漠然と中世としかとらえられない。しかし、やぐら群の隆盛期および他地点で発見された茶毘址の時期は14世紀以降に主体があると考えられ、平場の構築がこれらに先行すると仮定すれば、14世紀以前の地形改変と想定することもできる。

その他の平場は単独の平場である。極楽寺２は大形の堀切およびその背後の一升桝と一体でとらえられる。極楽寺22は極楽寺坂西側の登り口、朝夷奈11は朝夷奈切通の鎌倉側出入口に当たる部分で、人工的に造成された平坦面がみとめられる。特に朝夷奈11では岩盤を削平し、発生した岩塊で平場を拡張したことが確認されている。杉・釈17は人工的な削平面かどうか判断に迷うが、田楽辻子付近の急峻な崖上の平坦面で、後述

する名越９の堀切とも指呼の間にあり、平坦面が利用されていた可能性も捨てきれない。

詳細不明は極楽寺28、大仏14、仮粧２、亀・巨３,12、鷲・天１、杉・釈19、朝夷奈２,４である。仮粧６では防衛的色彩は見られず、荼毘址が多数発見されている。

③山腹平場

山腹を削り出して平場を造成したもので、平場の奥は切岸状となるところもある。明らかに人為的な遺構で、中世まで遡る可能性があるのは以下の10地点である。

極楽寺坂地区　１,25,33

大仏坂地区　２,８

仮粧坂地区　９

亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区　２,13,21

朝夷奈切通地区　12

このうち、極楽寺１、亀・巨２,13,21は平場の背側面に大規模な切岸を伴っている。出土遺物の様相から亀・巨２は寺地と推定され、その他もそれぞれ極楽寺、建長寺との位置関係から寺院に関わる施設があった可能性が高い。いずれも中世後半から近世にかかる時期の遺物が出土している。大仏２は遺物がまったく出土せず、覆土も極めて薄かったため、ごく近年まで利用されていたものと考えられる。浅間神社の跡地と推定されている(菊川・瀬田他1999)が、調査ではそれを証明する材料は得られなかった。極楽寺33は第１編第３章で述べたように、元弘の乱で戦闘があった仏法寺の跡と推定される。現在では切岸として確認できないが、急峻な崖が南北100mにわたって延び、その下には南北約70m、東西30mの大規模な平場が造り出されている。14世紀前半に遡る遺物は出土していないが、15世紀後半を中心とした遺物が多量に出土しており、中世後期においてもこの平場が寺地もしくは葬地となっていたものと考えられる。

遺構・遺物が見られない、もしくは中世まで遡り得ないと判断されたのは仮粧８、鷲・天３、杉・釈８、朝夷奈1, 5である。このうち杉・釈８は釈迦堂口の側面、現在の釈迦堂口隧道を望む位置にあり、防衛上重要な位置と推測されるが、石切によって大きく地形が改変されており、遺物も16世紀以降のかわらけが１点出土したのみであった。

④尾根筋平場

尾根上、もしくは尾根筋の直下に細長い平場を形成するもの。「犬走り」状の形態をとるものもある。このうち人為的な遺構と判断されるのは以下の11箇所である。

極楽寺坂地区　14,20,24,31

大仏坂地区　３

（仮粧坂地区　５）

亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区　19

鷲峰山・天台山地区　５

杉本城・釈迦堂口地区　１,13,18

いずれも出土遺物が少なく、明確な時期は決定し得ない。尾根筋に構築された小規模な平場であるため、人が恒常的に活動していたとは考えがたく、遺物の少なさは遺構の性格を反映していると考えられる。

大仏3で14世紀後半に比定されるかわらけが合わせ口で出土しているが、出土状態から見て祭祀的な様相が伺える。しかし、出土位置は平坦面の上面であるため、平坦面自体の構築は14世紀後半以前と判断できる。亀・巨19の平場はやぐら前面にあるが、やぐら構築に伴う平場か、やぐらに先行するのか、調査で判断はできなかった。やぐらに先行するとすれば14世紀以前に遡る可能性もある。

人為的な遺構が見られない、もしくは中世に遡ると判断できないのは亀・巨6，7、鷲・天2、杉・釈12、朝夷奈7である。このうち杉・釈12、朝夷奈7は石切、植林棚の造成等で大きな改変を受けていた。また、仮粧5では荼毘址が複数発見されたため、祭祀・葬送関連遺構として後述する。

⑤鞍部平場

頂部に挟まれる平場である。以下の3地点がこの地形に該当する。

仮粧坂地区　7

亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区　14

杉本城・釈迦堂口地区　2

杉・釈2は多量の遺物が出土し、13~15世紀の3期にわたる遺構面が確認された。この地は浄妙寺境内絵図にある「五輪塔」の跡と推定される。仮粧7、亀・巨14では明確な遺構は発見されず、性格は不明である。いずれもかわらけの細片が出土したが、明確な時期は定かではない。なお、両地点とも縄文時代の遺物が出土している。

⑥谷奥平場

谷の奥に造成された平場である。以下の4地点が該当する。

大仏坂地区　10,11

仮粧坂地区　4

名越切通地区　8

いずれも雛壇状の地形がみとめられたが、中世に遡る造成と判断し得る箇所はなかった。現在観察される段は近年の植林に伴う可能性もある。なお、大仏10では弥生土器破片、11では縄文土器破片が出土した。

（2）桝形

土塁で方形に囲まれる施設で、極楽寺6（一升桝）,26(五合桝)、杉・釈16が該当する。それぞれの立地は一升桝が尾根が二股に分かれる付け根部分、五合桝、杉・釈16が山後の端部である。

極楽寺6は「一升桝」と呼ばれ、古くからその存在が知られていた。調査の詳細は第2編に記したが、土塁の築造は堆積状況から2時期にわたる可能性がある。また、13世紀後半に遡る遺物が出土しており、元弘の乱の時点で存在していた可能性があることも明らかとなった。本遺構の南には第2号トレンチの巨大な堀切、北には第7号トレンチの堀切があり、これらが一体となって極楽寺の北方の防衛施設を構成していたものと推測される。第2号トレンチの堀切の時期が不明なため即断はできないが、当初の築造が13世紀後半まで遡り得る一升桝を中心とした大規模な防衛施設は、中世後半の本格的な城郭の先駆けになるものと位置づけることが可能であろう。

極楽寺26も「五合桝」として知られていた桝形遺構である。第2編でも述べたように、おそらく15~16世

紀に墓所・供養所に転化しており、現状では方形の枡形としてはっきりととらえることはできなかった。しかし、南側の第27号トレンチで検出された3段の平場と合わせ、付近一帯が雛壇状に造成されていることは明らかで、五合桝はその先端部に当たる。13世紀中葉に遡るかわらけと、元弘三年(1333)銘の地輪の存在を考えれば、一升桝と近い時期の所産である可能性もある。とすれば、両者を合わせ、極楽寺坂の南北に配置された大規模な防衛施設と想定することができる。

杉・釈16で調査したL字形の土塁については、その性格を明らかにするには至らなかった。土塁が市中の方向を向いている点も注意が必要であろう。大きく見れば西からの攻撃に備えたものとも考えられるが、朝夷奈方面、および衣張山から続く尾根筋には背を向けることになる。また、ここは現在も五輪塔や岩塊が多数散乱しているため、石材を切り出した結果として岩盤が土塁状に残されたとも考えられる。一升桝の土塁が屏岩塊を積み上げて構築しているのに対し、本地点の「土塁」は岩盤を削り出しており、形状と構築方法に差異がみとめられる。現時点では防衛施設としての「土塁」と判断するには躊躇せざるを得ない。

（3）堀切

調査の結果、人為的な遺構と判断できた堀切は以下の16箇所で、それぞれの規模は第11表の通りである。

極楽寺坂地区　2，7，9，11，12，18，29，30

仮裡坂地区　4（大堀切）

亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区　1，10，11

鷲峰山・天台山地区　5

杉本城・釈迦堂口地区　3，4，9

名越切通地区　4

これらの堀切の規模を第11表にまとめた。仮裡4のいわゆる大堀切が最大規模を持つ。それに次ぐのが極楽寺2の堀切で、これも他に比べると圧倒的な規模を持つ。大堀切は土橋状の路および背面の谷奥平場と組

第11表　調査した堀切の規模

地区	トレンチ番号	上部幅(m)	基底部幅(m)	深さ(m)	断面形状	備考
極楽寺坂	2	10	2	6	箱薬研	側溝あり
	7	6	0.6	2	薬研	13世紀後半～14世紀代
	9	約5	0.4		薬研	
	9（土坑）	4（直径）	0.8（直径）	3		
	11	7	1	1.5	薬研	
	12	2	0.5	1.4	薬研	
	18	5	2	2.3	箱薬研	
	29	1.7	0.6	0.7	薬研	
	30	1	0.6	0.3	薬研？	
仮裡坂	4（大堀切）	20	12	約18	箱	
亀ヶ谷坂・巨福呂坂	1	6	4.2	5	箱	
	10	2.5	1.8	1.2	箱薬研	
	11	2.5	0.7	2	箱薬研	
鷲峰山・天台山	5	1.5	0.3	0.8	薬研？	
杉本城・釈迦堂口	3	5	0.9	3	薬研	
	4	3.5	1.8	1.8	箱薬研？	
	9	3	1.8	3	箱	
名越切通	4	3.3	1.4	1.5	箱？	石切痕あり

み合わさり、大規模な防衛遺構を形成するものと考えられる。極楽寺2は尾根筋が断ち割られ、側面には大規模な切岸を伴う平場(極楽寺1)が存在する。両者とも今回の調査では出土遺物がなく遺構の構築時期は判断できなかった。

その他では上幅6m内外、もしくは3m内外の規模を持つ堀切が多い。山稜部には今回調査した堀切以外にも多数の堀切が確認されている(第119図)が、現状観察の範囲ではこの程度の規模のものが多いようである。このうち、ある程度構築時期が推定できるのは、13世紀後半～14世紀前半の遺物が出土した極楽寺7だけである。他に、堀切内に発見された施設では極楽寺2の側溝、杉・釈8の柱穴、門穴がある。しかし、同規模の堀切と比較すると杉・釈8だけが極めて精緻な箱形の断面形を呈しており、中世より下る時期の所産である可能性も否定できない。遺構の帰属時期については、類例の出現を待って判断すべきであろう。なお、この門と想定される施設は、堀切を設けることによってかえって尾根の横断を容易にしてしまうという矛盾を解決する一方策と考えられる。堀切の外に目を転ずると、極楽寺2側面の切岸、極楽寺9の大形土坑などがあり、これらも堀切内の通行を妨げる目的があったのだろう。しかし、他の調査箇所では堀切両側に路状の落ち込みがみとめられる箇所があり、堀切構築後も尾根を横断する道として利用されたことが伺える。杉本3では、近年まで二階堂と浄明寺の往来に堀切を通っていた、とのお話が近隣の方から得られた。落ち込みはみとめられるが、規模が小さく人為的な堀切と判断するのが困難であった極楽寺4、亀・巨20、朝夷奈9なども丘陵鞍部に位置しており、尾根を横切る際の通路として用いられるうち、堀切状の形態を呈したものと推測される。なお、名越4は石切による矩形の掘り込みがみとめられ、堀切の形状は改変を受けている。

第119図に示したように、これまでの詳細分布調査の成果を合わせてみると、堀切は鎌倉旧市街の西側山稜に濃密に分布し、北および東側ではそれほど顕著ではない。西側では細い丘陵線の至る所が掘り切られており、山稜の往来を分断する意図を看て取ることができる。逆に言えば、それだけ頻繁に通行があったということでもあろう。対して東・北側の山稜、特に鶴峰山・天白山および朝夷奈切通を取り巻く一帯では明確に堀切ととらえられる遺構はほとんど確認されていない(註)。この分布状況は頂部平場と共通しており、峻険な山稜が広範に広がるという地形的な差異に起因するものと考えられる。

(4) 堀割

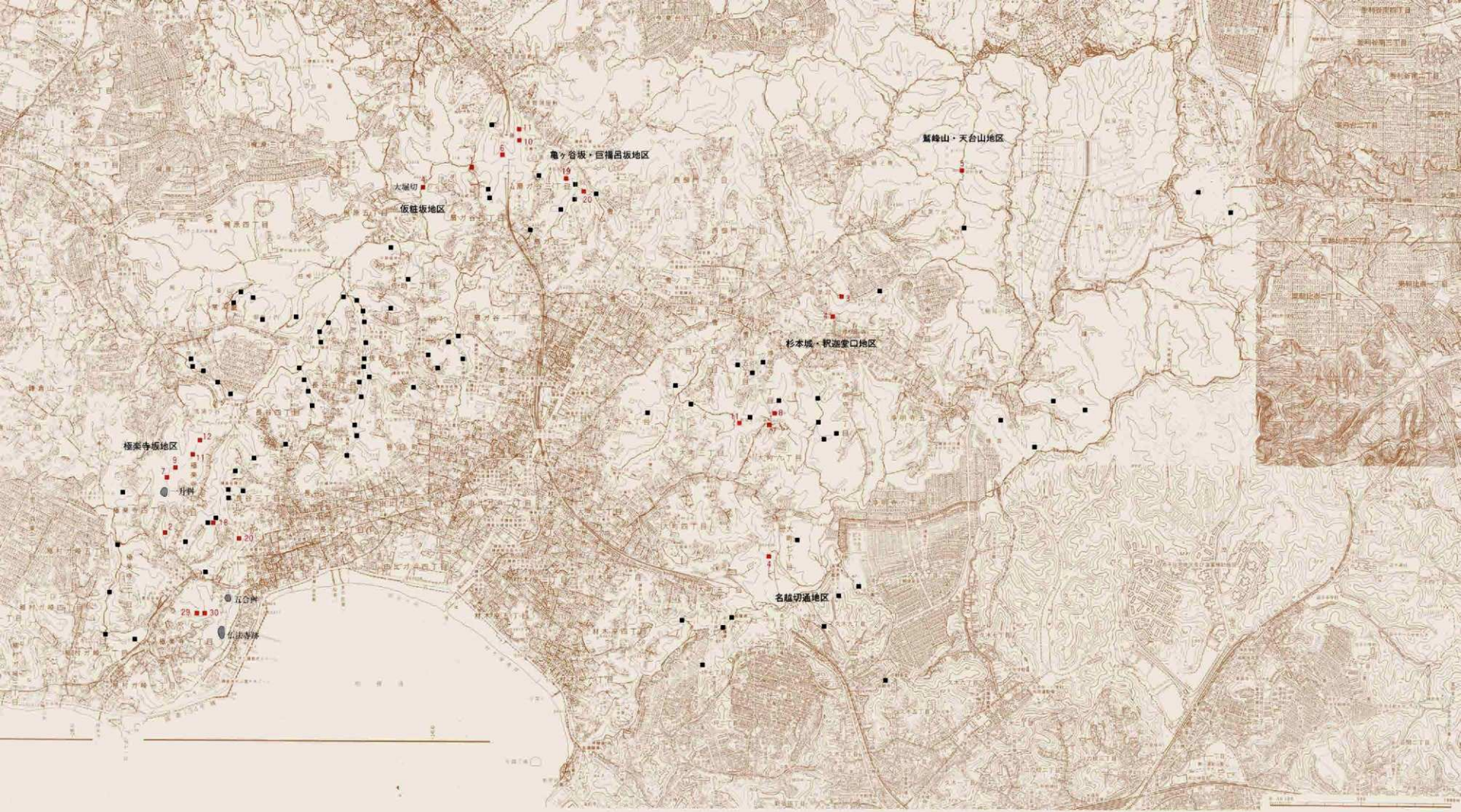
溝状の落ち込みが尾根の稜線沿いに延びる遺構である。尾根筋の通行を遮断する堀切に対し、尾根の横断を妨げる意図があったものと考えられる。以下の地点が該当する。

極楽寺坂地区　3, 5

亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区　15, 16, 17

極楽寺3, 5は規模、形態から見て防衛的な遺構とは考えがたく、路状の遺構と判断された。対して、亀・巨15, 16, 17は岩盤を掘り込んだ上幅1.5m、基底部幅1m、深さ2mの規模を持つ掘り込みが約100m延びており、明らかに形態が異なっている。山ノ内路から扇ガ谷への横断を防ぐための施設と考えられるが、底面は平坦、平滑になっており、通路として用いられた可能性もある。深さが2mあるため、ここを通行すれば人目に付かずに移動が可能となる。遺構の構築時期は、堀割横の平場から常滑甕片が出土し、堀割覆土中層に宝永火山灰が含まれていることから、中世に遡るものと考えられる。

しかし、本遺構の占地の仕方は横浜市緑区堀之内東遺跡、東京都八王子市宇津木台遺跡群、同市館町遺跡、埼玉県所沢市椿峰遺跡等で発見されたような、いわゆる「境堀」との類似性を持つ。山稜を半円形に、時に



第119図　堀切の分布[S＝1/16,000]　■は今回調査した堀切を示す)

数kmにわたって囲い込む境堀の性格は区画領域界等と推定されているが、未だはっきりとはしていない。山ノ内路に面する寺院を取り巻く尾根に構築される本例の性格も、他例と比較して検討する必要があろう。

（5）土橋

尾根線の両端を切り落とし、極端に狭くなっている場所である。堀切同様も各所にみとめられるが、地形的に調査が難しく、遺構の詳細をつかみ得た箇所はなかった。以下の地点が該当する。

極楽寺坂地区　15

仮粧坂地区　4（大堀切）

朝夷奈切通地区　8

いずれも出土遺物はなく、形態も判然としない。極楽寺15は底部が堀割路状に窪んでおり、人の往来があったことを伺わせるが、両端を人為的に切り落とした状況は調査範囲内では確認できなかった。仮粧4も表面観察では人工的な盛り土がなされ、土橋を構築しているように見えるが、調査でその状況は確認できなかった。朝夷奈8は表土下ですぐ岩盤に達してしまい、人為的な遺構とは判断できなかった。

（6）切岸

今回、切岸本体の調査を行ったのは、山腹平場に伴う以下の地点である。

極楽寺坂地区　1

亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区　2,13,21

杉本城・釈迦堂口地区　8

朝夷奈切通地区　12

切岸直下は数mにおよぶ厚さで土・泥岩塊が堆積しており、これらを除去して切岸下の基盤面まで調査し得たのは極楽寺1と亀・巨21の2箇所に止まった。各切岸と平場基盤面のなす角度は極楽寺1が110°（平場側面）、亀・巨2がほぼ垂直(平場側面)、亀・巨21が115°（平場背面）となっている。極楽寺1では切岸より少し離れた位置に小規模な溝が、亀・巨21では切岸直下に深さ70cmの溝がめぐる。いずれの平場も中世後半まで寺地、もしくは屋敷地として用いられていたと判断され、切岸そのものの構築年代は明らかではない。

なお、杉・釈8の切岸もほぼ垂直であるが、中世以降の石切によって大きな改変を受けている。朝夷奈12は切岸下面が傾斜しており、堆積土も厚かったため平坦面を確認することはできなかった。

（7）切通

切通と堀切は表裏一体のもので、尾根から見れば堀切でも、丘陵下から見れば切通となる。仮粧坂地区の「大堀切」も『相模国鎌倉郡村誌』には「蛇居ヶ谷切通」と記載されている。今回、切通状の遺構本体を調査したのは亀・巨1、杉・釈7、名越6の3箇所である。いずれも近年まで通行路となっていたもので、切通の構築年代を明らかにすることはできなかった。

切通というといわゆる「鎌倉七口」と釈迦堂口が著名であるが、亀・巨1と杉・釈7も七口と遜色ない規模を持っている。亀・巨1は山ノ内道と扇ガ谷を結び、鎌倉の外から扇ガ谷に入るには亀ヶ谷坂より近道となる。銅には平場(仮粧坂9)が構築されており、切通を警護する場であった可能性もある。また、杉・釈7は釈迦堂口に隣接する支道ともとらえられる。これらの構築時期が中世まで遡ると仮定すれば、いわゆる七

口以外にも相当規模の切通が存在したことになる。鎌倉の出入口については七口が強調されることが多いが、山稜上に残る尾根道と共に、これらの切通道による交通にも注意を向ける必要があろう。

(註)2000年、朝夷奈地域の詳細分布調査が鎌倉市教育委員会によって、瑞泉寺裏山地域の詳細分布調査が(財)鎌倉風致保存会によって行われている。本稿および図版作製に当たっては鎌倉市教育委員会、(財)鎌倉風致保存会から資料の提供を受けた。

第Ⅱ章　祭祀・葬送、その他に関する遺構

防衛的遺構の確認を主目的とした今回の調査であるが、以下に述べるような遺構も発見され、山稜部が葬送・祭祀的な空間であり、また生産に関わる場でもあったことが明らかとなった。これらの分布状況は第120図に示した。

(1) 塚

塚ととらえられる遺構が発見されたのは、以下の調査地点である。

極楽寺坂地区　2,18,26,27(周辺にもマウンド数基あり)

亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区　8,9(方形基壇状遺構)

平坦地にマウンドを構築しているものは、極楽寺2, 26, 27等がある。他は山稜頂部の自然地形を一部利用して塚としている。極楽寺2は当初から存在が確認されていたが、他は調査によって初めて確認されたものである。

極楽寺18の塚には13世紀後半の常滑甕が埋められており、構築年代が推定できる塚はこれが唯一である。極楽寺27の塚本体からは鎌倉期まで遡る遺物が出土したが、16世紀代の遺物も混在しており、中世末期に付近の石塔類を集めて構築されたものと考えられる。極楽寺26は15世紀後半から16世紀代のかわらけが大半で、わずかに13世紀～14世紀前半の遺物を含む。

第120図に示した通り、塚は旧市街の西側山稜に多く分布するが、もとよりこれは調査箇所の多寡を反映しており、確定的なものではない。しかし、極楽寺26,27の付近はトレンチにかからないマウンドも数基確認されており、この付近は塚が集中する地区と言うことができる。おそらく、五合桝が15世紀代に墓地へと変容するのと同じ時期に、極楽寺27の大規模な塚や、付近の塚が築かれたのであろう。中世後半には極楽寺の南側尾根一帯は、仏法寺も含めて広い範囲で葬送の地となったものと考えられる。

(2) 茶毘址

骨片・焼土を伴う土坑を茶毘址とした。以下の地点で発見されている。

仮称坂地区　3,5,6

杉本城・釈迦堂口地区　10,14,15

名越切通地区　2

円形の土坑に、円礫・泥岩・凝灰岩などを弧状に配置して構築したものが多い。杉本10はやぐら群に伴っており、長方形の掘り込みに切石を配する、特徴的な形態を持つものである。土坑内からかわらけが出土す

第120図 祭祀・葬送、その他の遺構の分布[S＝1/16,000]

る例が多かったが、年代が明らかな遺物は仮柱３の14～15世紀、仮柱６の14世紀後半である。なお、これらの遺構は仮柱坂地区および衣張山周辺に多く分布する傾向がある。調査箇所の多寡を考慮する必要は当然あるが、最も多くトレンチを設定した極楽寺坂地区では１基も発見されていないため、やはり、仮柱坂、衣張山といった境界域の特性を反映した結果と言うことができるだろう。

（３）やぐら

今回はやぐらそのものの調査は行っていないが、平場の調査に際して、やぐらの前面を調査した箇所があった。調査箇所は以下の通りである。

亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区　2

鷲峰山・天台山地区　3

杉本城・釈迦堂口地区　10,18

名越切通地区　7

このうち、亀・巨２は寺地と推定され、14世紀後半から16世紀の遺物が多量に出土している。杉・釈10,18は釈迦堂東やぐら群として周知されており、10号トレンチでは14世紀から16世紀の遺物が出土している。名越７は浅間山南やぐら群として周知され、谷の奥を取り巻く斜面に３段以上、計30基以上のやぐらが開口している。今回はやぐら群に見下ろされるような谷中の調査で、13世紀から16世紀の遺物が出土した。

（４）寺社地

平場の項でも触れたが、以下の箇所は寺地、社地と推定される。

極楽寺坂地区　1,33

大仏坂地区　2

仮柱坂地区　9

亀ヶ谷坂・巨福呂坂地区　2,13

杉本城・釈迦堂口地区　2

いずれも相当規模の平場を伴っている。このうち、極楽寺33は仏法寺、大仏２は浅間神社、亀・巨２は宝鏡寺、杉・釈２は五輪塔のそれぞれ跡地と推定される。また、仮柱９、亀・巨13はその場所から見て、建長寺もしくは浄智寺に関わる寺院であろう。極楽寺１にも極楽寺に関わる施設が存在した可能性が考えられる。

この中で特に注目されるのが、第１編第３章および平場の項でも触れた仏法寺跡（極楽寺33）である。幕府滅亡時、実際に戦闘が行われたことが文献から判明している寺跡が明らかになったことは本調査で最大の発見と言ってよい。平場の調査では建物跡や基壇、池跡が発見され、遺物も比較的多く出土した。中世だけではなく近世の遺物も少なからず出土しており、仏法寺が戦闘で荒廃した後も、極楽寺南側尾根一帯に広がる葬地の一つとして、近世までこの平場が用いられていたものと考えられる。

（５）石塔製作址

祭祀・葬送に間接的に関わる遺構として、鷲・天６で発見された石塔製作址がある。杉・釈16も明確ではないが石塔大の岩塊が周辺に散乱しており、同様の性格を持つ可能性がある。鎌倉には無数の石塔が存在しているが、それらを実際に切り出し、加工した場所はこれまで知られていなかった。天台山から瑞泉寺の裏

山にかけての一帯と衣張山の周辺はやぐら・石塔類が多く見られる地域である。この製作址の発見により、石塔類はやぐら群に比較的近い場所で製造され、供給された可能性が指摘できるようになった。これまで不明な部分の多かった、石塔生産様態の一端を明らかにする重要な発見と言えよう。

（6）その他

この他、祭祀・葬送に関わるものとして、合わせ口のかわらけ、祠がある。

合わせ口のかわらけは極楽寺16(13後半～14世紀前半)，大仏3（14世紀後半）で出土しており、地鎮等に関わる遺物と考えられる。

仮桙6、鶯・天4付近には石造の祠が現在も置かれている。祠自体は近世以降のものであるが、両者とも山頂付近にあり、信仰の対象となっている。仮桙6で荼毘址が多数発見されたことからも、祠が置かれるような場の特性は中世から引き継がれているものと推測される。

第Ⅲ章　中世以前の遺構・遺物

山稜部を発掘調査したことにより、中世以前の遺構・遺物も若干発見された。調査の目的は中世の遺構の解明であったため、中世以下の層の本格的な掘削は行っていないが、今まで知られていなかった遺跡の存在を明らかにする資料となるものである。

（1）縄文時代

大仏10,11、仮桙7で縄文土器が、亀･巨14では黒曜石剥片が出土した。いずれも頂部よりやや低い位置の平坦地である。それぞれの遺物の出土状況を見ると埋置や一括廃棄とは考えられず、流れ込みの可能性が高い。

仮桙7の側には縄文時代早期・前期の遺物が出土した葛原岡遺跡(鎌倉市№28)がある。仮桙7で出土した土器は後期(加曽利E)のものであり、今まで発見された遺物とは若干時期が異なるが、葛原岡一帯の縄文時代の遺跡は現在の周知範囲より広がる可能性がある。

（2）弥生時代

極楽寺6（C），8，10で弥生時代末期の土器が出土している。極楽寺6，8出土の土器は破片で明確ではないが、住居址と推定される落ち込みからの出土である。極楽寺10では復元可能な壺形土器が2点出土した。第Ⅱ章では住居址からの出土としたが、土器の1点は底部穿孔の可能性もあり、周溝墓などが存在する可能性も考えられる。8，10は極楽寺地区西尾根の最高地点であり、眺望のよい山頂が弥生時代末期の生活空間となっていたようである。

（3）古墳時代～奈良・平安時代

杉･釈14では古墳時代前期の高坏脚が、時期は明確につかめないが天･鶯5、杉･釈14，15、名越3では土師器の破片が出土している。いずれも見晴らしの利く山稜の頂部であり、古代の祭祀的な空間であったもの

と推定される。いずれの地点からも中世の遺物が出土するため、古代以来、中世以降も葬送・祭祀の場として機能していたと考えられる。

第Ⅳ章　結語

今回の調査で設定したトレンチは全体で123箇所、総延長1500m強、調査面積は2257.6㎡である。ここまで報告してきたように、調査によって得られた資料を総括すれば、鎌倉の山稜部に存在する防衛遺構群はおおむね中世に構築されたとしてよいものである。特に、一升桝のような大規模な遺構が13世紀代に遡る可能性が明らかになったことは大きな成果と言えよう。しかし、鎌倉幕府草創期まで遡る遺構・遺物は確認できなかった。九条兼実が玉葉に記した「鎌倉城」の内容については諸説議論があるが、今回の調査成果に基づく限り、これをいわゆる「城郭」や「城館」のイメージでとらえるのは困難である。防衛遺構の年代は14世紀から15世紀に比定されるものが多く、一部13世紀後半に遡るものも見られる。これらが構築される契機としては、元弘の乱や南北朝の動乱を想起することができよう。また、13世紀後半に遡るものもあることから、元寇による対外防衛意識の高まりに契機を求めることも可能であろう。その後、北条執権体制の弱体化に伴って、次第に山稜部の防衛遺構が整備されていったと推測することができる。

防衛遺構だけではなく、荼毘址をはじめとする、葬送・祭祀関連の遺構・遺物が多く発見されたのも大きな成果であった。今回の調査では、これらの遺構は仮粧坂や衣張山周辺で多く発見され、鎌倉旧市街を取り巻く山稜部が祭祀・葬送という境界域としての性格を強く有する場であったことが明らかとなった。中世の山稜部は防衛遺構に止まらず、多義的な性格を有していたのである。

また、幕府草創期の遺構は発見されなかったが、それをさらに遡る古代以前の遺物も若干発見された。近年鎌倉郡衙の位置が特定され、市内低地部でも中世以前の遺構・遺物の発見が相次いでいるが、山稜部も古代以前から生活空間として用いられていたことが明らかになった。

正直なところ、調査に着手する前は、常に人が居住していたわけではない山稜上の平場や堀切からは、遺構が発見されても遺物がまったく出土しないのではないかという危惧があった。しかしながら、決して多くはないものの、各遺構の構築年代を推定し得る遺物が出土し、遺構の形態についてもある程度のデータを得ることができた。これらのデータを元に、山稜部のより詳細な実態を明らかにするための対応が期待される。

また、今回の調査を通じて特に感じられたのは、山稜部の遺構が思いの外良好に遺存していることであった。大規模な開発により山稜そのものが消滅していたり、人の手が入らないためにかえって山林が荒廃しているところも見られたが、藪を少しかき分けると平場、堀切などがまだまだ良好に残っている。ハイキングコース沿いに存在する遺構もあり、そのスケールを容易に肌で感じることもできる。平場や堀切などは、漫然と歩けば見過ごしてしまうような、決して派手とは言えない遺構群ではある。しかし「武士の都」に残された希有な痕跡ー遺産として、これらを後世に残していく努力は今後絶えず払われなければならないだろう。

参考文献

赤星直忠　1959 『鎌倉市史　考古編』

赤星直忠　1979a 『逗子市名越遺跡－中世の切通・城郭・葬送遺跡』逗子市教育委員会

赤星直忠　1979b 『史跡名越切通保存管理計画策定報告書』逗子市教育委員会

阿部正道　1971 「塩田義政とその邸跡について－鎌倉武士邸跡の考察－」『神奈川県博物館協会々報』神奈川県博物館協会

石井　進　1986 「中世六浦の歴史」『三浦古文化』第40号　京浜急行電鉄・三浦古文化研究会

大三輪龍彦　1977 『鎌倉のやぐら』かまくら春秋社

大三輪龍彦編　1983 『中世鎌倉の発掘』有隣堂

奥富敬之　1999 『鎌倉史跡事典』新人物往来社

神奈川県立金沢文庫編　2000 『六浦・金沢－海が育んだ歴史と文化－』神奈川県立金沢文庫

鎌倉高校地理歴史研究部　1956 「衣張山発掘記」

鎌倉考古学研究所編　1994 「中世都市鎌倉を掘る」日本エディタースクール出版部

鎌倉市教育研究所編　1997 『鎌倉の自然』鎌倉市教育委員会

菊川英政・玉林美男　1996 『仮称坂周辺詳細分布調査報告書』鎌倉市教育委員会

菊川英政・瀬田哲夫他　1999 『大仏切通周辺詳細分布調査報告書』鎌倉市教育委員会

近藤真佐夫・宮重俊一他　1989 『堀之内東遺跡』日本窯業史研究所

佐藤和彦・錦昭江　1993 『図説　鎌倉歴史散歩』河出書房

浜江　芳浩　1992 「中世区画溝に関する覚書－中世東国における村落景観復元の手がかりとして－」『東京考古』10　東京考古談話会

白井永二編　1976 『鎌倉事典』東京堂出版

鈴木廣一郎・木村吉行　2000 『鎌倉城（二階堂紅葉ヶ谷）所在やぐら群』かながわ考古学財団調査報告88

鈴木廣一郎・木村吉行　2000 『極楽寺やぐら群』かながわ考古学財団調査報告90

田代郁夫・高野和弘　1998 『亀ヶ谷坂周辺詳細分布調査報告書』鎌倉市教育委員会

中澤克昭　1999 「中世の武力と城郭」吉川弘文館

貫達人・川副武胤　1959 『鎌倉市史　社寺編』

貫達人・川副武胤　1980 『鎌倉廃寺事典』有隣堂

原田信男・浜江芳浩　1994 「中世村落の景観復元について－東京都日野・八王子地区を中心に－」『札幌大学女子大学都紀要』第23号　札幌大学女子短期大学

松尾宣方　1983a 「極楽寺桝形遺構」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』鎌倉市教育委員会

松尾宣方　1983b 「北条氏常盤亭跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』鎌倉市教育委員会

松尾宣方他　1977 『東勝寺跡』鎌倉市教育委員会

馬淵和雄　1994 「武士の都鎌倉－その成立と構想をめぐって」『中世の風景を読む２－都市鎌倉と坂東の海に暮らす－』新人物往来社

三浦勝男編　1992 『鎌倉の古絵図Ⅰ』鎌倉国宝館図録第15集　鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館

三浦勝男編　1993 『鎌倉の古絵図Ⅱ』鎌倉国宝館図録第16集　鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館

見上敏三・江藤哲人　1986 『鎌倉市の地質』『鎌倉市文化財総合目録』地質・動物・植物編

The summary of the Medieval Kamakura Capitals

Kamakura has the three sides mountain and it is surrounded by the sea, which has known "the ground of the stronghold" from old ancient times.

Minamoto Yoritomo held the shogunate here and after that Kamakura prospered as "a samurai's capital for about 200 years 12 centuries end.

The shogunate develops a mountain on three sides, and it is said to it that various defense military installations were set up to protect this town. Kamakura can see the traces of the defense facilities, cutting path *"Kiridoushi"*, cutting edge of a dip *"Kirigishi"*, and surrounded by the earthen square wall *"Masugata"*. It disappears more than 600 years, have passed in the base of the military family administration even at present.

Moreover, though it is buried in the grass at present and it can't be confirmed, The flat created place *"Hira-ba"*, an urgent cliff, a moat *"Horikiri"*, which it guesses artificially make are seen in the ridge muscle and the mountainside.

This investigation was done so that such a defense structures might really exist or it might be made in artificial structures or about when. An investigation district is the surrounding cutting passes which called "Kamakura-Shichi-Kou(seven entrances)". We divided in 9 area which "Gokurakuji-zaka","Daibutsu-zaka","Kewai-zaka","Kamegayatsu-zaka and Kobukuro-zaka","Jubusen and Tendai-san","Sugimoto castle and Shakadou-guchi","Nagoe-kiridoushi","Asahina-Kiridoushi" and"Sumiyoshi castle" district, and 123 trenches were set up, and investigation was done. The trenches makes width 1.5m a basis respectively, and a digging area is 2257.6㎡, in total over 1500m as for the total extension.

By this investigation, the point which artificial structures and relics were not detected in at all and which was limited area. But, it become obvious artificial structures that *"Horikiri"* and *"Masugata"*, and medieval relics were excavated with many trenches.

All of the relics is product at the after 13th century, before 12th century is hardly presumed. Therefore, these structures concerned with this defense is not built at the time of shogunate opening. It guesses these structures is prepared in the Hojo regency.

There are many relics in the 14's, and the possibility that it is prepared urgently can think about these defense facilities after the war of the *"Genkou-era"* when Kamakura shogunate overthrown in 1333, and the war of the North and South Imperial Court.

Moreover, a point for a tombstone to be scattered is seen, and funeral mound-shaped structure is distributed abundantly. Medieval cremation mark is discovered in the district of "Kewai-zaka" and "Shakadou" area and so on. We guess, the remains of tombstones works was discovered in "Jubusen and Tendai-san". It was proved that various space where the part of hill wasn't confined to the master in defense structures in the medieval latter term from these results.

Besides this, the earthen vessel of the end of Yayoi period is excavated in the summit of a mountain part of the district of "Gokurakuji-zaka","Sugimoto castle and Shakadou-guchi", and the Jomon period earthen vessels are excavated in the district of "Daibutsu-zaka","Kewai-zaka". These hill parts became clear before ancient times it was being used as the magic-religious area.

報告書抄録

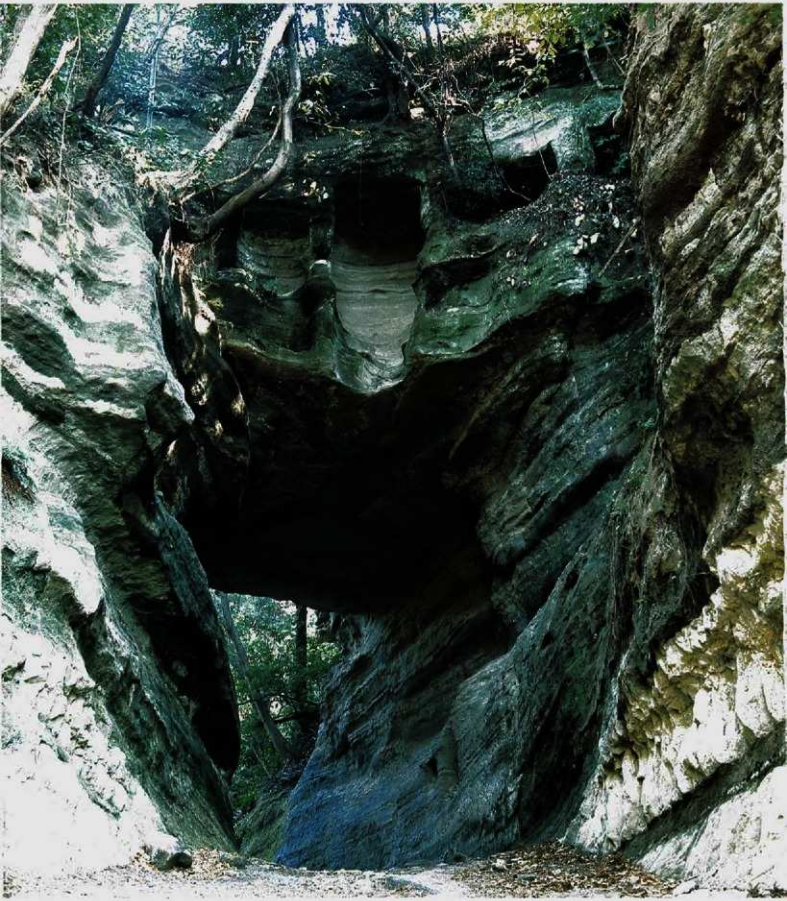
ふりがな	『ことかまくら』をとりまくさんりょうぶのちょうさ
書名	『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査
編著者名	柳川清彦・岩田直樹・鈴木庸一郎・菊川英政・桝潤規彰・松尾宣方
編集機関	神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・財団法人かながわ考古学財団
所在地	神奈川県教育委員会　〒231-0021　神奈川県横浜市中区日本大通1　045-210-1111 鎌倉市教育委員会　〒248-8686　神奈川県鎌倉市御成町18-10　0467-23-3000 (財)かながわ考古学財団　〒231-0033　神奈川県横浜市南区中村町3-191-1　045-252-8661
発行年月日	2001年3月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
菊川岡遺跡	神奈川県鎌倉市山ノ内1189他	14202	28	35°19′32″	139°32′44″	20000603 ～ 20001127	2257.6㎡	学術調査（「古都鎌倉」の世界遺産登録に向けた山稜部の確認調査）
鶴岡八幡宮旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市山ノ内1547他	14202	56	35°19′34″	139°33′22″			
杉本城跡	神奈川県鎌倉市二階堂831他	14202	62	35°19′10″	139°34′14″			
衣張山やぐら群	神奈川県鎌倉市大町六丁目1448他	14202	81	35°18′53″	139°34′06″			
鎌倉城	神奈川県鎌倉市二階堂637他	14202	87	35°19′40″	139°34′44″			
浅間山南 山腹やぐら群	神奈川県鎌倉市大町七丁目1642他	14202	89	35°18′22″	139°34′13″			
釈迦堂東やぐら群	神奈川県鎌倉市浄明寺一丁目606他	14202	157	35°18′57″	139°34′06″			
尾藤景綱邸跡	神奈川県鎌倉市山ノ内1502他	14202	171	35°19′48″	139°33′04″			
法輪寺跡	神奈川県鎌倉市扇ガ谷三丁目489他	14202	178	35°19′37″	139°33′10″			
満光寺跡	神奈川県鎌倉市山ノ内1523他	14202	179	35°19′37″	139°33′15″			
勝縁寺跡	神奈川県鎌倉市扇ガ谷三丁目422他	14202	181	35°19′35″	139°33′18″			
法泉寺跡	神奈川県鎌倉市山ノ内1459他	14202	182	35°19′40″	139°33′08″			
浄智寺境内遺跡	神奈川県鎌倉市山ノ内1421他	14202	286	35°19′38″	139°32′55″			
五谷橋遺跡	神奈川県鎌倉市極楽寺一丁目30他	14202	292	35°18′18″	139°32′05″			
一升橋遺跡	神奈川県鎌倉市極楽寺二丁目1008他	14202	293	35°18′38″	139°31′51″			
桑ヶ谷療病院跡	神奈川県鎌倉市長谷四丁目532他	14202	294	35°18′49″	139°32′06″			
長谷観音堂周辺遺跡	神奈川県鎌倉市極楽寺二丁目46他	14202	296	35°18′31″	139°32′07″			

光則寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市長谷三丁目658他	14202	300	35°18′35″	139°32′03″	20000603～20001127	2257.6㎡	学術調査（『古都鎌倉』の世界遺産登録に向けた山稜部の確認調査）
報国寺遺跡	神奈川県鎌倉市浄明寺二丁目528他	14202	306	35°18′54″	139°34′16″			
朝夷奈砦	神奈川県鎌倉市十二所582他	14202	310	35°19′19″	139°35′27″			
瑞泉寺遺跡	神奈川県鎌倉市十二所209他	14202	320	35°19′36″	139°34′46″			
一向堂跡	神奈川県鎌倉市常盤830他	14202	377	35°19′09″	139°32′25″			
桔梗山城	神奈川県鎌倉市佐助二丁目717他	14202	387	35°19′20″	139°32′29″			
名越砦遺跡	神奈川県鎌倉市大町七丁目1643他	14202	402	35°18′22″	139°33′59″			
名越遺跡	神奈川県逗子市小坪七丁目	14208	52	35°18′13″	139°34′04″			
	神奈川県横浜市金沢区朝比奈15他	14108	27	35°19′28″	139°35′56″			
	神奈川県横浜市金沢区朝比奈602他	14108	53	35°19′26″	139°36′01″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
葛原岡遺跡	散布地	中世、縄文	平場、堀切、堀割、切岸、桝形、塚、茶毘址、やぐら、建物址、石塔製作址、石切等	かわらけ、中世陶器・陶磁器類、金属製品、石製品、石塔他	鎌倉旧市街を取り巻く山稜部残る堀切、桝形。平場等の中には、中世に遡るものが存在することが明らかになった。その他、茶毘址、寺院址も発見され、山稜部が多様な性格をもっていたことが確認された。
鶴岡八幡宮旧境内遺跡	寺院址	中世			
杉本城跡	城跡	中世			
衣張山やぐら群	やぐら	中世			
鎌倉城	城跡	中世			
浅間山南山腹やぐら群	やぐら	中世			
釈迦堂東やぐら群	やぐら	中世			
尾藤景綱邸跡		中世			
法輪寺跡	寺院跡	中世			
満光寺跡	寺院跡	中世			
勝福寺跡	寺院跡	中世			
法泉寺跡	寺院跡	中世			
浄智寺境内遺跡	散布地				
五合橋遺跡	城跡	中世			
一升橋遺跡	城跡	中世			
桑ヶ谷療病院跡	病院跡、散布地	中世			
長谷観音堂周辺遺跡	寺院跡、町屋跡	中世			
光則寺旧境内遺跡	寺院跡	中世			
報国寺遺跡	寺院跡、館跡	中世～近世			
朝夷奈砦	城跡（山城）	中世			
瑞泉寺遺跡	散布地	中世			
一向堂跡	寺院跡	中世			
桔梗山城	城跡、散布地	中世、古代			
名越砦遺跡	城跡	中世			
名越遺跡	山城、生産遺跡	中世～近世、古墳			
横浜市№27, 53	防衛遺構、やぐら	中世			

本書は長期保存を考慮し、すべて中性紙(古紙40%配合)を使用しています。

『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査

発行日　2001年3月30日
発　行　神奈川県教育委員会
　　鎌倉市教育委員会
　　(財)かながわ考古学財団
印　刷　株式会社　アルファ